

# 大町遺跡 IV

—府営岸和田大町住宅道路整備工事に伴う発掘調査—

大阪府埋蔵文化財調査報告二〇二〇一四

令和3年3月

大阪府教育委員会

大阪府教育委員会

# 大町遺跡 IV

—府営岸和田大町住宅道路整備工事に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



## 序文

本書は府営岸和田大町住宅道路整備工事に伴い、岸和田市内に所在する大町遺跡ならびに田鶴羽遺跡において、令和元年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

大町遺跡と田鶴羽遺跡は隣接していて、一体として捉えることができる遺跡です。大阪府では平成15年度の住棟改築に伴う発掘調査以来7カ年度にわたり、今回の調査を含め住宅地内の15地点で発掘調査を行っています。

このたびの調査では、従来知られていなかった古墳時代中期の建物群が発見されました。この建物群の近くには、ほぼ同じ時期に築かれた田鶴羽古墳群が広がっています。建物群の発見は、この古墳群の成立に関する重要な鍵となります。

さらに15世紀の石組された井戸、14世紀の畦と耕作土などが見つかり、中世八木郷の実態解明に向けて情報を積み重ねることができました。

調査の実施にあたりまして大阪府住宅まちづくり部ならびに岸和田市教育委員会、さらに関係各位には多大なご協力をいただき深く感謝いたします。

本府教育委員会では文化財の調査、保護と活用などについてさらに推進してまいります。いつそうのご理解とご支援を賜りますよう、お願ひいたします。

令和3年3月

大阪府教育府文化財保護課長

大野 広



## 例言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府住宅まちづくり部の依頼を受けて令和元年度に実施した、府営岸和田大町住宅道路整備工事に伴う、岸和田大町所在の大町遺跡、田鶴羽遺跡の発掘調査報告書である。なお既刊の報告書との整合を図るために書名を『大町遺跡IV』とした。
2. 発掘調査は、文化財保護課調査事業グループ主任専門員 三木 弘、技師 石田尚子を担当者として実施した。
3. 遺物整理は、令和2年度に文化財保護課調査管理グループ専門員 藤田道子を担当者として実施した。
4. 発掘調査の調査番号は19017である。
5. 本書に掲載した写真図版の遺構写真撮影は発掘調査担当者が行った。
6. 発掘調査にあたっては、空中写真測量を株式会社イビソクに委託して実施した。
7. 写真図版の遺物写真撮影についてはイトーフォトに委託した。
8. 本書の編集は三木および調査管理グループ副主査 藤井陽輔が行った。執筆は三木が行った。
9. 発掘調査の出土遺物や写真・図面などの記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
10. 発掘調査・遺物整理にあたっては、以下の機関や方々よりご教示・ご協力をいただきました。  
岸和田市教育委員会、近藤利由
11. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府住宅まちづくり部が負担した。

## 凡例

1. 本書で用いる座標値は平面直角座標系第VI系（世界測地系）に基づき、表示する方位は座標北を示す。ただし、本文で方位や方向を示す場合の煩雑を避けるため、北東方向を北、南西方向を西などと呼び替えることもある。
2. 標高値はすべて東京湾平均海面を用い、本文および挿図中では標高値の前の「+」を省略し T.P. ○. ○ m と表示した。
3. 遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順に 3 桁の通し番号を付している。これは発掘調査の記録と合致する。この通し番号と種類を組合せて遺構名としている。
4. 掲載遺物に付した番号は通し番号である。また挿図と写真図版の遺物番号は一致している。
5. 土層の色調については『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 24 版）に拠る。
6. 参考文献は第 4 章末（112 ページ）にまとめた。

## 本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査の経緯と経過.....	1
第1節 発掘調査に至る経緯.....	1
第2節 発掘調査の経過.....	3
第2章 調査地点の特徴.....	5
第1節 調査地所在の遺跡概要.....	5
第2節 大町遺跡の既往調査.....	7
第3節 調査地点の地形と遺跡立地.....	7
第4節 大町遺跡周辺遺跡の歴史的動向.....	9
第5節 田鶴羽古墳群.....	14
第3章 発掘調査の成果.....	15
第1節 19-1区の概要.....	15
第2節 19-1区の調査成果.....	18
第3節 19-2区の調査概要.....	85
第4節 19-2区の調査成果.....	90
第4章 調査成果の総括と地域との関連.....	93
第1節 発掘調査の成果からみた遺跡内の変遷.....	93
第2節 古墳時代中期建物群.....	101
第3節 中世の大町遺跡、田鶴羽遺跡.....	107
参考文献.....	112
観察表.....	113
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 大町遺跡、田鶴羽遺跡の位置.....	2
第2図 確認調査トレンチ位置.....	3
第3図 令和元年度調査区の位置.....	4
第4図 埋設物試掘トレンチの位置.....	4
第5図 既往の調査区位置.....	7
第6図 大町遺跡、田鶴羽遺跡周辺の地形.....	8
第7図 大町遺跡、田鶴羽遺跡周辺の遺跡.....	10・11
第8図 田鶴羽古墳群.....	14
第9図 19-1区の遺構.....	16
第10図 壁穴建物の位置.....	17
第11図 002壁穴建物（平面・土層）.....	19
第12図 002壁穴建物（遺物出土状況）.....	21
第13図 003壁穴建物（平面）.....	22
第14図 003壁穴建物（土層）.....	23
第15図 作業台の台石.....	25
第16図 004壁穴建物（平面・土層）.....	28
第17図 004壁穴建物（土層）.....	29
第18図 004壁穴建物内186土坑（遺物出土状況）.....	30
第19図 002・003・004壁穴建物出土遺物.....	31
第20図 092壁穴建物（平面・土層）.....	35
第21図 挖立柱建物の位置.....	37
第22図 挖立柱建物A（平面）.....	38

第 23 図 挖立柱建物 A (土層).....	39	第 44 図 154 畦出土遺物 (6).....	67
第 24 図 挖立柱建物 B (平面).....	40	第 45 図 154 畦出土遺物 (7).....	68
第 25 図 挖立柱建物 B (土層).....	41	第 46 図 谷地形内土層.....	71
第 26 図 挖立柱建物 C (平面・土層).....	43	第 47 図 中段面土層 (1).....	74
第 27 図 挖立柱建物 D (平面・土層).....	45	第 48 図 中段面土層 (2).....	75
第 28 図 挖立柱建物 D (土層)、155 柱穴 (平面・土層).....	46	第 49 図 上段面土層.....	76
第 29 図 挖立柱建物 E (平面・土層).....	47	第 50 図 耕作土出土遺物 (1).....	77
第 30 図 001 落込み (平面・土層).....	48	第 51 図 耕作土出土遺物 (2).....	78
第 31 図 001 落込みの変遷.....	49	第 52 図 須恵器 (1).....	79
第 32 図 001 落込み (西壁土層).....	51	第 53 図 須恵器 (2).....	80
第 33 図 001 落込み出土遺物 (1).....	53	第 54 図 瓦 (1).....	82
第 34 図 001 落込み出土遺物 (2).....	54	第 55 図 瓦 (2).....	83
第 35 図 001 落込み出土遺物 (3).....	55	第 56 図 塗輪 (1).....	85
第 36 図 146 井戸、周辺遺構 (平面・土層).....	58	第 57 図 塗輪 (2).....	86
第 37 図 146 井戸出土遺物.....	59	第 58 図 塗輪 (3).....	87
第 38 図 154 畦 (平面・土層).....	60・61	第 59 図 19-2 区の遺構 (平面・土層).....	91
第 39 図 154 畦出土遺物 (1).....	62	第 60 図 谷地形の土層.....	92
第 40 図 154 畦出土遺物 (2).....	63	第 61 図 調査区位置.....	94
第 41 図 154 畦出土遺物 (3).....	64	第 62 図 河道位置.....	94
第 42 図 154 畦出土遺物 (4).....	65	第 63 図 古墳時代遺構位置.....	109
第 43 図 154 畦出土遺物 (5).....	66	第 64 図 中世遺構位置.....	109

## 挿表目次

表 1 確認調査 (平成 30 年度) の成果.....	3	表 18 挖立柱建物 D 柱穴.....	44
表 2 埋設物確認試掘に伴う立会の成果.....	4	表 19 挖立柱建物 E 柱穴.....	44
表 3 既往の調査.....	6	表 20 001 落込み出土の土器 (破片数).....	52
表 4 積穴建物一覧.....	18	表 21 146 井戸遺物組成.....	57
表 5 002 積穴建物内柱穴.....	20	表 22 154 畦遺物組成.....	69
表 6 002 積穴建物出土遺物.....	22	表 23 瓦質・土師質羽釜総計と 154 畦出土組成.....	70
表 7 003 積穴建物内柱穴.....	24	表 24 土釜総計と 154 畦出土組成.....	70
表 8 003 積穴建物出土遺物.....	26	表 25 上段面の出土遺物組成.....	73
表 9 003 積穴建物出土遺物 (出土位置).....	26	表 26 中段面の出土遺物組成.....	73
表 10 004 積穴建物内柱穴.....	27	表 27 下段面の出土遺物組成.....	73
表 11 004 積穴建物出土遺物.....	32	表 28 須恵器 (第 52・53 図) 観察表.....	81
表 12 004 積穴建物出土遺物 (出土位置).....	32	表 29 瓦 (第 54・55 図) 観察表.....	84
表 13 092 積穴建物内柱穴.....	34	表 30 塗輪出土位置.....	85
表 14 挖立柱建物一覧.....	36	表 31 塗輪 (第 56 ~ 58 図) 観察表.....	88・89
表 15 挖立柱建物 A 柱穴.....	36	表 32 19-2 区出土遺物組成.....	92
表 16 挖立柱建物 B 柱穴.....	42	表 33 大町跡、田鶴羽遺跡内の変遷.....	95
表 17 挖立柱建物 C 柱穴.....	42	表 34 織文土器出土の調査区.....	95

表 35 弥生時代中期後半・後期の土器出土状況	97	表 42 西大路遺跡のテラス部付設建物	103
表 36 河道出土の弥生時代中期後半・後期土器、古墳時代 初頭～前期土器	98	表 43 下田遺跡のテラス部付設建物	104
表 37 大町遺跡検出木片の AMS 測定成果	101	表 44 下田遺跡におけるテラス部付設建物の割合	105
表 38 切り合い関係からみた建物の先後	102	表 45 大町遺跡 19-1 区建物群と周辺古墳群の動態	106
表 39 建物群の重複関係	102	表 46 大町遺跡、田鶴羽遺跡の主な中世遺構	107
表 40 建物の方位軸	102	表 47 大町遺跡検出の井戸	107
表 41 建物群の構造と変遷	103	表 48 大町遺跡、田鶴羽遺跡の中世土地利用の変遷	108
		表 49 周辺遺跡の動向	111

## 原色図版目次

原色図版 1 穴穴建物出土土器類

原色図版 2 羽釜、土釜

## 図版目次

図版 1 19-1 区 全景	図版 15 001 落込み出土遺物（1）
図版 2 19-1 区 002 穴穴建物	図版 16 001 落込み出土遺物（2）
図版 3 19-1 区 003 穴穴建物	図版 17 001 落込み出土遺物（3）
図版 4 19-1 区 004 穴穴建物	図版 18 001 落込み出土遺物（4）
図版 5 19-1 区 004 穴穴建物	図版 19 154 畦出土遺物（1）
図版 6 19-1 区 092 穴穴建物	図版 20 154 畦出土遺物（2）
図版 7 19-1 区 001 落込み	図版 21 154 畦出土遺物（3）
図版 8 19-1 区 挖立柱建物群	図版 22 耕作土出土遺物
図版 9 19-1 区 挖立柱建物	図版 23 須恵器
図版 10 19-1 区 中・下段面、154 畦	図版 24 瓦（1）
図版 11 19-1 区 146 井戸	図版 25 瓦（2）
図版 12 19-2 区 全景、畦、谷状地形	図版 26 墓輪（1）
図版 13 002・003 穴穴建物出土遺物	図版 27 墓輪（2）
図版 14 004 穴穴建物出土遺物	



# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 発掘調査に至る経緯

### (1) 発掘調査に至る経緯

府営岸和田大町住宅の南端に位置する空閑地に、北西—南東方向の道路を敷設する事業予定を平成29年9月に受け、発掘調査が必要であるとの回答をした。

その後、この案件について、平成30年2月より大阪府教育庁文化財保護課と住宅まちづくり部住宅設計課が埋蔵文化財の取り扱いに関して具体的な協議を開始した。同時に、住宅内を横断し府道岸和田・牛滝山・貝塚線に接続する住宅内道路から北西方向に延びる道路計画も新たに示された。

前者の住宅地南端に予定された道路敷設範囲は、平成26年度に拡大した大町遺跡内、すなわち周知の埋蔵文化財包蔵地に当たる。岸和田市教育委員会が平成24(2012)年に発掘調査を行なった岸和田市八木市民センター(以下、八木市民センターと表記)地点をはじめ、周辺の発掘調査成果からみると、工事地点において遺構・遺物が検出される可能性は非常に高いと考えられた。

これに対して住宅地南端道路の北に予定された後者は、道路敷設用地の3分の1は田鶴羽遺跡に該当するが、残りは埋蔵文化財包蔵地外であった。埋蔵文化財包蔵地外域は包蔵地内に比して現況地盤が0.5m程度低く、地形の変化があることは予測されたが、埋蔵文化財に関する状況については不明な点が少なくなかった。そこで、埋蔵文化財包蔵地外域の遺構・遺物の存否を確認するため、確認調査を行なうこととした。

この未周知内の確認調査は、当初の予定では平成30年度に周知の埋蔵文化財包蔵地内の発掘調査と並行して実施することとしていた。しかし事業予定の変更により、確認調査のみを平成30年度に行ない、その結果を踏まえて平成31年度に事業範囲を一括して発掘調査を行なうこととした。

結果として、この北側の工事については周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲のみを対象として、住宅地南端の道路部分と併せて同時期に発掘調査を行なった。

### (2) 田鶴羽遺跡北西の埋蔵文化財包蔵地外域の確認調査

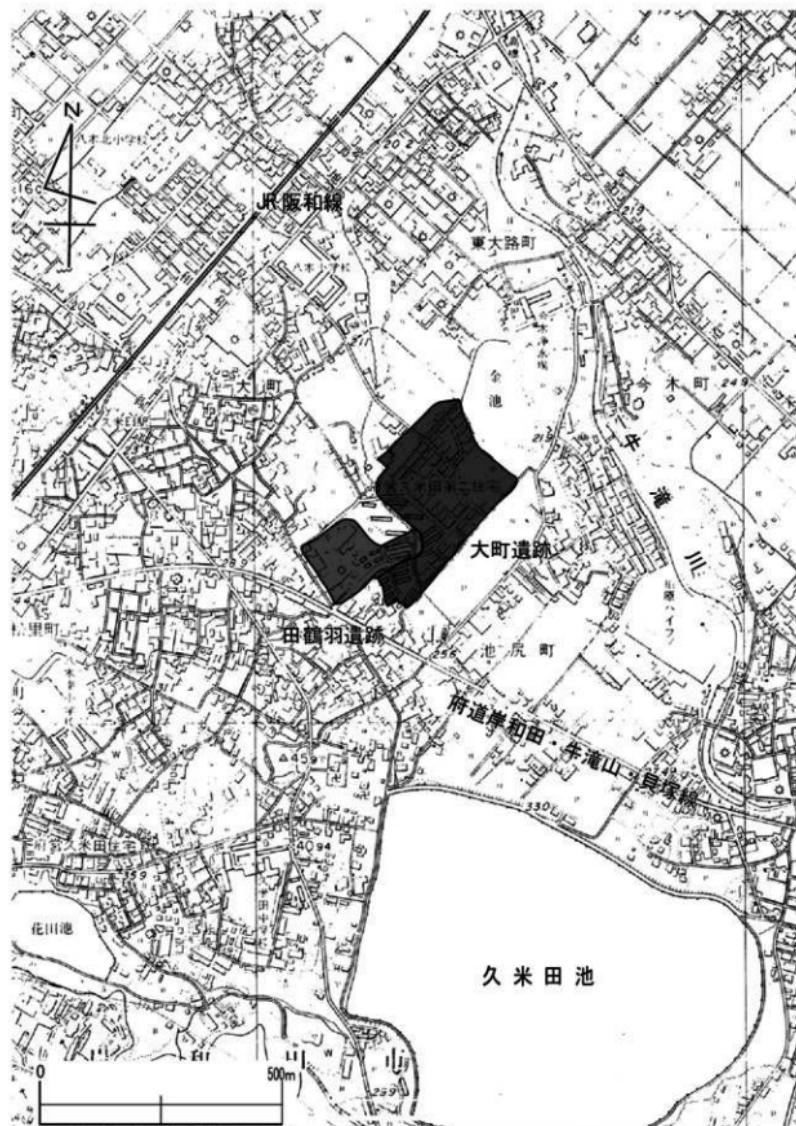
平成30年10月に田鶴羽遺跡の北、“天の川”の西岸にあたる埋蔵文化財包蔵地外域の空閑地にトレーニング2ヶ所を設置して確認調査を行なった。

北寄りに設定したトレーニングでは住宅造成時の盛土下に近・現代まで続く旧耕作土が広がり、その下に黄灰色シルト、あるいは茶褐色シルトと暗灰色粘性シルトが続く。暗灰色粘性シルトから少量の土器が出土した。これらの灰色系シルト層は古代末から中世にかけて形成された耕作土の可能性が高い。

一方南寄りに設定したトレーニングでは、現地盤下1.2mに近世以降、近・現代まで継続する旧耕作土が広がり、その下は河川状堆積の様相を呈していた。

大町遺跡一帯では、縄文時代後・晩期から古墳時代前期前葉にわたって主に南から北方向に流れた河道の痕跡が、河川状堆積として複数箇所で確認されている。ことに古墳時代前期初頭にかけて起きた洪水は地盤を大きく浸食し、集落の形跡まで消し去ったとみられる。この確認調査の南寄りトレーニングで検出された堆積層もそうした河道痕跡の一部である。

このように2ヶ所のトレーニングのうちの1ヶ所では近・現代を廻る耕作土の存在は認められず、住宅造成時の盛土の下は礫や砂からなる河道の堆積層であった。また遺物の出土は認められたもののその数は少なかった。こうしたことから、確認調査を行なった周辺について、改めて埋蔵文化財包蔵地にするこ



第1図 大町遺跡、田鶴羽遺跡の位置

表1 確認調査（平成30年度）の成果

トレンチ位置	規模		確認調査結果	
	長	幅	土層	遺物
北西	30 m	1 m	盛土1.0 m、旧耕作土0.1 m、淡黄灰色シルト(0.6 m) ／茶褐色シルト(0.2 m)・暗灰色粘シルト(0.1 ~ 0.2 m)、砂礫・砂層(河川状堆積)	暗灰色粘シルトより少量の土器と炭化物が出土。暗灰色粘シルト下の砂層上部からも土器片1点が出土
南東	15 m	1 m	盛土1.2 m、旧耕作土0.1 m、砂礫層(河川状堆積)	出土遺物なし

とはせず、周知の包蔵地内に該当する工事範囲を対象として発掘調査を行なうこととした。

道路計画の内容が平成30年度内に具体化したので、平成31年4月に大阪府教育委員会と大阪府住宅まちづくり部との間で発掘調査に係る覚書を締結した。文化財保護課はその後に発掘調査に係る手続きと準備を進めた。

## 第2節 発掘調査の経過

覚書の締結後に発掘調査に伴う機械掘削などの請負、基準点設置や空中写真測量などの委託に関して入札を実施し、10月までには各業者が決定した。

工事範囲については、9月下旬に住宅まちづくり部職員とともに現地で最終の確認を行ない、対象範囲を現地で線引きするとともに、その範囲を避けて調査時の排出土の仮置場や監督員詰所の設営地を確保した。

既述のように発掘調査の対象は2ヶ所ある。1ヶ所は八木市民センターの南西に隣接する空閑地の南辺に沿った東西約90m、南北約10mの範囲である。これを19-1区とした。

これに対して住宅地内道路を挟んだ八木市民センター北側の空閑地部分に設定した調査区を19-2区とした。この19-2区では、西辺の一部分に低位段丘が張り出しているものの、調査区の大半は“天の川”両岸に広がる沖積地であり、低位段丘よりさらに1.0m以上低い。

19-2区は当初、調査範囲を長辺16.6m、短辺8.5mと設計していた。しかし機械掘削開始直後、想定していたよりも盛土が厚く、掘削が深くなることが予測された。現況地盤から盛土下まで1.5m、人力掘削を併せると約2.0m下がることが判明した段階で、主に機械掘削未着手の範囲について調査範囲を維持しながら道路やフェンスなどの既設物との間隔を広げて機械掘削を再開し、また機械掘削途中で調査区内にテラス面を設けるなど、安全対策のための措置を行なった。そのため調査区上辺の形状が当初設計から若干変形した。

19-1区は、10月17日に調査範囲の現況測量を行ない、測量成果を点検した。そして不備のないことが確認できたので、翌日から機械掘削を開始した。この機械掘削は10月31日に終了した。

東西に長い調査区は西方向に旧地形が下降していて、それに対応して盛土が厚くなり、調査区の南東端で機械掘削の深度は最大1.8mを測った。なお調査区北西端から15~50m間には、調査区を南北に斜行する幅3~5mほどの擾乱が存在していた。擾乱の両壁はほぼ垂直に立上がり、直線的に長く延



第2図 確認調査トレンチ位置



第3図 令和元年度調査区の位置



第4図 埋設物試掘トレンチの位置

びることから構造物の掘方である可能性も考えられたが、具体的な原因は不明である。

現況地盤は平坦な住宅造成時の整地面であるが、その盛土を除去すると、高低差のある本来の地形が現れた。この地形の高低差は地質の違いに由来していて、19-1区内は3分される。

機械掘削終了と同時に本格的に人力掘削による遺構検出作業を北西端から開始した。調査区西寄りには竪穴建物や掘立柱建物が集中し、さらに重なり合う河道と溝が建物群とも重複していて、前後関係をはじめとして遺構の実態の理解は容易ではなかった。

12月17日に空中撮影による写真測量を実施し、同週に高所作業車による調査区全体写真の撮影を行なった。また12月21日（土曜日）には19-1区を対象に現地公開を行い、約100名の来場者があった。

19-2区は12月4日に機械掘削を開始した。既述したように予想外の深度であったため、状況を確認しつつ作業を進めるとともに安全対策を併行して行なつたため、人力掘削は1月から開始した。

19-2区の空中撮影による写真測量は1月17日、高所作業車による全景写真撮影はその前日の16日に実施した。測量用の空中写真撮影の可否を確認したのち19-2区の埋戻しを開始し、1月20日に終えた。

19-1区の埋戻しは1月21日から始め、1月31日に終了し、翌週に住宅まちづくり部職員と現地の復旧状況を確認した。その後、調査記録類の点検・整理、遺物の搬出準備などを行ない、現地調査を終了した。

なお、11月に住宅まちづくり部施設保全課により住宅内の空閑地内で埋設物確認のための試掘を行なうこととなった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である大町遺跡あるいは田鶴羽遺跡の範囲内に当たるため、19-1区の調査中ではあるが至近距離なので立会い、試掘作業によって遺構や遺物に損傷を与えないか確認した。この試掘は11月11・12・14日の3日間で16ヶ所に及んだ。いずれも埋蔵文化財へ

表2 埋設物確認試掘に伴う立会の成果

No	長さ	掘削深度（現況地盤～旧耕作土）	No	長さ	掘削深度（現況地盤～旧耕作土）
A-1	8	南端：0.9、北端：0.8	B-4	4	南端：0.95、北端：0.95
A-2	6	南端：0.8、北端：0.8	B-5	5.5	南端：1.10、北端：1.16
A-3	6	南端：0.8、北端：0.9	C-1	5	北端：1.3
B-1	6	中央：0.7	C-2	5	南端：1.5
B-2	5.4	南端：1.0、北端：1.1	D-4	5.8	西端：1.6、東端：1.75
B-3	5.9	南端：1.15、北端：0.95			（単位：m）

の影響はなく、また今後の調査の参考となる現況地盤から近世以降の旧耕作土までの深度を 11 ケ所で確認することができた。

## 第2章 調査地点の特徴

### 第1節 調査地所在の遺跡概要

#### (1) 大町遺跡の概要

大町遺跡は岸和田市大町に所在する。岸和田市は大阪府内の南部にあり、北西—南東方向に長い。大町遺跡は市域の中では北端近くに位置していて、1.4kmほど北東に進み牛滝川を越えると和泉市に入る。また西に約 3.4km 進むと現在の海岸線に至る。

大町遺跡の範囲は、府営岸和田大町住宅（旧称：久米田第二住宅）の範囲にほぼ該当している。その大きさは北東—南西方向 340 m、北西—南東方向 200 m ほどである。

遺跡の中央には久米田池を源とする用水路の“天の川”が縱断している。“天の川”は久米田池に伴う水路であり、その前段階においては牛滝川西域を縦横に流れる旧河道が集約された最終段階の河川である。なおこの“天の川”以西の府営住宅の一画や八木市民センターなどを含んだ現在の範囲まで大町遺跡を拡大したのは平成 27 年 2 月であった。それ以前、平成 15 年度から開始した府営住宅建替え工事に伴う一連の発掘調査にあっては、調査対象となる大町遺跡の範囲は“天の川”以東の府営住宅地および大路公園であった。

その範囲もまた府営久米田第二住宅（当時）の建替え事業に先立ち、平成 13 年 5 月に大阪府建築都市部（当時）の依頼を受けて同年 7 月に実施した住宅敷地内の試掘調査成果に基き、岸和田市教育委員会と協議して拡大したのである。それ以前の大町遺跡は、住宅敷地内の北西の一部を占める直径 40 ~ 50 m ほどの広さに過ぎず、遺跡の主要時期も縄文時代だと考えられていた。

大阪府教育庁（大阪府教育委員会）では平成 15 年度から今回の 2 ケ所を含め計 15 地点の発掘調査を府営岸和田大町住宅内で行なってきた。既往の調査成果は本章第 2 節で概略を示すが、15 年以上にわたり積み上げてきた遺跡の発掘調査成果に基づけば、“天の川”的東では弥生時代後期後半から古墳時代前葉にかけて規模の大きな集落が存在していたと結論付けることができる。それは土器をはじめとする遺物が数多く出土していることによる。とはいっても、その大半が河道からの出土であり、住居跡などは見つかっていないことから、当該期の集落の存在は予測に留まざるを得ないことも否定できない。

また“天の川”東岸に沿って中世の遺構や遺物も発見されていて、生産を含めた人々の活動域であったことも明らかである。

一方“天の川”的西は、東に比べて調査事例が少なく、その歴史的状況が不明瞭であった。そうしたなかで平成 24（2012）年の岸和田市教育委員会の発掘調査による庄内式期の竪穴住居の発見は、大町遺跡への評価、そして遺跡内部の集落の在り方について貴重な検討材料となった。

さらに今回の発掘調査で古墳時代中期の複数の竪穴建物や掘立柱建物が見つかり、これまで不明確であった“天の川”西域における集落の存在が断片的ながら判明した。ただし本質的には、その建物群を「集落」と呼ぶのは短縮的といえる。

また中世の遺構や多量の遺物も見つかり、“天の川”東域とともに西域においても、その時期の人の活動域の広がりを認めることができた。

## (2) 田鶴羽遺跡の概要

田鶴羽遺跡は、大町遺跡の南西に隣接する。大町遺跡の南西方向への拡大によって田鶴羽遺跡の東張出部と組み合うように接している。

この遺跡は、集合住宅の建築に伴って平成元（1989）年に岸和田市教育委員会が実施した調査によつて新規発見、周知された遺跡である。発掘調査の結果、中世の遺構とともに小型方墳6基が発見された。6基のうち2基は周溝を接して位置しているが、残りの4基は調査区内に分散している。

これまでの府宮岸和田大町住宅の建替に伴う調査のうち、田鶴羽遺跡内での調査は、府道岸和田・牛滝山・貝塚線に接する住宅地内道路の敷設に伴う発掘調査の2ヶ所（06-1区、10-3区）だけで、19-2区が3地点目となる。10-3区からは田鶴羽遺跡の古墳に供獻されたものと同時期、あるいは若干後出する須恵器が出土していて、古墳時代の遺物の広がりを認めることができた。

今回の調査で発見された堅穴建物や掘立柱建物が集中する地点から古墳群までは、現状の最短距離で50mにすぎない。古墳群は東に広がる様相を呈しているので、建物群と古墳群との距離はより短くなる。さらに注目すべきは、建物群と古墳群とは形成時期が比較的近いことである。

平成元年度の岸和田市教育委員会による発掘調査は、中世に関しては不詳だが、小型方墳で構成された古墳群の存在を明らかにしたこと、この地域の古墳時代像を捉える上で重要な成果であった。なおこの古墳群は「田鶴羽古墳群」と呼ばれている。

表3 既往の調査

調査区	主な遺構	主な遺物
03-1	旧河道、溝状遺構、粘土探査坑	土器（弥生後期・古墳前期）
03-2	旧河道、粘土探査坑	土器（縄文後・晚期・弥生後期・古墳前期）、
04-1	堅穴状遺構（庄内～布留式期）、旧河道、溝、土坑、粘土探査坑	土器（縄文後期・弥生中・後期・古墳前期）、土師器、須恵器、陶器（灰輪）
04-2	旧河道、粘土探査坑	土器（縄文後・晚期）
06-1 (田鶴羽)	旧河道（調査区全域が河道）	瓦質土器（甕）
06-2	土器溜り（13世紀）、井戸（木組：13世紀、石組：14世紀）、粘土探査坑	弥生土器、須恵器（杯身）、土師器（高杯・皿）、土師質土器（土釜）、瓦器（碗）、瓦質土器（羽釜）、須恵質土器（甕・捏鉢）、陶器（常滑・甕）、青磁、瓦、鐵製品、土鍬
06-3	井戸（石組：14世紀）、溝（弥生後期）	弥生土器、瓦器（碗・皿）、土師質土器、瓦
07-1	井戸（石組：14世紀）、石列群、土坑	土師器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、青磁、瓦、石製品（サヌカイ）
07-2	水田跡（上層面）	土師質土器、瓦質土器
09-1	旧河道、溝、土坑	土器（縄文中・後期・弥生中・後期・古墳前期）、土師器、須恵器
10-1	廐棄土坑（弥生中期）旧河道、溝、土坑	土器（弥生中・後期・古墳前期・古墳前前期）、土師器（皿・椀）、瓦器、石製品（石包丁・石鑊）、瓦
10-2	旧河道	土器（弥生中・後期・古墳前前期）、土師器、須恵器、黑色土器
10-3 (田鶴羽)	旧河道、溝、土坑、谷状地形	土器（弥生後期・古墳前前期）、須恵器（高杯・杯蓋）、黑色土器、瓦器、埴輪
19-1	旧河道、溝、堅穴建物（4軒）、掘立柱建物（5棟）、小穴・畦（14世紀）、井戸（石組：15世紀）、谷状地形	土器（古墳）、須恵器（高杯・甕）、土師器、土師質土器（羽釜・土釜、紀伊系）、瓦器、瓦質土器（羽釜・甕・捏鉢）、埴輪、石製品（台石）
19-2 (田鶴羽)	溝、耕作痕、谷状地形	土師質土器、須恵質土器、炻器、陶器、瓦
岸和田H1 (田鶴羽)	方墳（6基）	須恵器（杯身・杯蓋・甕・高杯・小壺・器台）
岸和田H24 (田鶴羽)	堅穴住居（1軒）、旧河道	土器（古墳前期）、瓦器



第5図 既往の調査区位置

## 第2節 大町遺跡の既往調査

大町遺跡においては、このたびの発掘調査以前に、試掘・確認調査を除き、過去6ヶ年度にわたって13地点の発掘調査を行なった（一部、田鶴羽遺跡を含む）。その大半が“天の川”以東であることから、西に当たる今回の発掘調査は遺跡の全体像を捉える上で重要であった。改めて過去の調査成果を表3にまとめておくが、岸和田市教育委員会による2ヶ所の調査も含める。

## 第3節 調査地点の地形と遺跡立地

大町遺跡が位置する大阪府南部の和泉地域の地形は、和歌山県との境をなす和泉山脈、そこから広がる丘陵、平野や主要河川に沿って広がる段丘、そして海岸や河川の周囲に分布する沖積地に大きく区分できる。

和泉山脈は標高約800mで、あまり高さはなく、山部も比較的緩やかである。和泉山脈は領家花崗岩類、泉南酸性火碎岩類を基盤層として、それらを覆って凝固不十分な礫岩・砂岩・泥岩が互層に堆積している。大阪湾方向には緩やかに傾斜するが、紀の川方向には比較的急峻である。

山脈の前にはその基盤層が大阪湾方向に張り出し、幅4~5kmの山地となって起立している。「前衛山地」と呼ばれ、岸和田市域では神於山が該当する。

前衛山地から大阪湾方向にかけて丘陵部が広がる。この丘陵部は大阪層群と呼ばれる凝固の不十分な礫岩・砂岩・泥岩およびこれらの互層からなる地層で形成されている。そして、和泉山脈から流れ出た中小河川がこの丘陵部を深く切り込み、地域一帯を南北に分断する。

段丘は、比高30~50mほどの高位段丘、10~30mの中位段丘、10m以下の低位段丘に分かれる。そのうち、和泉地域では主として中位段丘が発達している。

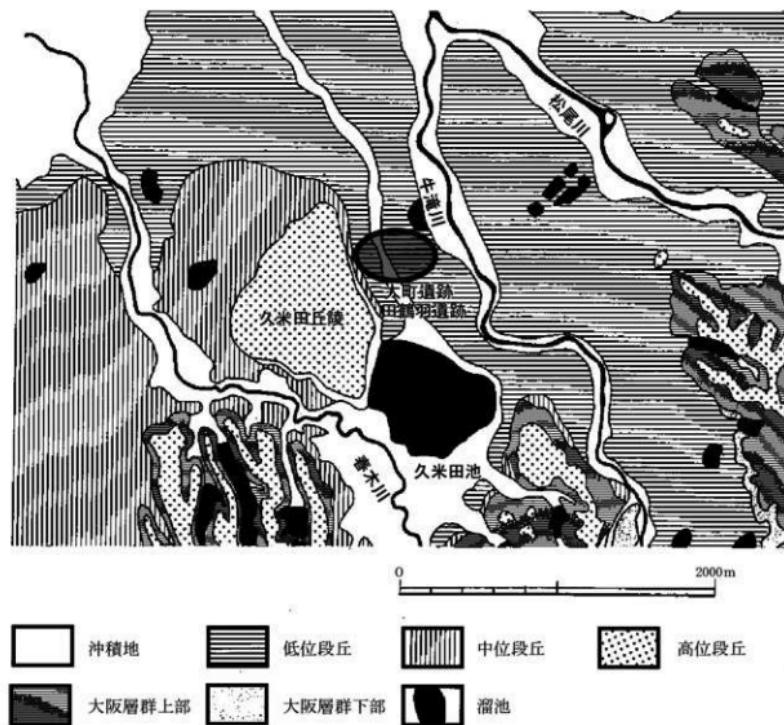
高位段丘は大町遺跡西方の久米田池の西辺から北にかけてみられ、和泉地域ではこのほか和泉市信太山付近や泉佐野市見出川西岸でも認められるが、概して広がりを欠いている。また低位段丘は河川の縁辺に広がるが、横尾川、松尾川、牛滝川、そしてそれらが合流した大津川の流域を除くとあまり発達していない。

沖積地は大阪湾沿岸に広がりをもつ。また各河川に沿って認められるが、河川沿いの沖積地は狭い。和泉地域の沖積地は概して狭小であり、ことに南に下るほど面積が狭くなる。

こうした和泉地域の地形のなかで、大町遺跡は東を牛滝川、西は春木川に挟まれた低位段丘に位置している。しかし詳細にみるとやや複雑である。

大町遺跡の中央を縦断するように南東から北西方向に流れる“天の川”は久米田池からの用水路であるが、その前身は遺跡内の複数地点で発見された旧河道の最終ルートである。旧河道は縄文時代から古墳時代初頭にかけて流れを変えつつ高位段丘裾部に向かって収束していく、かつての“天の川”となる。その名残りが谷状地形である。

周辺の発掘調査（06-2区）や道路整備事業に伴う確認調査（令和2年7月）、埋設物確認試掘に伴



第6図 大町遺跡、田鶴羽遺跡周辺の地形

う立会調査（令和元年11月）の成果からは、府営住宅造成以前の“天の川”東域は約20mにわたって現況地盤から約2m低くかったとみられる。

一方、“天の川”的西は、和泉山脈から張り出した「久米田丘陵」先端の東裾縁辺に当たるが、東域と同じく“天の川”沿いは旧地形が現況地盤より1.5m以上低いことが調査成果（10-3区、19-2区、岸和田H24区）から推測できる。この“天の川”によって大町遺跡における古墳時代の集落が東西に分割されていた可能性も予想される。

なお春木川は久米田丘陵を切り込むように北西方向に流れているが、東方向は丘陵が障壁となり牛滝川西城とは遮断されている。このため、大町遺跡との地域交流を検討する上では、牛滝川流域を対象として、春木川流域は一端分離しておく。

#### 第4節 大町遺跡周辺遺跡の歴史的動向

大町遺跡および田鶴羽遺跡が所在する岸和田市大町は、岸和田市の北端近くに当たり、北東へ約1.4km進むと和泉市内に入る。したがって、ここでは岸和田市と和泉市の両域に所在する遺跡の歴史的動向について概観する。なお、大町遺跡で遺物の確認ができる縄文時代中期から、中世までの時代・時期に焦点を当てる。

**縄文時代 中期～晚期** 大町遺跡09-1区で中期の可能性の高い土器破片1点が出土している。

岸和田市内、和泉市内では縄文時代中期になると、前期に比べて遺跡数が多くなる。岸和田市内では箕土路遺跡、葛城山頂遺跡、和泉市内では仏並遺跡をはじめ、小田遺跡、万町北遺跡、府中遺跡でそれぞれ土器が出土している。葛城山頂遺跡は標高850m付近の山頂部、仏並遺跡は山地と丘陵に挟まれた標高100mほどの狭い谷間の中位段丘上に位置している。これに対して箕土路遺跡や府中遺跡は低位段丘に位置している。縄文時代中期以降、低域にも生活圏が拡大する。

**縄文時代後期**になると、遺跡数は増加する。大町遺跡では07-2区から後期の宮壇式土器が出土しているほか、03-2区、04-1・2区、09-1区でも後期の土器破片が認められる。

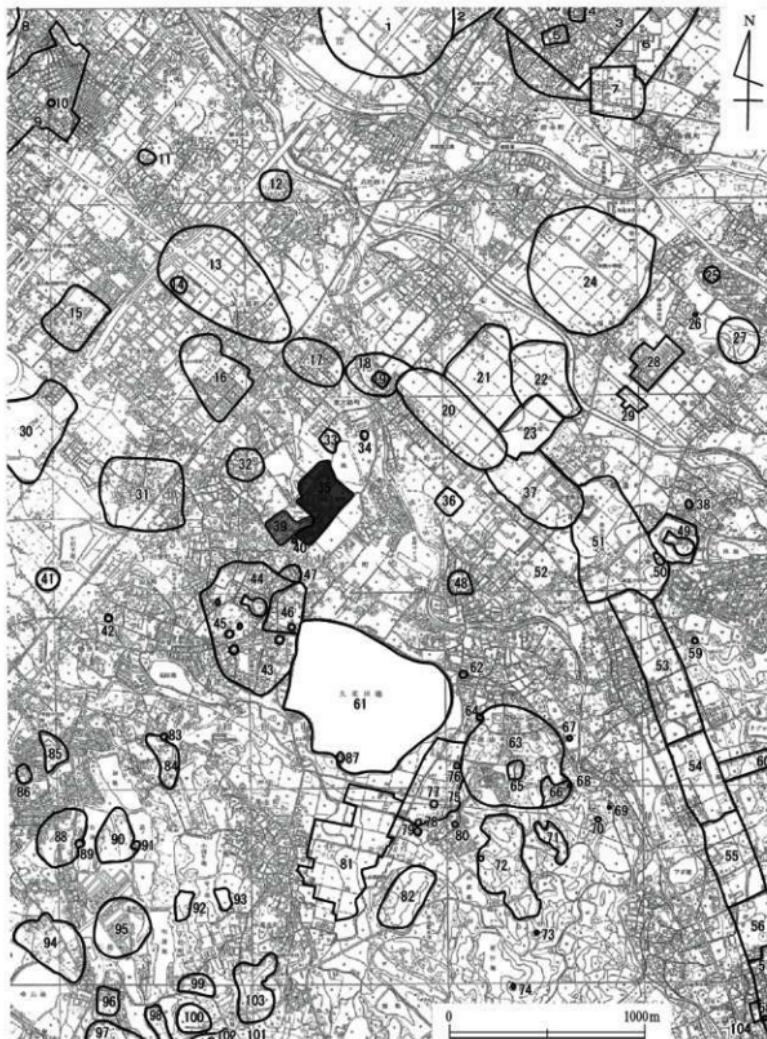
岸和田市内では山ノ内遺跡をはじめ、沖積地上に位置する春木八幡山遺跡や春木天の川遺跡、低位段丘の府中遺跡や輕部池西遺跡、箕土路遺跡で土器が出土している。さらに先述の葛城山頂遺跡や高位段丘の山直中遺跡でも土器の出土が認められる。

和泉市内では、仏並遺跡で竪穴住居跡や土器墓塚が検出されている。また中位段丘の池田寺遺跡や万町北遺跡、低位段丘の伯太北遺跡、府中遺跡、板原遺跡、池上曾根遺跡で土器の出土が認められる。遺跡数が増加するとともに立地場所が拡大し、高位段丘以下の利用が普遍化する。

**縄文時代晚期**になっても大町遺跡では03-2区で長原式土器が出土している。

しかし岸和田市、和泉市とも晚期になると後期から継続しない遺跡が現れ、遺跡数が若干減少する。後期から続く遺跡としては、岸和田市内では春木八幡山遺跡、春木天の川遺跡、山ノ内遺跡、山直中遺跡、和泉市内では府中遺跡、板原遺跡、万町北遺跡、仏並遺跡、池上曾根遺跡がある。このうち山ノ内遺跡ではサヌカイトの石核などが出土していて、石器製作が推測されている。また小田遺跡は後期になつていったん断続するが、晚期になると再び土器の出土が認められる。晚期の遺跡は高位段丘から沖積地までの広い範囲に及んでいるが、その中でも中位段丘に集まる傾向がみられる。

なお具体的な時期比定はできないが、岸和田市内では加守三昧山遺跡、二俣池北遺跡、土生遺跡、下池田遺跡で石匙、琴山遺跡、尾崎遺跡、三本松下遺跡で石鍬が出土している。その他、石器出土が知られる遺跡としては狐塚遺跡、荒子遺跡、畠遺跡、土生滝遺跡、大澤遺跡などもある。また栄の池遺跡では緑色結晶岩製の石棒が出土している。



- |           |           |            |           |          |             |           |
|-----------|-----------|------------|-----------|----------|-------------|-----------|
| 1: 板原遺跡   | 2: 鶴ノ上遺跡  | 3: 和泉国府跡   | 4: 泉井上社   | 5: 国府城跡  | 6: 府中遺跡     | 7: 和泉寺跡   |
| 8: 磯ノ上遺跡  | 9: 吉井遺跡   | 10: 吉井上品寺跡 | 11: 夜疑寺跡  | 12: 高月寺跡 | 13: 斎上路遺跡   | 14: 大飼堂廐寺 |
| 15: 荒木上塚跡 | 16: 下池田遺跡 | 17: 西大路遺跡  | 18: 今木遺跡  | 19: 今木庵寺 | 20: 軒部西遺跡   | 21: 小田遺跡  |
| 22: 軒部池遺跡 | 23: 軒部池   | 24: 和氣道路   | 25: 駿音寺城跡 | 26: 狐塚古墳 | 27: 寺門古墳・古墓 | 28: 寺田遺跡  |
| 29: 摩溫北道路 | 30: 茅の池遺跡 | 31: 小松里庵寺  | 32: 八木城跡  | 33: 大野城跡 | 34: 丸山古墳    | 35: 大町道路  |
| 36: 今木城跡  | 37: 山ノ内遺跡 | 38: イナリ古墳  | 39: 田舎羽遺跡 | 40: 池尻古墳 | 41: 頼原遺跡    | 42: 浄行寺古墳 |

43：久米田古墳群	44：貝吹山古墳	45：風吹山古墳	46：久米田寺跡	47：池尻町遺跡	48：田治米庵寺	49：摩瀬山古墳
50：馬子塚古墳	51：山直北遺跡	52：田治米宮内遺跡	53：三田遺跡	54：上ブジ遺跡	55：二俣北遺跡	56：水込遺跡
57：黒石遺跡	58：山直中遺跡	59：東山古墳	60：三田古墳	61：久米田池	62：岡山矢取遺跡	63：岡山遺跡
64：岡山孤塚古墳	65：岡山御坊跡	66：西山遺跡	67：古窯出土地	68：西山古墳	69：楠本矢社古墳	70：高山古墳
71：三田墓地	72：どぞく遺跡	73：お立場古墳	74：箱谷古墳	75：重ノ原古墳群	76：松尾池尻輪窓跡	77：馬塚古墳
78：重ノ原遺跡	79：重ノ原古墳	80：小金塚古墳	81：尾山遺跡	82：赤山古墳群	83：下松孤塚古墳	84：孤塚遺跡
85：上松三味道路	86：武蓮寺跡	87：岡山八ツ川遺跡	88：合池遺跡	89：合池遺跡	90：上松遺跡	91：道ノ池窓跡
92：唐池遺跡	93：笠松遺跡	94：板屋遺跡	95：上松中尾遺跡	96：泉光寺	97：志村遺跡	98：仏谷尾遺跡
99：尾崎遺跡	100：兒子池東遺跡	101：荒子遺跡	102：上松孤塚古墳	103：等山遺跡	104：上居城跡	

第7図 大町遺跡、田鶴羽遺跡周辺の遺跡

弥生時代 大町遺跡では10-1区では中期後葉の廃棄土坑が検出された。長径2.0m、短径1.5m、深さ15cmの土坑に広口壺・大型壺・鉢・高杯などの土器破片64点、サヌカイト製石劍基部1点、綠色結晶片岩製石包丁1点、砂岩製砥石1点、サヌカイト剣片5点が廃棄されていた。また04-1区、09-1区、10-1・2区、19-1区でも中期中葉～後葉の土器が出土している。

岸和田市内、和泉市内とともに弥生時代になると遺跡数は減少する。しかも春木八幡山遺跡を除くと、前期の遺跡は弥生時代になってから出現したものであり、春木八幡山遺跡でも出土した前期の土器は後半期のものなので、縄文時代から一時期断続していると理解することもできる。

弥生時代前期の遺跡としては、岸和田市内では上述の春木八幡山遺跡のほか、田治米宮内遺跡、加守三昧山遺跡、和泉市内では池浦遺跡と池上曾根遺跡がある。岸和田市内の3遺跡は土器が出土しているのみで、明瞭な遺構は知られていない。これに対して和泉市の池浦遺跡では前期中葉の幅2m、深さ1m以上の「V」字状溝が発見され、集落を囲む環濠であるとの見解もある。この集落は前期後葉以後には続かないが、入れ替わるように池上曾根遺跡が前期後葉に出現する。池上曾根遺跡は和泉地域最大級の拠点的集落であり、中期中葉・後半に盛行期を迎え、後期末まで継続する。

弥生時代中期になると、遺跡数は激増する。ただし、中期前半段階では土器の出土が認められるものの、集落構造が判明する遺跡はほとんどない。本格的な集落の形成がみられるのは中期中葉以降である。

岸和田市内では中期の遺跡としては、前期から続く田治米宮内遺跡、春木八幡山遺跡に加えて、春木天の川遺跡、下池田遺跡、栄の池遺跡、池尻遺跡、畑遺跡、兒子池東遺跡、岡山矢取遺跡、土生遺跡などがあり、さらに中期末頃から集落の形成が始まるとみられる遺跡には上松中尾遺跡がある。ただ既述したように春木八幡山遺跡を除くと、集落形成の状況が明瞭になるのは中期中葉以降である。この時期になると市内最大級の集落と推定される畑遺跡をはじめ、軽部池西遺跡、下池田遺跡、栄の池遺跡で集落の様相を具体的に推定することが可能となる。さらに弥生時代中期になると、標高50mの丘陵上に位置する上松中尾遺跡などの高地性集落が出現する。

弥生時代後期になると遺跡数は若干減少するが、そうした中でも後期後半～庄内・布留式期の竪穴住居7軒が検出された西大路遺跡、河道や土器溜りが見つかった箕土路遺跡、標高60～70mの丘陵上で竪穴住居や掘立柱建物が発見されたとぞく遺跡、軽部池西遺跡などが存在する。これらの多くは大町遺跡の北東、牛滝川の西岸に位置する、連接した遺跡である。牛滝川の西岸には、焼失家屋が発見された山ノ内遺跡もある。また下池田遺跡では竪穴住居や円形周溝墓が検出されている。大町遺跡を含めた複数の遺跡により集落域（遺跡群）が形成されていたと考えられる。

和泉市内における弥生時代中期以降の遺跡の様相についてみると、万町北遺跡で竪穴住居跡5軒、池田下遺跡で竪穴住居や方形周溝墓が発見されているのをはじめ、和氣遺跡、虫取遺跡、池田寺遺跡、小田遺跡、寺田遺跡でも当該時期の遺構あるいは遺物が検出されている。岸和田市内と同様に、和泉市内においてもこの時期には遺跡数が増加し、立地場所も広がる。

弥生時代後期になると、和泉市内でも高地性集落が出現する。標高 65 m に位置する觀音寺山遺跡、標高 50 ~ 60 m の惣の池遺跡があり、觀音寺山遺跡では 100 軒以上の竪穴住居が検出されている。また万町北遺跡では竪穴住居と方形周溝墓、小田遺跡では溝など、府中遺跡でも後期や後期末～庄内式期の竪穴住居や方形周溝墓などが発見されている。

**古墳時代** 岸和田市内の田治米宮内遺跡、春木天の川遺跡、箕土路遺跡、下池田遺跡、土生遺跡、西大路遺跡では弥生後期に引き続いて庄内式期にも集落が営まれるが、しかし布留式期になると消滅する遺跡が現れ、全体としては減少傾向にある。

古墳時代前期に明瞭な集落様相がみられるのは、竪穴住居 2 軒や掘立柱建物 2 棟などが発見された芝ノ垣外遺跡、布留式系土器が多量に発見された磯上遺跡、そして前期後半に比定される 100 基以上にものぼる土壙墓が発見された三田遺跡などがある。三田遺跡は摩湯山古墳の南約 300 m に位置していて、両者の関係が指摘されている。また和泉市の寺田遺跡では、前期後半から中期後半まで継続して集落が形成される。大町遺跡でも、今回の調査以前に布留式系甕などの前期の土器が複数点出土している。

中期後半から後期にかけては遺跡数が若干増加する。山直北遺跡で中期後半と考えられる竪穴住居、二俣池北遺跡や上フジ遺跡では後期後半の竪穴住居が発見されている。また畠遺跡は中・後期に、水込遺跡は後期後半に集落の形成が認められる。

和泉市内では和氣遺跡や府中遺跡、小田遺跡で弥生後期から継続して古墳前期にも集落が営まれている。これらの遺跡は中期以降にも継続する。また後期になると万町北遺跡で再び集落が形成され、池田寺遺跡も現れる。

古墳については、岸和田市の摩湯山古墳（前方後円墳：200 m）、貝吹山古墳（前方後円墳：130 m）、和泉市の和泉黄金塚古墳（前方後円墳：94 m）が前期後半に築造される。そのうち貝吹山古墳は風吹山古墳、さらに 10 基以上の円墳へと系譜をつなげて久米田古墳群を形成する。摩湯山古墳の南西には、後続する 1 辺約 35 m の方墳である馬子塚古墳が附隨している。この摩湯山古墳・馬子塚古墳と久米田古墳群とは系譜を異にする。また大町遺跡に隣接する田鶴羽遺跡では、1 辺 10 m に満たない方墳が 6 基見つかっている。周溝内から複数の須恵器が出土した古墳もあり、古墳時代中期後半から後期初頭に形成された古墳群である。

ところで先述したように、摩湯山古墳と三田遺跡の土壙墓とは相互に関係する可能性が指摘されている。しかし、久米田古墳群との関連が考えられる集落域は今のところ詳細を得ない。ひとつ可能性は、久米田池の構築にともなって破壊された、あるいは水没したとの見方である。いまひとつは、大町遺跡や下池田遺跡、箕土路遺跡などを含めた集落群と関連付けて捉えるという考え方である。

**飛鳥・奈良時代** 7 世紀代の集落は、岸和田市内、和泉市内ともに少なく、岸和田市内では二俣池北遺跡と水込遺跡が、和泉市内では池田寺遺跡と万町北遺跡がそれぞれあがるが、多くの遺跡では古墳時代後期から一時的に集落は断絶する。

8 世紀になると両市内とも再び集落は激増している。岸和田市内では山直北遺跡、芝ノ垣外遺跡、三田遺跡、上フジ遺跡、吉井一ノ坪遺跡、栄の池遺跡、西大路遺跡、畠遺跡、黒石遺跡が、和泉市内では觀音寺遺跡、板原遺跡、古池遺跡、府中遺跡、小田遺跡があがる。これらは新出あるいは一時期の断絶後に再び集落が営まれた遺跡である。これに対して、7 世紀代に集落を形成した各遺跡は 8 世紀代も継続している。

なお吉井遺跡では「天平寶字三年」の紀年銘木簡が出土した。759 年にあたる。京の刑部省囚獄司の役人である「主守」から、遺跡周辺に発給された文簡だとみられている。

古代寺院としては、7 世紀後半の建立とみられる岸和田市内の小松里庵寺や春木庵寺、和泉市内では

行基建立の伝承がある久米田寺、7世紀中葉の建立と推定され、寺院に附設されたとみられる掘立柱建物群が発見された池田寺、法隆寺式の伽藍配置に近いと推測される坂本寺、建物基壇の一部が検出され、さらに奈良時代の掘立柱建物跡群も見つかった信太寺、承和16（839）年に和泉国分寺に昇格した安楽寺、そして和泉寺などが建立された。

和泉寺跡からは「珍懸主廣足作…」、「坂合部連前…」、「讚美…」、「…美…」、「…宮…」と記された8世紀代の文字瓦が出土している。寺院や寺域に関する明確な遺構は見つからなかったが、当該期の和泉寺造営との関連を窺うことができる資料である。

ところで、和泉は古代の五畿のひとつであるが、当初は河内国に含まれていた。靈亀2（716）年に和泉・日根の2郡を河内国から割いて珍努宮に供したことが始まりとなり、同年には大鳥・和泉・日根の3郡を割いて和泉監が置かれた。珍努宮監をもって3郡を治めたが、天平12（740）年に和泉監が廃され、再び河内国に併合される。その後、天平寶字元（757）年になって、その3郡をもって和泉国が成立したという推移をたどる。

なお大町遺跡の所在地は、和泉郡八木郷にある。八木郷には今木・池尻・大町・西大路・東大路・小松里・下池田・箕土路・中井・吉井の10村が属したといわれている。大町遺跡はそのうちの大町に所在する。

平安時代 大町遺跡では、平安時代後期頃の軒丸瓦・軒平瓦が出土している。また10-1区ではこの時期に水田が形成されていた。

岸和田市内では奈良時代から平安時代にかけて継続する遺跡が数多くみられる。掘立柱建物群が検出された山直北遺跡や柴の池遺跡をはじめ、三田遺跡、上フジ遺跡、芝ノ垣外遺跡、水込遺跡、二俣池北遺跡、吉井遺跡などがある。他方、掘立柱建物群や溝、井戸、土壤墓が見つかった山直中遺跡、掘立柱建物群、井戸、土坑が見つかった黒石遺跡はこの時代になって形成が始まった集落である。

和泉市内にあっては、掘立柱建物群の発見された万町北遺跡が奈良時代からの継続的な集落、下池田遺跡や和氣遺跡は中断期を挟んだ集落であり、池上曾根遺跡も後者のタイプである。また和氣遺跡では、在地名主層の館との推定される建物群が検出されている。

鎌倉・室町時代 鎌倉時代になって集落形成が始まると上松宮之遺跡、室町時代になって始まる板屋遺跡などもあるが、当該時代に集落形成がなされた多くの遺跡は、弥生・古墳時代以降、一度は開発が及んだ場所である。

ただし、山直中遺跡、吉井遺跡、中之社遺跡、黒石遺跡、犬飼堂廃寺のように平安時代から継続する集落と、平安時代には集落形成が認められない、もしくはその痕跡が極めて稀薄な集落とがある。後者の例としては、西大路遺跡、箕土路遺跡、軽部池西遺跡などがある。西大路遺跡では平安時代においてのみ集落形成が不明瞭であり、箕土路遺跡は奈良～平安時代、軽部池西遺跡は古墳～平安時代の集落痕跡を残していない。

西大路遺跡では鎌倉時代の掘立柱建物跡群や区画溝、井戸などが発見され、屋地が形成されているとみられる。上松宮之遺跡では数枚の完形の皿を埋納した室町時代中葉の祭祀関連土坑が発見されている。二俣池北遺跡や箕土路遺跡、軽部池西遺跡では水田が検出されている。

古墳時代から古代の空白期を経た今木廢寺では、時期不詳ではあるが、溝で区切られた幅21mの屋敷地2区画とその前面を北西・南東方向に延びる道が検出されている。道幅は約3mを測る。ひとつの屋敷地内には桁行・梁行とも3間の掘立柱建物が建つ。さらに道路を挟んだ南西側にも同時期の区画溝状の遺構があり、道の両側に屋敷地が存在した可能性がある。

和泉市内における鎌倉・室町時代の遺跡には、区画溝が検出された和氣遺跡や福瀬遺跡、板原遺跡を

はじめ、池田寺遺跡、中世墓地が広がる万町遺跡などがある。

大町遺跡でも13～15世紀の井戸、畦、水路とみられる溝などが見つかっている。

## 第5節 田鶴羽古墳群

田鶴羽遺跡発見の契機となった集合住宅の発掘調査（岸和田H1区）では、6基の方墳が確認されている。今回の19-1区からは西50mほどの距離にすぎない。いずれの古墳も上面を削平されていて墳丘や埋葬施設は残っていない。規模についても現状を判断するだけであるが、最も大きい北東隅近くの1基が墳丘裾で8m、周溝を含めると14m近く、最小は北西にある1基で墳丘裾では3.5m、周溝を含めると5.7mを測る。

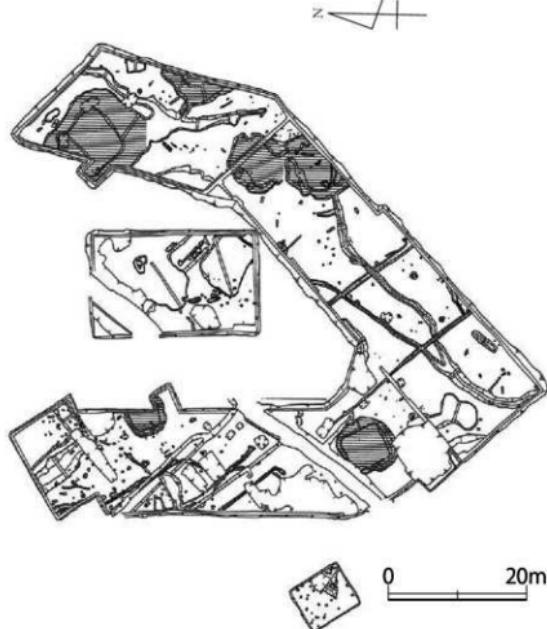
周溝からは須恵器が出土している。器種としては小型壺、壺、台付鉢、甕、器台、高杯、杯身、杯蓋があり、器台には装飾付器台と大型器台がみられる。そのうちの幾つかは大阪府教育委員会2012年『大阪町遺跡Ⅲ』（大阪府埋蔵文化財調査報告2011-2）で取り上げたが、補足しておく。

報告書に写真を掲載しなかったものとして小壺2点、装飾付器台1点、大型器台1点、高杯1点、杯蓋2点、杯身1点がある。小壺2点はともに口径7cm前後で、口縁部端は尖り気味である。胴部下半にヘラケズリが施されている。高杯は脚部の破片である。削り出しによる突線を巡らせる。杯蓋2点は

ともに口縁部直立気味で、ナデにより端部は僅かに外反し、報告書写真掲載の3・4に近似する。これらはTK23型式あるいはそれ以前に位置付けられる。

これに対して立上り部を欠く杯身は胴部が浅く、受部も短い。報告書掲載の甕9・11とともに6世紀代とみられる。

報告書において「須恵器の多くはTK23型式期で、一部にMT15～TK10型式期に下りそうなものもある」と述べた点に大きな変更はない。その上で、未掲載高杯と杯蓋2点および掲載杯蓋3・4がTK23型式を遡るとすれば、田鶴羽古墳群と大町遺跡の建物群とは近接した時期に形成されたことになる。しかも装飾付器台脚部の一部とみられる破片（第50図152）が19-1区から出土した。



第8図 田鶴羽古墳群

## 第3章 発掘調査の成果

### 第1節 19- 1区の概要

19- 1区では竪穴建物4軒、掘立柱建物5棟、河道1条と溝2条が重複する落込み1条、井戸1基、畦1ヶ所、溝10条、土坑19基、小穴87基を検出した。遺構の多くは調査区北西に集中している。

また、調査区を斜行する幅3~5m、長さ約30mにおよぶ擾乱により幾つかの遺構が消失している可能性は高いが、擾乱の過半は遺構濃密範囲外にあるので、消失遺構があつても調査成果に大きな影響を与えるほどではないと考える。

北西~南東に長く延びる19- 1区は旧地形の変化に対応して南東方向に下降していく、大きく3段の遺構面を形成している。調査区北西端から約40m間は、現況地盤から約0.7m下がった標高T.P.24.0mほどの低位段丘に位置する。久米田古墳群や久米田池が構築された「久米田丘陵」の裾部に当たり、大町遺跡内では比較的高所である。この範囲を「上段面」と呼称する。

上段面では竪穴建物4軒、掘立柱建物5棟が検出された。しかも1軒の竪穴建物を除くと14mほどの範囲に集中している。この範囲の3軒の竪穴建物は、遺跡内では比較的高所に位置するとはいえ、局地的にみるといずれの建物も半分は河道上にあり、堅固な基盤層上に築かれてはいない。

大町遺跡の歴史的展開を物語る上ではこれらの建物群は不可欠であるが、その建物群の地質的・地形的基盤が低位段丘を主としつつも一部では段丘を切り込む河道や溝の堆積土上に位置している点、さらに先行溝と同様のルートで延びる溝によって一部の建物では部分的に切り崩されている点もまた、この地点の建物群形成に関わる重要な視点となる。すなわち、軟弱な地盤上に建てられていることから、耐久度の高い構造が求められてはいなかったとみられ、建物の性格とも関わる。

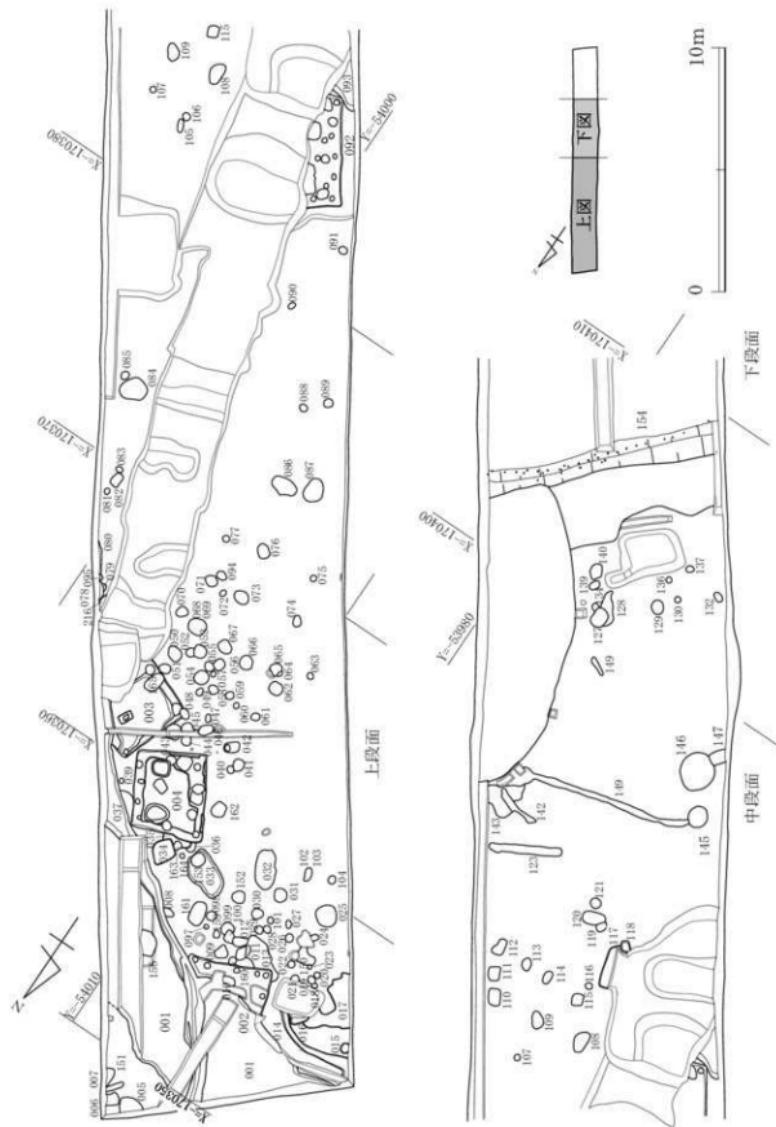
なお調査の途中まで単一の落込みと判断していたため、遺構や遺物については当初に付与した遺構番号で扱っていた。その後、河道と2条の溝が複合していることがわかった段階で当初の単一の遺構番号に「河道」「溝A」「溝B」を付加して呼びわけ、遺構全体を示す場合は「001落込み」と呼ぶこととした。

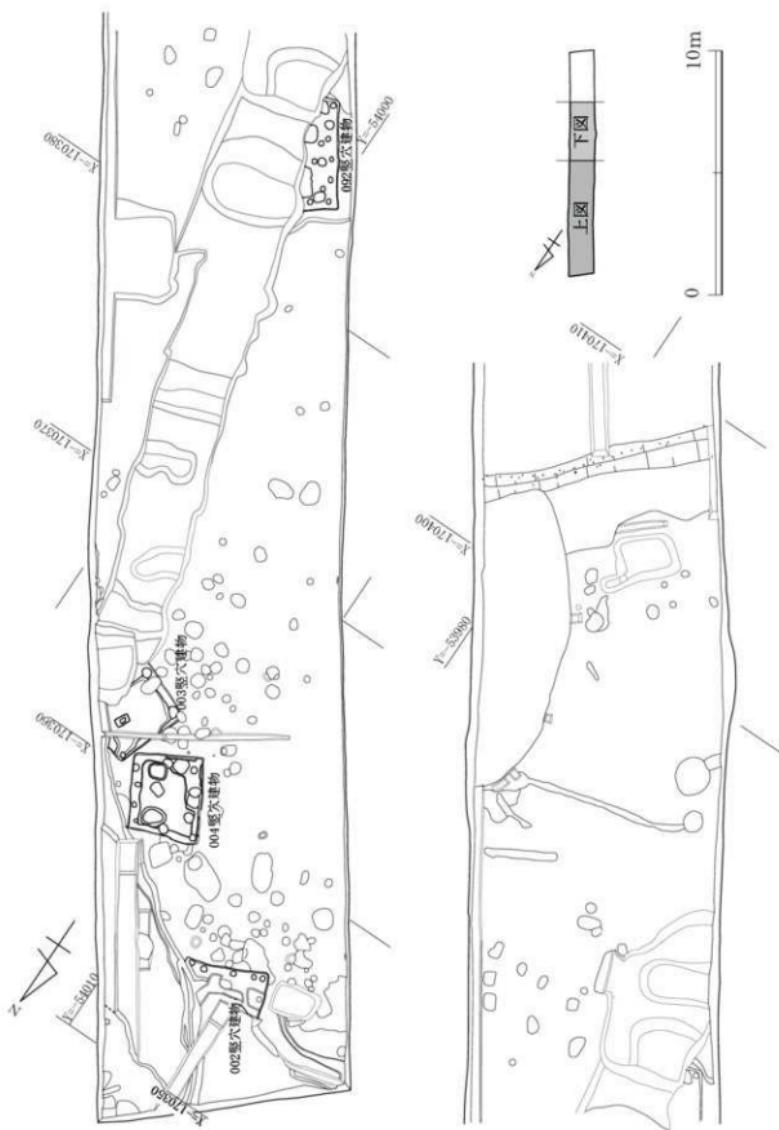
調査区西端40mから54mほどの間は、現況地盤から約1.4m下がった標高T.P.23.3mほどの低位段丘裾部に当たる。この範囲を「中段面」と呼称する。ここでは井戸(146)と溝(147)、それに近接した土坑(145)と溝(149)、東に下降する地境に築かれた畦(154)などがあり、14世紀代を中心とする時期の遺構群と考えられる。また、調査区西端40m付近で2列に平行する土坑群(108・109・110、112・113・114・115)は、柱間が組めないとから掘立柱建物と捉えることはできない。遺構分布および堆積土の状況からすると、植栽の痕跡である可能性が高い。

調査区西端から54m以東は“天の川”的前身河川脇に広がる沖積地に当たる。現況地盤から約1.7~2.4m下がった標高T.P.22.3mほどに、河川状堆積により形成された基盤層が認められる。中段面とは1.0mの比高差がある。この範囲を「下段面」と呼ぶ。

岸和田H24区(八木市民センター地点)で検出した調査区南半の「河道」、さらに06- 1区や10- 3区、06- 2区で検出した“天の川”沿岸部の谷状地形、そして今回の19- 2区の谷状地形などは、19- 1区の沖積地と一連の地形である。

この面では、近・現代の耕作土の下に14世紀前後の中世耕作土を認めたのみで、構造物の痕跡などは検出されなかった。これは“天の川”周辺に広がる沖積地利用の時期と方法に関わっている。なお10- 3区では平安時代後期の耕作土を確認している。





第10図 竪穴建物の位置

## 第2節 19-1区の調査成果

### (1) 竪穴建物

既述したように、19-1区では4軒の竪穴建物を検出した。そのうち3軒（002・003・004 竪穴建物）は隣接あるいは近在しているが、1軒（092 竪穴建物）は最短距離にある003 竪穴建物からでも22m離れている。このほか各建物にはそれぞれ独自の特徴もある。まず、4軒の建物について概略を提示する（表4）。それを踏まえて、各竪穴建物の細部について記す。

表4 竪穴建物一覧

	002 竪穴建物	003 竪穴建物	004 竪穴建物	092 竪穴建物
位置	調査区西端から4m	調査区西端から16m	調査区西端から12m	調査区西端から38m
周辺状況	001 河道と重複	001溝Bと一部重複、004 竪穴建物と近接	001溝Bに切り込まれる、003 竪穴建物と近接	擾乱により北東半分消失
規模(m)	(3.0) × 3.6	— × 3.3	3.0 × 3.2 ~ 3.7	— × 4.8
方向軸	東—西	北東—南西	北—南	北東—南西
炉・竈	なし	なし	なし	なし
柱穴	壁際に小柱穴	建物隅に小柱穴	壁際に小柱穴	壁際に小柱穴
貼床・テラス	貼床なし、テラスなし	貼床あり、テラスあり	貼床あり、テラスあり	貼床なし、テラスなし
付属施設	現状なし	作業台	貯藏穴	現状なし
出土遺物	土器 29点・152g 須恵器 8点・137g	土器 57点・368g 須恵器 7点・89g	土器 228点・1430g 須恵器 7点・356g	なし
建物性格	作業場と推定	作業場と推定	作業場と推定	作業場と推定
その他	建物の一部は河道上に位置	建物の一部は河道上に位置	建物の一部は河道上に位置	鉄分強い堆積土の詰まつた土坑・小穴4基

#### 1. 002 竪穴建物

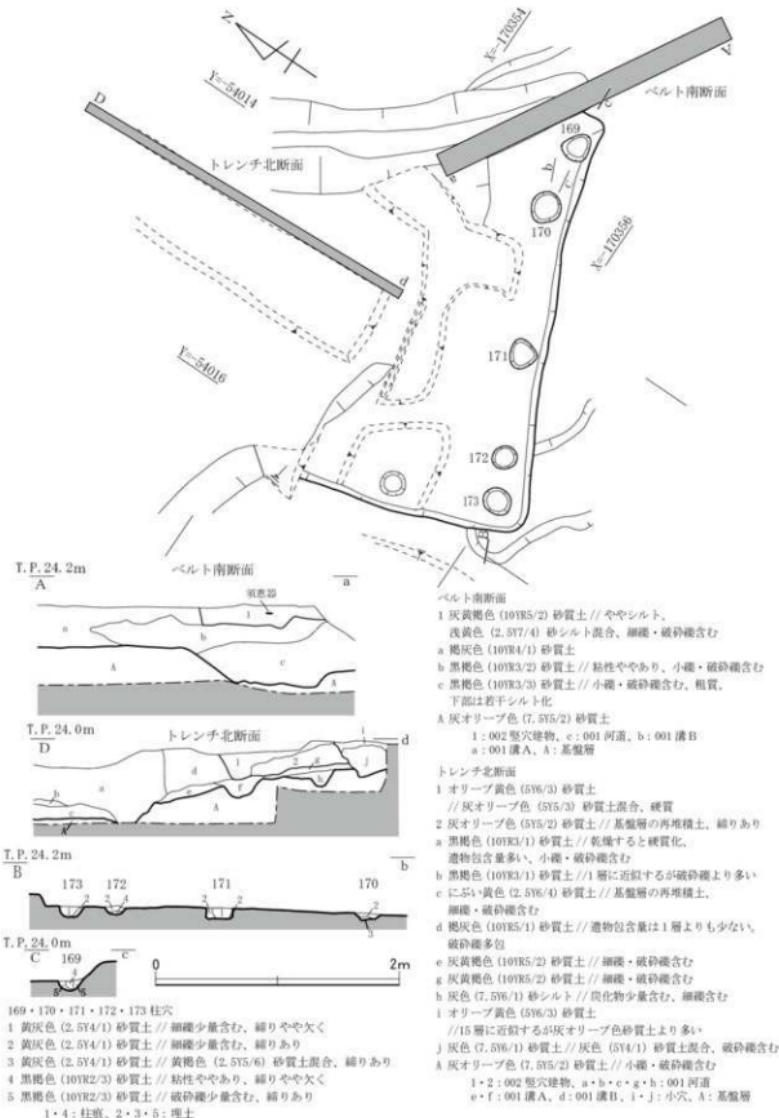
周辺状況 002 竪穴建物は 001 河道および 001 溝A の東岸から南岸に位置する。調査がある程度進捗するまでは 001 落込みの実体を充分に把握できていなかったため、002 竪穴建物の構造についても理解が断片的になった。

001 落込みと 002 竪穴建物との関係を把握するため、調査の早い段階でトレントを設定し、また 001 落込みを掘り下げる過程でベルト 1本を掘り残した。トレント断面の堆積層の観察では、結果としては 002 竪穴建物および 001 落込みの過半を占める河道、そして溝A と溝B の覆土の重なりであることを把握した。さらに断面で認められた 002 竪穴建物の覆土の広がりから、建物本来の規模を推測することもできた。

しかし、トレントを設定した直後にあっては、トレント断面の堆積土全体が 001 落込みに由来するものであり、002 竪穴建物は 001 落込みに切り崩されていると考えた。それは、遺構検出において 001 落込みを切り込んで 002 竪穴建物の覆土が広がる状況が観察できなかっただためであり、さらに 002 竪穴建物の床面下に潜り込んでいる 001 河道や 001 溝A の覆土を調査区西寄りから連続的に掘削したことでも要因となった。

しかし 001 落込みと 002 竪穴建物の間を横断するように建物東端に残したベルトでは、001 落込みが河道と 2 条の溝からなっていること、そして 002 竪穴建物および 001 河道・溝A・溝B の前後関係について捉えることができた。この時点ではトレント内の堆積土についても、改めて土層状況を見直した。

また掘立柱建物 E と位置が重複しているので、建物間に時期の前後がある。



第11図 002 窓穴建物（平面・土層）

**建物規模** 002 積穴建物では西壁および南東隅を確認できていて、東西方向は 3.6 m である。一方南北方向については、遺構検出時に建物西辺の立上がりラインを把握することができなかったが、断面で確認できる建物北端の立上がりがトレチ南端から約 1.3 m 付近であることから、南北方向は 3.0 m ほどと推定する。

また現状の深さは、検出面から 15 ~ 20cm である。床面は東方に僅かに下降するもののほぼ水平に近いといえる。

**柱穴** 建物の中央部には柱穴は見当たらないが、柱痕が残る小穴が南壁に沿って 5 基直列していて、これらを柱穴と捉えることができる。この南壁の柱穴列に対して、西壁際でも 1 基の小穴が検出された。しかし攪乱下にあり検出面が下がっているにもかかわらず掘方底が残っているのは、南壁の 5 基よりも 10cm 近く深く掘られているためである。この深さの不均衡を考えると、南壁の柱穴と一連で捉えることはできない。

とはいっても、本来は小規模な柱穴が四周の壁に沿って巡っていたとみられる。南壁沿いの 5 基の柱穴には柱痕を留めるものがある。その痕跡幅は 8 ~ 15cm を測ることから、柱材の太さは本来直径 10cm 程度であったと推測できる。なお遺物が出土した柱穴はなかった。

表5 002 積穴建物内柱穴

遺構No	169	170	171	172	173
長径 (cm)	20	26	22	20	22
短径 (cm)	18	22	20	18	20
深度 (cm)	8	6	9	8	11
覆土	柱痕・埋土	埋土	柱痕・埋土	埋土	柱痕・埋土
備考					

この 5 基の柱穴について概要を表示しておく。

**床面** 002 積穴建物では掘方底を床面とし、貼床は設けられていなかった。床面はほぼ平坦であるが東方向に僅かに下降し、遺構検出面からの深さは西寄りで約 15cm、東寄りで約 20cm を測る。

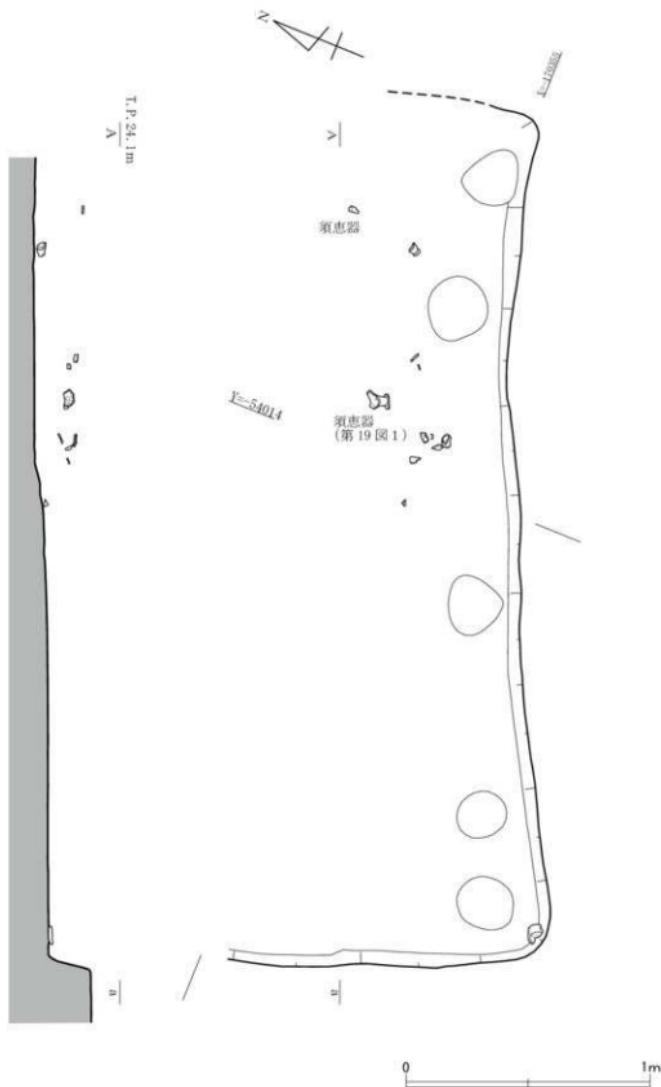
**出土遺物** 出土遺物は土器類 37 点・289g、そのうち土器 29 点・152g、須恵器 8 点・137g である。いずれも建物内覆土からの出土である。

土器は 1 点当たりの平均重量が 5.2g に過ぎない小破片であるため、大半の器種・器形や時期は判明しないが、庄内式期から布石式期に位置付けられる甕と高杯の破片がそれぞれ 2 点ある。

第 19 図 1 とした須恵器の高杯脚部は、002 積穴建物出土遺物 37 点の中で唯一図示できた資料である。第 12 図の遺物出土状況に示したように、建物内中央付近の床面から 13cm ほど高い位置から出土した。また時期不詳須恵器 7 点のうちの 1 点は、第 11 図のベルト断面 1 層に示した位置から出土している。

高杯脚部（1）は「ハ」字状に開く裾部に削り出した突線を巡らせ、端部は尖り気味である。脚部の外面調整は上下 2 段にわたるタテヘラケズリであり、杯部との接合部分にヨコナデを加えている。内面はユビナデされているが、成形時の絞目が残っている。整形状態などから TK73 型式あるいはそれより 1 段階遅い時期に位置付けられる。この須恵器は床面より 13cm 高い位置で検出されたが、覆土の状況をみると床面から須恵器が出土した位置までの間で土層に変化はみられない。したがって、須恵器は建物が使用された最終段階あるいは廃絶直後の時期を示していく、002 積穴建物の時期指標であるとともに、建物群のひとつの時間的な定点となる。

**微細遺物の抽出** 床面直上の覆土を採取して 0.15cm メッシュのフレイにかけて微細遺物の抽出を行なった。サンプル土は土嚢袋 4 分の 1 程度で 3 袋分である。結果として、建物の機能と関連する残留物



第12図 002 竪穴建物（遺物出土状況）

表6 002 竪穴建物出土遺物

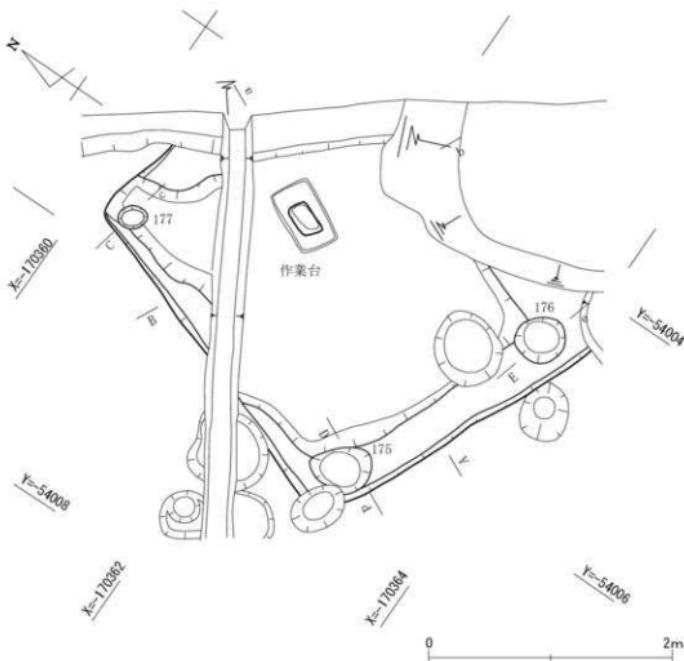
	土器				須恵器		
	弥生IV期	弥生V期	庄内・布留	時期不詳	～TK73	中期	時期不詳
点数（点）			4	25	1		7
重量（g）			80	72	94		43
主器種			甕・高杯	甕・高杯	高杯		高杯

は検出されなかった。

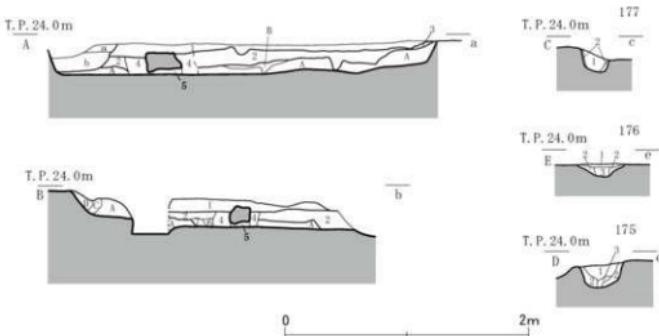
建物の性格 この建物については、

- ・1辺3.0～3.6mの小型である
- ・柱穴は壁沿いを巡る
- ・柱痕幅から推測される柱材の太さは直径10cm程度である
- ・現状では炉や竈がみられない

という特徴があがる。こうした点から脆弱、あるいは簡易な構造の建物であったことが推定される。しかも、建物の一部が消失しているものの、現状では炉や竈が認められることから、日常生活が営まれた住居であったとは考え難い。出土遺物が乏しいのでこの建物の具体相を描くことは難しいが、建物の構造状況から短期間の作業場ではないかと想定する。



第13図 003 竪穴建物（平面）



003 壓穴建物

- 1 暗灰色 (10Y4/1) 砂質土//遺物細片やや多く含む。明黃褐色 (10YH6/6) 砂質土混合。破砕繊維含む。やや粗質  
2 暗黄色 (2.5Y4/2) 砂質土//破砕繊維少含む。繩りあり。やや粗質  
3 黑褐色 (10YR3/1) 砂シルト//黒褐色?。繩りあり  
4 灰白色 (2.5Y7/1) 粘シルト//遺物細片少量含む。黒褐色 (2.5Y3/2) 砂質土混合。炭化物少量含む。繩りあり  
5 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂シルト//灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土混合。繩りあり。上面 0.2 ~ 0.3cm 硬化  
6 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土//灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土混合。破砕繊維少含む  
7 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土//灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土混合。破砕繊維含む  
a 暗灰色 (10Y5/1) 砂質土//遺物細片若干含む。繩維含む。やや粗質  
b 黑褐色 (10YR2/2) 砂質土//遺物細片含む。ややシルト。繩りあり  
c 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂質土//破砕繊維少含む。繩りや欠く  
D 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土//明黃褐色 (2.5Y6/6) 砂質土混合。炭化物少量含む  
C 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂質土//灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土混合。小塊少含む。繩りや欠く  
e 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂質土//灰白色 (2.5Y6/6) 砂質土混合。块状不規則

1: 球土; 2: 6; 3: 贴床; 4: 5: 合石固定球土; a: b: 001 谱 B; A>0: 基础固

1774

- 1 黒褐色 (10YR2/2) 砂シルト // 細礫少量含む、締りやや欠く  
2 黒褐色 (10YR2/2) 砂質土 // 破碎砕合む、締りあり

176 柱穴

- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 // 喀褐色 (10YR3/3) 砂質土混合、繰りや欠く  
2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 // 細纖少量含む。繰りあり  
3 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土 // 細・小礫含む。繰り欠く、柱痕

175 住穴

- 1 黒褐色 (10YR2/3) 砂質土 // 繰りやや欠く、土質均一  
2 黒褐色 (10YR2/3) 砂質土 // 明黄褐色 (10YR7/6) 砂質土混合、繰りあり  
3 黒褐色 (10YR2/3) 砂質土 // 粗粒、礫砂混在か、粗質、柱直

第14図 003 穴穴建物（十層）

## 2. 003 穴穴建物

周辺状況 002 竪穴建物の南東約 14 m に 003 竪穴建物が位置している。また 004 竪穴建物とは極めて近接していて、003 竪穴建物北辺と 004 竪穴建物南隅との最短距離は 0.1 m しかない。建物の上層を勘案すると両建物が同時に存在していたことは考え難く、前後の時期差はある。

建物の東は調査区外に延びているが、その東端部には001溝Bが北西から南東方向に走行していて、建物の南東部分を切り崩している。この部分での溝の広がりを考えると、調査範囲を広げても建物東辺を把握することはできないと判断したため、調査区の拡張は行なわなかった。

表7 003 竪穴建物内柱穴

遺構No.	175	176	177
長径 (cm)	50	41	22
短径 (cm)	(40)	34	18
深度 (cm)	19	10	19
覆土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	埋土
備考	土器1点		

建物の床下に潜り込むように、001 河道と 001 溝 A が重なり合って北西から南東方向に走行していた。この 003 竪穴建物では、001 河道・001 溝 A・001 溝 B との重複関係を比較的明瞭に捉えることができた。

さらに、掘立柱建物 B・C とも重複している。

建物規模 003 竪穴建物は、北壁の東過半が 001 溝 B と重複するとともに調査区外へ延び出し、さらに攪乱によって東壁が消失しているため、建物規模のうち東西方向に関しては計測できない。現状の最大長は 3.0 m である。これに対して南北方向は 3.3 m 弱を測る。

遺構検出面から床面までの深度は 10~15cm 程度であり、比較的浅い。この 003 竪穴建物だけでなく、一帯の遺構は上部が削平されていて、検出面が下がっている。

柱穴 建物の上屋を支える柱穴は、建物北西隅の 177 柱穴、南西隅の 175 柱穴、そして建物隅は攪乱されたために検出されないが配置からすると 176 柱穴が該当しよう。とすればこの 003 竪穴建物では、柱は建物の 4 隅に寄っていて、テラスを掘り込んだ掘方内に据えられていた。

柱穴には柱痕を確認できるものがある。その幅は土層断面で 7~11cm を測るので、柱本来の太さは直径 10cm 程度と推定される。

なお 175 柱穴から土器 1 点・2 g が出土した。

床面 T.P.23.7 m 前後まで建物下部を掘り込み、その上に灰白色砂質土を部分的に含んだ灰黄色粘質土を 10cm ほど積み重ねて貼床を形成している。床上面に顯著な硬質化は認められない。

貼床を除去した掘方底面は比較的平坦であった。3 基の浅い小穴状の落ち込みはあったものの、特別な構造は認められなかった。

テラス 贊床と一体的に黒褐色砂シルトを積み上げて壁際にテラスを巡らせる。北壁では 001 落込み、東壁では攪乱によりそれぞれ建物の一部分が消失しているためにテラスの周囲状況は不明であるが、広狭差はあるものの全周していた可能性は高い。テラス上面の床面との比高差は 5~10cm 程度である。

また建物壁際を巡る壁構は確認できなかった。

作業台 建物の北寄りで、長さ 25cm、幅 15cm、厚さ 12cm ほどの長方体を呈する花崗岩を据えた土坑を検出した。花崗岩は上面が水平になるように置かれていた。土坑の大きさは南北 0.6 m、東西 0.35 m で平面はほぼ長方形を呈している。掘り込みの深さは建物床面から約 15cm を測る。掘方底に暗灰黄色砂シルトと灰白色砂シルトの混合土を置き、花崗岩の上面が貼床面より 4~5 cm 高くなるように調整するとともに、花崗岩と掘方との間に灰白色粘シルトを充填して花崗岩を固定している。

花崗岩の上面は平滑であるが、一方向から敲打された痕跡が認められる。こうした使用痕と堅固に据えられている状況から、作業用の台石であったと考える。

掘方底と台石の間から 2 点・2 g、台石脇の充填土から 3 点・2 g の土器が出土したが、1 点平均 1 g 未満の小破片であり、台石設置の時期などを求ることはできない。

出土遺物 出土遺物は土器類 59 点・457g、そのうち土器 57 点・368g、須恵器 2 点・89g である。

57点のうち43点は建物内覆土からの出土であり、点数比で75.4%、重量比81.8%を占める。1点当たりの重量は土器が6.5g、須恵器が44.5g。このように土器の破片は小さいが、5点の土器（第19図2～6）と須恵器1点（第19図7）を図示した。

175柱穴から1点・2g、台石掘方から5点・4g、貼床内から3点・13gの土器、そして貼床下の掘方底面で検出した3基の小穴状の落ち込みからはそれぞれ時期不詳の土器片1点・3g、さらにそのうちの1基では布留式甕とみられる破片2点・39gも出土した。

57点の土器のうち1点は弥生時代IV期の甕とみられるが、小破片のために図示できない。

また古墳時代前期に属するとみられる土器は8点を数える。甕、壺、高杯を認め、建物内覆土から出土した高杯と貼床下検出小穴出土の甕を各1点図示した（第19図2・3）。残る48点は時期不詳の土器である。その平均重量5g未満であることが示すように大半が小破片であり、器種が不明なものも多いが、その中で甕、壺および製塙土器を認めた。そこで、建物内覆土から出土の製塙土器3点を図示した（第19図4・5・6）。

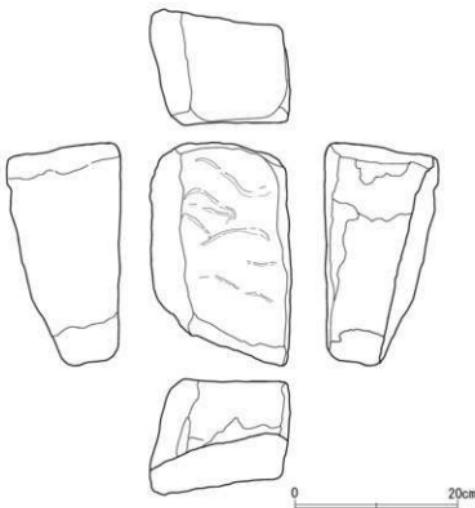
須恵器は竪穴建物内覆土から2点出土した。そのうち時期不詳の高杯脚部1点を図示した（第19図7）。

第19図2の布留式甕は口縁部が直線的に外傾するが、やや開きに乏しい。また口縁部内面端の肥厚は低く、丸味をおびる。

第19図4～6は製塙土器である。いずれも小破片であり、図上復元により図示した。4は「く」字状の頸部から外反する口縁部は短い。胴部は扁平気味ではあるが、比較的球形度はある。5は口縁部が内傾する楕円形のH類（積山洋「大阪湾沿岸の漁撈・製塙集団と広域交流」『古墳時代の海人集団を再検討する—「海の生産用具」から20年— 発表要旨集』（埋蔵文化財研究会、第56回埋蔵文化財研究集会実行委員会）2007年、以下製塙土器分類は同じ）。古墳時代中期後半。6は体部が逆「ハ」字状にひらく。小破片のため全形を推定することは困難だが、古墳時代初頭のC類と捉えておく。

7は須恵器の高杯脚部。杯部と裾部を欠いているが、現状では裾部にかけて開き気味である。現存部分に透孔は認められない。器面調整は外表面とともに回転ユビナデである。焼成不良で還元化しきれていない。この高杯に関しては時期を求めるのは難しいが、比較的古い段階に位置付けることも可能ではないかと考える。とすれば、貼床下出土の布留式甕（2）との組合はなく、003竪穴建物は布留式期最終段階、あるいはその1段階前に年代比定できる。

微細遺物の抽出 分層した建物内の各覆土および作業台掘方の埋め土を探取し、0.15cm メッシュの



第15図 作業台の台石

表8 003 穫穴建物出土遺物

	土器				須恵器		
	弥生IV期	弥生V期	庄内～布留	時期不詳	～TK73	中期	時期不詳
点数(点)	1		8	48		1	1
重量(g)	9		158	201		78	11
主器種	壺		壺・壺・高杯	壺・壺・製塙		高杯	

表9 003 穫穴建物出土遺物(出土位置)

	土器				須恵器		
	弥生IV期	庄内～布留	時期不詳		中期	時期不詳	
建物内覆土	1点 19g	6点 119g	36点 173g	1点 78g	1点 11g		
175柱穴			1点 2g				
作業台掘方			5点 4g				
貼床内			3点 13g				
貼床下落ち込み		2点 39g	3点 9g				

フルイにかけて微細遺物の抽出を行なった。建物内覆土のサンプル土は土嚢袋4分の1程度で5袋分、作業台埋め土は3袋分である。

作業台埋め土内から微量の焼土が検出されたが、建物の機能を具体的に示す残留物は発見されなかつた。

建物の性格 003 穫穴建物に関しては、

- ・1辺3.0m程度の小型である
- ・柱穴は建物隅の壁沿いを巡る
- ・柱痕幅から推測される柱材の太さは直径10cm程度である
- ・建物の壁に沿ってテラスが巡る
- ・現状では炉や竈がみられない
- ・作業用とみられる台石が据えられている

という特徴があがる。なかでも台石は、この建物の性格を示す重要な要素である。

既述したように台石の上面には一方向から敲打された痕跡がみられ、硬い工具を使用したことを示唆している。さらに、炉や竈が存在しないことから想定できる作業内容は限定され、例えば鍛冶は除外される。作業台の存在からこの建物が作業場であったことは確実視できるが、建物内での活動内容について出土遺物などから詳細にすることはできない。

### 3. 004 穫穴建物

周辺状況 003 穫穴建物の北西に隣接していて、その近さからすると両建物が同時に存在していた可能性は低い。

また建物の北東隅が001溝Bとごく僅かではあるが重複している。その狭小な部分だけでは重複の前後関係は不明だが、002 穫穴建物や003 穫穴建物は001溝Bに切り込まれていることから、ここでも001溝Bが後出するとみられる。

さらに掘立柱建物Dが004 穫穴建物と斜交して重なる位置に建つ。

建物規模 19-1区で検出した4軒の竪穴建物のうちで唯一全形を捉えることができる。その規模は、北東-南西方向3.0m、北西-南東方向は3.2~3.7mを測り、北東辺よりも南西辺が約0.5m長い。そのため、平面形は西隅が張り出した台形を呈している。

柱穴 建物中央部に柱穴は認められないが、壁際に沿って並んだ小穴が柱穴である。北東辺の181・

表10 004 竪穴建物内柱穴

遺構No	181	182	184	185	191
長径(cm)	16	25	25	30	40
短径(cm)	16	16	18	20	38
深度(cm)	8	10	10	16	8
覆土	埋土	埋土	埋土	埋土	柱痕・埋土
備考					
遺構No	193	189	187	192	190
長径(cm)	30	30	40	55	42
短径(cm)	26	28	38	40	40
深度(cm)	8	14	11	16	17
覆土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	埋土
備考					

182・184・185、北西辺の187・189、南東辺の191・193がそれぞれ該当する。南西辺では配列状況から192を柱穴とみることができるが、さらに190が加わる可能性もある。建物隅の柱穴を除くと4辺のうち南東辺のみが2基、残りの3辺では中央に1基、もしくは南東辺と南西辺に2基、残り2辺に1基の柱穴を配した構造となる。

柱痕が認められた柱穴は5基である。柱痕の幅は8~14cmを測り、平均的な直径は10cm程度と推測される。002竪穴建物や003竪穴建物と同程度の柱材が使用されていたとみられる。

床面 T.P.23.7~23.8mまで掘り込んだ建物底に主として黒褐色砂質土を10cmほど積み上げて貼床を形成している。その上面はやや硬質化しているものの顕著ではない。

貼床を除去した建物の掘方底はほぼ平坦で、西半で長径0.2~0.4mの小穴状の落ち込み3基が検出された。そのうちの2基は建物の柱穴と重複する位置にあるが、掘方底面で構造物が築かれた状況は認められなかった。

テラス 掘方底に貼床として充填した黒褐色砂質土の上に同質の黒褐色砂質土あるいは灰黄色砂質土を壁際に沿って積み上げ、床面より10~20cmほど高めたテラスを設けている。

テラスの幅はほぼ20~40cmで、建物内を全周する。南西から南東にかけてはテラスが北に張り出し、幅が70~80cmと広くなる。ただし床面からの高さは変わらない。

なおこのテラス上に位置する柱穴はいずれもテラス面を切り込んでいる。

壁溝 建物壁際を巡る溝は南西壁および南東壁で断片的に検出された。現状の幅は10cm、深さは5cm程度である。

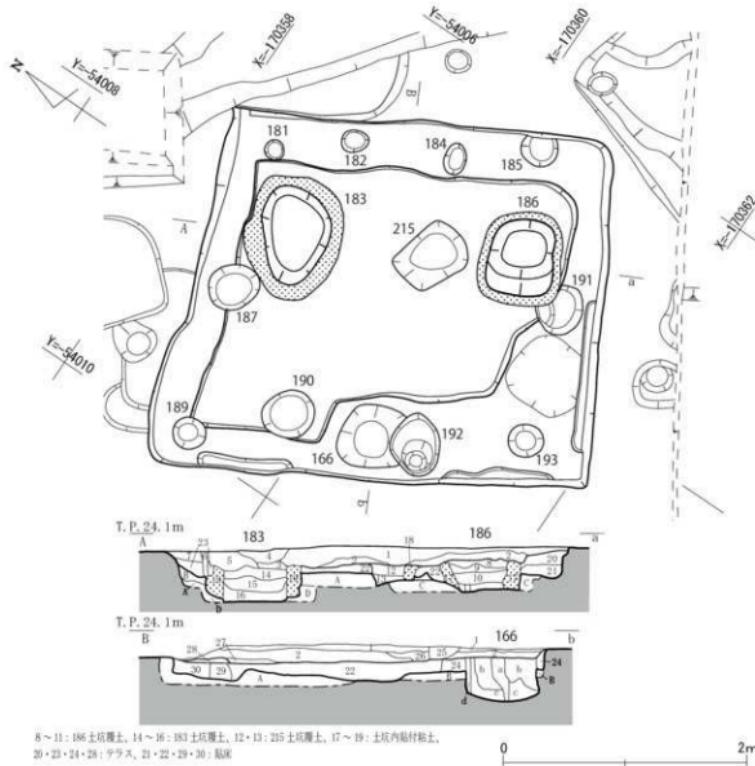
付属施設 004竪穴建物の付属施設には、並列した3基の土坑がある。3基のうち東に位置する186土坑は掘方長径が0.78mの隅丸方形、西の183土坑は1.0mを測る隅丸方形である。中央の215土坑は約0.6mとやや規模が小さく、長方形を呈する。

大きさや平面形の違いに加えて構造の違いもみられる。東西の2基では灰白色粘質土や灰黄色砂シルトを5~10cm程度の厚さで掘方の内面に貼っている。

215土坑でもまた、掘方内面に灰黄色砂シルトが5~10cmほどの厚さで貼り付いていた。しかも砂シルト内は長方形を呈し、003竪穴建物の作業台に充填されていた灰白色粘シルトや暗灰黄色砂シルトと類似する灰黄色系砂シルト・砂質土が堆積していた。人為的な埋め土の2次堆積である可能性が高い。こうした状況から、215土坑は台石設置の掘方であると考えられる。

一方、東西の土坑は粘土貼りという構造に加え、186土坑では納められていた状態の甕が検出された。こうしたことから、186土坑と183土坑はともに貯蔵穴であると考える。

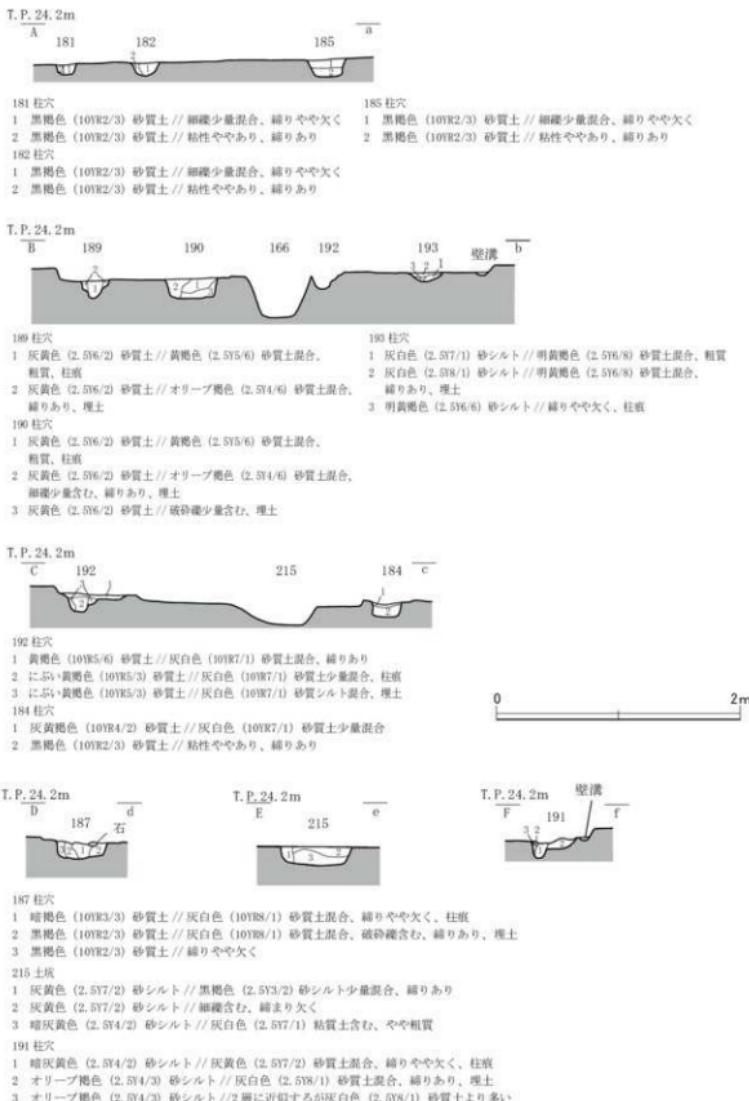
出土遺物 出土遺物は土器類235点・1786g、そのうち土器228点・1430g、須恵器7点・



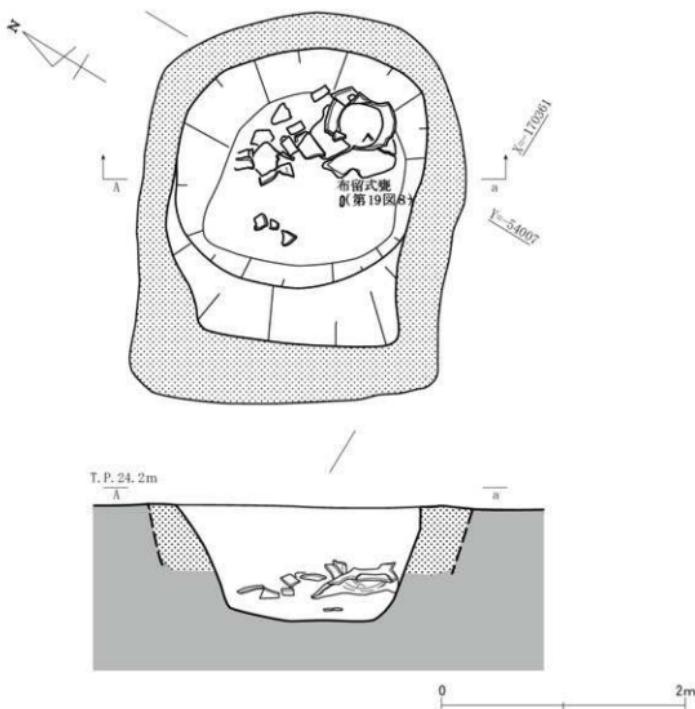
8 ~ 11 : 186 土垣覆土。14 ~ 16 : 183 土垣覆土。12 ~ 13 : 215 土垣覆土。17 ~ 19 : 土坑内貼付粘土。  
20 ~ 23・24・28 : テラス。21・22・29・30 : 基礎

- 1 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 // ややシルト。繊維・磁鉄鉱含む  
 2 黄灰色 (2.5Y1/1) 砂質土 // 粘りあり。小礫・磁鉄鉱含む。繊りやや欠く  
 3 黒褐色 (10Y3/2) 砂質土 // 磁鉄鉱含む。粗質  
 4 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 // 白灰色 (2.5Y9/1) 砂質土少量混入。やや粗質  
 5 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 // 明黄色 (2.5Y7/6) 砂質土混入。繊維含む  
 6 白灰色 (10YR8/1) 砂質土 // やや粗質。繊りあり  
 7 黄褐色 (2.5Y5/1) 砂質土 // 磁化鉄鉱少量含む。繊りやや欠く  
 8 黑褐色 (2.5Y3/1) 砂質土 // 地面に沿むが繊維・磁鉄鉱より少ない  
 9 黑褐色 (2.5Y3/1) 砂質土 // 6層に分れるが繊維・磁鉄鉱等混入  
 10 黑褐色 (2.5Y3/1) 砂質土 // 上層細粒出土。繊維・磁鉄鉱少量含む。  
 11 黄灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 // 灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土混入。  
 12 黄褐色 (2.5Y7/2) 砂シルト // 灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土含む。小礫含む  
 13 黄灰色 (2.5Y7/2) 砂シルト // 11層に沿むが繊維含む  
 14 黄灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 // 灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土含む。やや粗質  
 15 黑褐色 (10Y3/2) 砂質土 // 黑褐色やや強め。粗質  
 16 黑褐色 (10Y3/2) 砂質土 // 繊維少量含む。繊りやや欠く  
 17 白灰色 (5Y6/2) 砂質土 // 黄色 (2.5Y7/1) 砂質土少量混入。磁鉄鉱含む  
 18 黄灰色 (2.5Y7/2) 砂シルト // 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂シルト混入。繊りあり  
 19 黄褐色 (2.5Y7/2) 砂シルト // 磁化鉄鉱少量含む。繊りあり  
 20 黑褐色 (2.5Y3/1) 砂質土 // 灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土混入。磁鉄鉱少量含む。繊りあり  
 21 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂質土 // 繊りやや欠く  
 22 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂質土 // 21に近似が織まりあり  
 23 黑褐色 (2.5Y3/1) 砂質土 // 小量少量含む  
 24 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂質土 // 粘りやや大きさ砂質に近い  
 25 黄灰色 (3Y7/1) 砂質土 // 黑褐色 (10YR8/2) 砂質土混入。繊りやや欠く。粗質  
 26 白灰色 (2.5Y1/1) 砂質土 // 明黄色 (2.5Y6/6) 砂質土ブロック混入。粗質  
 27 黑褐色 (2.5Y3/1) 砂質土 // 灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土混入。磁鉄鉱少量含む。繊りあり  
 28 黄灰色 (2.5Y7/2) 砂質土 // 繊りあり  
 29 黑褐色 (10Y3/1) 砂質土 // 灰白色 (2.5Y7/1) 砂シルト・12.5Y3/4 黄褐色 (10YR7/4)  
 砂質土混入。粘性あり  
 30 黄褐色 (10Y3/1) 砂質土 // 灰白色 (2.5Y7/1) 砂シルト混入。粘性あり。繊りあり  
 a 白灰色 (10YR7/1) 砂シルト // 黄褐色 (10YR6/2) 砂シルト少量混入。灰化物質小含む。柱痕  
 b 黄褐色 (10YR6/2) 砂シルト // 灰白色 (10YR7/1) 砂シルト混入。繊りあり。磁鉄鉱少量含む。埋土  
 c 黄褐色 (10YR6/2) 砂シルト // 灰白色 (10YR7/1) 砂シルト・明黄色 (10YR6/6) 砂質土混入。埋土  
 d 黄褐色 (10YR6/1) 砂シルト // 繊維のため全体に黄褐色 (2.5Y5/4) 化。繊りあり。埋土  
 e 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂質土 // 灰白色 (2.5Y7/1) 砂シルト混入。繊りあり  
 f 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂質土 // 黄色 (2.5Y7/1) 砂シルト・黄褐色 (2.5Y5/6) 砂質土混入。磁鉄鉱含む  
 g 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂質土 // 繊維・磁鉄鉱含む。繊りやや欠く  
 h 白灰色 (2.5Y7/1) 砂シルト // 繊維のため全体に黄褐色 (10YR5/6) 化。繊りあり

第16図 004 窓穴建物 (平面・土層)



第17図 004 穴竪建物（土層）

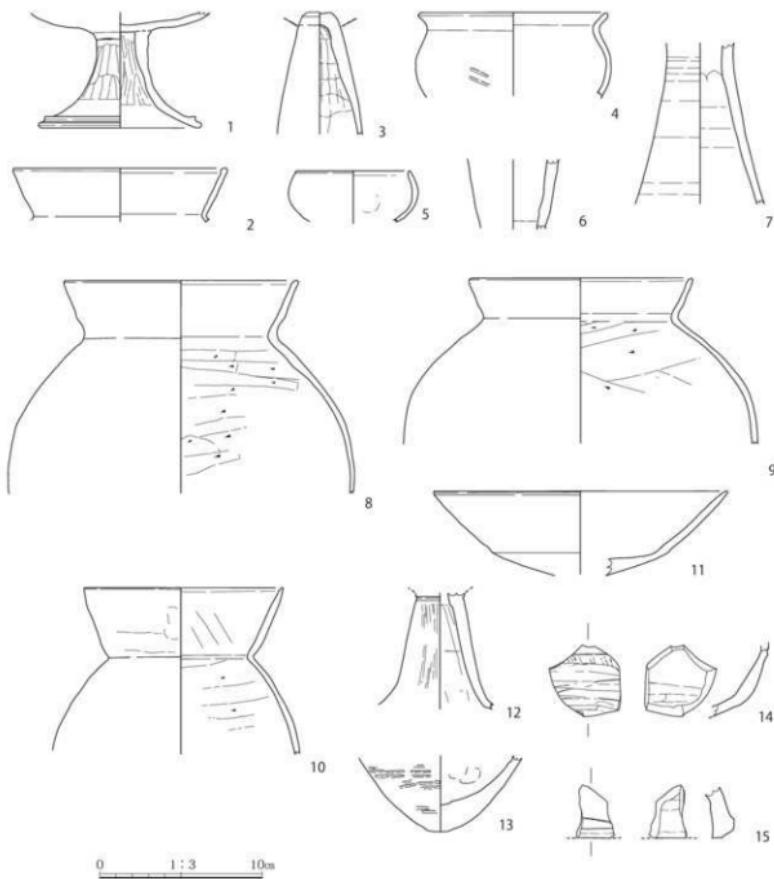


第18図 004 竪穴建物内 186 土坑 (遺物出土状況)

356g であり、土器類の中で須恵器が占める割合は点数比で 3.1% に過ぎない。ただし 003 竪穴建物でもその割合は 3.5% であり、ほぼ等しい。

228 点の土器のうち竪穴建物の覆土から出土したのは 106 点・355g、点数比では 46.5%、重量比では 24.8% である。4 軒の竪穴建物の中でも出土点数は少くないが、それにもかかわらず比率からみるとさほど高くない。これについては、竪穴建物内に設けられた貯蔵穴からも破片ではあるが土器が数多く出土したこと、貼床内および貼床下の落ち込みにも一定量の土器が含まれていたことが覆土中の土器比率を低くする要因となった。また覆土内からは須恵器 5 点・28g も出土しているが、1 点当たり 5.6g の小破片である。そうした建物の覆土から出土した土器のうち高杯（第 19 図 12）、そして須恵器の脚部破片（第 19 図 15）をそれぞれ図示した。

土器の出土が比較的多い 2 基の貯蔵穴のうち、東の 186 土坑からは 24 点・775g、西の 183 土坑からは 31 点・53g の出土があった。186 土坑出土の土器は 1 点当たり 32.3g、これに対して 183 土坑の土器は 1.7g である。この差が示すように、186 土坑の土器に遺存度の高いものが数点含まれているが、183 土坑から出土した土器は大半が小破片であった。186 土坑から出土した土器のうち甕 2 点、直口



第19図 002・003・004 穂穴建物出土遺物

壺1点、製塙土器1点を図示した（第19図8～10・13）。

貼床内からは21点・102gの土器が出土した。平均重量4.9gで、小破片が主体である。また貼床面下の建物掘方底で3基の小穴状の落ち込みが検出されたが、それぞれから土器類の出土がみられ、合わせて土器23点・68g、須恵器2点・26gを数えた。土器の平均重量は3.0gに過ぎず、いずれも小破片である。一方、須恵器の平均重量は13.0gで、土器よりも破片が大きい。

建物内覆土とともに建物構築時の掘方の落込みに須恵器が含まれていることは、この建物の建築時期を考える上で重要な指標となる。なお出土した須恵器2点のうち1点を図示した（第19図14）。

表 11 004 穫穴建物出土遺物

	土器				須恵器		
	弥生IV期	弥生V期	庄内～布留	時期不詳	～TK73	中期	時期不詳
点数(点)	1	1	20	206		2	5
重量(g)	2	3	824	601		335	21
主器種	甕	甕	甕・壺・高杯	甕・壺・高杯・製塙		大型器台	甕・杯蓋

表 12 004 穫穴建物出土遺物(出土位置)

	土器						須恵器					
	弥生IV期		弥生V期		庄内～布留		時期不詳		中期	時期不詳		
建物内覆土	1点	12g	1点	3g	10点	125g	94点	225g	1点	9g	4点	19g
184 柱穴							1点	1g				
187 柱穴							4点	14g				
189 柱穴				1点	6g	2点	4g					
190 柱穴						10点	30g					
191 柱穴			1点	6g	3点	5g						
192 柱穴						1点	11g					
186 土坑			4点	614g	20点	161g						
183 土坑			1点	4g	30点	49g						
貼床内			1点	61g	20点	41g						
貼床下落込み			2点	8g	21点	60g	1点	24g	1点	2g		

これらのほか、建物の柱穴内からも土器の出土がみられた。6基の柱穴から合わせて23点・77g、平均重量3.3gで大半は小破片である。189柱穴と191柱穴の出土土器には布留式期の高杯と甕の破片がそれぞれ1点含まれていたが、残りの21点は時期比定ができない。189柱穴出土の高杯の杯部破片を図上復元して掲載した(第19図11)。

須恵器のうち覆土出土の15は脚部端の破片である。端部を帯状に肥厚させ、その正面および下辺をヘラナデする。大型器台の脚部の可能性を考えられる。貼床下から出土した須恵器(14)は外面下半にヨコヘラケズリ調整を施していく、残存部の上寄りをナデて一段立てている。内面はヘラナデ。この須恵器も大型器台の杯部下半の破片とみられる。

186土坑出土の図示した4点のうち布留式甕(8)は口縁部が僅かに内湾し、胴部には長胴化の傾向が認められる。外面調整は不明であるが、内面にはヨコヘラケズリが施されている。甕(9)は口縁部が短く直線的に外傾し、胴部の球形度が高い。この甕も外面調整は不明であるが、内面はヨコ・ナナメ方向のヘラナデが確認できる。直口壺(10)は口縁部が僅かに内湾していて、端部は尖り気味である。胴部は球形度が低く、肩の張りを欠いている。また口縁部内面はヘラナデ、胴部内面にはヘラケズリがなされている。

製塙土器(13)は尖った底部の破片であり、厚みがある。外面にヨコタタキ、内面には部分的にユビオサエの痕跡がみられる。その形状からE類に当たるなり、古墳時代前期後半から中期にかけての時期に比定できる。

この004 穫穴建物については、貼床下および建物廃絶後に堆積した覆土内から小破片ではあるが須恵器が出土していて、さらに貯蔵穴とみられる186土坑で検出された収納状態の布留式甕や直口壺など特徴から、布留式期最終段階に位置付けられる。

微細遺物の抽出 分層した建物内の各覆土、2基の貯蔵穴(183・186土坑)内覆土、および工作に関連しているとみられる土坑(215土坑)掘方の埋め土を採取し、0.15cmメッシュのフリイにかけて微細遺物の抽出を行なった。建物内覆土は土養袋4分の1程度で6袋分、186土坑(東貯蔵穴)は5袋分、183土坑(西貯蔵穴)は8袋分、そして215土坑は3袋分である。

186 土坑からは鉄分が付着した小礫、183 土坑からも鉄分付着礫と微量の炭化物および焼土、そして 215 土坑からは微量の焼土と木片が検出されたが、いずれも建物の機能とは直接結び付かなかった。

また 186 土坑のサンプル土とは別に、土坑内出土の布留式甕内部からもサンプル土を採取して微細遺物の確認を行なったが、自然細礫以外は見当たらなかった。

建物の性格 004 竪穴建物に関しては、

- ・ 1辺 3.0 ~ 3.7 m程度の小型である
- ・ 柱穴は壁沿いを巡る
- ・ 柱痕幅から推測される柱材の太さは直径 10cm 程度である
- ・ 建物の壁に沿ってテラスが巡る
- ・ 現状では炉や竈がみられない
- ・ 粘土貼りをした 2 基の貯蔵穴がある
- ・ 2 基の貯蔵穴の間に、工作に関連するとみられる土坑が存在する

という特徴がある。貯蔵穴の 1 基からは甕や壺が出土していて、生産物貯蔵との関連が示唆される。ただししかし、炉や竈がない点からこの建物が住居であったとは考え難く、台石設置の可能性や小型規模であることからも裏付けられる。

出土遺物やフリュイ掛けにより検出した微細遺物からもこの建物の用途を特定することはできないが、建物の構造や 215 土坑の存在を踏まえれば、この建物も作業場であったとみられる。

#### 4. 092 竪穴建物

周辺状況 19-1 区で見つかった 4 軒の竪穴建物、5 棟の掘立柱建物のうち、1 軒の竪穴建物を除くと比較的の近距離に位置している。092 竪穴建物はその群在しない 1 軒の建物であり、調査区西端から 38.0 m の距離にある。

092 竪穴建物の北東半分は攪乱されて消失している。調査区西端から 15 ~ 50 m にかけて、幅 3 ~ 5 m ほどの溝状の攪乱が調査区を南北方向に縦断していく、それにより 092 竪穴建物の一部は破壊されていた。さらに周辺の遺構にも影響が及んでいる可能性はあるので、092 竪穴建物と同時期の遺構の有無に関しては不明といわざるを得ない。しかし現状においては、調査区西端より 40 ~ 65 m 間では 14 世紀を中心とする時期の遺構の広がりは認められるものの、092 竪穴建物を除くと古墳時代に比定できる遺構は見当たらない。ただ、092 竪穴建物が低位段丘の先端に位置していることから、西方および南方の調査区外に同時期の遺構が広がっている可能性は高い。

建物規模 北東半分を攪乱により消失しているが、南西辺および北西辺と南東辺のそれぞれ一部が残っていたことにより北西 - 南東方向は約 4.8 m を測る。これに対して北東 - 南西方向は、北西辺が最長 0.75 m 程度残っているに過ぎないことから本来の長さは不明であるが、002 竪穴建物より一回り以上大きく、また平面形状は長方形であると推定される。とすれば、4 棟の竪穴建物の中では最大規模の建物であったことになる。

柱穴 半壌状態だが建物中央に主柱穴が認められない。規模や配列の点から壁際に沿って並んだ 7 基 (199, 200, 201, 202, 205, 206, 208) が柱穴であり、さらに建物内部を横断する位置にある 2 基 (203, 204) も柱穴である可能性は高い。

この 203 柱穴と 204 柱穴を除く 7 基の間隔は、205 柱穴 - 206 柱穴間がやや短いものの、およそ 0.8 ~ 0.9 m を測り、ほぼ半間の長さである。

柱痕が認められた柱穴は 4 基ある。そのうちの 203 柱穴と 205 柱穴では、土圧により柱痕の本来の形状が大きく崩れないと観察されることから、残りの 2 基についてみると柱痕幅は 8 ~ 14 cm である。

表 13 092 竪穴建物内柱穴

遺構No	199	200	201	202	205
長径 (cm)	22	22	24	20	22
短径 (cm)	20	18	16	14	18
深度 (cm)	12	16	6	16	15
覆土	埋土	柱痕・埋土	埋土	埋土	柱痕・埋土
備考					
遺構No	206	208	203	204	
長径 (cm)	38	26	34	22	
短径 (cm)	34	24	30	20	
深度 (cm)	10	14	16	14	
覆土	埋土	埋土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	
備考					

したがって直径 10cm 程度の柱材が使用されたと推定される。

なお 206 柱穴は他の柱穴に比べて長径が 10cm 以上大きい。しかも柱穴内の堆積土は破碎礫を含んだ黄褐色砂質土の単一層であり、柱の痕跡がみられない。こうしたことから、206 柱穴では柱の抜き取りによって掘方が広がった可能性が考えられる。

床面 この 092 竪穴建物は、T.P.23.8 mまで掘り込んだ掘方底を水平に整え、貼床を施すことなく基盤層自体を床面としている。

土坑 092 竪穴建物では、覆土に鉄分を高濃度に含んだ土坑 4 基 (214・212・210・209 土坑) が検出された。それぞれの規模や形状は若干異なるが、平面隅丸長方形を呈し、床面から 4 ~ 5 cm 下がる程度の浅い掘り込みである。

この竪穴建物の覆土にも鉄分の沈着が部分的にみられた。しかし 4 基の土坑内の鉄分含有濃度の方が高く、恐らく土坑内の鉄分含有土の一部が建物の覆土に混じったとみられる。

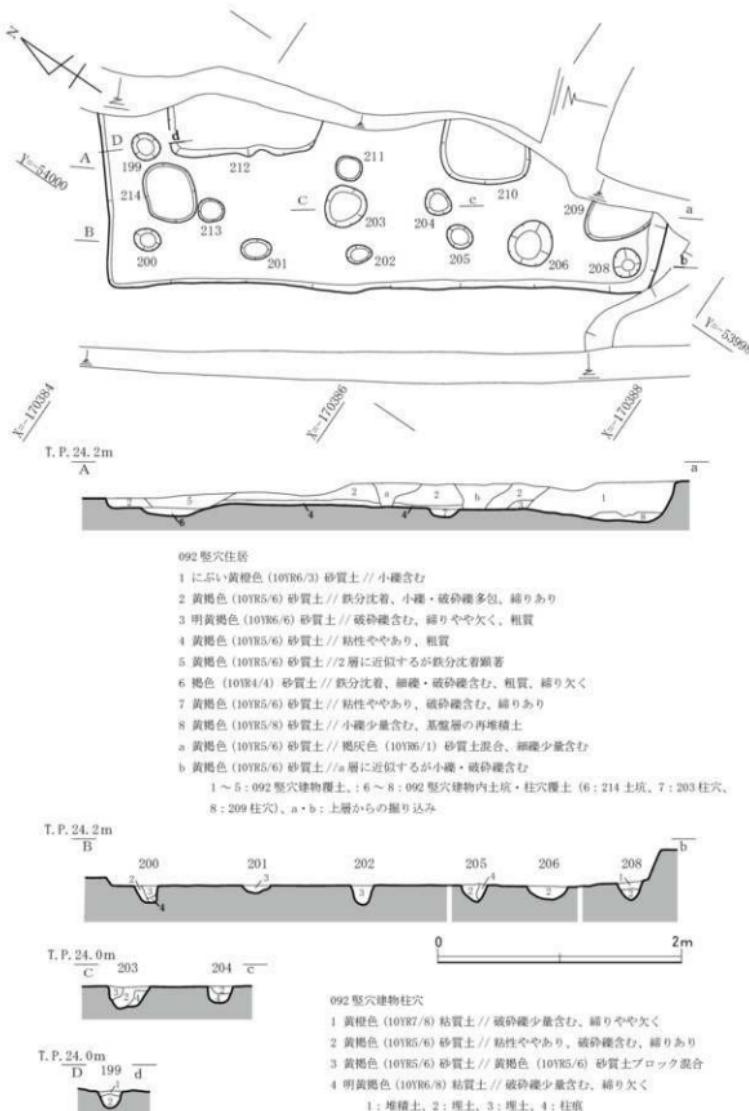
出土遺物 092 竪穴建物では上器類をはじめ遺物の出土はなかった。したがって建物の時期を求めるための根拠を欠くが、002 竪穴建物と類似する構造であり、また周囲の状況を踏まえると他の 3 軒の竪穴建物と同様の時期であったとみることができる。

微細遺物の抽出 分層した建物内の各覆土を採取し、0.15cm メッシュのフリイにかけて微細遺物の抽出を行なった。建物内覆土は土嚢袋 4 分の 1 程度で 3 袋分である。

サンプル土内からはサヌカイト破片および鉄分が付着した小礫が出土したが、建物の機能を具体的に示す残留物は検出されなかった。

建物の性格 092 竪穴建物については、

- 1 辺 4.0 ~ 5.0 m 弱ほどの小型である
  - 柱穴は壁沿いを巡る
  - 柱痕幅から推測される柱材の太さは直径 10cm 程度である
  - 現状では炉や窓がみられない
  - 覆土に鉄分を含む土坑が存在する
- という特徴があがる。建物規模は 4 軒の竪穴建物のなかでは最も大きいといえ、小型の範疇に入る。その規模の点も含め、建物の構造は 002 竪穴建物に類似している。ただし覆土に鉄分を含む土坑の存在は、現状ではこの建物のみで認められる。この土坑は建物の性格と結び付いていると考えられるが、具体的な内容が判明しない。建物の機能について推定することはできないが、簡易な構造であることから、他の 3 軒の竪穴建物と同じく作業場であったと推測する。



第20図 092 壁穴建物（平面・土層）

表 14 挖立柱建物一覧

位置	掘立柱建物 A	掘立柱建物 B	掘立柱建物 C	掘立柱建物 D	掘立柱建物 E
調査区西端から 20 m	調査区西端から 16 m	調査区西端から 17 m	調査区西端から 12 m	調査区西端から 7 m	
掘立柱建物 B・C と重複	掘立柱建物 A・C、掘立柱建物 A・B、004 竪穴建物と重複、003 竪穴建物と重複	003 竪穴建物と重複、003 竪穴建物と重複、掘立柱建物 B・C と近接	掘立柱建物 D と近接	掘立柱建物 D と近接	002 竪穴建物と重複
周辺状況					
方向	北-南	西-東	西-東	北-南	南西-北東
桁行	2間	3間	2間	2間?	2間?
梁行	2間	2間	2間	2間?	1間
出土遺物	土器 7 点 須恵器 0 点	土器 13 点 須恵器 2 点	土器 1 点 須恵器 1 点	土器 16 点 須恵器 1 点	土器 1 点 須恵器 1 点
備考	束柱	束柱	小屋	小屋	小屋
推定種別	倉	倉	小屋	小屋	小屋

## (2) 挖立柱建物

19-1 区では 5 棟の掘立柱建物を検出した。そのうち 3 棟は重複し、1 棟はその 3 棟に近接している。残りの 1 棟は 4 棟から離れて位置するが、002 竪穴建物と重複している。また近在する 4 棟の掘立柱建物のうち 3 棟は 003 竪穴建物、あるいは 004 竪穴建物と重複する位置に建つ。

5 棟を数える掘立柱建物については個別の遺構番号ではなく、南から順に A ~ E の仮番号を与えた。柱穴に関しては検出時に付した遺構の番号を踏襲した。

### 1. 挖立柱建物 A

桁行 2 間・4.3 m、梁行 2 間・3.9 m の総柱建物である。ただし梁行 3.9 m は柱芯間で 1.6 m と 2.3 m に分かれ、不均等な間隔である。

柱穴の規模には大小差があり、掘方の深さにも差がみられる。土層断面観察により想定される柱材の太さは直径 20cm ほどであり、竪穴建物の柱よりも太い。

表 15 挖立柱建物 A 柱穴

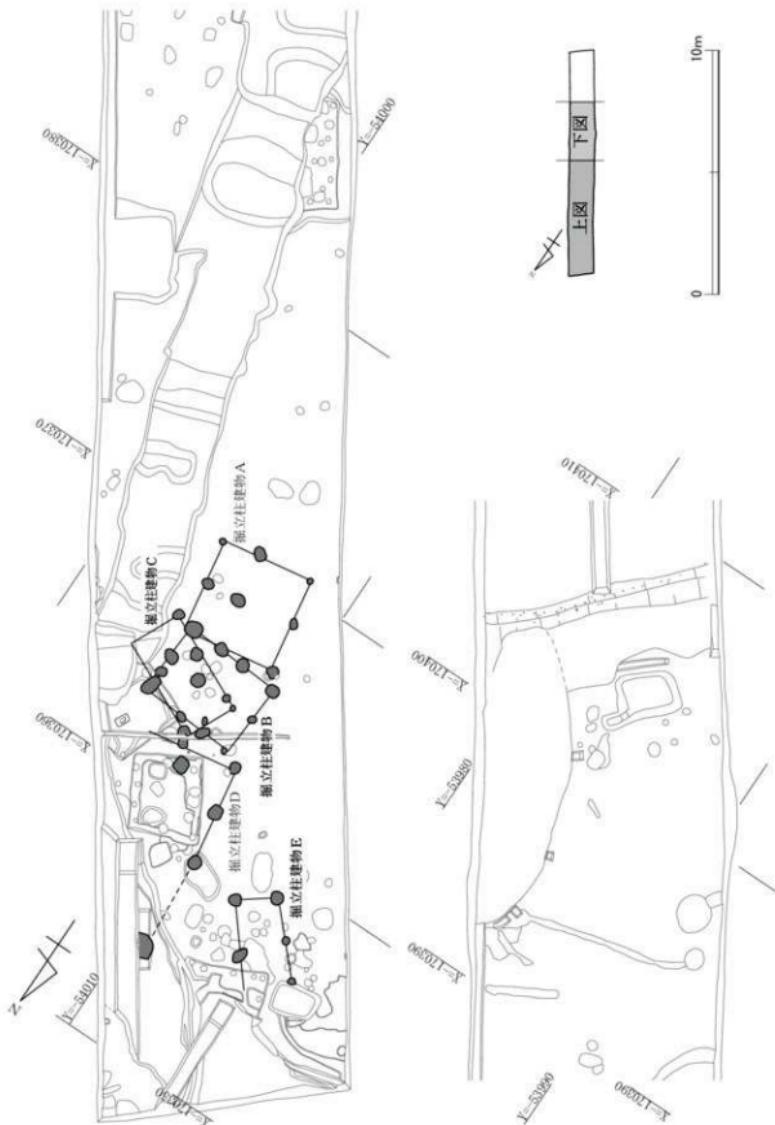
遺構 No	068	067	065	071	073	074
長径 (cm)	60	60	50	50	65	50
短径 (cm)	47	50	50	45	50	40
深度 (cm)	29	24	10	20	24	14
覆土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	埋土	埋土	柱痕・埋土	柱痕・埋土
出土遺物	土器 1 点	土器 3 点			土器 1 点	
備考	西半 069 柱穴重複 南半別柱穴重複					
遺構 No	077	076	075			
長径 (cm)	30	60	25			
短径 (cm)	30	45	25			
深度 (cm)	22	13	7			
覆土	柱痕・埋土	埋土	埋土			
出土遺物	土器 2 点					
備考						

4 基の柱穴から 7 点の土器が出土した。067 柱穴出土の破片は高杯、076 柱穴出土の 1 点は製塙土器とみられるが、小破片のため時期比定はできない。

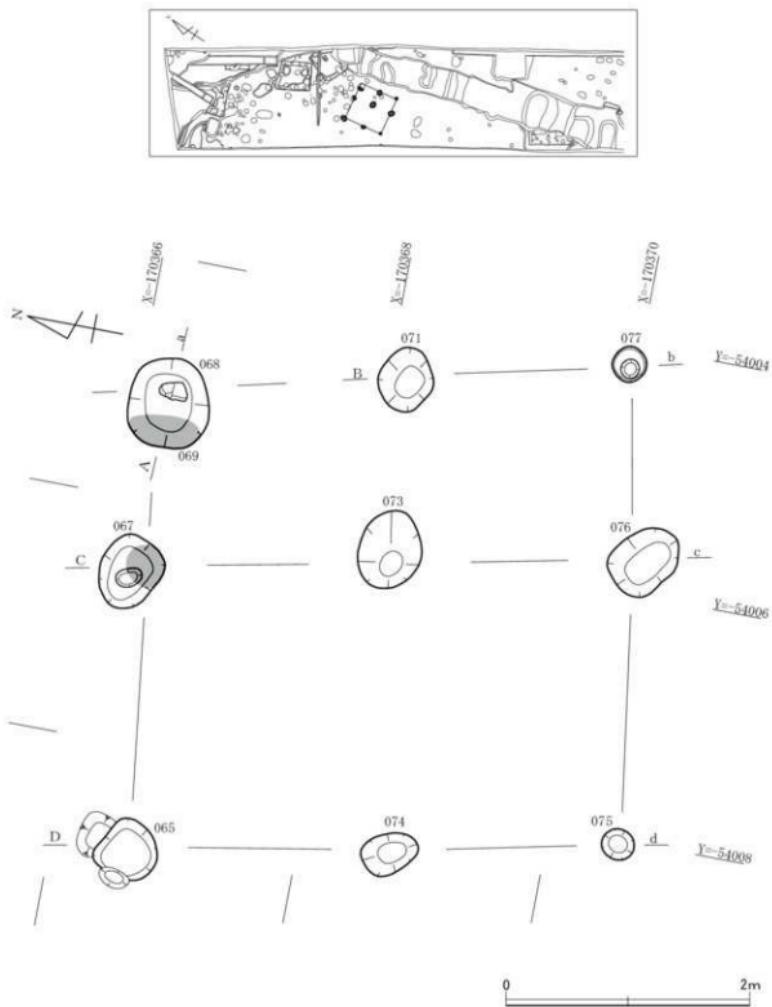
### 2. 挖立柱建物 B

桁行 3 間・4.1 ~ 4.3 m、梁行 2 間・3.2 m の総柱建物である。165 柱穴が 003 竪穴建物の南端を切り込んでいるほか、掘立柱建物 C とも重複する。

桁行、梁行ともに柱間隔は不均等で、桁行の柱芯間は 1.0 ~ 1.8 m、梁行では 1.4 ~ 1.8 m である。

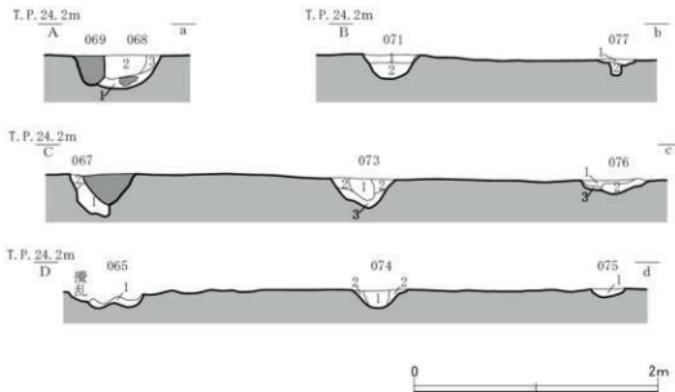


第21図 掘立柱建物の位置



第22図 振立柱建物A(平面)

柱穴の規模は長径が90cmを越えるものから30cmほどのものまでみられる。深さについても深浅の差がある。土層断面の観察により、12基の柱穴のうち10基で柱痕を確認し、061柱穴を除く9基で柱幅を計測することができた。柱痕幅は6~20cmであり、幅に開きがあるが平均すると13.8cmと



## 068柱穴

- 1 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土 // 破砕縫合む。粗質、柱底
- 2 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂質土 // 繰りあり、粗質、埋土
- 3 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土 // 小縫・破砕縫合む、繰りやや欠く。埋土

## 071柱穴

- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土 // 細縫・破砕縫合む。粗質、埋土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 // にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土混合、小縫多包、埋土

## 073柱穴

- 1 明黄褐色 (10YR6/6) 砂シルト // 繰りやや欠く、土質均一
- 2 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土 // 繰りやや欠く、柱底

## 067柱穴

- 1 増灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 // 繰りやや欠く
- 2 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂質土 // 細・小縫・破砕縫合む、繰りあり

## 075柱穴

- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土 // 灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土少量混合、炭化物少量含む、柱底
- 2 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土 // 鷺灰色 (10YR6/1) 砂質土混合、繰りあり、埋土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 // 破砕縫多包、繰りあり、粗質、埋土

## 076柱穴

- 1 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土 // 炭化物僅か含む、埋土
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 // 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土少量混合、破砕縫合む、繰りあり、埋土
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 // 2層に近似するが破砕縫より少い、埋土

## 065柱穴

- 1 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土 // 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土少量混合、細縫少量含む、繰りやや欠く、埋土

## 074柱穴

- 1 灰白色 (2.5Y7/1) 砂シルト // 黏性やや欠く、細縫少量含む、柱底
- 2 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘質土 // 破砕縫少量含む、繰りあり、埋土

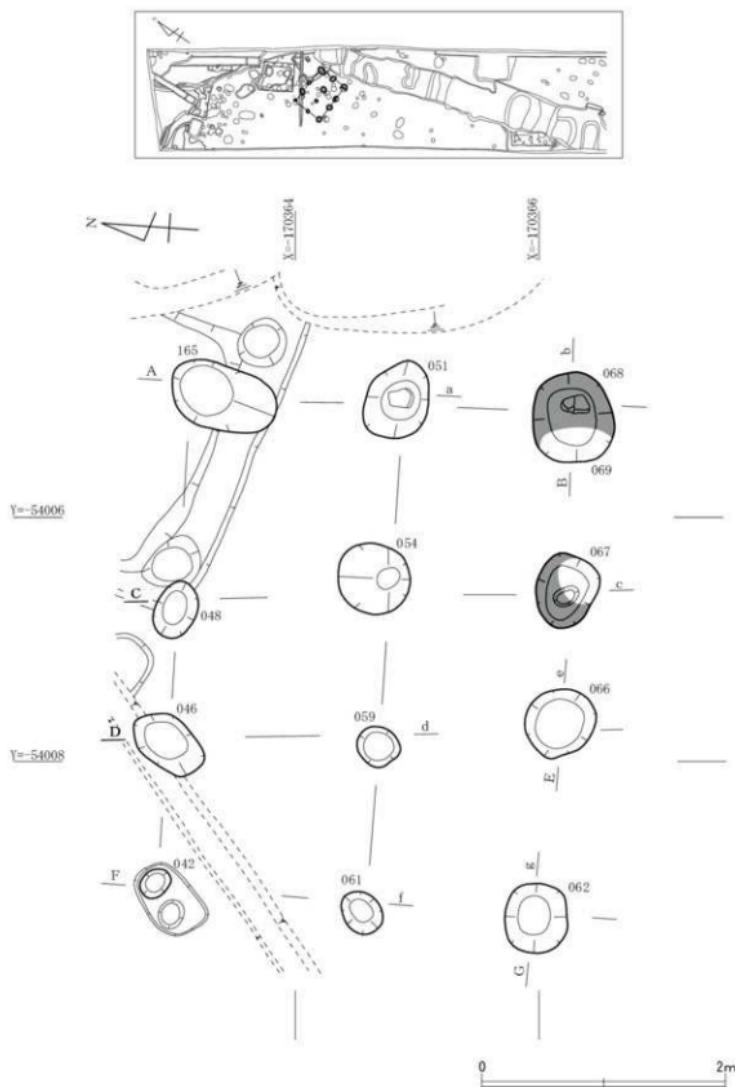
## 077柱穴

- 1 灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土 // 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土混合、細縫少量含む、繰りやや欠く

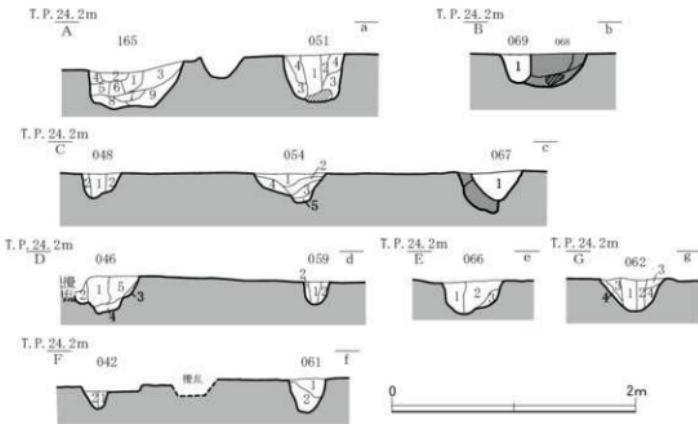
第23図 挖立柱建物A(土層)

なることから直徑14cm前後の太さの柱材が使用されたと推定する。掘立柱建物Aに比べて建物面積は広いが、柱材が細いことからより簡易な構造であった可能性もある。

遺物が出土した柱穴は9基を数える。そのうち051柱穴と062柱穴からは須恵器の破片がそれぞれ



第24図 掘立柱建物B(平面)



- 165柱穴 1 黒褐色 (10YR1/2) 砂質土//黒褐色 (10YR1/1) 砂質土混合、破砕縫少量含む、繊りやや欠く、埋土  
2 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土//炭化物少量含む、細繩・破砕縫含む  
3 灰黃褐色 (10YR4/2) 砂質土//2層に近似するが細繩・破砕縫より多い、埋土  
4 灰黃褐色 (10YR4/2) 砂質土//2層に近似するが細繩・破砕縫より少ない  
5 鵝灰色 (10YR1/1) 砂質土//炭化物少量含む、破砕縫含む、繊りあり、埋土  
6 鵝灰色 (10YR1/1) 砂質土//破砕縫少量含む、柱痕  
7 鵝色 (10YR4/2) 砂質土//細繩少量含む、繊りやや欠く、粗質  
8 鵝色 (10YR4/4) 砂質土//明黄褐色 (2.5Y6/8) 砂質土混合、小繩含む、埋土  
9 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土//部分的に粘土化、炭化物少量含む、小繩含む、柱痕  
051柱穴 1 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土//粘性ややあり、炭化物少量含む、細繩含む、柱痕  
2 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土//明黄褐色 (2.5Y6/6) 砂質土含む、粗質、柱痕の崩れ  
3 黄褐色 (2.5Y4/1) 砂質土//破砕縫含む、繊りあり、埋土  
4 黄橙色 (10YR7/8) 粘質土//黄褐色 (2.5Y6/1) 砂質土少量混合、繊りあり、埋土  
069柱穴 1 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土//暗灰褐色 (2.5Y5/2) 砂質土混合、破砕縫含む、繊りあり、柱痕  
048柱穴 1 噴灰褐色 (2.5Y4/2) 粘シルト//破砕縫少量含む、繊りやや欠く、柱痕  
2 噴灰褐色 (2.5Y4/2) 砂質土//小繩・破砕縫含む、粘性あり、埋土  
054柱穴 1 灰黃褐色 (10YR4/2) 砂質土//灰白色 (10YR7/1) 砂シルト混合、細繩・破砕縫含む  
2 灰黃褐色 (10YR4/2) 砂質土//1層に近似するが細繩・破砕縫より少ない  
3 灰黃褐色 (10YR4/2) 砂質土//2層に近似するが細繩・破砕縫ごく少量  
4 明黄褐色 (2.5Y6/6) 砂質土//破砕縫多包、繊りあり  
5 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土//細繩少量含む、繊り欠く  
067柱穴 1 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂質土//細・繩・破砕縫含む、繊りあり  
046柱穴 1 に5-6層 (7.5Y5/3) 粘質土//灰白色 (10YR7/1) 砂質土混合、細繩少量含む  
2 暗褐色 (10YR4/4) 砂質土//明黄褐色 (10YR7/6) 粘土ブロック混合、繊りあり  
3 鵝色 (10YR4/4) 砂質土//2層に近似するが明黄褐色 (10YR7/6) 粘土ブロックやや少ない  
4 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土//破砕縫少量含む、繊りやや欠く  
5 鵝色 (10YR4/4) 砂質土//2層に近似するが灰白色 (10YR7/1) 砂質土ブロックも混合  
059柱穴 1 黑褐色 (10YR3/2) 砂質土//炭化物少量含む、繊りあり、柱痕  
2 に5-6層 (10YR5/3) 粘シルト//破砕縫少量含む、埋土  
066柱穴 1 噴灰褐色 (2.5Y4/2) 砂質土//細繩僅かに含む、繊りやや欠く、柱痕  
2 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂質土//明黄褐色 (2.5Y6/6) 砂質土混合、繊りあり、埋土  
3 黑褐色 (2.5Y3/2) 砂質土//2層に近似するが破砕縫含む、埋土  
061柱穴 1 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土//灰白色 (10YR7/1) 砂シルト混合、細繩少量含む、埋土  
2 灰白色 (10YR7/1) 砂シルト//やや砂質、黄褐色 (10YR5/6) 砂質土少量混入、埋土  
062柱穴 1 灰黃褐色 (10YR4/2) 粘シルト//灰白色 (10YR8/1) 砂シルト少量混合、破砕縫少量含む、柱痕  
2 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂シルト//細繩少量含む、繊りあり、埋土  
3 鵝色 (10YR4/4) 砂質土//破砕縫少量含む、やや粗質、埋土  
4 黄褐色 (10YR5/6) 粘質土//明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土混合、細繩含む、繊りあり、埋土

第25図 挖立柱建物B(土層)

表16 挖立柱建物B柱穴

遺構No	165	051	069	048	054	067
長径(cm)	92	65	65	45	60	30
短径(cm)	84	50	25	35	60	20
深度(cm)	42	32	32	20	24	34
覆土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	柱痕	柱痕・埋土	埋土	埋土
出土遺物	土器1点	土器1点、須恵器1点	土器4点		土器1点	土器1点
備考			東半068重複			西に別遺構重複
遺構No	046	059	066	042	061	062
長径(cm)	45	35	57	65	40	55
短径(cm)	25	32	55	45	30	50
深度(cm)	30	18	28	20	28	27
覆土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	柱痕・埋土
出土遺物	土器1点	土器2点	土器1点			土器1点・須恵器1点
備考				2基同一掘方と 認識		

1点出土した。また069柱穴には高杯と製塙土器が各1点が認められ、067柱穴の土器1点は高杯である。このように器種を判別できた破片もあるが、いずれも図示できないほどの小破片である。

### 3. 挖立柱建物C

桁行2間・4.5m、梁行2間・2.2mの建物であるが、柱間隔が不均等である。梁行の柱間隔は1.0mと1.2mで近似している。これに対して桁行は2.7mと1.8mを測り不等である。南辺では柱穴の可能性のある小穴が2.7m間に2基みられるが、それに対応する小穴が北辺では認められないことから柱穴とはしなかった。

この掘立柱建物Cを構成する050柱穴が003竪穴建物の南辺と重複している。また掘立柱建物Aと位置が重なり、掘立柱建物Bとも近接している。遺構検出面での平面的な観察では、003竪穴建物の南辺が050柱穴を切り込んでいるとみられた。

西梁行の3基の柱穴はいずれも小規模で、平均すると長径27cm、短径18cmにすぎない。さらに070柱穴と050柱穴の2基では柱痕を確認できたが、柱痕の幅は12cmであった。こうした状況から掘立柱建物Cは直径10cm程度の柱材を使用した、先にみた掘立柱建物A・Bに比べてさらに脆弱な

表17 挖立柱建物C柱穴

遺構No	047	060	053	070	045	050
長径(cm)	35	27	55	50	(20)	50
短径(cm)	20	20	55	40	14	40
深度(cm)	18	7	8	18	14	18
覆土	埋土	埋土	埋土	柱痕・埋土	埋土	柱痕・埋土
出土遺物	土器1点					
備考					小穴と重複	

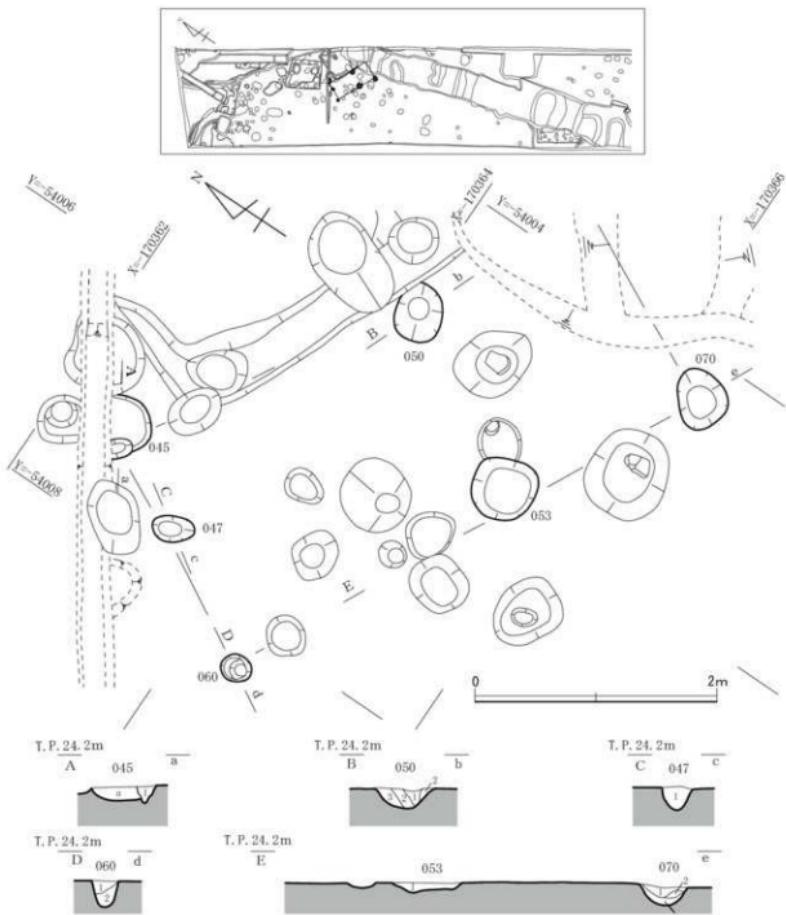
構造の「小屋」状建物であったと推測する。

遺物が出土した柱穴は047柱穴1基だけで、土器1点を認めた。

### 4. 挖立柱建物D

004竪穴建物と重複し、003竪穴建物とも重複している可能性が高い。また掘立柱建物A・Bと近接する位置にある。

南北方向西辺の2間(153・162・041柱穴)と東西方向南辺の1間(041・044柱穴)を捉えたが、北辺および東辺については検出できなかった。したがって全体の形状や規模は不明である。現状の規模



## 045柱穴

1 黄褐色 (10YR4/4) 砂質土 // 灰白色 (10YR7/1) 砂質土混入。縫りあり  
a 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土 // 破砕少量含む。縫まりやや欠く

## 050柱穴

1 灰白色 (10YR7/1) 砂質土 // 明黄褐色 (10YR7/6) 砂質土混入、  
破砕繊少量含む。柱痕

2 灰白色 (10YR7/1) 砂質土 // 酸化のため明黄褐色 (10YR6/6) 化、  
破砕繊含む。縫りあり。埋土

3 灰白色 (10YR7/1) 砂質土 // 2層に近似するが破砕繊少ない、埋土  
047柱穴

1 灰白色 (10YR7/1) 砂質土 // 黄褐色 (10YR5/6) 砂質土混入。  
縫りあり。粗質

## 060柱穴

1 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土 // 黒褐色 (10YR3/1) 砂質土ブロック混入。  
縫りあり

2 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土 // 1層に近似するが黒褐色 (10YR3/1) 砂質土  
ブロックより多い

## 053柱穴

1 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土 // 細繊・破砕繊含む。基盤層の再堆積土

## 070柱穴

1 明黄褐色 (2.5Y5/6) 砂質土 // 小繊・破砕繊含む。縫りあり

2 灰白色 (10YR7/1) 砂質土 // 明黄褐色 (10YR7/6) 砂質土混入。  
破砕繊少量含む。柱痕

3 明黄褐色 (2.5Y5/6) 砂質土 // 小繊・破砕繊多含。縫りあり

第26図 据立柱建物C(平面・土層)

表18 挖立柱建物D柱穴

遺構No	153	162	041	044	168	155
長径(cm)	60	65	55 (40)	64 (35)	64 (110)	59 (66)
短径(cm)	60	52	45	18	62	53
深度(cm)	16	20	25	柱痕・埋土	柱痕・埋土	柱痕・埋土
覆土	埋土	柱痕・埋土	埋土	柱痕・埋土	柱痕・埋土	柱痕・埋土
出土遺物	土器3点	土器3点	土器6点 須恵器1点		土器3点	土器1点
備考					関連柱穴	関連柱穴

は桁行とみられる南北方向が4.2m、梁行とみる東西方向が2.5mである。柱間隔は2.0~2.2mを測り、5棟の掘立柱建物の中でも間隔が広い。

162柱穴と044柱穴で柱痕を確認した。柱痕の幅は前者が12cm、後者が22cmを測ることから直径15~20cm程度の柱材が使用されていたとみられる。

5基の柱穴以外に、この掘立柱建物Dと関連する可能性のある柱穴が2基存在する。この2基は、5棟の掘立柱建物の構成要素とはならず、また新たな掘立柱建物を組むこともできない。しかし柱痕が確認できるので柱穴であり、位置からすると掘立柱建物Cとの関連が捨て切れない。

1基は建物南辺の044柱穴に近接する168柱穴である。1辺約0.6mの隅丸方形を呈し、土層断面で柱痕が確認される。この柱穴は044柱穴から1mほど西に寄っているため、梁行ラインからは外れている。

いま1基は、桁行西ラインの北延長上にある155柱穴である。掘立柱建物Dの中でも最も至近距離にある153柱穴との間隔が4.3mで、他の柱間隔の2倍の距離である。調査区外におよそ半分が伸び出しているために全容は不詳であるが、現状の計測では北西-南東方向の長さは110cm、深さは53cmを測り、規模は大きい。

155柱穴でも土層断面に柱痕を認めた。その柱痕の幅は168柱穴と等しく18cmを測り、掘立柱建物Dを構成する044柱穴でみられた柱痕の幅に近い。

掘立柱建物Dを構成する4基の柱穴のうち044柱穴を除く3基、そして掘立柱建物Dと関連する可能性のある2基の柱穴の計5基で遺物の出土を認めた。

153柱穴、162柱穴、168柱穴から土器3点、さらに041柱穴からは土器6点と須恵器1点が出土した。いずれも小破片であり、器種などについては不明である。

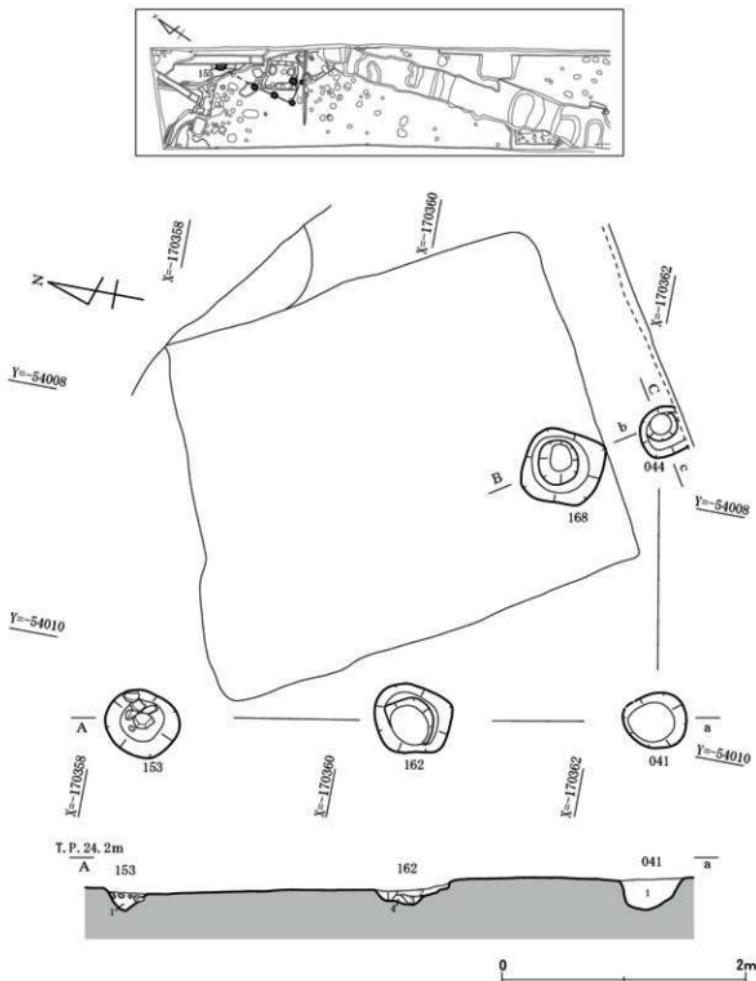
##### 5. 掘立柱建物E

北西部が002竪穴建物と重複する位置にあり。また001河道とも重複しているとみられることから、軟弱地盤の上に建つ可能性が高い。

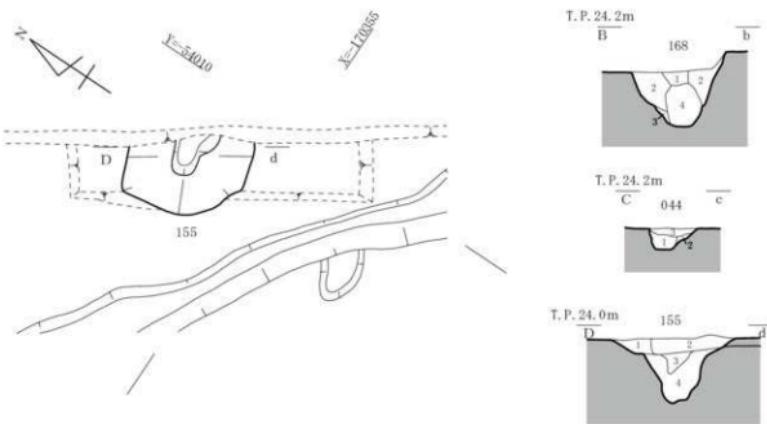
建物の北西梁行については捉えることができなかった。ただ、現状で最も北東に位置する021柱穴

表19 挖立柱建物E柱穴

遺構No	021	026	031	152	011
長径(cm)	(35)	30	55	52	60
短径(cm)	(30)	25	50	50	45
深度(cm)	18	11	12	14	20
覆土	埋土	柱痕・埋土	埋土	柱痕・埋土	埋土
出土遺物		須恵器1点		土器1点	
備考					



第27図 据立柱建物D(平面・土層)



155柱穴

- 1 鷗灰色 (10YR6/1) 砂シルト // 細纖含む
  - 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂シルト // 細纖含む
  - 3 灰黃褐色 (10YR4/2) 砂シルト // 細纖含む、柱痕
  - 4 晴灰褐色 (2.5Y5/6) 砂シルト // 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂シルト混合、細纖含む、埋土
- 444柱穴
- 1 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂シルト // 全体に酸化、オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土少量混合、柱痕
  - 2 オリーブ褐色 (2.5Y6/3) 砂質土 // 全体に酸化、土質均一、埋土
  - 3 灰黄色 (2.5Y6/4) 砂質土 // オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土混合、炭化物少量含む
- 168柱穴
- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 // 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土少量混合、炭化物少量含む、縞りやや欠く、柱痕
  - 2 灰白色 (10YR7/1) 砂シルト // 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土少量混合、破碎繊少含む、縞りあり、理土
  - 3 灰褐色 (10YR4/2) 砂質土 // 灰白色 (10YR7/1) 砂シルト混合、縞りあり、埋土
  - 4 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土 // にぶい黄褐色 (10YR7/2) 砂シルト混合、破碎繊含む、堅固、埋土

第28図 掘立柱建物D(土層)、155柱穴(平面・土層)

を梁行の隅柱とみることは可能であり、そうだとすれば桁行2間・3.8～3.9 m、梁行1間・1.9 mの規模となる。

また桁行の柱間隔は北東辺が2.2 m、南西辺が1.8 mと1.8 mで、011柱穴と026柱穴との間で0.4 mの距離差が生じている。

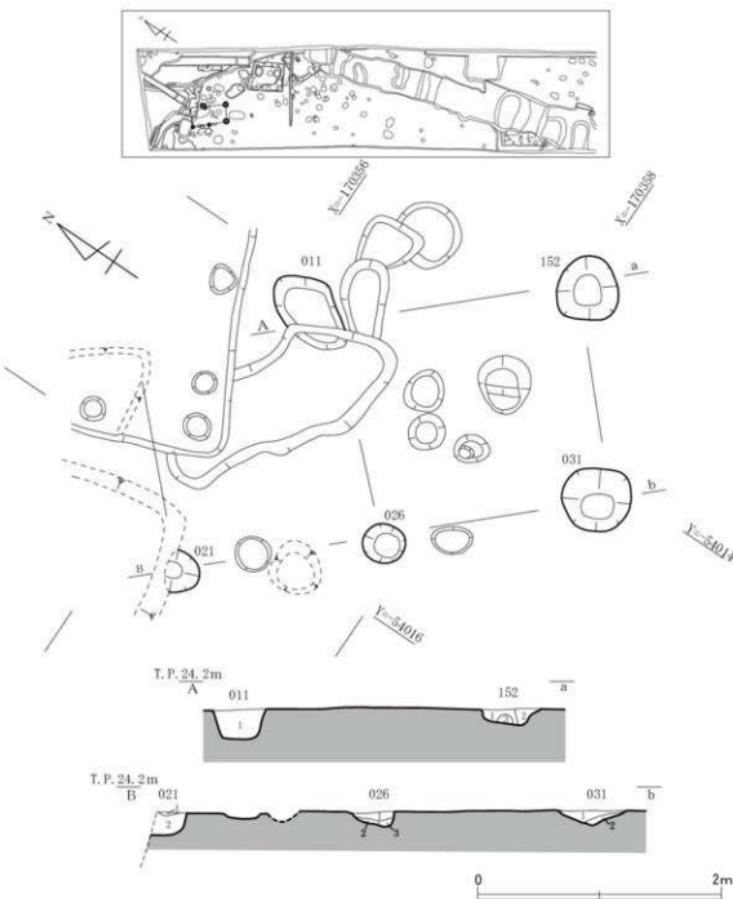
026柱穴と152柱穴で柱痕を確認した。柱痕の幅は前者が10cm、後者が14cmを測り、直径10cm程度の柱材が使用されていたと推定される。この直径10cmの柱材は、掘立柱建物Cでも想定している。

遺物の出土があった柱穴は2基で、026柱穴では須恵器1点、152柱穴では土器1点がみられた。026柱穴の須恵器は杯身の小破片である。

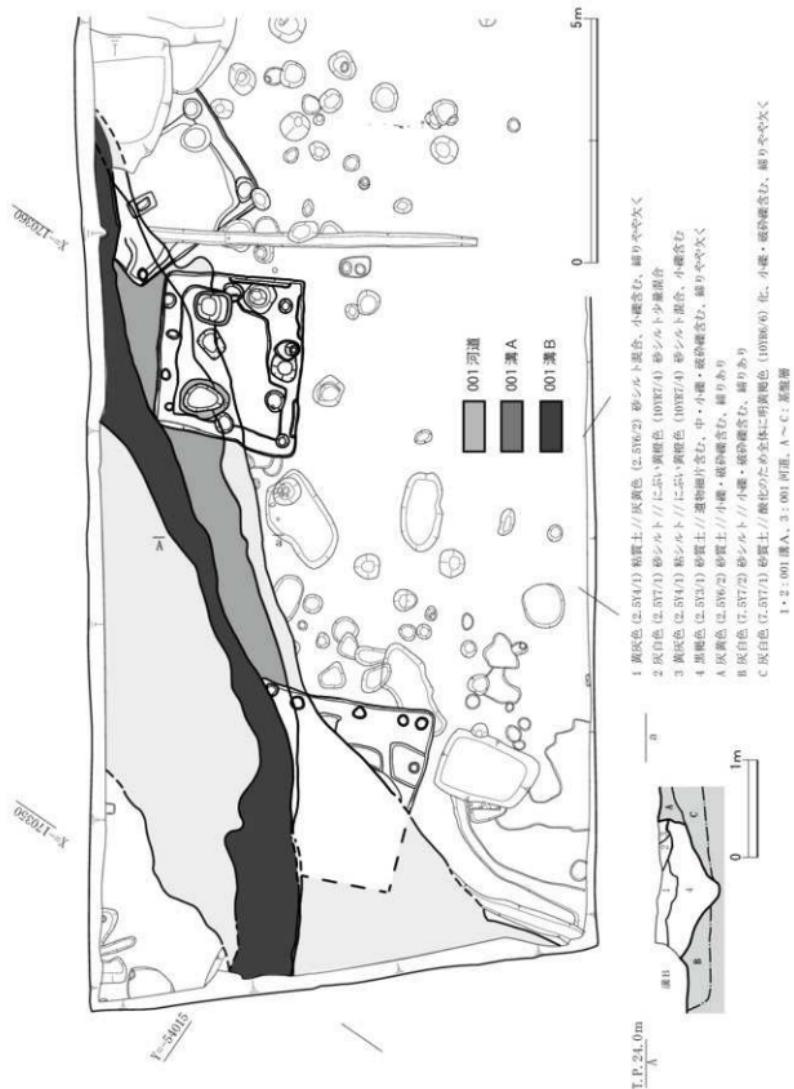
柱の細さ、そして不均等な柱並びはこの掘立柱建物Eだけでなく、掘立柱建物C、あるいは掘立柱建物Dも同様であった。こうした掘立柱建物は、「小屋」状の構造物であったと推測する。

### (3) 001落込み(河道、溝A、溝B)

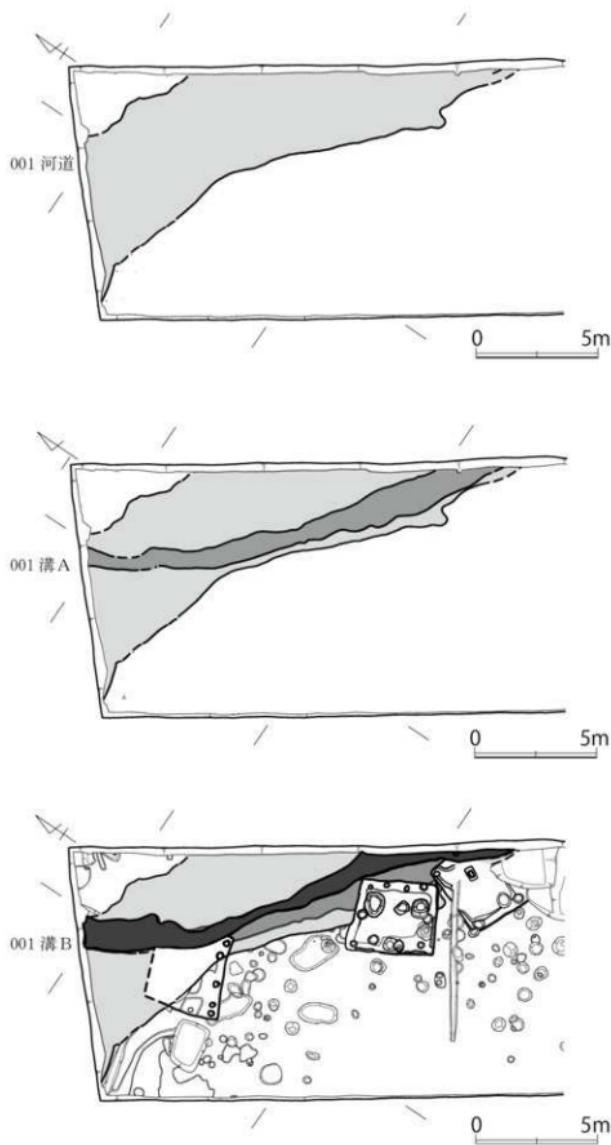
遺構検出作業開始直後、調査区西端から東方向に走行する落込みを検出した。当初、この落込みは全



第29図 据立柱建物E(平面・土層)



第30図 001 落込み（平面・土層）



第31図 001 落込みの変遷

体がひとつ河川痕だと認識した。しかし 002 竪穴建物との間に設定した土層観察用ベルトや調査区西壁の土層観察を通じて、1 条の自然河道と 2 条の溝が重複したものであることが判明した。

河道と溝 1 条は 3 軒の竪穴建物（002、003、004）が構築される以前の形成であり、1 条の溝は 003・004 竪穴建物を切り込んでいる。また河道と溝では河道が先行する。

このように 001 落込みは単一の遺構ではなく、時間差をもって形成、廃絶された河道と溝の複合体である。なお、全体をまとめて呼ぶ場合は「001 落込み」とし、個別に河道を示す場合は「001 河道」、先行する溝の場合は「001 溝 A」、後出溝は「001 溝 B」と呼称することは既述の通りである。その上で、改めて 001 落込みの形成について時系列に沿って整理しておく。

まず、調査区西端付近を西から東方向に斜行する 001 河道が広がる。次いで、この 001 河道と重複して走行する 001 溝 A が開削される。この溝の底の標高は T.P.23.2 m ほどで、河道や溝 B よりも 0.4 ~ 0.7 m 低い。この溝 A が埋没したのちに竪穴建物や掘立柱建物が構築される。その時期は、大きく捉えると、古墳時代中期前葉から中頃にかけてである。また建物間にも構築の前後差はある。

建物の掘方や柱穴などが完全に埋没したのちに溝 B が開削された。溝 B は 004 竪穴建物と僅かに接していて、また 003 竪穴建物の東部分を切り崩している。

### 1. 001 河道

001 河道は、調査区西端付近の遺構検出面での計測では幅が 5 m、深さは 0.2 ~ 0.3 m である。ただし、河道上面を近世以降の耕作土と床土が覆っていることから、河道上部が削平を受け、その肩部は本来の位置よりも下がっているとみられる。とすれば、幅、深度ともに現状以上に大きかった。

また底面の標高は、調査区西端付近で T.P.23.7 m、それに対して北壁付近では T.P.23.9 m を測り、0.2 m ではあるが西壁付近が低い。調査区内においては西から東へ移るにしたがい地形が低位段丘から沖積地へと変化し、その高低差を上・中・下段面と呼んで区分した。これに対して 001 河道は、調査区内に限つてみると、西方に下降しているとみられる。この東から西、あるいは南から北への流れは「天の川」など周辺の河川や水路と同じであり、大きくは周囲の地形に沿った方向である。

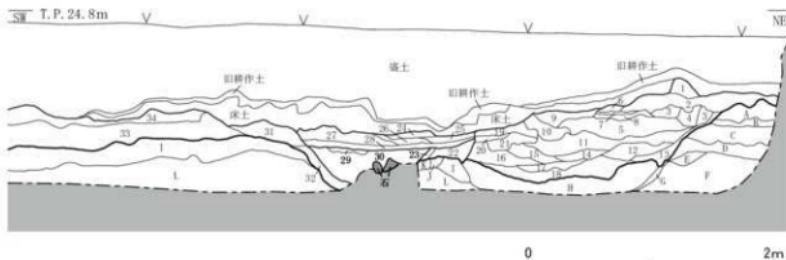
河道内の覆土については、調査区西壁、002 竪穴建物北のトレンチ、同建物の東ベルトでそれぞれ観察した。主に黒褐色あるいは暗度の高い灰色を基調とした砂質土であり、小・細礫や破碎礫を含んでいる。土層断面の観察により分層することは可能であるが、河道と溝 A および溝 B をそれぞれ認識することは容易ではなかった。

001 河道からは 274 点・2448g の土器と 1 点・30g の埴輪の破片が出土した。埴輪片は上層からの混入とみられる。また弥生時代 IV 期および V 期の土器も含まれている。

1 点当たり 9 g ほどの小破片であるため、器種や器形を特定できないものが大半である。その中から製塙土器も含めて 18 点を図示した。製塙土器 7 点（48、51、53、57、58、60、61）、布留式甕 5 点（21、22、26、28、33）、高杯 5 点（38、41、42、43、45）である。

製塙土器 7 点のうち 3 点が胴部上半あるいは頸部より上の破片（48・51・53）、4 点が胴部下半あるいは底部の破片（57・58・60・61）である。48 は胴部上半から口縁部、51 は頸部から口縁部の破片だが、ともに落込み一括の 47 にみられるような張りの乏しい胴部、緩やかに屈曲する頸部、開きの乏しい口縁部を特徴とする。古墳時代前期後半から中期にかけての E 類（横山 2007、以下同）とみられる。この 2 点に対して 53 は胴部に張りがあり、口縁部は外反して開き気味である。48・51 よりも先行する可能性が高い。

胴部下半の 57 は尖底で、砕頭形を呈している。58 の底部も 57 に近い。これに対して 61 はほぼ平底、60 も幾分平坦気味である。このうち 61 は V 様式系甕底部の可能性もあるが、残り 3 点は E 類で、



- 1 明黄褐色 (2.5Y6/8) 砂質土 // 細繩・破砕繩含む、粗質、縦りあり  
 2 明黄褐色 (2.5Y6/6) 砂質土 // 層より暗めあり、小繩・破砕繩含む  
 3 黒灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 // 破砕繩若干含む、縦りあり  
 4 明黄褐色 (2.5Y7/6) 砂質土 // 破砕繩若干含む、縦りあり  
 5 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土 // 破砕繩・小繩多包、粗質、縦りやや欠く  
 6 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 // 破砕繩多包、粗質、縦りやや欠く  
 7 暗灰色 (10YR5/1) 砂質土 // 黄褐色 (10YR6/6) 砂質土混合、細繩・破砕繩多包  
 8 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 // 細繩・破砕繩含む、粗質、縦りあり  
 9 黑褐色 (10YR3/2) 砂質土 // 小繩・破砕繩多包、縦りやや欠く  
 10 暗灰色 (10YR6/1) 砂質土 // 黑褐色 (10YR3/2) 砂質土混合、小繩・破砕繩多包、粗質  
 11 明黄褐色 (2.5Y7/6) 砂質土 // 黄褐色 (2.5Y6/2) 砂質土混合、破砕繩含む、縦りやや欠く  
 12 暗灰色 (2.5Y5/2) 砂質土 // ややシルト、縦り含む、縦りやや欠く  
 13 暗灰色 (2.5Y5/2) 砂質土 // 細繩多包、縦りやや欠く  
 14 灰黃褐色 (10YR5/2) 砂質土 // 黄褐色 (2.5Y6/2) 砂質土混合、細繩・破砕繩多包  
 15 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 // ややシルト、細繩・破砕繩多包  
 16 灰色 (7.5Y5/1) 粘シルト // 灰黃褐色 (10YR4/2) 砂質土若干混合、破砕繩含む、縦りあり  
 17 犀オーブリーカ (7.5Y5/2) 砂シルト // 部分的に灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土混合、粘性ややあり、縦りやや欠く  
 18 犀オーブリーカ (7.5Y5/2) 砂シルト // 16層に近似する/破砕繩より多い  
 19 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂質土 // 破砕繩多包、粗質、縦りやや欠く  
 20 黄褐色 (2.5Y6/1) 砂質土 // 黄褐色 (2.5Y6/1) 砂質土混合、破砕繩多包、縦りやや欠く  
 21 灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土 // 破砕繩多包、縦りあり  
 22 灰色 (5Y6/1) 砂質土 // 部分的に灰色 (5Y6/1) 粘質土混合、細繩・破砕繩多包  
 23 黑褐色 (10YR3/2) 砂シルト // 細繩・破砕繩少含む  
 24 灰黃褐色 (10YR4/2) 砂質土 // 犀オーブリーカ (7.5Y6/2) 砂質土混合、破砕繩若干含む、縦りあり  
 25 暗灰色 (10YR5/1) 砂シルト // 細繩・破砕繩若干含む、土質均一  
 26 暗灰色 (10YR4/1) 粘シルト // 部分的に灰白色 (10YR7/1) 粘シルト混合、破砕繩若干含む、縦りやや欠く  
 27 暗灰色 (10YR4/1) 砂質土 // 小繩・破砕繩若干含む、遺物細片若干含む  
 28 灰黃褐色 (10YR4/2) 砂質土 // 分別した灰白色 (10YR7/1) 粗砂混合、炭化物少量含む、細繩・破砕繩含む  
 29 灰黃褐色 (10YR4/2) 砂質土 // 分別した灰白色 (10YR6/6) 粘質土混合、炭化物少量含む、縦りやや欠く  
 30 黑褐色 (10YR2/3) 粘質土 // 遺物細片多包。小繩・破砕繩含む、縦りやや欠く  
 31 黑褐色 (10YR3/2) 砂質土 // ややシルト、細繩・破砕繩含む、縦りあり  
 32 灰黃褐色 (10YR5/2) 砂質土 // ややシルト、小繩・破砕繩含む、縦りやや欠く  
 33 黑褐色 (2.5Y3/1) 砂質土 // 黄褐色 (2.5Y6/2) 砂質土混合、小繩・破砕繩多包、破砕繩含む、粗質  
 34 暗灰色 (2.5Y4/2) 砂質土 // 黄褐色 (2.5Y7/6) 砂質土ブロック混合、破砕繩含む、粗質  
 A 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂質土 // 黄褐色 (2.5Y6/1) 砂質土混合、破砕繩含む  
 B 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂質土 // 14層に近似する/黄褐色 (2.5Y6/1) 砂質土混合やや低い  
 C オーブリーカ (2.5Y4/6) 粘質土 // ややシルト、堅固  
 D 黄褐色 (2.5Y5/2) 砂質土 // 破砕繩含む、粗質  
 E 暗灰色 (2.5Y5/2) 砂質土 // 破砕繩若干含む、粘性ややあり  
 F オーブリーカ (2.5Y4/6) 砂質土 // 細繩・破砕繩若干含む  
 G 暗灰色 (2.5Y5/2) 砂 // 砂較粗い。暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土混合、破砕繩多包  
 H オーブリーカ (2.5Y4/3) 粘質土 // 青灰色 (10Y6/6/1) 粘シルト混合、小繩多包、縦り欠く  
 I 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘質土 // 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土若干混合、小繩・破砕繩含む  
 J 黄褐色 (2.5Y5/1) 粘質土 // やや砂質、破砕繩含む、粗質  
 K オーブリーカ (2.5Y4/3) 粘質土 // 破砕繩若干含む  
 L 青灰色 (10Y6/4/1) 粘質土 // やや砂質、小繩・破砕繩含む、縦りやや欠く

1 ~ 21 : 001 落込み以前の流れ 22 ~ 23, 31 ~ 34 : 001 河道 24 ~ 28 : 001 湧B  
 29 ~ 30 : 001 湧A

第32図 001落込み(西壁土層)

表20 001 落込み出土の土器（破片数）

	弥生IV期		弥生V期		古墳前期		時期不詳		備考	
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
河道	1点	8g	1点	40g	9点	970g	264点	1460g	埴輪1点	30g
溝A	1点	40g	2点	33g	7点	293g	255点	1376g		
溝B			1点	59g	1点	39g	35点	181g		
落込み一括			3点	132g	24点	1763g	550点	3731g	須恵器1点	2g
計	2点	48g	7点	264g	41点	3065g	1104点	6748g		

57・58は古墳時代前期後半から中期、60は古墳時代中期前半から中葉とみられる。

布留式甕については、口縁部が直線的に外傾する28と内湾する26がある。前者は頸部が鋭く「く」字状に屈曲し、胴部内面にヨコヘラケズリを施す。一方後者は、頸部の屈曲がやや鈍い。ただし胴部外面をヨコハケのちミガキ、ヨコナデ、内面はヨコヘラケズリにより調整がなされていて、最新段階までは下らないと考える。この2点に対して33は明らかな長胴化がみられ、26よりも新相に属する。

建物群に先行する001河道の覆土に須恵器が含まれていない点は、遺構形成状況と整合している。また布留式甕には時間差がみられる。ただ、長胴化傾向の認められる布留式甕が004竪穴建物内の186土坑から出土していることから、33などは混じり込んだ後出の土器である。

## 2. 001溝A

001溝Aは、001河道の埋没後に形成された溝であり、現状で幅0.5～1.2m、深さ0.3～0.5mを測る。001河道を斜行する北西～南東方向に延びているが、南半では001河道西辺に沿っている。底面の標高は西端でT.P.23.2m、北壁付近でT.P.23.2mであり、同じレベルではあるが、僅かながら高低差があり、全体としては北東から南西方向へ緩やかに下降している。

001溝Aも上部が幾分削平を受けていることから、当初の形状を求めるることはできない。現状では狭小な底部から0.2mほど急傾に立上り、そのち開き気味となる。2段掘りされているようでもあるが、全体としては断面「V」字状に近い。

溝内の覆土は、細・小礫や破碎礫を含んだ暗度の高い灰色系の砂質土が主体である。

001河道理毎後から建物群構築までの間に001溝Aは開削された。出土した土器類の破片は265点・1742gを数え、1点当たり7g弱である。先述の001河道から出土した土器の平均重量が9gであることを比べると、破片化が進んでいるといえる。こうした状況を反映して、出土土器のうち復元図化できたのは5点であった。

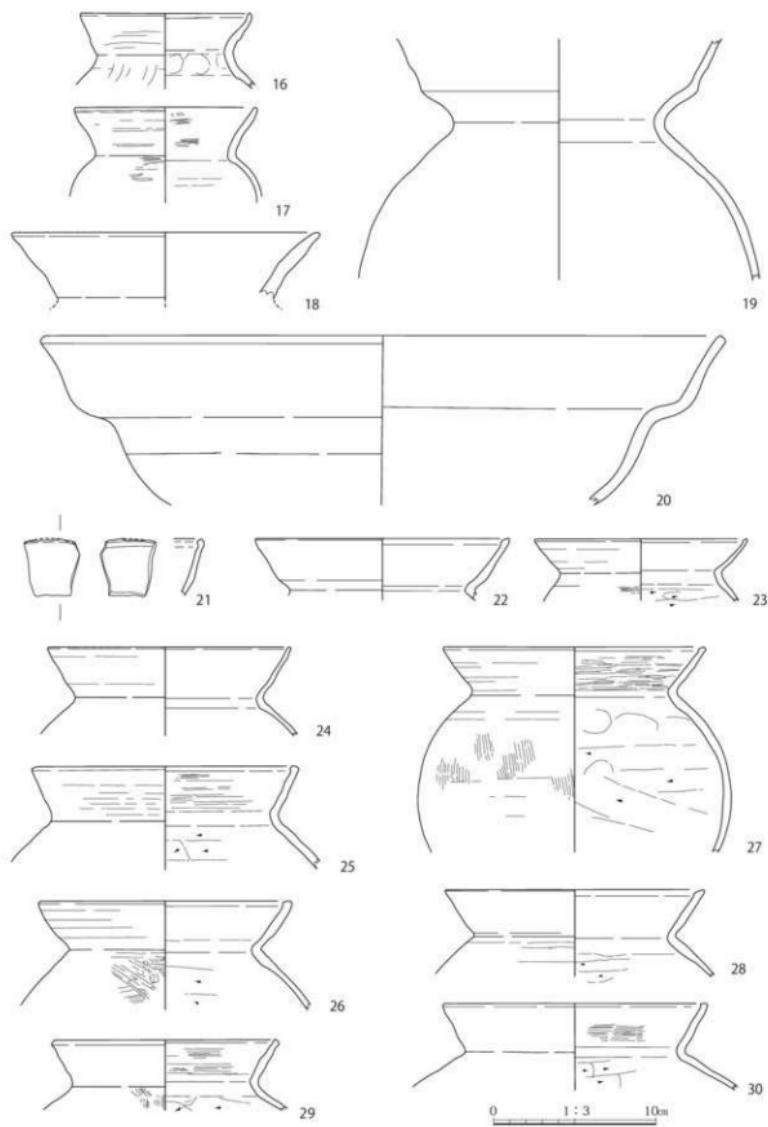
5点のうち23と31は布留式甕である。前者は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部は直線的に外傾している。口縁部内面端の肥厚は弱い。31は胴部上半のみの破片である。外面にはヨコハケが施されているが、それに先行するタテハケがかすかに認められる。胴部の球形度は高いとみられる。

36は台付甕の脚部破片である。色調と外面調整の類似から35・37と同一個体である可能性が高い。東海あるいは東方の地域に系譜をもつかは、小破片であるため不明である。

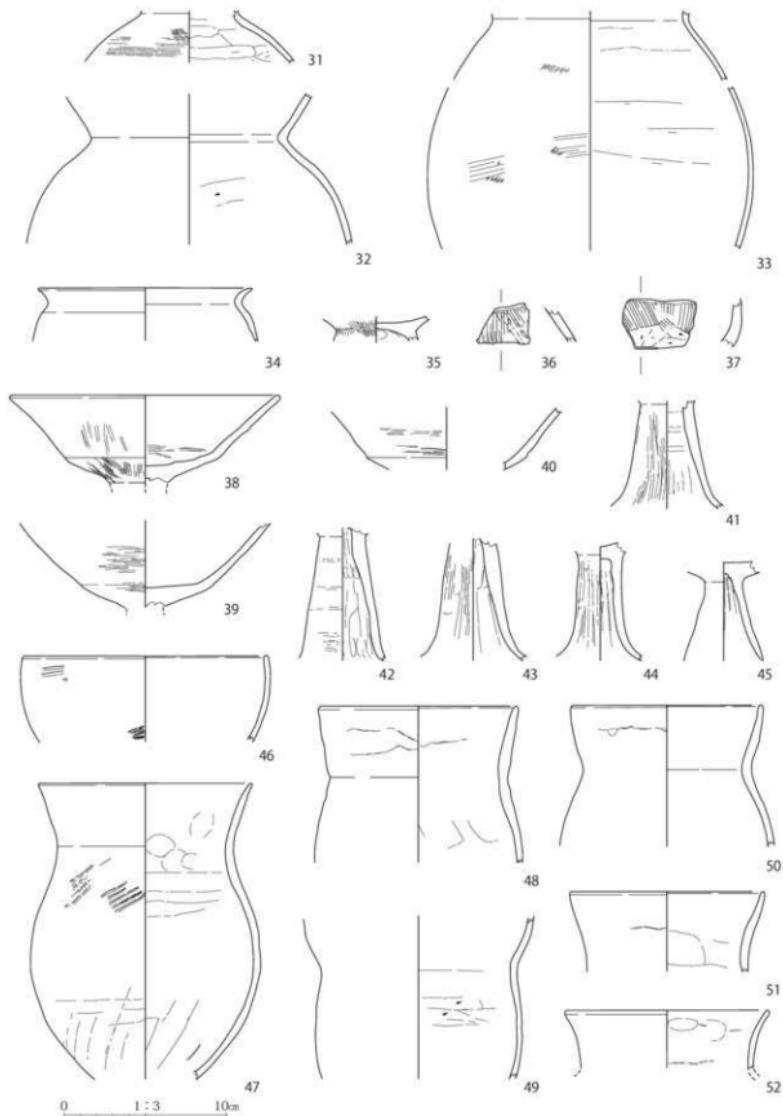
64は突出した底部から胴部下半にかけての破片である。2次焼成を強く受けていることから製塙土器と判断したが、V様式系甕の可能性もある。ただし、製塙土器以外で被熱したものは、第33～34図掲載土器を参考にすると42点中4点、9.5%に留まるところから、その可能性は低い。

## 3. 001溝B

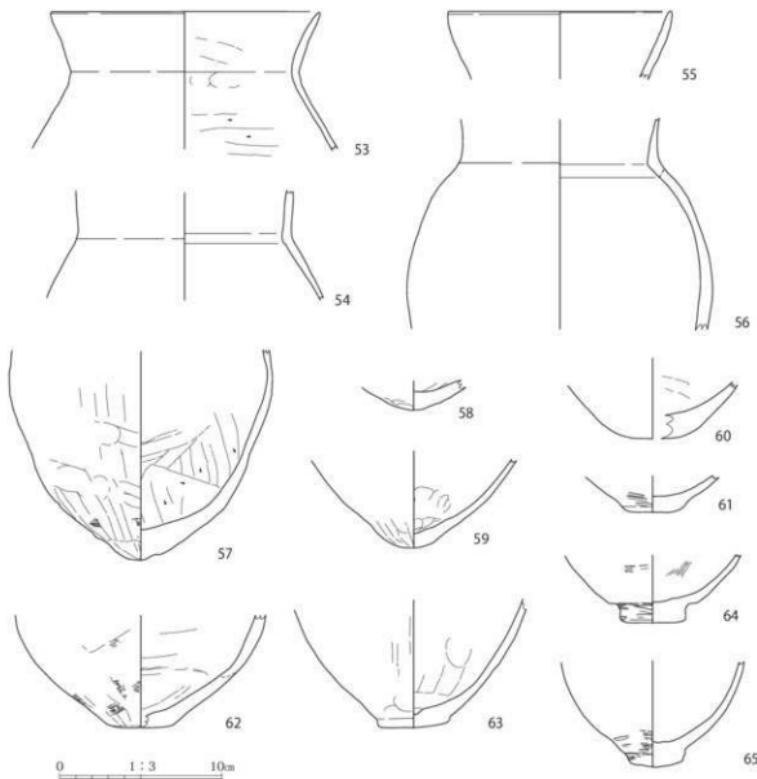
001溝Bは、001溝Aおよび竪穴建物や掘立柱建物が廃絶・埋没したのちに形成された溝である。溝Bは溝Aの覆土を切り込んでいることから、溝B形成時点には溝Aはほぼ埋まり切っていたことになるが、しかし溝Bは溝Aと重複あるいは近接してほぼ同じ位置で延びている。このように溝Aと溝Bと



第33図 001落込み出土遺物（1）



第34図 001落込み出土遺物（2）



第35図 001落込み出土遺物（3）

の間には時間差があるものの、ともに等しい目的と機能が付された、例えば水脈に沿った水路のような溝であったと考えられる。

001溝Bは現状で幅0.4~1.2m、深さ0.2~0.4mを測る。底面の標高は西端でT.P.23.6m、北壁付近でT.P.23.7mを測り、南西方向に僅かに下降している。溝の底部は比較的平坦で、側壁は緩やかに立上がる。

溝内の覆土は001溝Aと近似していて、細・小礫や破碎礫を含んだ暗度の高い灰色系の砂質土・粘質土が主体である。

001溝Bからは37点・279gの土器が出土した。1点当たり8g弱である。この溝Bでは、河道や溝Aよりも遺物量が少ない。その要因としては、河道より幅が狭く溝Aに比べて浅いため、遺物包含土量が少ないことが想定される。

図示できた土器は有稜高杯の杯部1点（第34図40）のみである。杯部の稜はやや鈍く、口縁部の

外反も緩やかである。

#### 4. 001 落込み一括の遺物

既述のように、当初は重複する河道と2条の溝をひとつの001落込みと認識していた。そのため帰属する個別の遺構が不明である遺物も存在する。それを「001落込み一括」としてまとめた。

001落込み一括の土器類は578点・5628gを数え、1点・2gは須恵器、それ以外は土器である。そのうち26点を図示したが、12点は製塩土器(46、47、49、50、52、54、55、56、59、62、63、65)、布留式甕は6点(24、25、27、29、30、32)で、そのほか弥生時代V期の短頸壺2点(16、17)、台付甕(35、37)などもみられる。台付甕2点は001溝A出土の36と同一個体とみられる。

製塩土器のうち47は、今回の調査で出土した製塩土器の中でも最も本来の形状を捉えることができる。古墳時代前期後半から中期のE類とすることができ、49・50・52も同類・同時期といえる。46は口縁部にかけて内湾しつづかに開き気味に立上がる。54・56は胴部の張りはあるが、口縁部は直立傾向にある。47などと同類で捉えられるが、後出する可能性もある。55は胴部上半から口縁部にかけの破片である。本来は椀形を呈する。図上復元による口径は13.7cmとなり、やや広いがH類に該当し、古墳時代中期後半に位置付くと考える。

尖底の59は先にみた57、平底気味の63は61、そして突出した底部の65は64とそれぞれ同じ範疇で捉えることができる。

この001落込み一括としてまとめた土器群は、本来は河道や溝A・Bに包含されていたものである。このことは各遺構の出土土器の様相と比べて齟齬がないことから裏付けられる。

#### (4) 146井戸

調査区西端から南東約50m、南壁沿いに位置する石組の井戸である。長径約2.3mの掘方を設け、長さ20cm、幅・厚10cm程度の河原石を小口積にして壁面を補強している。井戸の断割りにより、河原石を積み上げながら掘方との間に粗砂を多く含んだ褐色系の砂質土を充填している状況を確認した。

井戸の掘方は検出面から1.6m下までとみられる。石組は検出面下1.4mほどで終わり、その下に灰白色粘シルト(3・4層)が堆積している。この部分には木枠などが本来設置されていたと推測する。

石組内部は、砂を含んだ褐色粘シルト(2層)で上部まで埋まり、さらにその上を覆うように大小の礫を含む褐色砂シルト(1層)が堆積している。2層は井戸を一気に埋め戻した土、1層も最終段階の埋め土とみられる。

この146井戸の南に147溝が接続する。幅0.5m、深さ12cmほどで、約0.7mにわたり検出されたが、調査区外に延び出していく。この溝と井戸は一体で機能していたと考えられるが、井戸への取水か、それとも井戸からの排水かは、検出範囲内では溝底の高低差が認められないため不明である。

また井戸の近くには接続した145土坑と144溝が存在する。145土坑は長径0.9m、短径0.8m、深さ0.4mを測る。144溝は幅0.3m、深さ5cmほどで、東方に延びていて、近世の整地により埋った北東方向に下降する谷状地形の縁辺に取り付く。後述するように、谷状地形内には中世の耕作面が広がっている。

144溝の底はいずれの箇所も標高がTP.23.2mであり、ほぼ平坦である。したがって通水に関連する遺構とは断定できない。しかし145土坑と一体化した構造は146井戸と147溝の組合せと類似していることから、その可能性は否定できない。

井戸から65点の遺物片が出土した。全点、井戸枠内埋戻し土(2層)からの出土である。瓦質・土器質羽釜のほか、瓦質土器、土器・土師質土器、須恵器・須恵質土器が多く、それに対して土釜の出土はみられなかった。また磁器が含まれていないことから、廃絶時期は近世に下らないとみられる。

表21 146 井戸遺物組成

	瓦質羽釜	土師質羽釜	土釜	瓦質土器	瓦器	土器・土師質土器	須恵器・須恵質土器	炻器	陶器	磁器	瓦	埴輪	その他
2層埋め土(点数)	7	6	0	10	1	16	19	1	1	0	4	0	

瓦質土器には捏鉢、甕、土器・土師質土器には甕、須恵器・須恵質土器には片口鉢、捏鉢、甕が認められた。65点のうち6点を図示した。

66は瓦器皿。口径8.0cm、器高1.1cm、口／高比13.8である。15世紀前半。67～70は瓦質羽釜。69・70は14世紀後半とみられ、67は15世紀代に下る可能性がある。71は瓦質土器捏鉢。口縁部にかけて直線的に立上がり、口縁部端上下が僅かに突出する。14世紀末～15世紀前葉。

こうした出土遺物の状況をみると、この146井戸の廃絶は15世紀前葉頃であると考える。

## (5) 154畦

### 1. 検出状況

調査区西端から南西61～65mの地点で地形の下降が認められた。調査区に平行して北東～南西方向に延びる肩部から南東方向に下降する地形と、それに接続して北方向に肩が延び北東に下降する地形とがある。そのうち北東方向への下降部分については近世に盛土を施して整地を行ない、耕作面の拡張が図られていて、それ以降近・現代にまで至っている。

南東方向に下降する北東～南西方向の肩部では、基盤層を切り込んで基礎となる地盤を整えたのち築土を行ない、畦を形成している。さらにその後、その畦を覆う新たな畦も築かれている。

調査区南壁の上層断面観察からは、畦の形成状況を具体的に捉えることができた。まず、最初の畦と基盤層を切り込んだ上面の高さが一致していることから、後出する畦を構築する時には先行畦の上部が削られたとみられる。

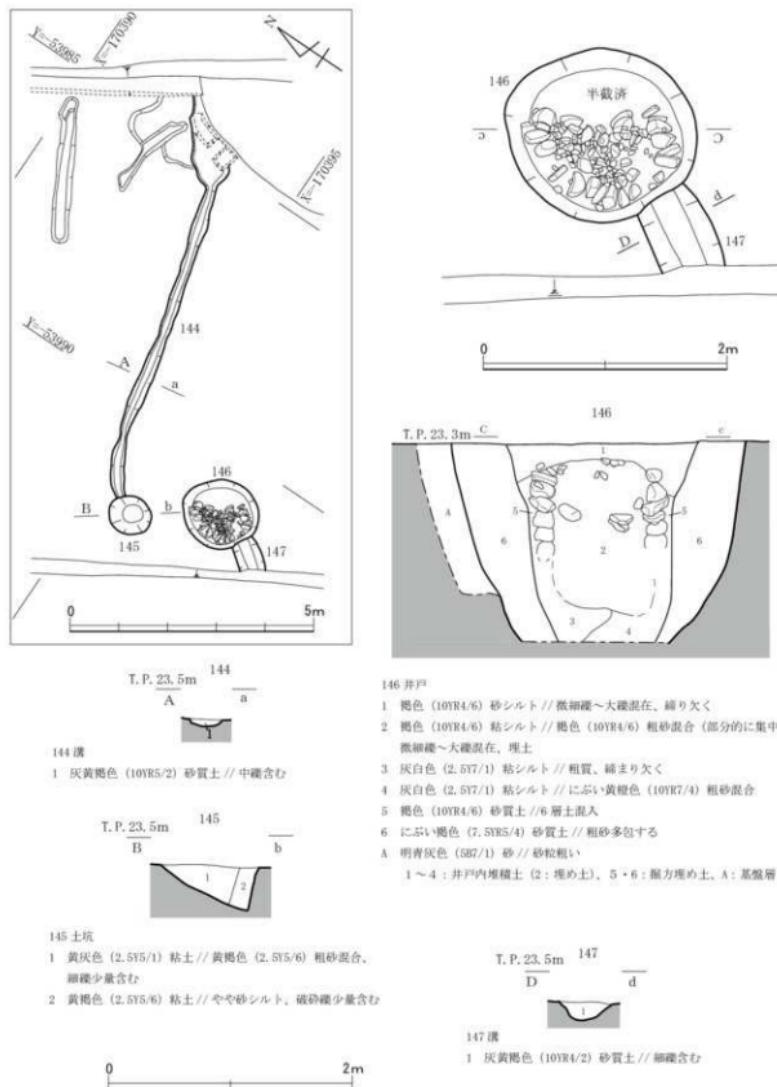
さらに当初の畦の構造については、基盤層である低位段丘礫層（第38図A・B）を切り落とし、灰色・灰白色粘質土（第38図1～10層）を基調とする築土を前行約2.7m、高さ約0.4m以上積み上げて形成していること、近世にこの畦を上段面のレベルまで削平してから築土（第38図13・14層）を積み足し、築き直していることなどが確認できた。

また先行する畦の前面には、肩部や裾部と平行して並ぶ木杭列が確認された。残存する木杭の数は20本ほどで、およそ0.4m間隔で打設されているが、必要により追加打設されている箇所もある。

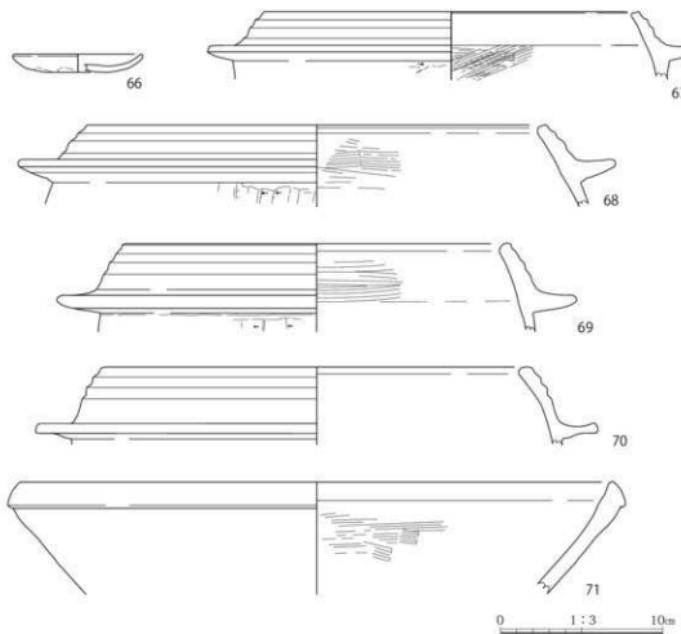
### 2. 出土遺物

畦の上層断面のうち、第38図1～4・6層から多量の遺物が出土した。後述するように、瓦質および土師質の羽釜と土釜を合わせて、90個体を上回ると推計できる。ただし羽釜、土釜については接合作業によっても過半以上の復元ができたものはほとんどなく、畦内に埋まる時点できなり破損が進んでいたと考えられる。

出土遺物は瓦質・土師質羽釜、土釜のほか、瓦器、瓦質土器、土器・土師質土器、須恵器・須恵質土器、炻器、陶器、瓦があり、青磁や灰釉陶器、また磁器や埴輪も含まれている。磁器については、中世築土の上面を覆う近世の11～14層に含まれていたものが混じった可能性が高い。また埴輪は周辺の耕作土からも複数点出土していることから、畦を形成する築土の供給元周辺に古墳が存在していたとみ



第36図 146井戸、周辺遺構(平面・土層)



第37図 146 井戸出土遺物

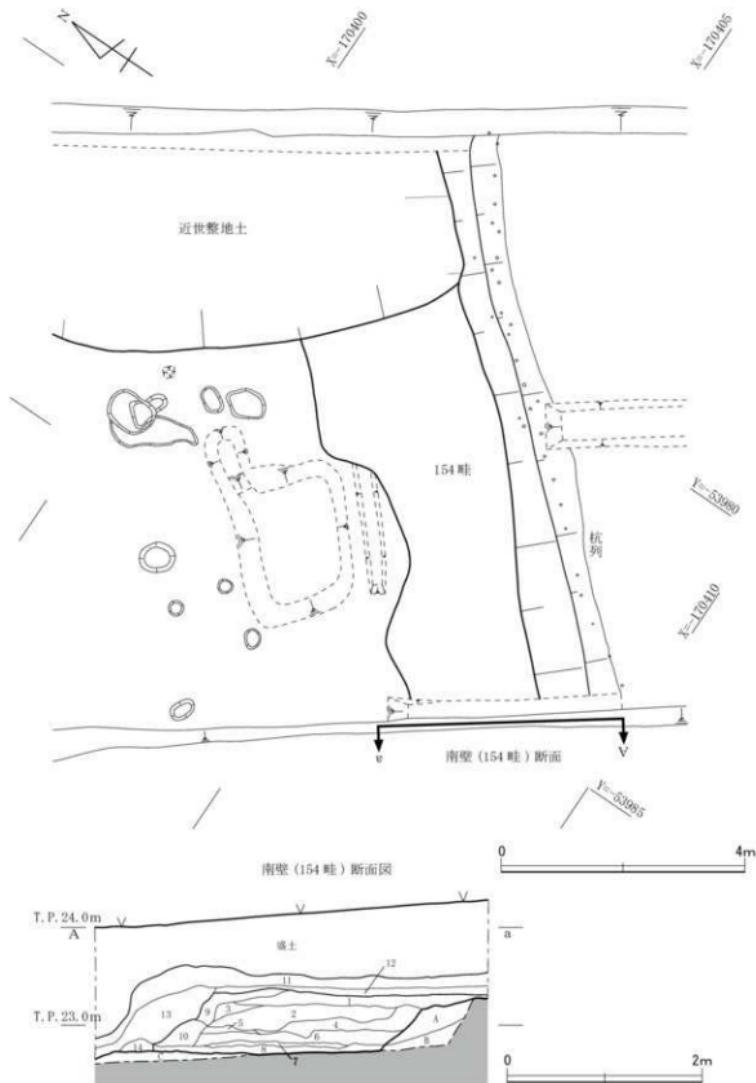
られる。

瓦質土器には羽釜のほか捏鉢、擂鉢、甕がある。瓦器には皿と椀があり、椀が95%を占めている。土器・土師質土器には羽釜、土釜のほか椀・皿・甕があり、弥生時代の土器も出土している。また土製品として土錘もみられる。須恵器・須恵質土器には捏鉢、甕、瓶など中世に比定できるものとともに、古墳時代中期に収まる椀や後期の甕もある。炻器には甕、捏鉢、擂鉢がみられる。陶器は2層から出土した破片1点のみである。瓦には平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦があり、畦の各所から出土している。

出土遺物のうち土器類67点、土製品1点を図示した。72～85は1層、86～102は2層、103～116は2・3層、117～119は4層、120～129は2・4層、130～133は6層からの出土である。さらに畦北方の谷状地形を埋めた近世の整地土から出土した土師器皿（134）、畦の南方に広がる中世耕作土に含まれていた土器類（135～139）や土製品（140）も併せて提示した。

1層出土の14点のうち、須恵器椀（72）は両端を欠如することに加え、幅1.0cm、高さ0.6cmの突帯が巡る器形の理解は難しいが、突帯を挟んで外面調整と形状が異なることから、ヘラケズリされた側が下半部となる大型の椀ではないかとみた。

73は土師器皿。74～76は瓦器椀。75の丸味をもって内湾する脛部は深さがあるが、高台は極めて扁平化していて13世紀後葉あるいは14世紀代に下る可能性もある。76の瓦器椀は底部内面にミガキが残り、高台は形骸化しているものの断面形状は三角形を留めている。13世紀後葉。



## 154 紮

- 1 灰白色 (7.5Y7/1) 粘質土 // 細繩若干含む、酸化のため全体に黄褐色 (10YR7/8) 化
- 2 灰白色 (N7/0) 砂質土 // にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土ブロック混合、粘性ややあり、遺物包含量多い
- 3 灰白色 (N7/0) 砂質土 // 2層に近似するがにぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土ブロックより多い、粘性もより高い
- 4 灰白色 (N7/0) 粘質土 // 2層に近似するがにぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土ブロック少ない、遺物包含量も少ない
- 5 灰色 (7.5Y6/1) 砂質土 // 粗質
- 6 灰色 (7.5Y6/1) 粘質土 // 酸化のため全体に斑状、やや砂質
- 7 灰色 (7.5Y6/1) 粘質土 // 酸化のため全体に黄褐色 (10YR7/8) 化
- 8 灰色 (5Y6/1) 粘土 // 繩り欠く、やや粗質
- 9 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘質土 // 細繩含む、ややシルト
- 10 灰白色 (5Y7/1) 粘質土 // 酸化のため全体に黄褐色 (10YR5/6) 化、ややシルト
- 11 灰色 (N4/0) 粘シルト // 繩・小繩、破砂繩含む
- 12 灰白色 (2.5Y7/1) 砂シルト // 繩よりや欠く
- 13 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質土 // 細繩多包、やや砂質、粗質
- 14 灰色 (5Y6/1) 粘土 // 酸化のため全体ににぶい黄褐色 (10YR5/4) 化
- A 灰色 (N6/0) 粘シルト // にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土ブロック・細繩含む、粗質、粘性やや欠く
- B 灰色 (N6/0) 粘シルト // 灰色 (N6/0) 砂混合、A層より粗質
- C 明黄色 (10YR6/8) 粘質土 // 小～大繩含む、ややシルト

1～10：中世埴輪土、11：近世耕作土、12：床土。13～14：近世埴輪土、A～C：基盤層

第38図 154 紮（平面・土層）

77～81は瓦質羽釜、82は土師質羽釜、83は土釜である。瓦質羽釜5点はすべて口縁部の形状が異なるがいずれも14世紀後半に比定でき、土師質羽釜(82)や瓦質土器甕(84)も同時期とみる。

86～102は2層に含まれていた土器類である。86～91は土師器皿、92は瓦器皿である。土師器皿では91のように口径に対して器高が低いものもあるが、残り5点は比較的高さがある。口径は6.4～8.6cmまで分布するが、7.4～7.8cm間にまとまる。口／高比は14.0～23.4まで分布し、21.6～23.4に集まる。

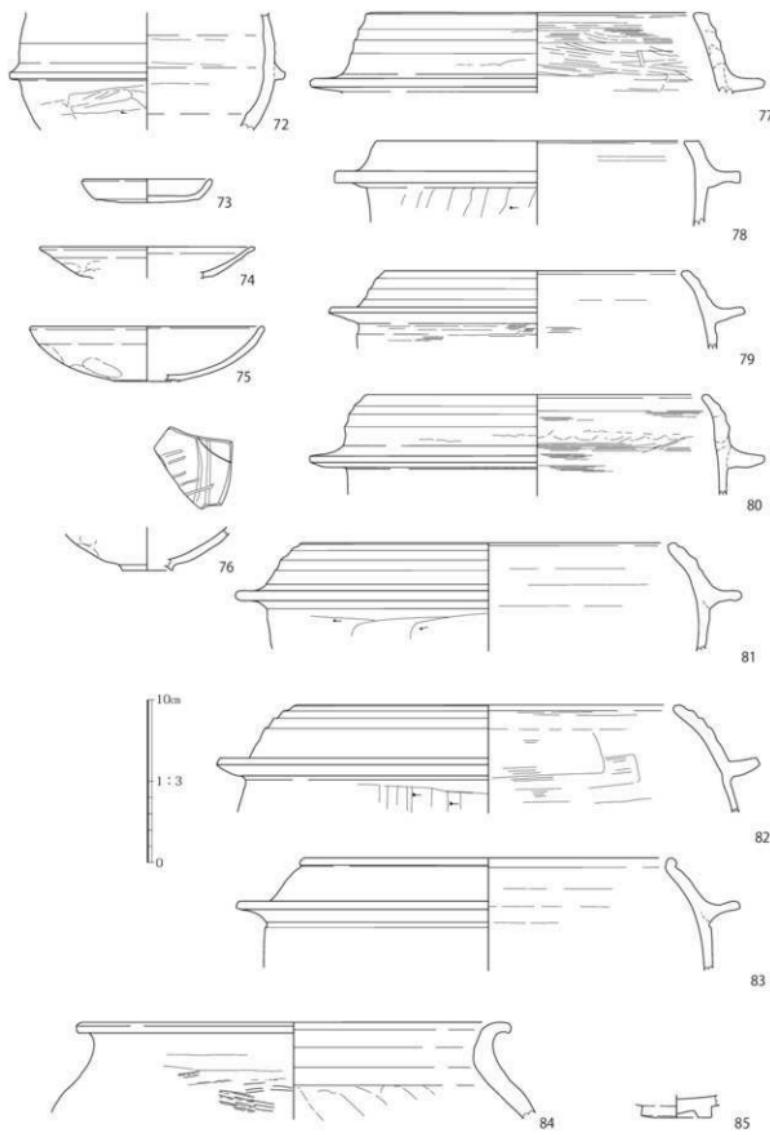
93、94は瓦質羽釜、95～97は土釜である。97は13世紀代に遡る可能性があるが、93と94については14世紀後半とみる。瓦質土器甕(98)は、1層出土の84に比べて口径が3.1cm広いが、形状が類似していることから同時期と考える。

99は「く」字状に屈曲した頸部から口縁部は外反して立上がり、端部は内面のユビナデにより直立する。また、胴部上半に突帯を貼り付ける。紀伊系の土釜である。

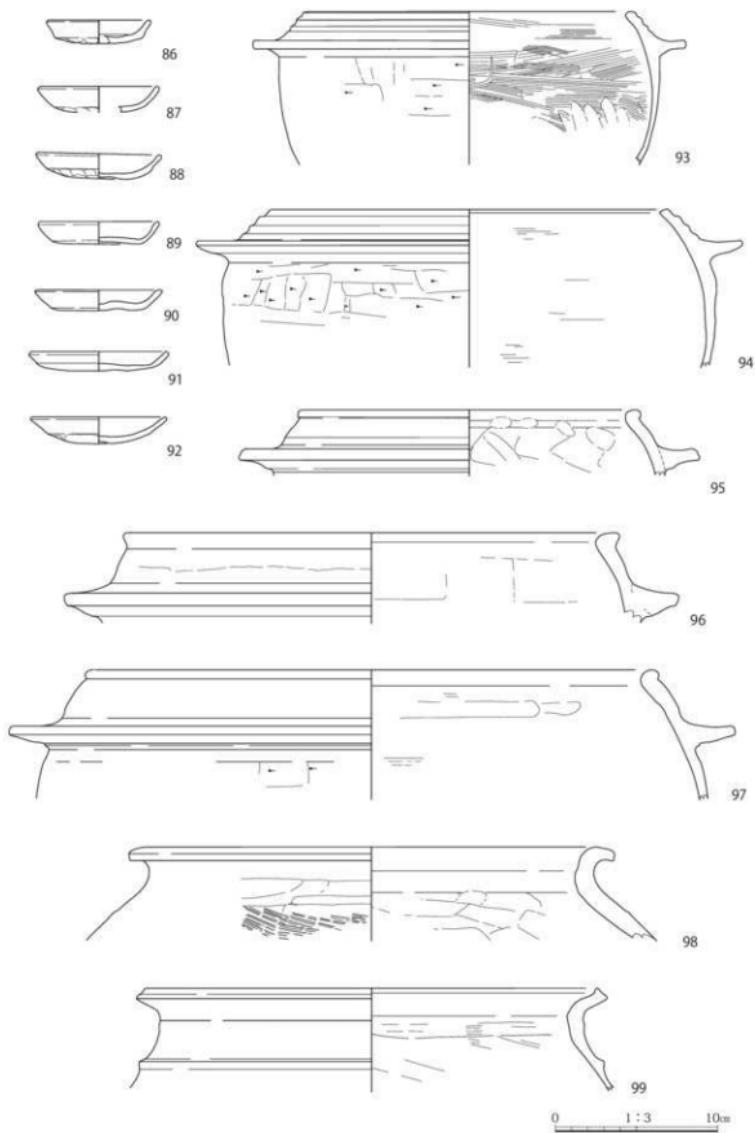
100・101は須恵質土器捏鉢。100は胴部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁部端は肥厚して上方に立上がる。101も口縁部にかけて直線的に立上がるが、口縁部端は上下に僅かに肥厚するのみである。器面調整も100と101では異なるがともに15世紀前葉とみる。あるいは14世紀末まで遡る可能性もある。

103～116は2層と3層を同時に掘削して出土した土器類で、いずれの層に帰属するかは不明である。103～107は土師器皿、108は瓦器皿である。土師器皿は口径7.2～9.2cmまでみられ、7.2～7.8cmにまとまる。また口／高比は17.9～24.7で、17.9～18.5に集まる。2層出土の土師器皿と比較すると、口径分布はほぼ等しいが口／高比は僅かに小さく、2層の一群より高さが概して乏しい。

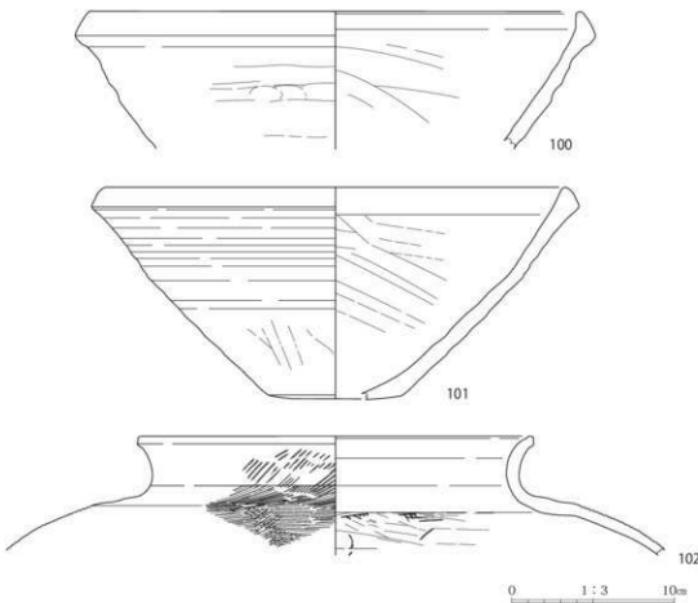
109～112は瓦器椀。111・112は口縁部にかけてやや内湾しつつ、開き気味に浅く立上がる。これに対して109・110は口縁部にかけて深さを保って立上がる。また111・112の高台は形骸化が著しく、ことに112では紐状を呈している。111の高台は断面形状三角形を保つが、扁平化が進んでいる。こうしたことから111・112は13世紀後葉、109・110は13世紀中葉とみる。



第39図 154 畦出土遺物（1）



第40図 154 砂出土遺物（2）



第41図 154畦出土遺物（3）

113は土師質羽釜、114は瓦質羽釜である。ともに14世紀後半に位置付ける。115は口縁部端が直立する紀伊系の土釜である。13世紀後半に位置付けられる。116は瓦質土器甕。頸部は「コ」字状に屈曲し、口縁部は短く外反する。14世紀後葉～15世紀初頭。

117～119は4層出土の土器類で、そのうちの117は瓦器椀。高台は紐状に形骸化していて、13世紀後葉に比定する。118は瓦質羽釜、119は土釜。

120～129は同時に掘り下げた2層と4層のいずれに帰属するか判断できず、一括で取り上げた土器類である。120は瓦器皿、口径10.2cm、器高2.4cm、口／高比23.5であり、口径に対して比較的高さがある。

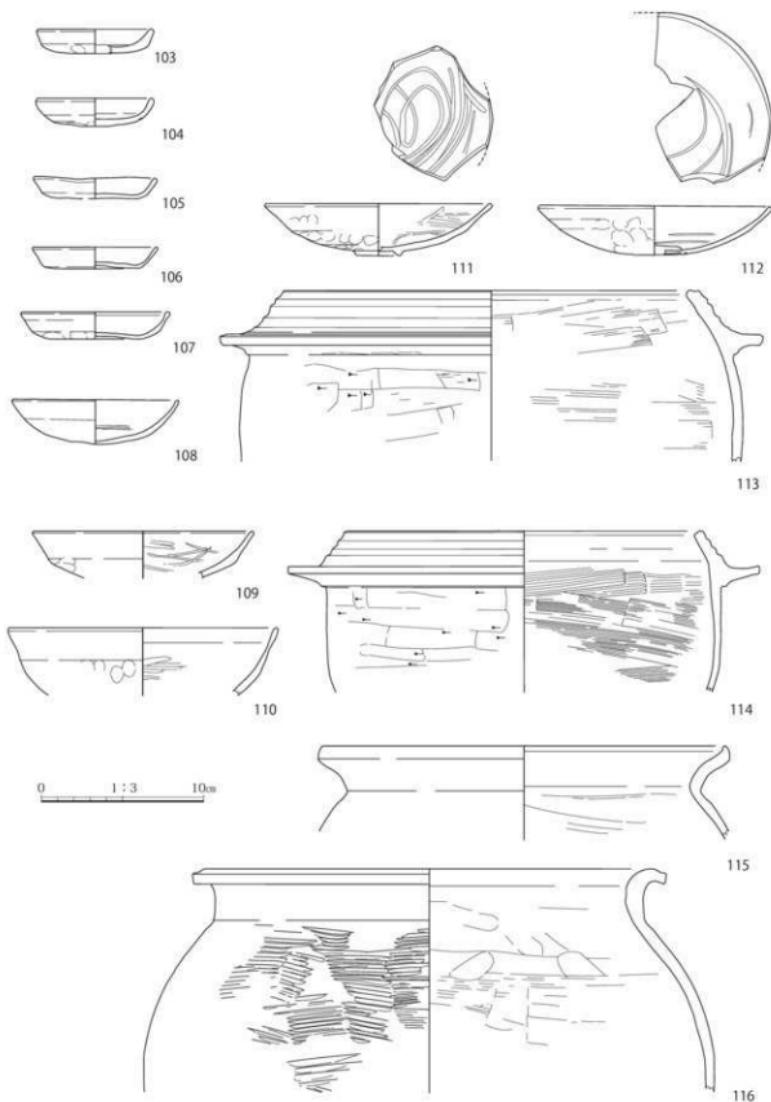
121～123は瓦質羽釜。122の口縁部には段がみられない。122は14世紀末、121・123は14世紀後半。124・125は土師質羽釜。126～128は土釜。

129は瓦質土器搗鉢。口縁部にかけて直線的に立上がり、端部は上下に肥厚する。14世紀後半。

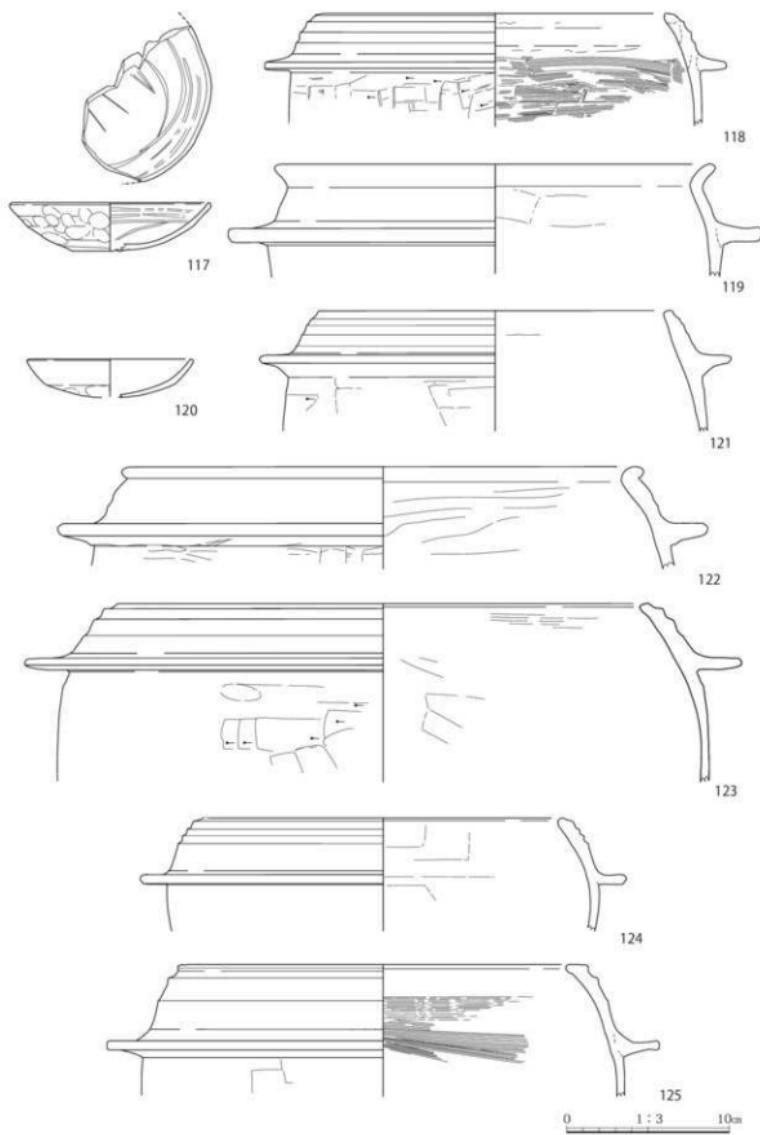
130～133は6層出土の土器群。130は土師器皿。口径7.2cm、器高1.5cmを測り、口／高比は20.8となる。口径に比して高さがある。

131は瓦質羽釜。132は瓦質土器捏鉢で、口縁部にかけて直線的に立上がり、端部はほぼ肥厚せず、正面は平坦である。14世紀末～15世紀前葉。133は須恵質土器甕。頸部以下、外面は平行タタキがなされ、内面には当具痕が残る。14世紀前半。

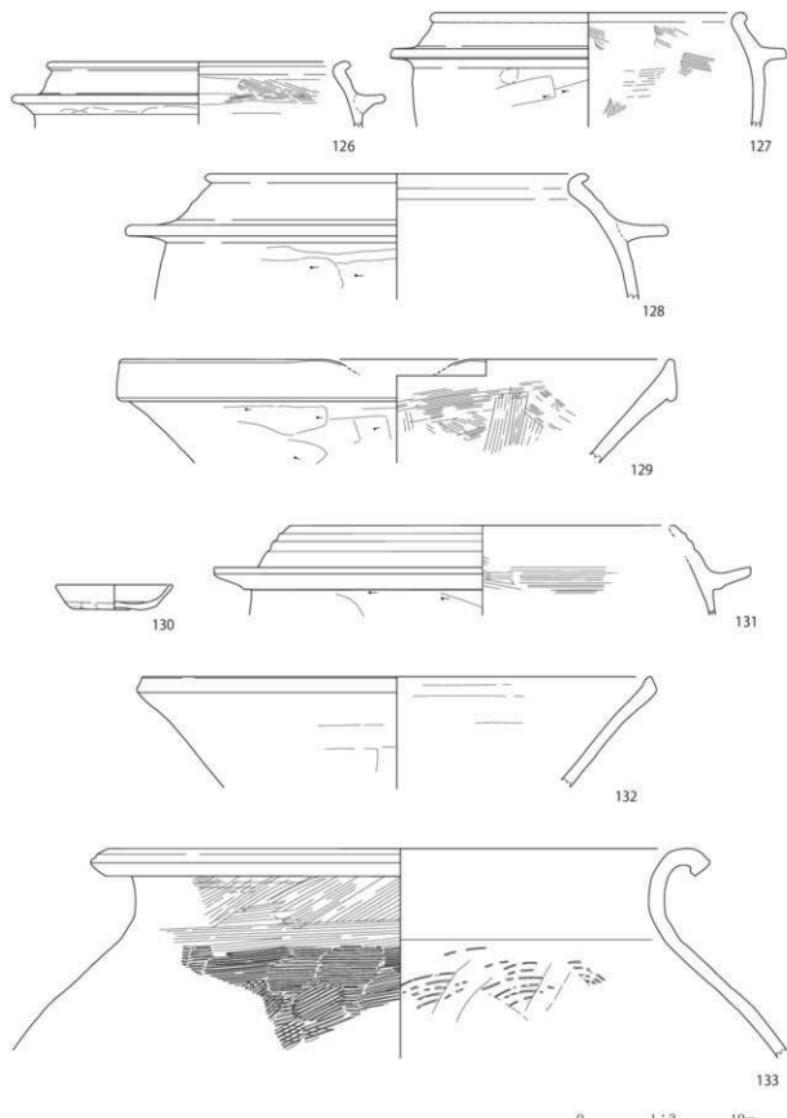
134は154畦の北方に広がる近世整地土、135～140は154畦の南に広がる中世耕作土から出土



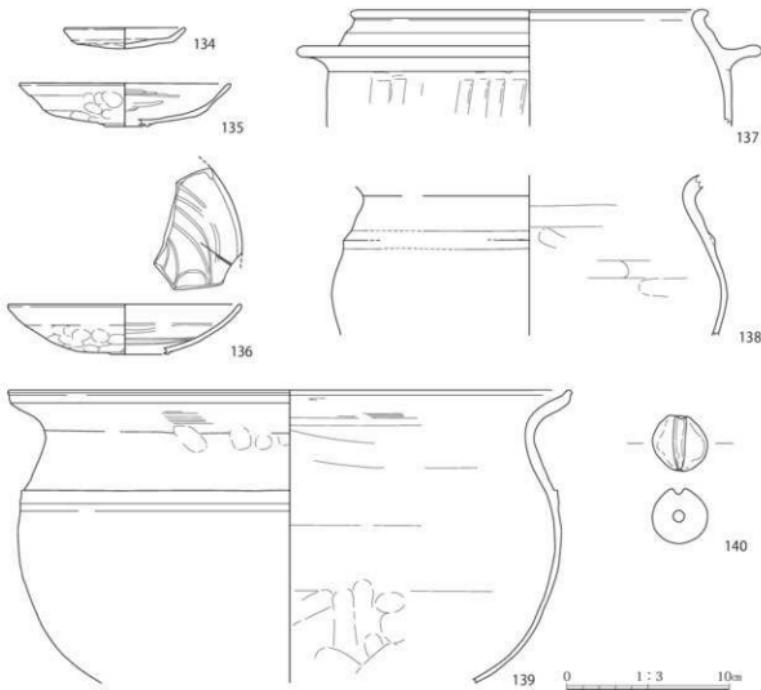
第42図 154 畦出土遺物 (4)



第43図 154 県出土遺物（5）



第44図 154 畦出土遺物（6）



第45図 154 畿出土遺物（7）

した遺物である。134は土師器皿。口径7.5cm、器高1.3cm、口／高比は17.3である。6層出土の130よりも口径、器高とも縮小しているが、器高の縮小率が高い。近世整地土からの出土であるが、形状は2層出土の90に近く、畦内に含まれた土師器皿と同様の時期とみられる。

135・136は瓦器椀。ともに高台は形骸化して扁平になっている。137は土釜、138・139は紀伊系の土釜である。紀伊系の土釜の胴部上半には突帯が巡る。また139は被熱のために赤化している。140は土鉢。直径3.5cmの球形で、孔間をつなぐ紐掛け溝が1条切り込まれている。

以上の遺物の状況からすると、154 畿の構築は14世紀後葉頃とみられる。

### 3. 154 畿出土の羽釜と土釜

今回の調査で出土した瓦質および土師質の羽釜そして土釜については、接合作業を経たのちに口縁部を対象に形状の分類を行なった。これは羽釜、土釜の個体数を推計するための過程である。

形状分類により、羽釜は瓦質、土師質の違いにかかわらず同じ基準により8分類、土釜は3分類することができ、さらに口縁部端の形状によって各分類を2分できる。なお土釜は無段である。

#### 瓦質・土師質羽釜の分類指標

I形 長めで3条段の口縁部は内湾して立上がる。口縁部端の頂部が水平（A）か丸い（B）で細分

表 22 154 瓦遺物組成

	瓦質羽釜	土師質羽釜	土釜	瓦質土器	瓦器	土器・土師質土器	須恵器・須恵質土器	炻器	陶器	磁器	瓦	埴輪	その他
1層一括	○	○	○	○	○	○	○	○			○		
1層北半	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
1層南半	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
2層北半	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
2層南半	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
2・3層	○		○	○	○	○	○	○					青磁
2・4層北半	○	○	○	○	○	○	○				○	○	青磁
4層南半				○	○	○	○				○		灰釉陶器
4・6層北半	○		○	○	○	○	○				○		
6層南半	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
南中世耕作土	○		○	○	○	○	○						
北整地土	○			○					○	○	○		灰釉陶器

2形 短めで3条段の口縁部は内湾して立上がる。(A)、(B)に細分

3形 長めで3条段の口縁部は直線的に立上がる。(A)、(B)に細分

4形 短めで3条段の口縁部は直線的に立上がる。(A)、(B)に細分

5形 長めで2条段の口縁部は直線的に立上がる。(A)、(B)に細分

6形 短めで2条段の口縁部は内湾して立上がる。(A)、(B)に細分

7形 短めで2条段の口縁部は直線的に立上がる。(A)、(B)に細分

8形 短めで無条段の口縁部は内湾して立上がる。(A)、(B)に細分

接合作業と口縁部形状の分類による個体の識別によって推計できた羽釜・土釜は、表23・24に示すように瓦質羽釜59個体、土師質羽釜19個体、土釜63個体、総計141個体を数えた。瓦器羽釜ではA・Bを含めて1形が約44%、土師質羽釜でもA・Bを含めて1形が約32%を占めており、形状の偏りは明らかである。

羽釜・土釜のうち154瓦の築土などに含まれていた瓦質羽釜は40個体（総数に対して68%、以下同じ）、土師質羽釜12個体（63%）、土釜34個体（54%）、全体で86個体（61%）である。

羽釜および土釜とともに、包含された築土は1層や2層という上部に概して多い傾向があるが、瓦築土全体から出土している。

#### 土釜の分類指標

1形 長めで内湾して立上がる。口縁部端を折込む(A)か折返す(B)で細分

2形 長めで直線的に立上がる。(A)、(B)に細分

3形 短めで直線的に立上がる。(A)、(B)に細分

土釜でもA・Bを含む1形が約44%を占めていて最も多いが、2形が24%、3形が32%であり、羽釜のように突出して多い形状は認められない。

ただ、上層ほど出土点数が多い傾向は羽釜と同様である。

#### (6) 谷状地形内の中世耕作土

154瓦以東、調査区南東端から北西方向25mの間は沖積地に当たり、19-1区内でも最も標高の低い地点である。そのため地下水の影響を受けて、調査中も常時滲水していた。なお標高はT.P.22.3m

表23 瓦質・土師質羽釜統計と154件出土組成

分類	全個体数	154件												回収物No
		1層	2層	2・3層	2・4層	4層	4・6層	6層	整地土	瓦質	土師質	瓦質	土師質	
形	瓦質	土師質	瓦質	土師質	瓦質	土師質	瓦質	土師質	瓦質	土師質	瓦質	土師質	瓦質	土師質
1	A 18	5	6	1	8	2	1		1			1	1	94,118
	B 8	1				1	2	1						80,123
2	A 5	1				2	1							
	B 2	0										1		
3	A 4	2	1	1	2			1						77
	B 1	1	1	1										131
4	A 2	0				1								114,121
	B 0	0												
5	A 1	0							1					125
	B 1	0							1					81
6	A 5	3	2	1	2		1							79
	B 0	1	1											
7	A 5	3	1				1						1	93
	B 4	2												
8	A 2	0	1		1									78
	B 1	0	1											122

表24 土釜統計と154件出土組成

分類	全個体数	154件												回収物No 土釜
		1層	2層	2・3層	2・4層	4層	4・6層	6層	整地土	瓦質	土師質	瓦質	土師質	
形	土釜													
1	A 22	2	4						1					83,128
	B 6		2	1	2							1		
2	A 5		3	1	1									97
	B 10	6	1				1		1					119
3	A 15			1	3	2								95,127,137
	B 5		2									1		96,120

前後である。

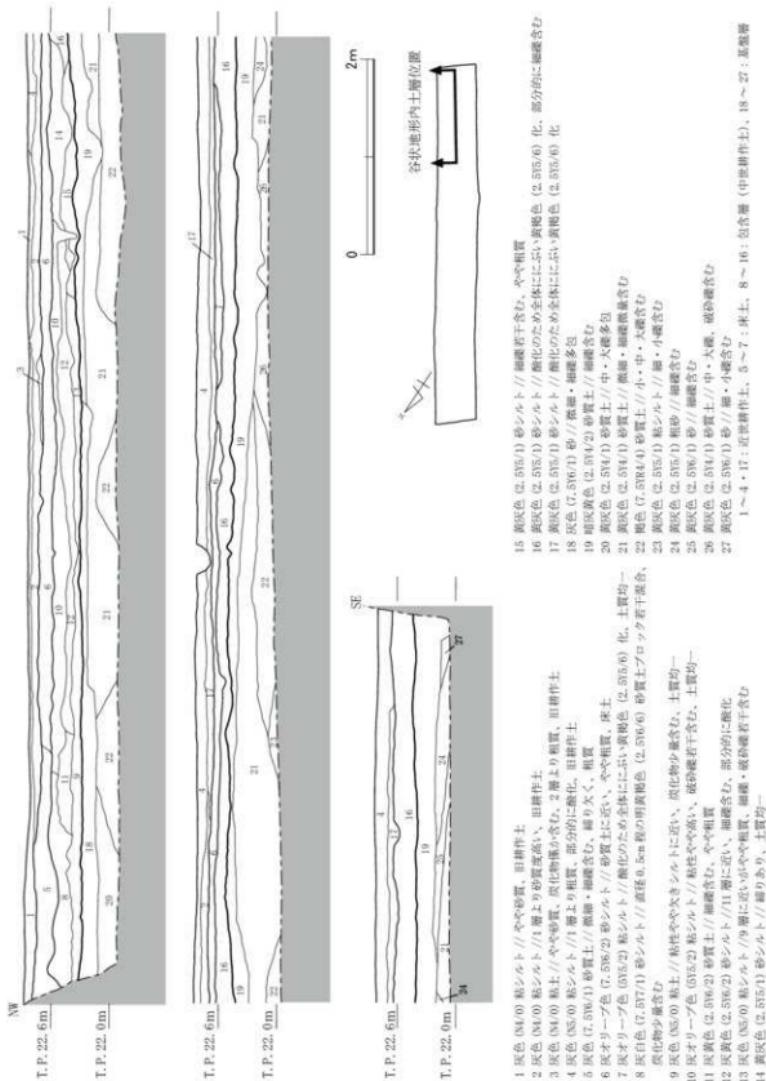
この範囲は“天の川”的前身河川が切り開いた谷状地形と考えられ、既往調査の10・3区や岸和田市H24区で検出した谷状地形につながる。

10・3区では近世の耕作土の下で中世耕作土を検出しが、その耕作土はさらに平安時代後期まで遡る可能性があった。19・1区も10～15cmの厚さの近世耕作土と10～30cmの中世耕作土の2層が確認できた。近世耕作土の下には床土が敷かれていたが、中世耕作土下に明確な床土は検出されなかつた。中世耕作土は主に灰色系の砂シルトであり、部分的に細礫を少量含んでいる。こうした状況から、中世期の耕作土が果たして継続した水田層であったかは検討を要する。

#### (7) 19-1区西半域の耕作土

##### 1. 中段面の耕作土

調査区西端から南東40～65m間は低位段丘の裾部に該当する。調査区北壁で土層観察を行ない、この範囲の基本土層を捉えた(第47・48図)。まず現地表面下に0.8～1.0mの厚さで府営住宅造成時の盛土があり、その下に近世以降、近・現代にまで継続する耕作土がみられる。耕作土の下には床土が敷かれている。この近世耕作土は10～30cm、床土は5cmほどの厚さで、さらにその下に厚さ5～10cmほどの中世の耕作土が広がり、そして基盤層となる。中世耕作土は灰黄色の砂質土を基調と



していて、全体に酸化傾向にある。

ところが土層断面の南東端付近では上述の基本土層と異なる様相がみられた。それは、南東方向に下降する基盤層を肩にして灰オリーブ色粘質土による畦が構築され（第48図7層）、その畦の裾から灰オリーブ色粘土と灰色粘質土の耕作土が広がっているのである（第48図9・10層）。耕作土の上には整地土である灰オリーブ色粘シルト（第48図8層）が覆っている。

耕作土の標高はTP.22.3～22.7mを測る。下段面の土層でみられた中世耕作土のレベルとほぼ一致していることから、畦と耕作土は中世、そしてそれらを覆う整地土は近世に比定できる。

この畦は154畦の北東約10mに当たる。154畦北方に広がる北東方向の谷状地形を埋めた整地土に該当する。この整地土の輪郭が地形の状況を反映しているとすれば、154畦に「L」字状に取り付いたもうひとつの畦を想定することもできる。

## 2. 上段面の耕作土

調査区西端から東40mまでの間の低位段丘に該当する範囲では、既述したように古墳時代中期の建物群、それに先行する河道や溝、あるいは後出して建物を切り崩す溝などが存在する。しかしその一方、この上段面では中・下段面で検出された中世の耕作土を明確に捉えることができなかった。

調査区南壁で土層状況を確認すると、現地表面以下に40～60cmの府営住宅造成時の盛土があり、近世以降・現代まで続く耕作土（4～20cm）と床土（4～5cm）が続き、そして基盤層となる。中世耕作土が確認できない状況は、調査区西壁においても同様である。ただし床土が基盤層の直上に広がっている点からすると、中世耕作土を削平あるいは再利用して近世耕作土が形成された可能性は捨てられない。

## 3. 耕作土出土の遺物

19-1区では、西半の低位段丘、東寄りの沖積地に当たる谷状地形、そしてその中の低位段丘裾部それぞれで地形の違いに対応して耕作土の在り方が異なり、遺物の出土状況にも差異がみられた。

中世耕作土が確認されなかった上段面では、近世耕作土の出土遺物が主体であるが、近世耕作土下層として取り上げた遺物もある。これは遺構内に含まれていたものが検出作業時に巻き上がった可能性、本来近世耕作土・床土に含まれていたものを取り残していた可能性などが考えられる。

ただし、近世耕作土から出土した遺物の種類は少なく、耕作土下層から出土した遺物の種類も多くはない。遺物の少なさ自体も要因はあるが、さらにその背景には、耕作土であることから混在物は積極的に取り除かれてきたという耕作土由来の経緯もある。

中段面では基盤層上に厚さ5～10cmの中世耕作土が認められ、そして厚さ約5cmの床土、10～30cmの近世耕作土が続く。その中世耕作土から出土した遺物についてみると、種類が限られていること、耕作土の形成時期を端的に示すように磁器が含まれていないことがわかる。

近世耕作土では種類が少なく、遺物量も乏しいという状況は上段面の近世耕作土と同じであるが、近世耕作土下層ではやや種類が多くなっている。これは、多量の土器類を内包していた154畦の上部を近世に削平した際、散乱した遺物が周辺に混入したためとみられる。畦の周辺から出土した多くの中世の遺物はそうした経緯によると考える。

谷状地形にあたる下段面では、府営住宅造成時の盛土の下に近世以降に形成され近・現代まで継続する耕作土と床土があり、その下に厚さ10～30cmの中世耕作土が広がる。さらにその下は、沖積地を形成する河川状堆積である。

この谷状地形内の近世耕作土からは多種類の遺物が出土していて、上段面や中段面の近世耕作土とは様相が異なっている。これは低い地形内にあるため、周辺から遺物が流転・混入した可能性もひとつに

表25 上段面の出土遺物組成

	瓦質羽釜	土師質羽釜	土釜	瓦質土器	真器	土器・土師質土器	須恵器・須恵質土器	炻器	陶器	磁器	瓦	埴輪	その他
近世耕作土					○				○				灰釉陶器
近世耕作土下層					○	○		○	○				
上段面一括	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		

表26 中段面の出土遺物組成

	瓦質羽釜	土師質羽釜	土釜	瓦質土器	瓦器	土器・土師質土器	須恵器・須恵質土器	炻器	陶器	磁器	瓦	埴輪	その他
近世耕作土						○	○		○				銷壺
近世耕作土下層	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	
遺構面上層(中世耕作土)	○			○	○	○		○	○	○			
154 畦周辺	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	
154 畦北整地土	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	
中段面一括				○	○						○	○	

表27 下段面の出土遺物組成

	瓦質羽釜	土師質羽釜	土釜	瓦質土器	瓦器	土器・土師質土器	須恵器・須恵質土器	炻器	陶器	磁器	瓦	埴輪	その他
近世耕作土	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	灰釉陶器、土鍾
中世耕作土	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	弥生土器、黒色土器、青磁
下段面一括	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

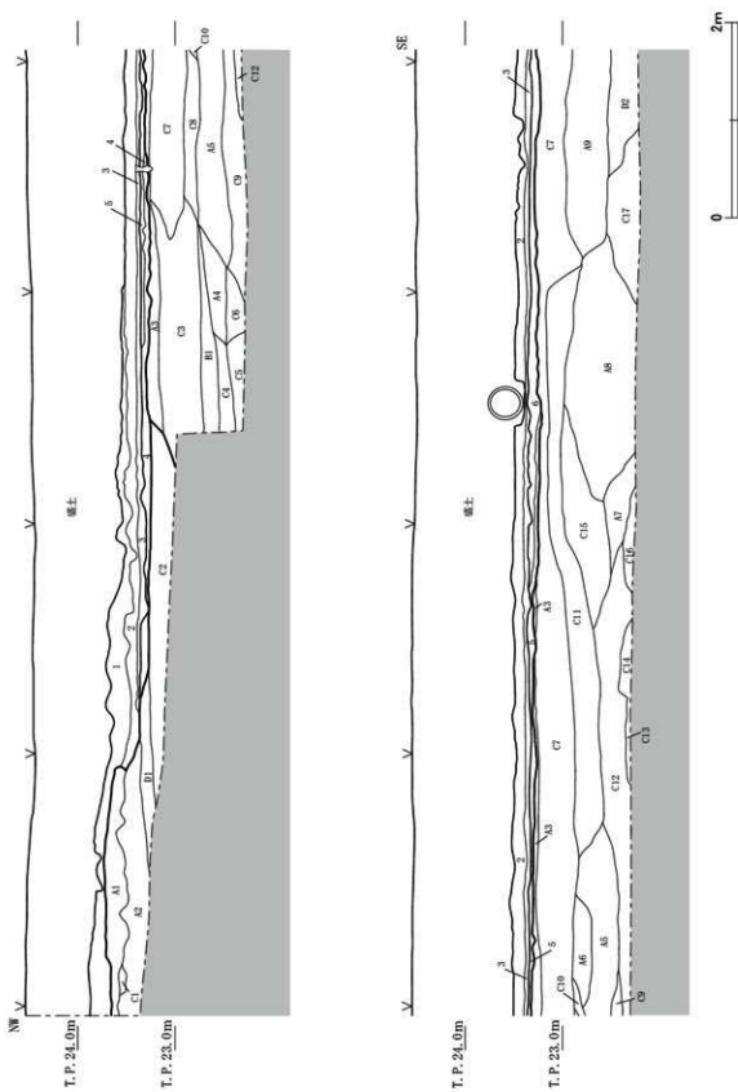
は考えられる。

この近世耕作土からの出土遺物に比べて、中世耕作土では瓦質土器と炻器が確認されなかった。これは、日常的に大型混在物は積極的に除去されるという耕作土の性質によるとも考えられる。なお磁器破片は上層土からの混入である。

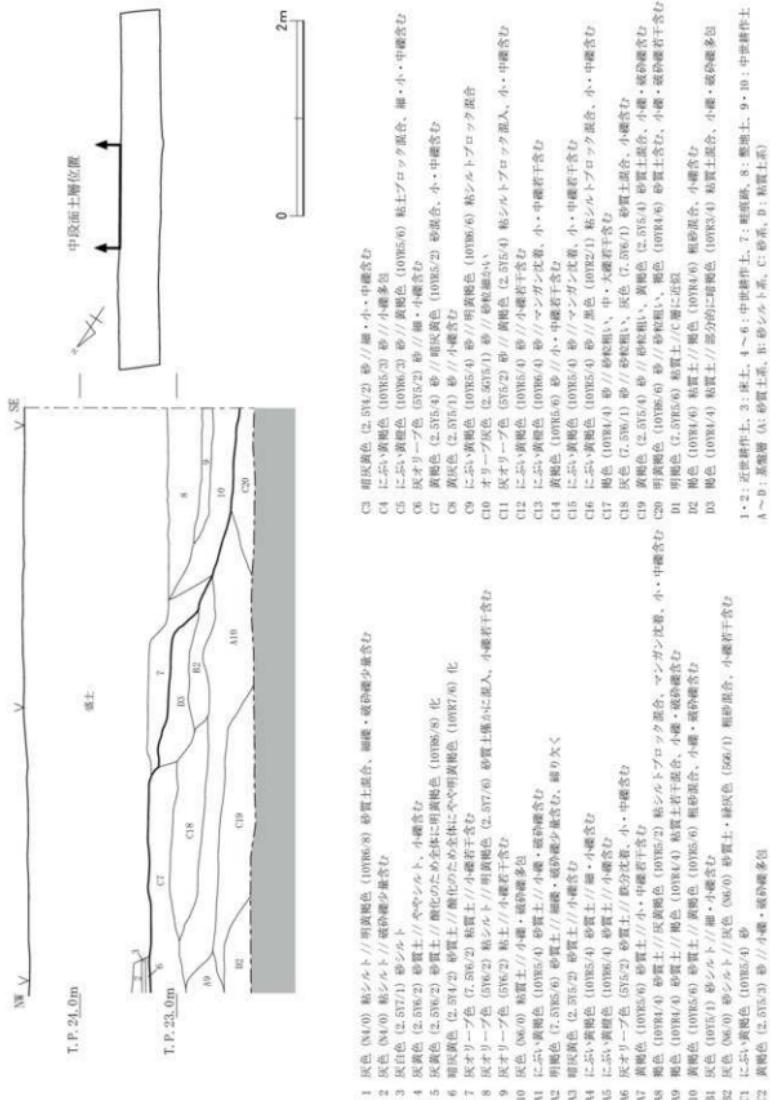
下段面の近世耕作土から出土した遺物のうち26点(141~150、152~165、167、169)および中世耕作土出土遺物の中から3点(151、166、168)の計29点を図示した。中世耕作土の3点は須恵器壺、瓦質羽釜、土鍾である。

141・143は弥生時代IV期の甕口縁部と底部である。144~152は須恵器で、144・145の杯蓋や149の杯身は古墳時代後期。148は複数の長方形透孔が開けられた破片である。透孔の大きさや形状から硯の脚部とみられる。

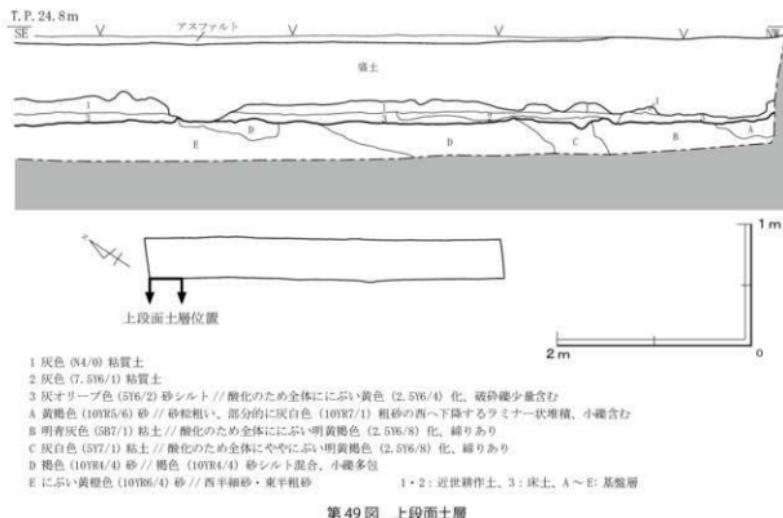
152は1辺6cmほどの破片である。3条の突線を挟んで上方に櫛文、下方に波状文を描く。さらに櫛文の一部を切り込んで直径1.2cmほどの円孔が穿たれている。この破片と同じ文様構成の須恵器が田鶴羽古墳群から出土している。装飾付器台の脚部がそれに当たり、写真照合ではあるが同一個体



第47図 中段面土層（1）



第48図 中段土層(2)



第49図 上段面土層

だとみられる。

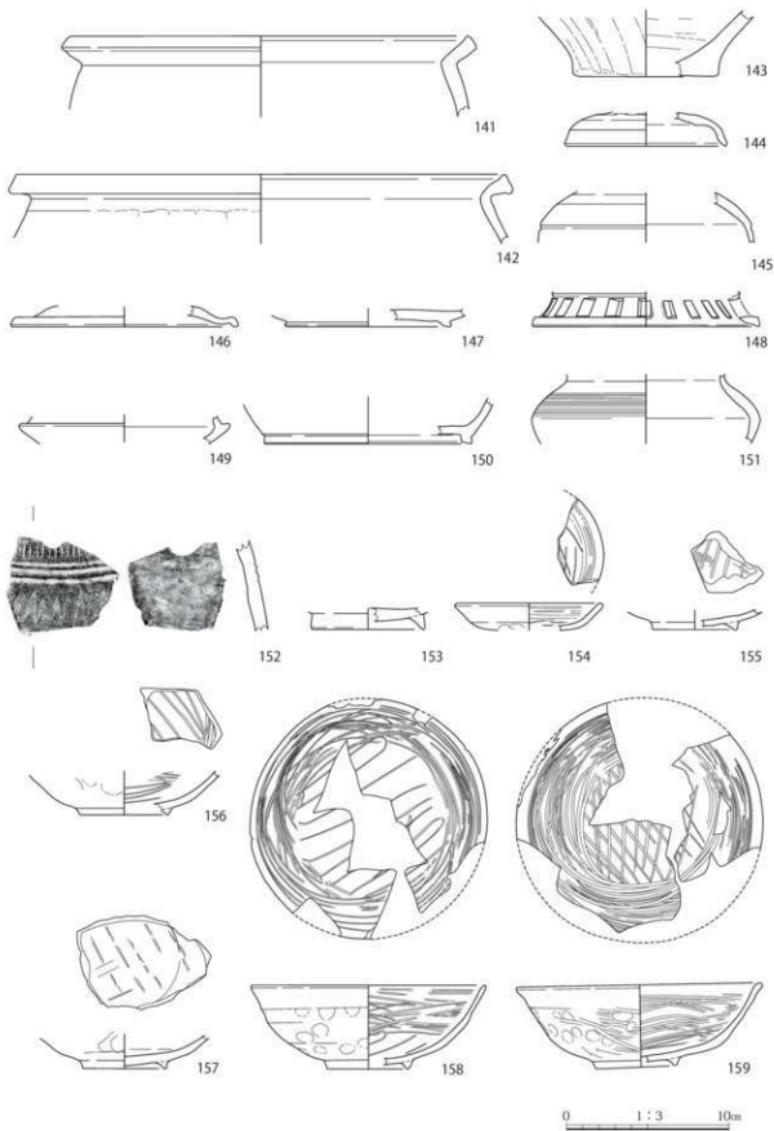
154は瓦器皿。口径9.1cm、器高1.9cmを測り、口／高比は20.9となる。155～165は瓦器椀である。このうち158～165の8点では胴部から口縁部にかけての器面調整が内外面ともに判明する。外面調整については、現状では158ではユビオサエのみが確認されるが、残りの7点はユビオサエのうちにミガキが加えられている。また158～160・162～165には口縁部下にユビナデがなされ、それにより口縁部が幾分外反する。胴部内面にはミガキ調整がなされ、底部にもミガキによる施文が残る。底部のミガキには平行（155～158・162・163）と格子（159）がみられる。また胴部内面のミガキには粗密があり、丁寧な同心円を描くもの（158・159）と粗雑に描かれているもの（160・161）、そしてその中間に位置するようなもの（162・163）がある。

近世耕作土出土ではあるが、146井戸や154畦から出土した瓦器椀に比べて遺存度が高い。図示した11点のうち高台が高く、胴部の深い158・159は12世紀中葉、胴部は深いが高台が扁平化している162は12世紀後半、胴部が浅くなっている160・161は12世紀末～13世紀前葉とみられる。

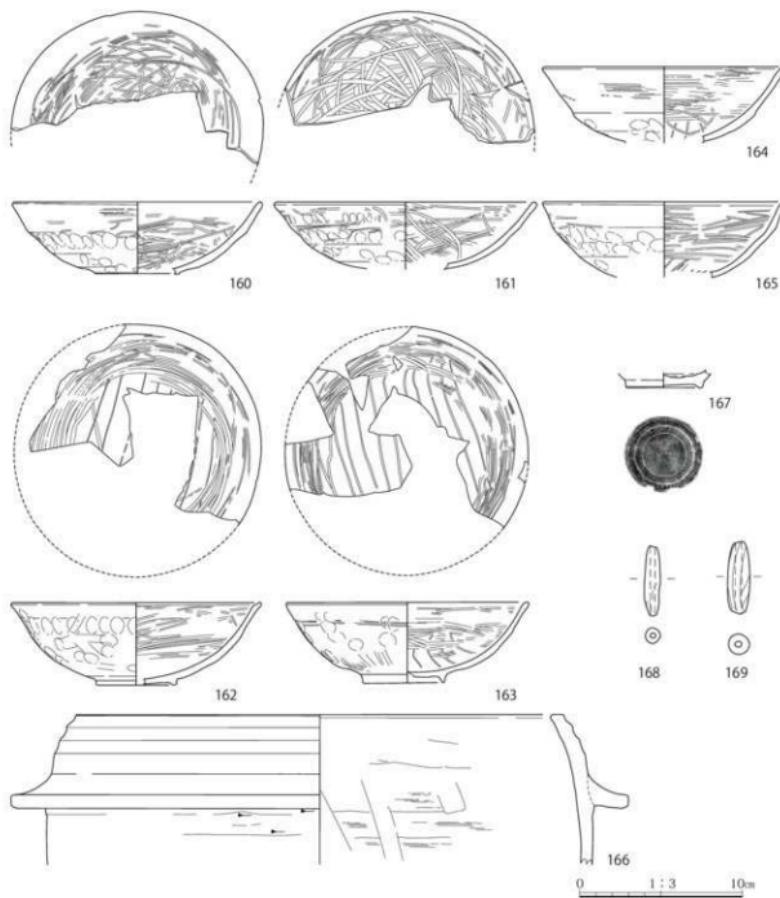
166は中世耕作土出土の瓦質羽釜。口縁部形状は1A形である。鍔は短く、胴部は膨らみを欠く。

この下段面の中世耕作土には弥生時代の土器から混入物とみられる磁器まで含まれているが、図示できた遺物の少なさが示すように、耕作土の時期を特定する遺物はほとんど見当たらない。したがって近世耕作土出土の中世遺物も参考にして、予測的に中世耕作土の形成時期を求みたい。

近世耕作土出土遺物の中でも遺存度の高い一群の瓦器椀は、中世耕作土に含まれていたものが近世耕作土とともに取り上げた可能性を前提として、それらが中世耕作土の第一次遺物との見方に立てば耕作土形成を12世紀とみることもできる。一方、154畦の形成を考慮して瓦質羽釜166に依るなら、中世耕作土の形成は14世紀後葉となる。あるいは2時期にわたり形成された可能性もある。



第50図 耕作土出土遺物（1）



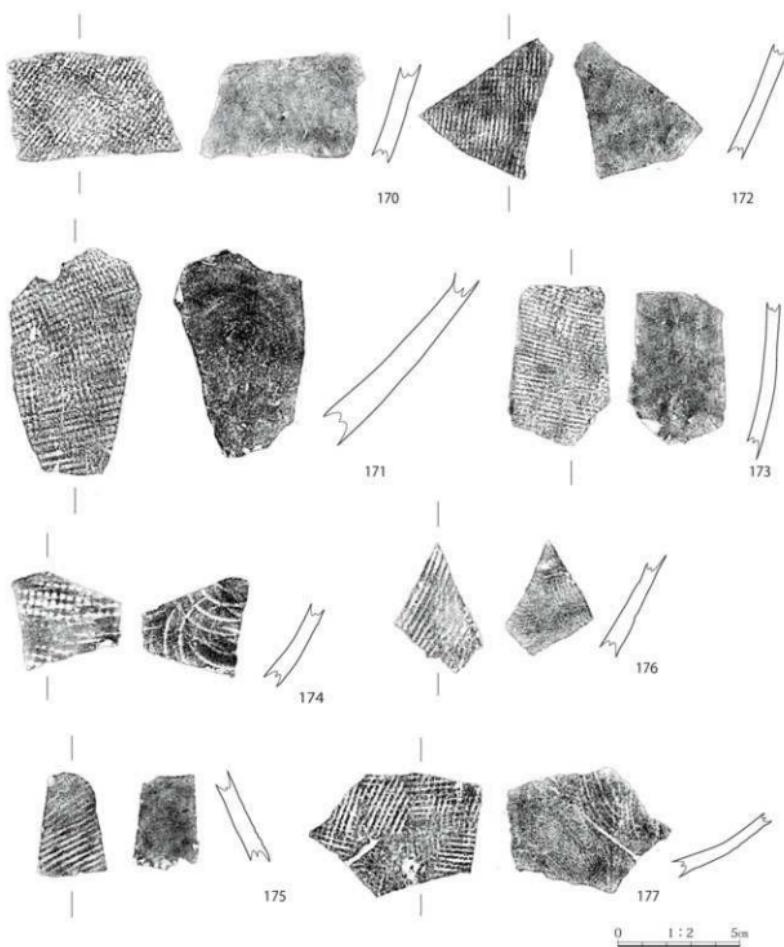
第51図 耕作土出土遺物（2）

## (8) 遺跡の評価に関わる遺物

## 1. 須恵器

このたびの調査で、複数の竪穴建物や掘立柱建物が発見されたことは、大町遺跡の正確な評価のための重要な材料となった。しかも3軒の竪穴建物からは、破片化が進んでいたが須恵器が出土した。

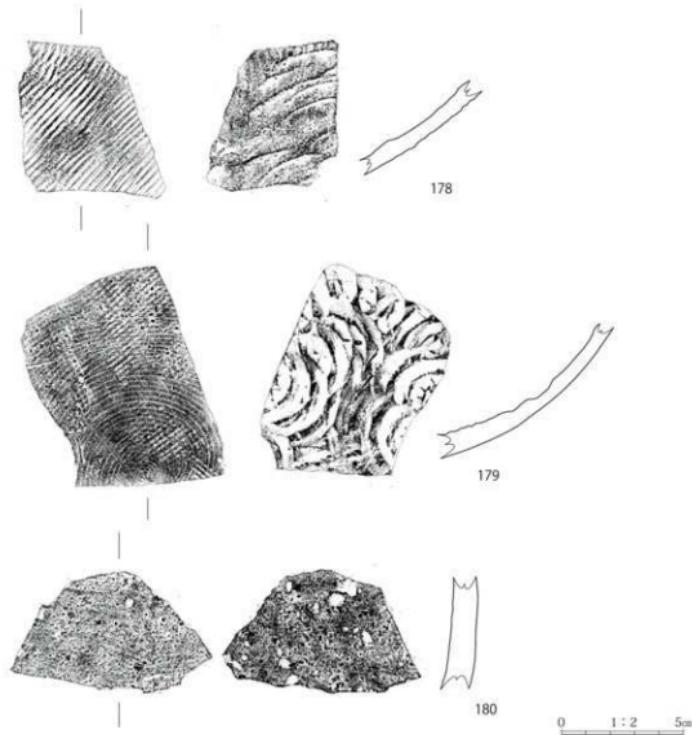
002 竪穴建物では覆土内に須恵器高杯が含まれ、また003 竪穴建物と004 竪穴建物では小破片とはいえ貼床下からも須恵器が出土し、これまで描いてきた時代相とは異なる時期の活動域が遺跡内に存在することが明らかとなった。



第52図 須恵器(1)

002 穫穴建物出土の高杯は初期段階の須恵器とみられる。久米田古墳群内の持ノ木古墳からはその高杯より遅る時期の須恵器が出土している。とはいえそうした時期の須恵器は普及度が低いので、大町遺跡内からそのような須恵器が出土したことは看過できない。

そこで、建物群の形成期における遺跡の実態を検討する前提として、図化復元できるほどの遺存度はないが、参考となる須恵器を取り上げる。



第53図 須恵器(2)

提示した破片は11点。179が壺の底部とみられるほかは甕の胴部あるいは底部である。180は外面へラナデ調整により先行するタタキ成形痕を消しているが、それ以外では格子タタキあるいは平行タタキの痕跡が残っていて、しかもいざれのタタキ目も細かい。格子タタキでは1辺0.1～0.2cm、平行タタキでは1cm当たり4～5本の条線である。

内面に当具痕がみえないものと痕跡の残るものがあるが、いずれもナデ調整による磨り消しがなされていて、完全に消えている部分と消し切なかった部分との違いに過ぎない。なお178の当具痕は通常みられる同心円文を描かず、青海波状でもない。弧が長いことから扇形の当具痕の可能性を考える。

壺だと考える179は丸底で、外表面は細かな平行タタキが行なわれたのちにカキメが施されている。内面には当具痕が同心円文状に残るが、他の当具痕に比べて削り込みの間隔が広い。

また大半の破片は、断面の色調が小豆色を呈していて、产地と生産時期を予測させる。

ただ、拓影を掲載した11点のうち5点は154畦と南の中世耕作土、4点は下段面近世耕作土からの出土、残りの2点も下段面一括と19-2区谷状地形内近世耕作土の出土である。すなわち、11点中

表28 須恵器(第52・53図)観察表

No.	出土位置	種別	部位	形状・調整(外側)	形状・調整(内側)	胎土	その他
170	下段面近世耕作土	甕	胴部	細かい格子タタキ(0.15×0.15~0.20cm)	当貝痕磨り消し	長石、クサリ礫	断面小豆色
171	154 畦1層	甕	胴部	細かい格子タタキ(0.20×0.20cm)	当貝痕磨り消し(同心円文残る)	長石、チャート(灰)	断面灰色
172	154 畦南中世耕作土	甕	胴部	細かい格子タタキ(0.10×0.15~0.20cm)	当貝痕磨り消し	長石、チャート(灰)	断面小豆色
173	下段面一括	甕	胴部	細かい格子タタキ(0.15×0.15~0.20cm)	当貝痕磨り消し	長石、チャート(灰)、石英粒	断面小豆色
174	下段面近世耕作土	甕	胴部	格子タタキ(0.20×0.30cm)・ヘラナデ、自然釉	当貝痕磨り消し(同心円文残る)	長石、チャート(灰)	断面小豆色
175	下段面近世耕作土	甕	胴部	細い平行タタキ(4~5本/1cm)	当貝痕磨り消し	長石、石英粒(少)	断面小豆色
176	下段面近世耕作土	甕	胴部	細い平行タタキ(4~5本/1cm)	当貝痕磨り消し	長石、石英粒	断面小豆色
177	154 畦1層	甕	底部	細い平行タタキ(5本/1cm、多方向重複)	当貝痕(同心円文)をヘラ状工具により磨り消し	長石、チャート(灰)	断面灰色
178	154 畦2・4層	甕	胴部	細い平行タタキ(4本/1cm)	当貝痕磨り消し(当貝痕残る、扇状文の可能)	長石、チャート(灰・茶)、石英粒	断面小豆色
179	19-2区谷状地形近世耕作土	甕	底部	細い平行タタキ(5~6本/1cm)カキメ	当貝痕(同心円文)残る。当貝大きい可能性	チャート(灰)、石英粒	断面灰色
180	154 畦1層	甕	胴部	ヘラナデ(部分的に強い)	当貝痕磨り消し(同心円文残る)	長石、チャート(灰)、石英粒	断面灰色

10点が中・近世の生産関連遺構に含まれていたことになる。一見すると、これらの破片は上段面の建物群とは無関係であるよう映る。

しかし、上段面でも002竪穴建物や003竪穴建物、004竪穴建物、あるいは掘立柱建物B・C・D・Eの柱穴でも少量ではあるが須恵器の破片は見つかっている。また上段面一括遺物として杯身1点を含む破片2点が確認されている。したがって揭示した須恵器破片は、中世あるいは近世の耕作土を形成するために付近から運ばれた搬入土に混入していた可能性、あるいは上段面の遺構に伴うものが流入・混入した可能性などによると考えられる。

しかもこれらの須恵器破片が比較的初期段階のものと考えられることから、それらを受容した集団に対する評価への重要な判断材料となる。

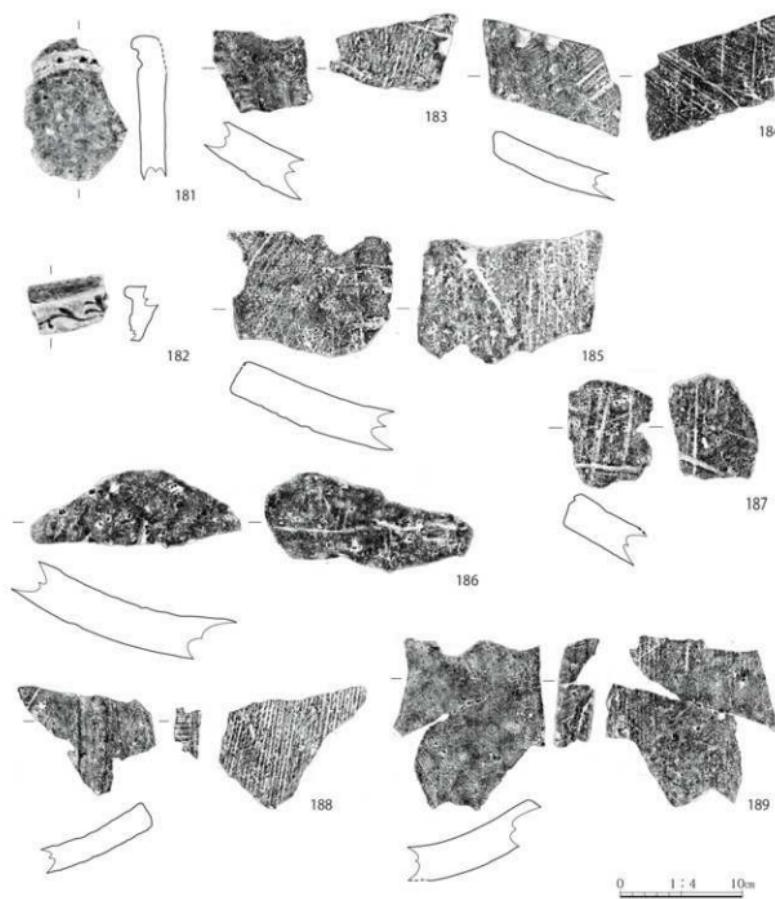
## 2. 瓦

瓦は主に、19-1区の154畦、中段面および下段面の中・近世耕作土から出土した。すべて破片であるが、70点以上を数える。これに対して19-2区では10破片であった。ただし19-1区にあっても中世耕作土が認められない上段面では、出土数は乏しい。

今回の調査では軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が出土しているが、軒丸瓦は1点、軒平瓦は2点を確認したのみであり、軒平瓦の1点は瓦当表面の剥離片である。以下に特徴のある13点を取り上げる。

軒丸瓦(181)の外区には珠文が配されているが、内区には文様の痕跡が認められない。素文であった可能性がある。唐草文軒平瓦(182)は、これまで大町遺跡で出土したいずれの軒平瓦の唐草文とも構図が異なる。この2点以外は平瓦である。

183は大町遺跡の歴史を検討する上で重要な瓦である。それは第1に直径1.2cmほどの釘孔の穿孔、第2に凹面の布目に重なって縦筋を呈する成形台痕、第3に3.2cmを測る厚さ、という特徴にある。この3点から、泉佐野市安松田遺跡で生産された東大寺の鎌倉期再建瓦との関連が窺われる。さらに焼成状況、胎土中の含有鉱物も共通している。なお大町遺跡の過去の調査においても、極めて少ないが、

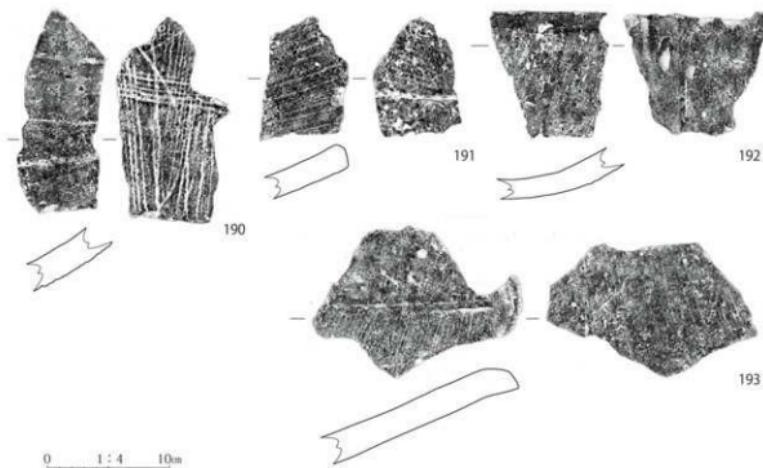


第54図 瓦(1)

釘孔の穿たれた平瓦は出土している。

第2の特徴としてあげた成形台痕は3点(185、187、188)にみられる。そのうち185は成形台痕の幅が3cmで安松田瓦の一般的属性と一致する。さらに胎土内含有鉱物、器厚の点でも等しい。187も凹面に3cm近い間隔の成形台痕が認められる厚さ3.0cmの平瓦であり、安松田瓦との類似性が高い。しかし凹面には竹管状の工具により幅0.3～0.5cmの横線が引かれている。

この横線は、安松田瓦を特徴付ける粘土接合痕とは異なり、瓦の表面が線引きにより0.1～0.2cmの深さで窪められているだけである。こうした横線は安松田瓦にはみられない、もしくは極めて客体的



第55図 瓦(2)

であったために認識しなかった特徴である。

この竹管状工具横引き線が認められる平瓦は5点あるが、そのうち3点(187、190、193)は凹面、2点(186、191)は凸面に施されている。面を異にする理由は不明だが、この横線については瓦葺きの際の基準線であったと現時点では推測している。

成形台痕の認められる188は厚さ2.0cmで、安松田瓦よりも薄い。さらに側辺の切断痕が瓦の縱方向に対して直交していて、平行方向に切断痕が延びる安松田瓦とは異なる。側辺の切断痕が直交するものとしては189もあるが、それは器厚3.0cmを測り、胎土においても安松田瓦に類似する。

このように安松田瓦自体である可能性のあるもの(183・185)とともに、製作技法や胎土、焼成状況などに共通点はあるがこれまで知られてきた安松田瓦そのものとは言いがたいもの(184・186～189)も認められるが、大町遺跡出土瓦の多くは安松田瓦と異なる技法、法量などを示すもの(190～193)である。

大町遺跡出土瓦は、畦や耕作土に含まれる前の搬出元、そして生産地など複数の地点を経たものと推定されるが、それを解く材料のひとつが安松田瓦類似瓦である。154 畦の築土には瓦とともに多量の羽釜と土釜も含まれていた。またこれまでも羽釜や土釜、そして瓦が数多く出土した調査区もあった。大町遺跡における中世の状況整理は、この地域の歴史を再考するための作業課題である。

### 3. 塙輪

出土した埴輪はいずれも小破片である。19-2区での出土ではなく、19-1区のみから32点が出土したが、出土位置に若干の偏りがみられ中段面近世耕作土、下段面中世耕作土および154 畦築土内とその南の中世耕作土にやや多く含まれていた。23点を掲示した。

23点のうち215は朝顔形埴輪の頸部、216は種類が不明であるが形象埴輪の体部端だとみられる以外、21点は円筒埴輪である。そのうち口縁部の破片は4点、残りはすべて体部破片であり、底部の破

表29 瓦(第54・55図)観察表

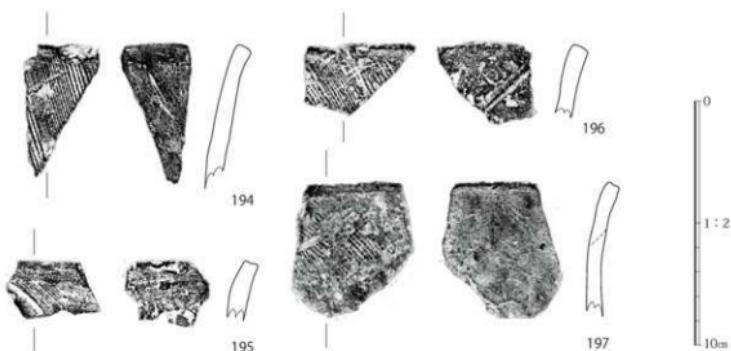
No	出土位置	種別	焼成	形状・調整		胎土	その他
				凹面	凸面・側邊		
181	154畦4・6層	軒丸瓦	半瓦質(瓦質生焼け)	(瓦当) 外区に縫 0.7cm・幅 0.5cm の珠文を配する。内区は素文とみられる	瓦当背面に丸瓦を直角に据えて粘土貼りで固定	チャート(灰・茶)、厚さ 2.0cm 長石、石英粒、クサリ礫	(軒面)
182	中段面耕作上	軒平瓦	半瓦質(瓦質生焼け)	(瓦当文) 唐草文	(接合法) 瓦当貼付け技法もしくは文様面・顎附付け技法(芦田淳一「鎌倉時代の東大寺軒瓦平瓦」『帝塚山大学考古学研究所研究報告N』2002)	チャート(灰)、厚さ 2.0cm 長石、クサリ礫	(軒面)
183	下段面耕作上(中世)	平瓦	半瓦質(瓦質生焼け)	成形台痕とみられる凝筋がみられ、タテユビナデが加えられている。成形台痕の間隔はユビナデのために不明	(凸面) 繩タタキ。釘孔が認められる。孔径 1.0 ~ 1.2cm	長石、石英粒、クサリ礫、チャート(灰)	厚さ 3.2cm
184	154畦2層	平瓦	瓦質	部分的に糸切り痕、布目、指面痕が残る	(凸面) 糸切り痕著に残るが繩タタキ痕は不明(側邊) 凹凸面と直角をなす	チャート(灰)、厚さ 2.2cm 長石、クサリ礫	
185	154畦2・3層	平瓦	半瓦質(瓦質生焼け)	成形台痕とみられる凝筋が約 3cm 間隔で認められる	(凸面) 繩タタキ(側邊) 凹凸面と直角をなし、縱方向に平行する筋状の切断痕	チャート(灰)、厚さ 3.1cm 長石、クサリ礫	
186	154畦6層	平瓦	半瓦質(瓦質生焼け)	摩耗のため調整など不明	(凸面) 繩タタキ。竹管状工具による幅 0.2cm の横位線(側邊) 凹凸面と直角をなし、縱方向に平行する筋状の切断痕	チャート(灰・茶)、クサリ礫	厚さ 3.4cm
187	146井戸	平瓦	半瓦質(瓦質生焼け)	糸切り痕。成形台痕とみられる凝筋が 2.5 ~ 2.7cm 間隔で認められる。竹管状工具による幅 0.3 ~ 0.5cm の横位線	(凸面) 繩タタキ(側邊) 凹面側から幅 1.0cm にわたり削り込む	チャート(灰・茶)、厚さ 3.0cm 長石、石英粒	
188	154畦1層	平瓦	半瓦質(瓦質生焼け)	成形台痕とみられる凝筋が 1.0 ~ 1.5cm 間隔でみられ、タテユビナデを加える	(凸面) 繩タタキ(側邊) 凹凸面と直角をなし、縱方向に直交する筋状の切断痕	チャート(灰)、厚さ 2.0cm 長石、クサリ礫、石英粒	
189	154畦1層、4・6層	平瓦	須須質	ユビナデにより大半の糸切り痕と布目は消える	(凸面) ヘラナデにより繩タタキがほぼ消える。(側邊) 凹凸面と直角をなし、縱方向に直交する筋状の切断痕	チャート(灰)、厚さ 3.0cm 長石、白色粒子、黒色粒子	
190	中段面耕作上(中世)	平瓦	半須須質	扶端部から 4.0cm に幅 0.3 ~ 0.7cm、13.0cm に幅 0.3 ~ 0.4cm の竹管状工具による横位線。扶端部から 5.0cm の粘土接合痕(2 本の横位線とは異なる)	(凸面) 糸切り痕、繩タタキ痕(4 本 / 1 枚) 跛著	チャート(灰・茶)、厚さ 2.2cm 長石、クサリ礫、石英粒、雲母(少)	
191	146井戸	平瓦	瓦質	糸切り痕著に残る。その他の調整は不詳	(凸面) 竹管状工具による幅 0.2cm の横位線。泥状物質の付着のため調整については不明。(側邊) 凹凸面と直角をなし、縱方向に平行する筋状の切断痕	チャート(灰・茶)、厚さ 2.0cm 長石、クサリ礫	
192	154畦6層	平瓦	半須須質	扶端部に幅 1.0 ~ 1.7cm の面取。凹面全体にユビナデ	(凸面) 繩タタキのちへラナデ・ユビナデ	チャート(灰)、厚さ 2.0cm 長石、石英粒	
193	下段面耕作上(中世)	平瓦	半瓦質(瓦質生焼け)	糸切り痕著に残る。竹管状工具による幅 0.2 ~ 0.3cm の横位線	(凸面) 繩タタキ(側邊) 凹面側から幅 2.4cm にわたり削り込む	チャート(灰)、厚さ 2.2cm 長石、石英粒(多)	

片はみられなかった。

口縁部破片(194 ~ 197)はいずれも單口縁で、緩やかに外反する。外面調整はナナメハケ、内面はナナメユビナデ・ヘラナデで、口縁部の頂部にユビナデ・ヘラナデを加えるものもある。

体部の外面調整は1次タテハケで共通するが、ナナメハケとなった調整も少なくない。ハケメについては、調整工具と埴輪器面との接触状態によりその間隔に粗密が生じるので個体別の差を評価するのは難しく、214はで 1cm 当たり 5 ~ 6 本、201では 22 ~ 24 本と開きがある。なお平均化すると 10 本は超える。

突帯は扁平度が高く、断面形状は台形が主流である。また、ナデ調整により頂部が浅く窪み「M」字



第56図 塙輪(1)

表30 塙輸出土位置

出土位置	点数	出土位置	点数
中段面 近世耕作土	5	001 落込み	1
	耕作土(中世)	017 溝	2
下段面 近世耕作土	1	154 畦	5
	耕作土(中世)	築土内	8
計 32		南中世耕作土	

状を呈するものもある。202の突帯頂部には断続ユビナデ、207では突帯頂部に工具による押圧、そして214では突帯上辺にユビオサエが加えられ、突帯固定の強化が図られている。

突帯部分で直径を復元することができたのは198(12.8cm)、207(13.2cm)、213(17.0cm)、214(18.2cm)である。小型品であるとはいっても、復元径が20cmにも満たないことから、焼成不良などにより現状の破片からは判読できない器形の歪みが生じている可能性がある。

焼成状態は須恵質と土師質があり、須恵質には還元焰焼成されたものと酸化焰状態のものとがある。また土師質にも須恵質・酸化焰状態に近いものが多くみられる。

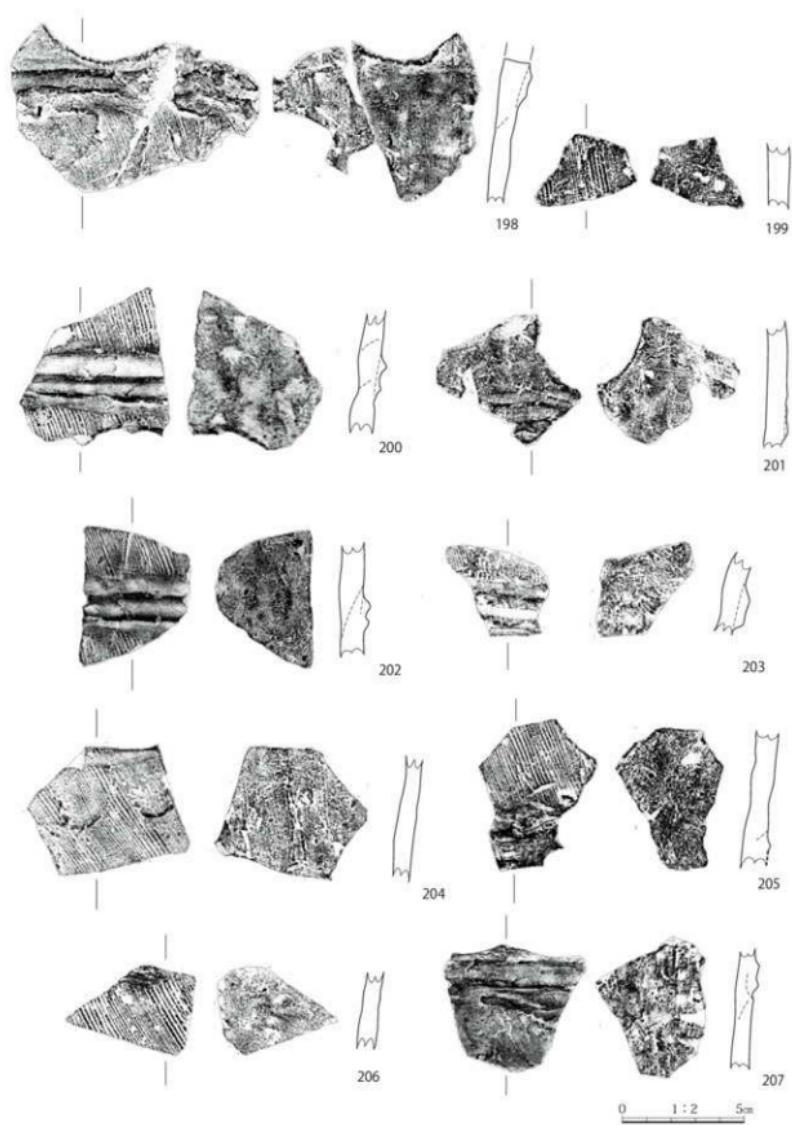
215は「く」字状に外反する形状から朝顔形埴輪の頸部とみたが、その屈曲は緩やかである。現状2.2cmを測るやや幅広い突帯が巡る。

216は全体に摩耗していて本来の形状を捉えることが困難であるが、円筒埴輪の底部とは考え難い。また底部の直径を算出すると30cm前後となり、推計することができた4点の胴部直径と比較すると1.5～2.0倍大きい。種類は不明であるが形象埴輪の体部端破片とみる。

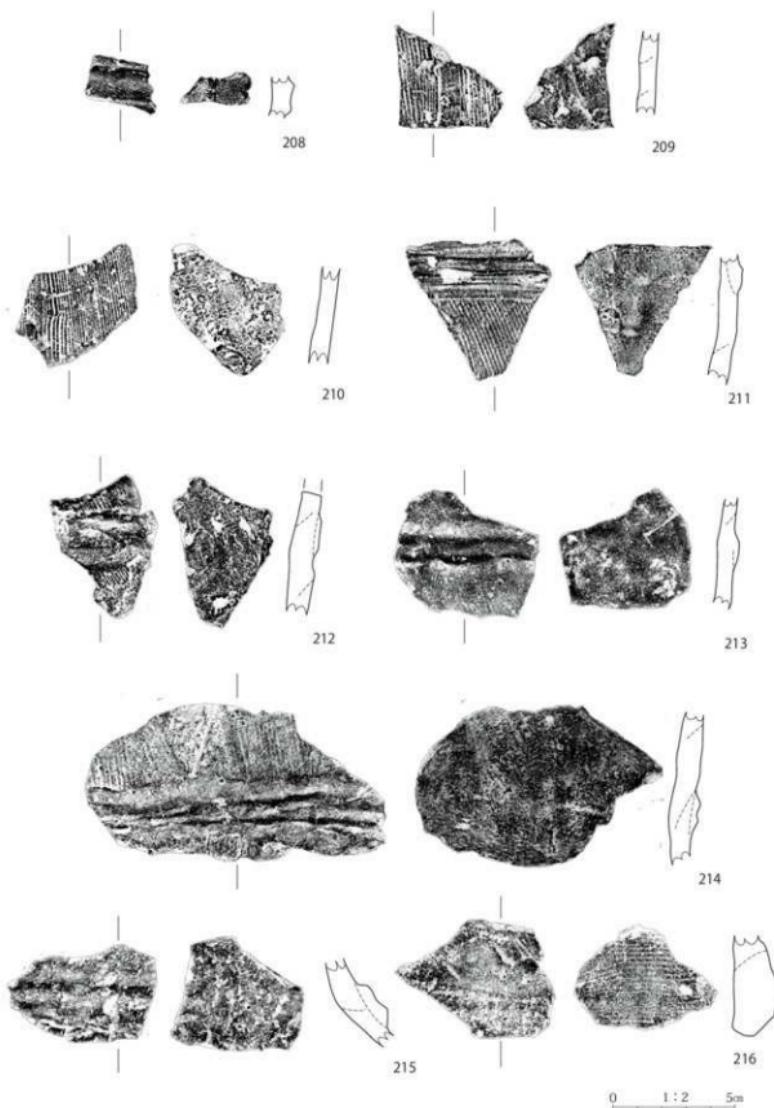
これらの埴輪は出自が知ないので、大町遺跡との関連についても不明である。ただ、概して近似した時期にまとまっていて、おおよそ6世紀前半～中葉に位置付けることができる。

### 第3節 19-2区の調査概要

19-2区は南西辺14m、北東辺11m、南東辺10mを測り、平面形状が幾分台形を呈する調査区



第57図 墳輪(2)



第58図 増輪(3)

表31-1 塙輪(第56～58図)観察表

No	出土位置	種別	部位	焼成	形状・調整	胎土	その他
194	017溝	円筒	口縁部	土師質(須 恵質・酸化 焰に近い)	外面はナメハケ。工具の当たりによりハケメに網目が生じている(6 ~24本/1cm)が6~8本/1cmが標準といえる。内面は斜め方 向のユビナデ。口縁部直下には輻方向のユビナデを加えている。口縁 部頭部にはヘラナデを行なっているようである。口縁部は緩やかに外 反する	チャート(80), 長 石、クサリ繩	
195	下段面耕作 土(中世)	円筒	口縁部	須恵質・酸 化焰	緩やかに外反して立上かる口縁部の外面調整はナメハケ。工具の当 たり具合でハケメに網目が生じている(10~14本/1cm)。また口 縁部端にはユビナデを加える。内面は主にナメヘラナデが施され, 口縁部端にはヨコユビナデが施される	チャート(80), 長 石、黒色粒子	
196	154駐2層	円筒	口縁部	土師質	外面は比較的細かいナメハケ(12本/1cm)を施し、口縁部直 下にユビナデを加える。内面はユビナデ。口縁部頭部にはヘラナデを 行なっているようで、多少二つ折りながらも半円となり、外側に粘土 の盛り出しがみられる。口縁部は緩やかに外反する	チャート(80), 長 石、クサリ繩	
197	中段面近世 耕作上	円筒	口縁部	土師質	緩やかに外反して立上かる口縁部の調整は、外面ではナメハケ(6 ~7本/1cm)、内面はナメハケのちヨビナデ、前面はユビナデが施される ように僅かに窪む。また外縁端には幅0.3cmのユビナデが施される	チャート(80), 長 石、クサリ繩、赤 色粒子	
198	中段面近世 耕作上	円筒	体部	須恵質・酸 化焰	外面はナメハケ。ハケメに網目がある(12~18本/1cm)が、12 本/1cmが標準である。頭部および上・下縁をユビナデされた突 部は低く高さ0.3cmで、幅は2.0cm、断面は扁平なM字形。突部上・ 下縁に加えたユビナデによりハケメが消えている。またユビナデによ り引かれた粘土が剥離している状況もみられる。内面調整はユビナデ。 突部上方に透孔が開けられている	チャート(80), 長 石、クサリ繩、石 英繩(少)	202と同一 個体の可能 性、突帯半 径6.4cm
199	下段面耕作 土(中世)	円筒	体部	土師質(須 恵質・酸化 焰に近い)	外面はタテ・ナメハケ。工具の当たりによりハケメに網目が生じて いる(8~18本/1cm)。内面ユビナデ	チャート(80), ク サリ繩、石英、長 石(少)	209と同一 個体の可能 性
200	中段面近世 耕作上	円筒	体部	須恵質・酸 化焰	外面はナメハケ。工具の当たりによりハケメに網目が生じている(7 ~22本/1cm)が10本前後が標準。粘土をユビナデにより成形 したような突部の高さは0.3cmほどで、その上下辺がユビナデされて いる。突部の内面側にはユビナデが施されている。突部下に円形透孔 の上部がある	チャート(80), 長 石、クサリ繩	
201	001落込み	円筒	体部	須恵質・還 元焰	外面にはナメハケ。ハケメ網が(22~24本/1cm)。内面はタテ・ ナメユビナデ。突部は低く上部で0.1cm、下辺で0.2cmほど、幅は 1.5cm。突部の上縁および頭部ユビナデし、頭部へのユビナデのた め突部中央は大きく消曲する。また外面調整のタテハケは突部上縁で はユビナデにより消されているが、僅かに残す下縁にはハケメがみえ る。透孔が突部上縁のユビナデを切り込さうに穿たれている	チャート(灰・褐), 長石	
202	中段面近世 耕作上	円筒	体部	須恵質・酸 化焰	外面はナメハケ。ハケメに網目がある(8~18本/1cm)。頭部お よび上・下縁をユビナデされた突部は低く高さ0.2cmで、幅は2.0cm、 断面は扁平なM字形。突部上・下縫に加えたユビナデによりハケメが 消えている。突部頭部のユビナデの重なる状況から、断続的にユビナ デが進められたとみられる。内面調整は輻方向のユビナデ。なお焼成 やハケメの状況が198と類似して同一個体の可能性がある。ただ し、測定精度の違いはあるが、突部部分での復元直角が異なる	チャート(80), 長 石(多), クサリ繩, 石英繩(少)	198と同一 個体の可能 性
203	下段面耕作 土(中世)	円筒	体部	土師質	外面調整はタテハケ(11本/1cm)、内面調整はユビナデ。突部は高 0.4cmで、断面は扁平台形	チャート(80), 長 石、クサリ繩、赤 色粒子(多)	
204	中段面耕作 土(中世)	円筒	体部	須恵質・酸 化焰	外面の調整はナメハケ。工具の当たり具合でハケメに網目が生じて いる(9~11本/1cm)。頂部にはユビナデがなされていて、突部 下辺に当たるとみられる。内面調整はヘラナデの後タテユビナデ。内 面透孔の頭部がある	チャート(80), 長 石、石英、クサリ 繩、赤色粒子(多)	
205	中段面近世 耕作上	円筒	体部	土師質(須 恵質・酸化 焰に近い)	外面はナメハケ。ハケメに網目がある(8~16本/1cm)。突部 は表面削離が著しいため本来の形状は不明。僅かに存する上辺の高 さは0.3cm。突部上縁に加えたユビナデによりハケメが消えているが、 ユビナデが及ばない部分もある。内面調整はユビナデ	チャート(80), 長 石、クサリ繩、石 英繩	
206	中段面耕作 土(中世)	円筒	体部	須恵質・還 元焰	外面はナメハケ。工具の当たりによりハケメに網目が生じている(7 ~21本/1cm)が10本前後が標準。拓上部にハケメが後出するヨコ ユビナデが認められ。突部下の調整とみた。内面調整は主としてナメ ユビナデ	チャート(80), 長 石、クサリ繩、青 母	

表31-2 塙輪(第56～58図)観察表

No.	出土位置	種別	部位	種成	形状・調整	胎土	その他
207	154鞋1層	円筒	体部	須恵質・酸化焰	外面上にはナメハケ。ハケ面細かい(16～18本／1cm)。内面はタテ・ナナメユビナデ。突帯は低く上・下辺で0.2cm、幅は1.5cmほど。突帯の頂部にはユビナデがなされているが、その前段調整のハケメがみられることから突帯の貼付時にあたり正面(頂部)をハケ(ヘラ)状工具で押圧して接着度を高めたとみられる。突帯の上・下辺にはハケ(ヘラ)状工具のたたいた跡が削り落とされている。透孔が突帯上縁のユビナデを切り込むように穿かれている	チャート(灰・褐)、長石、クサリ礫	突 带 半 稚 6.6cm
208	017溝	円筒	突帯	土師質(須恵質・酸化焰に近い)	突帯のほぼ上・下辺間の小破片。断面はユビナデにより歪み、断面は扁平であるがM字形を呈している。高さは0.3cm。内面調整はユビナデ	チャート(灰)、長石	
209	下段面耕作土(中世)	円筒	体部	土師質(須恵質・酸化焰に近い)	外面上はタテハケ。工具の当たりによりハケメに割れが生じる(8～18本／1cm)。内面ユビナデ	チャート(灰)、クサリ礫、石英颗粒、長石(少)	199と同一個体の可能性
210	下段面一括	円筒	体部	土師質	外面上調整のタテハケは工具の当たりにより割れが生じている(9～14本／1cm)。内面調整はタテユビナデ	チャート(灰)、長石、赤色粒子(多)	
211	下段面耕作土(中世)	円筒	体部	須恵質・還元焰	外面上調整はナメハケ(8本／1cm)。突帯の頂部および上・下辺にユビナデがなされているが各面にはんど確まない。突帯の断面は扁平な台形で、高さは0.2cmを測る。内面調整はユビオサエ、ユビナデ、体部は内消しつつ、外傾して立ち上がる	チャート(灰)、長石(多)、クサリ礫、赤色粒子、石英颗粒(少)	
212	154鞋2・4層	円筒	体部	土師質	外面上には多くの剥落・磨滅があり、ここに突帯では多くの部分で減滅しているが、体部の外面上にはナメハケ(16本／1cm)が残る。内面はユビナデとみられるが、押過痕がよく残っていることからヘラ状工具によるナデ調整の可能性もある。突帯は灰森0.2cm、幅は1.7cmを測る。突帯頂部はユビナデにより僅かに消す。突帯下縁にユビナデが施されているが、現状では上縁にユビナデはみられない。突帯上方に透けあり	チャート(灰)、長石、クサリ礫、赤色粒子	
213	154鞋6層	円筒	体部	土師質	全体が摩耗しているため外面上ともに調整状況は不明。突帯についても本来の形状が形創化している。突帯は、残りのよい部分で高さ0.2cm、幅1.4cmを測る。突帯表面はユビナデにより僅かに消す。不明点は多いが、土師質の中でもより軟質である点には留意される	チャート(灰)、赤色粒子(多)、長石、クサリ礫	突 带 半 稚 8.5cm
214	下段面耕作土(中世)	円筒	体部	土師質	全体に磨滅しているため外面上の調整は不鮮明だが、外縁についてはタテハケ(5～6本／1cm)、内面についてはユビナデがなされているとみられる。また突帯については頭部および上・下辺にユビナデがなされているが、ユビナデの残していない部分もある。また上縁のユビナデとともに、突帯上縁を押さえ込むためにユビオサエが加えられている部分もある。突帯は高さ0.3cm、幅1.8cm。断面についてでは頭部がぐるり側面に窪む部分もあるがほぼ扁平な台形とみることができる	チャート(灰)、長石(多)、クサリ礫、赤色粒子	突 带 半 稚 9.1cm
215	下段面近世耕作土	朝顔形	頭部	土師質	外反度の強・形状から朝顔形埴輪の頭部と考える。頭部突帯は現状幅2.2cmを測るが、破片全体が摩耗してて本来の高さを減じている。また外面上の調整も不明。内面にはユビオサエの痕跡が僅かに残る	チャート(灰)、長石、石英、クサリ礫、赤色粒子	
216	154鞋1層	形象?	体部端	土師質	全体に摩耗しているため種別は不明。埴輪資料であり、円筒埴輪にすると復元測定による直径が大きいことから形象埴輪の体部端だと想定した。しかし具体的に対応できる種類を示すことはできない。頭部は外側から腹幅8cmほど斜めに切り込んでいるため、1.8cmを測る厚さが半減する。切り込みの上部に幅0.1～0.2cmの沈線が巡るように入れるが、2次的な傷の可能性もある。外面上調整は摩耗のため判然としないがヘラナデとみられる。内面はヨコハケ(5本／1cm)のうち、主に端邊にユビナデを加える	チャート(灰)、長石、クサリ礫、赤色粒子	底 部 半 稚 15.3(あるいは14.3)cm

である。調査区内の西隅を約3mにわたって低位段丘が横切る。19-2区全体に対する低位段丘部分は20%にも満たない。この低位段丘上で耕作土と溝1条を検出するとともに段丘縁辺に築かれていた畦を確認した。

一方、残りの80%は低位段丘下の谷状地形、すなわち沖積地に当たる。その基盤層は標高T.P.20.9m、現地表面との比高差はおよそ2.6mである。19-1区東端周辺の谷状地形以上に湧水は著しいが、この範囲でも耕作土が広がり、耕作の痕跡が認められた。

## 第4節 19-2区の調査成果

### (1) 167溝

低位段丘上に位置する。段丘面は東方向に延びて比高差約1.0mの段丘崖を形成する一方で、その反対方向は30cmほど西に地形が下がる。167溝はその段丘崖と下がった地形をつなぐように、狹小な平坦面に設けられた溝である。

この溝は幅が約1.0mであるが、南端から20cmの範囲では15cmほどに狭くなっている。また段丘崖付近では、拳大あるいはそれより少しこのじめの礫が溝の南半分に充填された状態で検出された。なお溝の深さは20cmほどである。この溝については、導水管を設置するための掘方であり、導水管を固定するために礫が敷かれたと考える。なおこの溝内から遺物の出土はなかった。

### (2) 段丘面の畦と耕作土

調査区西壁において、畦とみられる土層、およびその背後に広がる耕作土を確認した。畦の形跡を残す土層(第59図4・5層)は、切り落とした基盤層の前面に基礎として貼り付けられた灰白色(5層)、黄橙色(4層)の粘土である。畦の背後には黄色味のある粘土や砂質土を基調とする耕作土(第59図1~3層)が広がっている。この耕作土の上や畦の前面をさらに異なる耕作土が覆っている。この後出する耕作土が近世に形成され近・現代まで継続する「旧耕作土」、そしてそれに覆われた耕作土(1~3層)は中世に形成されたものである。

また畦の裾部に当たる低位段丘の崖線下辺付近では、A区154畦と同じく、打設された土留め用の木杭が検出された。現状では10本を数え、畦裾部の南半にまとまっていて、北半にはみられなかった。

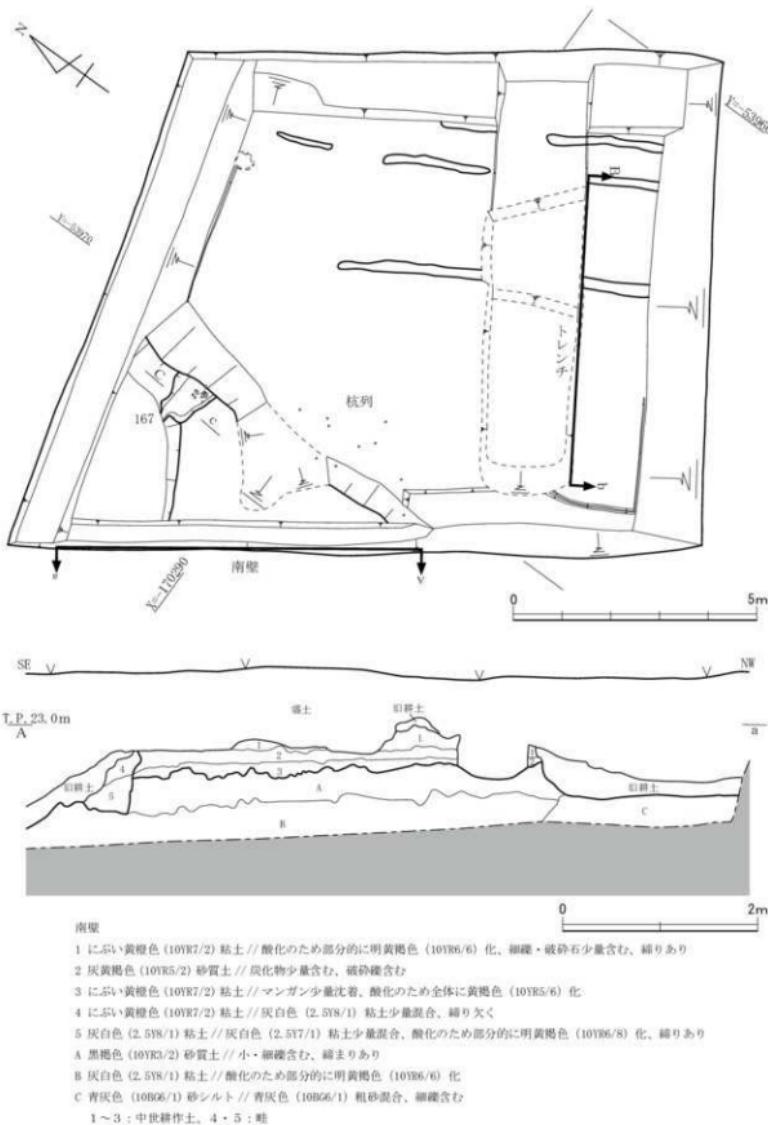
### (3) 谷状地形の耕作土

19-2区の80%を占める沖積地を19-1区と同じく谷状地形と呼ぶが、その基本層序は現地表面下に厚さ2m強の盛土がまず存在する。これは19-1区でも検出された府営住宅造成時の埋め土である。この盛土の下に近世耕作土(旧耕作土)、そして中世耕作土が続き、そして基盤層である河川状堆積となる。中世耕作土はこの河川状堆積の上に直接形成されていて、その状況は19-1区と同様である。なお近世耕作土は15cm、中世耕作土は30cmほどの厚さである。

中世耕作土の上部を少し削り込んで耕作痕を検出した。いずれも北西-南東方向に延びていて、現状3cmほどの落ち込み内部には灰色粘シルトが堆積していた。

### (4) 出土遺物

19-2区における遺物の出土は主に耕作土内からである。そのなかでも谷状地形内の近世耕作土と中世耕作土に多種類の遺物が含まれている。一方、低位段丘上の近世耕作土では遺物の種類は少ない。この違いは耕作土の層厚の違いに起因している。出土遺物はいずれも小破片であり、復元図示できなかった。なお畦や中世耕作土、さらに近世耕作土からも羽釜や土釜の出土がみられない点は留意が必要であり、調査区周辺の歴史的状況が異なっていた、あるいは畦や中世耕作土の形成時期が違っていたなどの可能性がある。



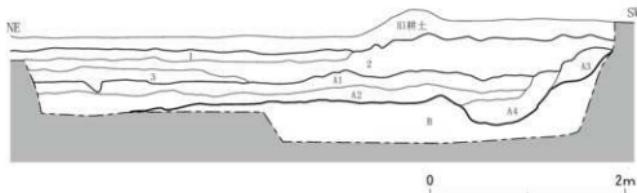
第59図 19-2区の遺構（平面・土層）

表32 19-2区出土遺物組成

		瓦 瓦質羽釜	土 土釜	瓦質土器	瓦器	土器 土師質土器	須恵器・須恵質土器	植器	陶器	磁器	瓦	埴輪	その他
低位段丘	近世耕作土					○	○			○			
	疊					○							
谷状地形	近世耕作土					○	○	○	○	○	○	○	灰釉陶器
	耕作土(中世)				○	○	○	○	○	○	○	○	土鍾
	一括			○		○	○	○	○	○	○	○	

T.P. 22.0m  
B

b



トレンチ

1 明青灰色 (SB7/1) 粘土 // 灰オーブル色 (5Y5/2) 砂質土混合、酸化のため全体に黄色 (2.5Y7/8) 化。織り欠く

2 青灰色 (10BG6/1) 粘土 // 酸化のため全体にオーブル色 (5Y5/6) 化。織りやや欠く

3 青灰色 (10BG6/1) 粘土 // 2層に沿するが酸化によるオーブル色 (5Y5/6) 化より濃い

A1 灰色 (5Y6/0) 粘土 // 酸化のため全体に灰オーブル色 (5Y4/2) 化。織り欠く

A2 灰オーブル色 (5Y4/2) 粘土 // 灰オーブル色 (5Y4/2) 砂混合、破砕細少含む。織りやや欠く

A3 灰色 (5Y6/1) 粘土 // 灰白色 (5Y7/1) 粘土混合。細織多包、織りやや欠く

A4 灰白色 (10BG6/1) 粘土 // 明青灰色 (10BG7/1) 粘土ブロック混入。酸化のため全体に明黄褐色 (2.5YR6/6) 化。織り欠く

B 灰色 (5Y4/1) 粘土 // 灰色 (5Y4/1) 粗砂混合、小織・破砕織多包、織りあり

1～3：中世耕作土、A1～A4：・河川堆積粘土層、B：河川堆積粘土・砂質層

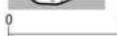
T.P. 22.6m 167

C

1 灰灰色 (10YR4/1) 砂シルト // 黄橙色 (10YR7/8) 砂質土ブロック混合、織りやや欠く

2 灰白色 (10YR7/1) 砂シルト // 細織・破砕織含む。織り欠く

3 灰白色 (10YR8/1) 砂シルト // 黄橙色 (10YR7/8) 砂シルト混合、細織・破砕織少含む。粗質



第60図 谷状地形の土層

谷状地形内の出土遺物について具体的にみると、近世耕作土からは土師質土器培燒、炻器擂鉢、削出し高台の灰釉陶器椀があり、磁器には肥前系とともに波佐見・平戸系がみられた。また須恵器には外面格子タタキが施された古墳時代の甕もある。

中世耕作土には炻器瓶、半瓦質の平瓦と丸瓦、古墳時代とみられる平行タタキがなされた甕胴部の破片など含まれている。

なお畦の築土4層から出土した土師質土器は口縁部の小破片である。その口縁部は内傾して口がすぼまり端部は丸く收まる。また厚さ0.7cmを測り、やや厚味がある。こうした形状から真ダコ壺の可能性もある。しかし著しい被熱のために脆化、赤化している状態から、鋳造関連遺物の可能性もある。

## 第4章 調査成果の総括と地域との関連

### 第1節 発掘調査の成果からみた遺跡内の変遷

#### (1) 令和元年度の調査成果概要

令和元年度の主要な調査成果としては、次の2点に集約できる。第1は、古墳時代中期の建物群が発見されたこと、第2は中世の遺構の発見とともに多数の遺物が出土したことである。

第1の点についてみれば、大町遺跡では岸和田H 24区で発見された庄内式期の竪穴住居と04-1区で検出した庄内式期から布留式期にかけての竪穴状遺構が建物跡および建物の一部の可能性のある遺構だが、19-1区の建物群が比定される古墳時代中期の建物跡は、田鶴羽遺跡の範囲を含めてこれまで未検出であった。

中期の建物群が発見されたことで、縄文時代中期以降、中・近世そして近・現代までつながる遺跡の歴史のなかにある中断期を埋めることとなった。

この大町遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期中葉にかけて生じた洪水により集落が消滅したと考えられる。それは河川状堆積となって残る河道跡に含まれる遺物の時期と量の多さに示されている。その一方で、須恵器をはじめとする古墳時代中期以降の遺物を主体的に含んだ河道跡は検出されていないことから、河道跡を残すほどの激しい洪水は古墳時代前期中葉以降にはほぼ起きなかったとみられる。にもかかわらず19-1区のいずれの竪穴建物も検出面から遺構底面までの現状深度が浅いのは、恐らく中世の開墾時に遺構上面が削平を受けたためだといえる。ただそうだとしても、各建物とも遺構検出面から掘方底面まで10cm程度はあるので、中世耕作の影響を受けたとしても多くの遺構では掘方底は残ったに違いない。にもかかわらず遺跡の広い範囲で痕跡が残っていないことは、本来的に当該期の遺構が19-1区西端近くに集中していて、遺跡の北から東に広がりがなかったとみられる。古墳時代中期の遺構分布は限定的であった。

なお岸和田H 1区で検出した6基の方墳からなる田鶴羽古墳群は、一部に後期に下る可能性もあるが、主として古墳時代中期後半に形成された。したがって19-1区の建物群とは距離とともに時期においても近接していて、単純にみれば両空間が無関係であるとは考え難い。

さらにこの19-1区の建物群に関してみれば、この一群を「集落」跡と呼べるかも疑問である。それは、竪穴建物4軒はすべて作業場、掘立柱建物のうち2棟の総柱建物は倉、残り3棟は小屋であり、いずれも日常生活のための居住空間ではないと前章で捉えたように、建物の機能と関わっている。

しかも重複や隣接距離という配置状況から、すべてが同時に存在していたとは考えられない。すなわち建物間の前後差を想定せざるを得ない状況にある。

このように第1の成果に関しては、

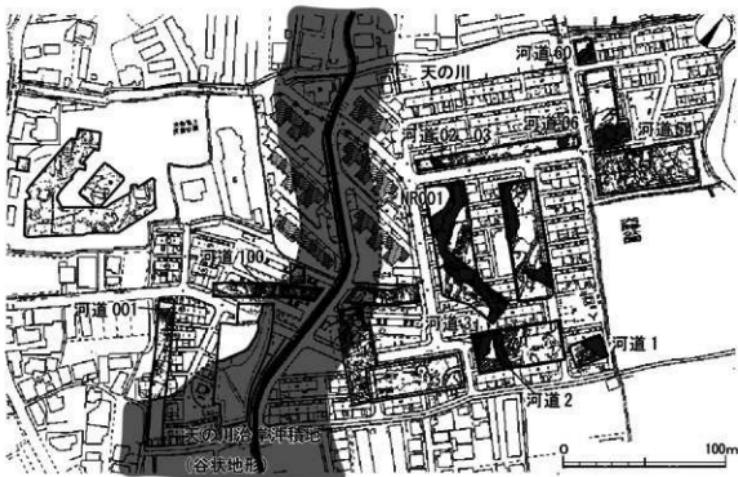
- ①建物群の時系列の変遷
- ②竪穴建物の機能
- ③田鶴羽古墳群との関係

という3点の検討を進めることで調査成果がより具体化する。また②に関しては、既に各建物の性格付けは行なっているが、それを検証するためには類例との比較が必要となる。

調査成果の第2点である中世の遺構と遺物に関しては、これまで5地点で当該時代の遺構・遺物は検出されている。そのうち田鶴羽遺跡に当たる10-3区を除くと、いずれも「天の川」以東に位置する。



第61図 調査区位置



第62図 河道位置

10-3区では13世紀の用水路とみられる溝3条が検出されたに留まり、出土遺物も極めて少ない。“天の川”東域の調査地点に比べると、積極的な土地利用がなされていたとは考えられない状況であった。

表33 大町遺跡、田鶴羽遺跡内の変遷

時代	時期	活動状況を示す調査成果	河道の消長	遺跡内の変遷
縄文	中期	土器 (09-1区河道01)		大町遺跡東域の低位段丘が活動域 (集落形成は不明)
	後期	土器 (03-2区包含層、04-1区河川状堆積層)、04-2区河道1、07-2区落込み、09-1区河道06)	09-1区河道 06・07・2 区落込みの形成・埋没	"天の川" 東域で河道形成
	晩期	土器 (03-2区 NR001・包含層)		
弥生	前期			
	中期			河道形成の休止 (基盤層の安定)
	前半			
	中期	10-1区廐廢土坑 (土坑 65: 土器破片、石劍片、石包丁、砥石、サヌカイト破片)		大町遺跡東域で集落形成
	後半			中期後半～後期に "天の川" 東域で河道形成 (西に移動)
古墳	後期			東域の集落は西寄りに移動 (弥生後期～古墳初頭)
	初頭	04-1区1房跡 (堅穴状道構 075: 烤跡 3基、貼床、土器破片 248点・3090g、土坑 30 近接)	河道 (03-2区 NR001、04-1区河道 2・3、09-1区河道 01・02、10-1区河道 54、10-2区河道 60、10-3区河道 100、19-1区河道 001)	大町遺跡東域で1房状施設、西域で住居設置。集落域西方に拡張
				大町遺跡東域の集落は洪水により消滅 (河道形成は "天の川" に集約)
	中期	岸和田 H24 区堅穴住居 (土器 5点)		
	後期			
飛鳥	前期			
	中期	19-1区建物群 (堅穴建物 4軒 002・003・004・092、掘立柱建物 5棟)		中期中葉に大町遺跡西域で建物群形成 (～中期後葉)
	後期	岸和田 H1 区古墳群 (田鶴羽古墳群、方墳 6基、後期主に繼續か)		中期後葉に田鶴羽遺跡西端で古墳群形成 (～後期前葉?)
				(遺跡内あるいは周辺に古墳造築)
奈良	飛鳥			
	奈良			
平安	前半	10-1区水田 (～13世紀前葉)		"天の川" 東域で水田形成
	後半	10-3区水田 (～13世紀前葉)		"天の川" 沿い・冲積地に水田形成
	鎌倉	10-3区用水路 (溝 101・102・104)		水田整備
		10-1区畠地 (～14世紀代)		大町遺跡東域で洪水 (13世紀前葉)。後に場所により畠地化
	後期	06-2区木枠井戸 (～13世紀中葉)、上器割り (13世紀後葉～14世紀前葉)		"天の川" 東岸付近を活動域 (生産か居住かは不明)
室町	前半	06-2区石組井戸 (～14世紀中葉)、土坑		大町遺跡南西部で積極的な土地利用
		06-3区石組井戸 (～14世紀中葉)		
		07-1区石組井戸 (～14世紀中葉)、石列壙 (13世紀中葉～14世紀中葉)、土坑 (墓の可能性、14世紀中葉)、溝 (12世紀中葉～14世紀中葉)		
	後半	19-1区石組井戸 (～15世紀前葉)、154往 (14世紀後葉～)、耕作土形成 (14世紀後葉)		"天の川" 西岸付近を生産活動域
	後半	10-1区水田		"天の川" 東域で水田回復

表34 縄文土器出土の調査区

調査区	時期	出土遺構・層	備考
03-2区	後期	包含層	注口土器、注口下部に沈線・両脇に巻目刺空
	晩期	包含層	浅林
	晩期	NR001	浅林、朝日突帯文土器 (長原式)
04-1区	後期	河川状堆積層	浅林
04-2区	後期～晩期	河道 I	深林、凹縮文
07-2区	後期	落込み	浅林、口縁部に巻目条痕、後期後半～晩期前葉
09-1区	中期	河道 01	底部破片
	後期	河道 06	
10-1区	—	基盤層	詳細不明
		河道 54	詳細不明

だが、同じく“天の川”以西に位置する 19-1 区において石組井戸 1 基のほかに畦や耕作土を検出し、畦築土からは多量の羽釜、土釜などが出土したことで、調査区周辺が耕作を中心とする活動域であることを確認するとともに、生活空間に関する異なる要素も併せ持つと推測する。

こうした大町遺跡、田鶴羽遺跡における中世の様相について、

- ①遺跡内での中世遺構の広がり
- ②中世遺構の変遷

の 2 点を整理することが、遺跡内の土地利用の在り方を検討する上で不可欠である。それは周辺遺跡の動向とも併せた、広い範囲の情勢を把握するための前提材料となる。

## (2) 遺跡内の土地利用変遷

このたび 2 調査区（19-1・2）の発掘調査を実施したことで、“天の川”西域の状況がこれまでよりも格段に明らかになった。その成果を踏まえ、岸和田市教育委員会による発掘調査も含め、これまでに大町遺跡と田鶴羽遺跡で行なった調査の成果を時系列に整理し、土地利用に主眼をおいて遺跡内の変遷を表 33 に示す。

**縄文時代中期** 現時点で、最も時代の遅る出土遺物は 09-1 区の河道 01 から出土した縄文時代中期の土器である。ただし底部の破片 1 点のみであることから「中期の可能性が高い」とした。ただ、箕上路遺跡や小田遺跡、あるいは和泉市の府中遺跡など比較的近在する遺跡においても縄文時代中期の土器が出土していることから、「可能性が高い」といえる。

土器が出土した 09-1 区は“天の川”的東域、大町遺跡内でも東寄りに位置する。その北東—南西に長い調査区の南西端付近を横断する河道 01 だが、埋没過程中に古墳時代初頭の多くの土器が河道肩部から投下されていた。したがって縄文時代中期の土器は、この河道と直接的に関連付けることはできないとの見方もできる。

**縄文時代後期** 次いで縄文時代後期になると土器の出土は 5 地点を数え、急増する。そのうちのひとつは中期の土器が出土した 09-1 区だが、出土した河道が異なり、後期の土器は河道 06 に含まれていた。

この河道 06 からは古墳時代初頭・前期の器台 1 点が出土しているが、上面からの出土である。これに対して縄文土器は遺構検出面下 0.8 ~ 1.0 m の底部近くで出土した。弥生時代中期後半から後期の土器が含まれていないことから、河道 06 は縄文時代後期、遅くとも弥生時代中期前半までの間に埋没したとみられる。同様の状況は、07-2 区の落込みについても当てはまる。

07-2 区の落込みは、基盤層である青灰色系粘質土を削り込み、そこに堆積した黄褐色系砂質土や淡黒色系粘質土から縄文後期の宮滝式土器やサヌカイト破片、自然木、炭化物が出土した。土器の遺存状態は比較的良好で、摩耗度は低い。

04-2 区河道 1 については、縄文後期の土器とともに弥生時代中期後半、あるいは古墳時代までの土器が含まれているので、上部まで完全に埋没したのは弥生時代以降にまで下ることも考えられる。しかしその形成は当該期にあるといえる。

また土器が出土した調査地点をみると、“天の川”東域の低位段丘に分布がみられ、“天の川”岸部の沖積地には及んでいない。このことは、地形と土地利用が結び付いていることを暗示している。

**縄文時代晚期** 縄文時代晚期の土器が出土した調査区は、後期に比べて急減して 03-2 区のみとなる。ただ出土した浅鉢と長原式の突帯文土器は、それぞれの特徴がわかる程度には遺存していて、遠距離から流れ込んだとはみられない。したがって出土地点は少ないが、後期に引き続いて“天の川”東域低位段丘を活動の場としていたとみられる。

**弥生時代前期～中期前半** 弥生時代前期および中期前半の遺物は管見にのぼらないことから、遺跡内

表35 弥生時代中期後半・後期の土器出土状況

		弥生中期後半		弥生後期	
		点数	重量(g)	点数	重量(g)
04-1区	河道2	39	1680	56	3145
	河道3	3	270	7	355
	道構一括	4	110	3	30
	道構外一括	1	10	8	260
04-2区	河道1	3	55	0	0
	河道01	7	348	6	255
	河道02	8	596	2	103
09-1区	道構一括	1	20	0	0
	道構外一括	1	13	1	21
	河道54	2	73	0	0
10-1区	道構一括	3	59	0	0
	計	72	3234	83	4169

での活動は縮小、というよりも休止した可能性が高い。

周辺遺跡の動向をみると、岸和田市、和泉市ともに弥生時代前期になると縄文時代晚期に比べて遺跡数が減少する。この状況は中期前半にも継続するが、中期後半をむかえて変化する。したがって、大町遺跡、田鶴羽遺跡でみられた状況は、当該期の牛滝川流域の一般的な様相であるといえる。

遺跡内での活動の中断が想定される一方で、この時期になって“天の川”東域で縄文時代後期以降にみられた河道の形成はいったん終息する。そして一部の基盤層で認められる河川状堆積もこの時期になって安定化する。この点については、本節末に補記する。

弥生時代中期後半 弥生時代前期から中期前半にかけて、洪水が生み出す河道の形成が取り基盤層が固定化する。これは自然環境の変化と連動しているが、さらに生活圏の移動も起こしたとみられる。しかしこうした状況は中期後半になると変化する。

大町遺跡の中でも東端に近い10-1区で当該期の廃棄土坑(土坑65)を検出した。長径2.0m、短径1.5m、深さ15cmを測り、掘り込みが浅いことから上部が削平されているとみられる。

土坑内からは64点・244gの土器破片とともにサヌカイト製石剣の基部1点、緑色結晶片岩製石庖丁1点、砂岩製砥石1点、サヌカイト破片5点が出土した。土器破片1点の平均重量は4g以下であり、破損化が進んでいる。上部が削平されているとみられるにもかかわらず、数多くの遺物が出土していて、本来の掘方が残っていればさらに多くの遺物が出土したと考えられる。

石器については、石剣、石庖丁、砥石といったそれ程異なる機能を有した組合せからなる。砥石の表面には鋭い刃を研いだ痕跡が傷となって残り、鋭利な金属器の使用が予測できる。さまざまな石器が集積の結果であるとしても、廃棄した集団では稲作を行い、石剣とともに鋭利な刃の金属器を所有していたと推測される。さらに5点のサヌカイト剣片は、石器が作製されていたことを示唆する。

生業に関係する石器、そして掘方規模に対して数多い土器などの土坑出土の遺物は、居住空間から廃棄されたものであり、集落の存在を想定することは可能である。

ところが、弥生時代中期後半における集落の存在を示す遺構は、この廃棄土坑を除くと皆無である。現状でその存在を認めることができないのは、調査区外に存在しているため、あるいは深い削平により消失したためなどの理由が考えられる。ここで留意しておきたいのは、弥生時代中期後半(弥生IV期)の土器は幾つかの調査区から比較的まとまった点数が出土している点、そして河道から出土しているにもかかわらず磨滅度は高くなないので遠距離を流されたとはみられない点で、このことから遺跡内の“天の川”東域にこうした土器が使用された一定程度の居住空間、すなわち集落が存在したことを想定できる。

しかしこうした集落もまた、河道形成の契機となった洪水のために痕跡までも消滅された。

表36 河道出土の弥生時代中期後半・後期土器、古墳時代初頭～前期土器

		弥生中期後半		弥生後期		古墳初頭～前期	
		点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
04-1 区	河道 2	39	1680	56	3145	506	15150
	河道 3	3	270	7	355	125	3900
09-1 区	河道 01	7	348	6	255	44	2783
	河道 02	8	596	2	103	35	4571
10-1 区	河道 54	2	73	0	0	1	11
10-2 区	河道 60	11	140	2	123	1	11
10-3 区	河道 100	9	292	4	207	10	458
19-1 区	河道 001	1	8	1	40	9	970
03-2 区	NR001	弥生時代から古墳時代前期の多量の土器が出土。大半は古墳時代初頭の土器					

弥生時代後期 10-1 区で検出された竪穴状遺構と河道出土土器の多さから、弥生時代中期後半に大町遺跡東端付近で集落が形成されていた可能性が考えられた。これに対して弥生時代後期に比定できる遺構は現状では皆無であり、実態不明といわざるを得ない。ただし、遺跡内を縦横に走る河道の幾つかでは後期の土器が出土している。この状況から、中期後半と同じく旧地表面を削り込んだ洪水により集落の構造物の痕跡までも流失したとみられる。

土器の出土状況からすると、当該期の集落は弥生時代中期後半に比べて西寄りの 09-1 区や 03-2 区周辺にあったとみられる。これは河道の形成が時間とともに西方向に移動しているためであり、次第に“天の川”岸寄りまで可住域が広がった。

また後期のうちでも、後半期の土器が主流であることから、後期前半には集落の一時的な断絶があつた可能性も捨てられない。

古墳時代初頭～前期 古墳時代初頭～前期の遺構としては 04-1 区の竪穴状遺構 075、および“天の川”西域に位置する岸和田 H24 区竪穴住居がある。ともに庄内式期から布留式期にかけての時期に比定できる。竪穴状遺構 075 は長辺 2.2 m、短辺 1.4 m のやや不整な長方形を呈し、縦半分に 3 基の炉が並び、残りの側に粘性度の高い粘土で貼床を行なっている。工房跡と考えられるが具体的な作業内容は不明である。

当該期の遺構が“天の川”東西両域で確認され、しかも河道から出土する土器は弥生後期に比べてはるかに多い。したがって、古墳時代初頭～前期には集落自体が大きくなり、集落域が“天の川”西域まで拡大、もしくは西域に分散したと考えることができる。しかもその規模は、牛滝川西岸に展開する集落の中でも上位クラスであったと推測する。

また集落内の状況に関しては、遺跡内でも比較的高所にあり、洪水の影響を受けにくい“天の川”西域において、東域よりも調査事例が少ないと云は、発見された当該期の遺構が竪穴住居 1 軒だけであること、そして土器の出土量も劣ることからすれば、集落の主体は從来と変わらず“天の川”東域にあつたといえる。

ところで拡大が想定される集落の痕跡がほぼ残っていない原因として洪水があがり、その証左が多量の土器を含んだ河川跡の存在であることは繰り返し述べている通りである。河道のうち 03-2 区 NR001、04-1 区河道 2・3、09-1 区河道 01・02、10-1 区河道 54、10-2 区河道 60、10-3 区河道 100、19-1 区河道 001 などは、形成時期は不明であるが、埋没はいずれも庄内式期から布留式期にかけてと判断される。そして、集落内への流水は“天の川”に集約されていき、“天の川”東西両域の低位段丘面上も広く安定化する。

古墳時代中期 古墳時代中期においても低位段丘面は安定的である。しかしそれにもかかわらず“天の川”東域では明らかな古墳時代中期の遺構は確認できていない。この東域では土地利用が一時放棄さ

れた可能性がある。

これに対し“天の川”西域では、このたびの調査地点である19-1区で中期中葉の竪穴建物4軒、掘立柱建物5棟の建物群が見つかっている。既述しているように、これらは、日常的な居住空間ではなく、作業内容を異にしている可能性が高い工房と付帯施設であるとみている。それらの建物間に構築の前後はある。なお、これらの建物群は、調査区の北西端付近でまとまって検出されていることから、調査区外に当該期の遺構がさらに広がっている可能性はある。

この建物群から西約50mには、6基の方墳からなる田鶴羽古墳群が広がっている。この古墳群の形成に関しては詳細を得ない点が少くないが、大まかには中期後葉に形成されたといえる。

その一方、19-1区建物群の002竪穴建物や004竪穴建物から出土した土器類とは、総体的にみると須恵器1~2型式分の差がある。古墳と須恵器との個別的な関係が明らかでないので、古墳群の時系列に沿った形成過程が捉えられない。そのことから、建物群との関連についても確定できない。ただし古墳時代中期になって、古墳時代初頭から前期にかけての時期よりも“天の川”西域の利用度がさらに高まったことは認められる。

**古墳時代後期** 古墳時代後期に比定できる遺構は、大町遺跡、田鶴羽遺跡ともに明らかではない。ただ、田鶴羽古墳群から後期の須恵器が出土しているほか、遺跡内の幾つかの調査地点で古墳時代後期の須恵器や埴輪が出土している。19-1区では中・近世耕作土などから須恵器杯身と杯蓋そして埴輪破片32点、10-3区では水田層から埴輪破片1点と104溝から須恵器杯蓋1点が出土している。一方“天の川”東域では03-2区NR001から6世紀代の土器複数点が出土しているというが、これを除くと古墳時代後期の遺物はあまり顕著ではない。

古墳時代中期に引き続いて、後期にも居住域もしくは生産域、そして墓域が形成されていたかは現状では不明である。しかし古墳時代後期の遺物分布からみると、集落が営まれたとすれば中期と同じく遺跡西端付近に位置していたと推測する。

**飛鳥・奈良時代** 飛鳥時代や奈良時代に比定できる上器類も出土しているが、その点数は少なく、弥生時代中期後半から古墳時代中・後期にかけてみられた遺跡の在り方とは異なっている。現状では、飛鳥・奈良時代には土地利用の断絶があったと推定する。

平安時代前半 平安時代および奈良時代でみられた状況は、9~10世紀の平安時代前半にも続く。ただ、こうした消長は大町遺跡、田鶴羽遺跡の固有状況である。周辺の遺跡動向をみると、7世紀代には遺跡数は減少するが、8世紀に入ると回復し、平安時代に継続する遺跡は多い。

**平安時代後半** 平安時代後半とした11世紀~12世紀中葉には、10-1区と10-3区で水田が形成されている。10-1区では北東~南西方向に延びる上幅2m、下幅3mを測る畦と灰色系の粘土・粘質土の水田層が検出された。出土した黒色土器から11世紀代の形成、瓦器椀からは13世紀前葉の洪水による埋没であることが窺われる。

10-3区の“天の川”沿いの谷状地形内においても水田層を検出した。出土遺物から12世紀後半から13世紀前葉にかけて営まれたとみられる。19-2区では中世耕作土を遡る耕作層は確認していないが、平安時代後半になって“天の川”両岸の沖積地にも生産域が拡大された状況が捉えられる。また、低位段丘面に設けられた北西~南東方向に延びる3条の溝は、周辺一帯の耕作に係わる用水路とみられる。いずれも鎌倉時代初期の開削であるが、水田と同じく13世紀前葉に埋没しているので水田の説明とともにここで扱った。

この時期、生活域は不明確であるが、生産域については低位段丘が開発され、後続して沖積地内まで及んでいたと考えられる。

なお、以下の鎌倉時代以降の土地利用変遷については、改めて第3節で取り上げるので、ここでは概要を示すに留める。

**鎌倉時代** この時代の遺構としては、上述の10-3区の用水路、および06-2区の土器溜りと木枠井戸がある。木枠井戸は、出土遺物から13世紀中葉に廃絶したと考えられる。開削時期は不明。

13世紀後葉には廃棄土坑と考えられる土器溜りが形成された。破損した日用の土器類などが多く廃棄されて、青磁や瓦も含まれていた。生活空間が近在している可能性がひとつはあるが、それが日常生活的なものであったかは不明である。

なお10-1区では平安時代後期に形成された水田が洪水によって13世紀前葉に埋没するが、その後14世紀代にかけて畠地になる。

**室町時代前半** 室町時代になると、複数の調査地点で井戸が廃棄される。06-2区、06-3区、07-1区の石組井戸で、いずれも14世紀中葉に埋め戻されている。さらに07-1区では、石列群や墓の可能性が指摘されている土坑も同時期に廃絶している。これらの遺構は“天の川”東岸付近の比較的近距離内に分布しているので、廃絶の原因が共通している可能性は高いものの、具体的な内容までは明らかにならない。

これら14世紀中葉に廃絶する一群に遅れ、19-1区の石組井戸は15世紀前葉なって廃棄される。またそれに先行して14世紀後葉には畦が築かれ、耕作土が形成される。19-1区にみられる“天の川”西城の状況に対し、東域では14世紀の遺構廃絶後には明確な遺構の存在はみられない。

**室町時代後半** 室町時代後半期になると、10-1区では畠地は再び水田に移行している。こうした状況を踏まえれば、この時期の“天の川”東域では水田が広がっていたとみられる。

**近世以降** 近世以降、遺跡内の広い範囲では、府営住宅建設までの間に土地利用に関する大きな変化はなく、水田が基本的な在り方である。ただしそうした状況の中で地點的ではあるが、土地利用に関する変化が2点みられた。ひとつは03-1・2区や04-1・2区周辺で近世後期に行なわれた土地の改変である。これは地形の変化までもたらした大掛かりな改変であった。

いまひとつは、近世末あるいは近代になって行なわれた基盤層にある粘土の採掘である。これにより多数の掘削坑が痕跡となって残った。この粘土採掘は地点が限られていて、採掘坑が認められたのは03-1区、03-2区、04-1区、04-2区、06-2区であった。主に“天の川”沿岸の低位段丘縁辺の粘土が求められていたとみられる。なお粘土の使用目的については不明である。

### (3) 基盤層形成に関する補遺

大町遺跡、田鶴羽遺跡は低位段丘と沖積地に立地しているが、遺構面を形成する基盤層はそうした地形上に形成された河川状堆積である地点も少なくない。それは、洪水など流水により遺跡内に浸食と堆積がもたらされた結果である。

既述したように、流水の痕跡である河道は時間とともに遺跡の東から西に移動し、最終的には“天の川”に集約される。多くの河道からは古墳時代初頭～前期の土器が数多く出土していて、その周辺に生活域を設けることが可能な自然条件下にあったとみられることから、その時期には基盤層は安定していたと考えられる。

その点を検証するために、04-1区の基盤層内出土木片、同区河道3出土木片、03-2区NR001出土木片について平成17年度にAMS年代測定分析を委託した。その基盤層形成時期を捉える根拠となつたAMS年代測定の結果を再度掲載する。なお本書では、『大町遺跡』(2007年)に掲載した測定結果を簡略している。

分析の結果から、次の3点を読み取ることができる。

表37 大町遺跡検出木片のAMS測定成果

試料	地区	出土地点	補正年代(BP)	樹年較正年代(cal)		相対比	$\sigma_{13C}$ (%)	Cord. No.
				cal BC353-cal BC293	cal BP2303-2243			
1	04-1区	基盤層内	2158 ± 40	cal BC230-cal BC218	cal BP2180-2168	0.059	30.41 ± 0.80	IAAA-42292
				cal BC213-cal BC61	cal BP2163-2111	0.42		
				cal BC132-cal BC118	cal BP2082-2068	0.076		
2	04-1区	基盤層内	2174 ± 41	cal BC356-cal BC286	cal BP2306-2236	0.991	30.01 ± 0.98	IAAA-42293
				cal BC358-cal BC281	cal BP2308-2231	0.617		
3	04-1区	基盤層内	2193 ± 41	cal BC258-cal BC243	cal BP2208-2193	0.091	31.96 ± 0.75	IAAA-42294
				cal BC253-cal BC199	cal BP2158-2149	0.291		
4	04-1区	河道底直土	1773 ± 44	cal AD178-cal AD188	cal BP1772-1762	0.049	28.25 ± 0.85	IAAA-42295
				cal AD213-cal AD337	cal BP1737-1613	0.979		
5	04-1区	河道底直土	1957 ± 40	cal BC18-cal BC14	cal BP1968-1964	0.021	31.64 ± 0.78	IAAA-42296
				cal BC0-cal BC83	cal BP1950-2033	0.979		
6	04-1区	河道底直土	2262 ± 44	cal BC393-cal BC354	cal BP2343-2304	0.43	30.94 ± 0.98	IAAA-42297
				cal BC291-cal BC231	cal BP2241-2181	0.562		
7	04-1区	河道底直土	2173 ± 40	cal BC216-cal BC215	cal BP2166-2165	0.007	32.87 ± 0.68	IAAA-42298
				cal BC233-cal BC191	cal BP2183-2141	0.452		
8	03-2区	河道底直土	2222 ± 35	cal BC362-cal BC348	cal BP2312-2298	0.122	27.83 ± 0.65	IAAA-31906
				cal BC319-cal BC270	cal BP2269-2220	0.429		
9	03-2区	河道斜部	1773 ± 33	cal BC262-cal BC228	cal BP2212-2178	0.306	26.97 ± 0.68	IAAA-31907
				cal BC222-cal BC205	cal BP2172-2155	0.143		
試料	詳細			cal AD224-cal AD262	cal BP1726-1688	0.411		
				cal AD277-cal AD336	cal BP1673-1614	0.589		

## 試料詳細

試料1：基盤層（河川状堆積）内出土、04-1区西トレンド113層、試料2とは別個体

試料2：基盤層（河川状堆積）内出土、04-1区西トレンド113層、試料1とは別個体

試料3：基盤層（河川状堆積）内出土、04-1区中央トレンド59層

試料4：河道3底直土出土、04-1区河道3（3層）

試料5：河道3底直土出土、04-1区河道3（1層）、試料6とは別個体

試料6：河道3底直土出土、04-1区河道3（1層）、試料5とは別個体

試料7：河道3底直土出土、04-1区河道3

試料8：NR001底直土出土、03-2区NR001

試料9：NR001西斜部出土、03-2区NR001

第1は、基盤層内出土の3試料は比較的近似した年代を示していて、BC250～BC200年にまとまる  
 第2は、河道出土の試料には年代差があり、河道3の4試料では約500年、NR001の2試料では250年ほどの時間幅がある

第3に、基盤層内出土の3点と河道3出土の1点（試料7）の平均値はおよそBC220年である

これらの点から、04-1区付近の基盤層形成は弥生時代中期中葉であると捉えることができた。基盤層の形成に関わる河道の変遷は、生活空間の確保とも深く関連していることから、少なくとも古墳時代以前における当該地の土地利用を把握する上では重要な視点となる。

## 第2節 古墳時代中期建物群

## (1) 建物群の変遷

4軒の竪穴建物と5棟の掘立柱建物の組合せと変遷については、いくつかの手掛かりはあるものの、決め手に欠けている。そうした状況ではあるが、まずは調査によって確認した遺構間の切り合い関係をもとに、建物間の先後を判断した結果から示す。なおカッコ内は（先行建物→後出建物）を表す。

- 1) 掘立柱建物Bの165・148柱穴が003竪穴建物の縁辺を切り込んでいる(003→B)
- 2) 掘立柱建物Cの050柱穴が003竪穴建物に僅かではあるが切り込まれている(C→003)
- 3) 掘立柱建物Bの069柱穴が掘立柱建物Aの068柱穴を切り込み、また067柱穴でも掘立柱建物Bの掘方が建物Aの掘方を切り込んでいる(A→B)

表38 切り合い関係からみた建物の先後

建物	先←		→後	
	掘立柱建物C	003 竪穴建物	002 竪穴建物	掘立柱建物B
			掘立柱建物A	

以上の3点の関係を整理すると、掘立柱建物C→003 竪穴建物→掘立柱建物B、掘立柱建物C→掘立柱建物Aという2列の変遷を捉えることができる。

出土遺物の視点からみた場合、竪穴建物の時期を示すのは002 竪穴建物覆土内の須恵器高杯（第19図1）と004 竪穴建物186 土坑出土の土器3点（第19図8・9・10）程度である。

003 竪穴建物出土の布留式甕（第19図2）は口縁部の小破片であるので004 竪穴建物の布留式甕（第19図8）と比較するのは難しい。また須恵器高杯脚部（第19図7）もまた時期比定が難しいことは既述の通りである。

なお002 竪穴建物の須恵器高杯（第19図1）はTK73型式、あるいはその1段階前、004 竪穴建物の甕は（第19図8）は布留式新相に位置付けられることも既に述べた。

次いで、建物群の配置に関し、重複関係に視点を当てて同時存在の可否について確認を行なった結果を表39にまとめた。

表39 建物群の重複関係

掘立柱建物	A	B	C	D	E	○ 同時存在はあり得る
	倉	倉	小屋	小屋	小屋	
002	○	○	○	○	●	△ 近接しているが、同時に存在することが可不可以はない
003	○	●	●	△	○	● 重複あるいは至近距離にあるため同時存在は不可である
004	○	△	△	●	○	
092	○	○	○	○	○	

また建物群の配置という点では、建物の方位軸の異同に基づいて組み合せを求める方法を探ることもある。ただし本遺跡の場合、古代官衙的な建物群とは異なり整然とした配置であったとは想定できず、よって有効的とは考え難い。ただし、参考として提示しておく。

表40 建物の方位軸

	竪穴建物	掘立柱建物
正方位	002, 003	A, B, D
斜方位	004, 092	C (?)、E

4軒の竪穴建物のうち、いずれの掘立柱建物とも組み合う可能性があるのは092 竪穴建物である。それは、最も近い掘立柱建物Aでも15mほどの距離が開いていることによる。このことは、この092 竪穴建物と002・003・004 竪穴建物の一群とを同じ空間域に所在するとみてよいかという疑問を生じさせる。先にも記したように、092 竪穴建物の南から東にかけての調査区外に、092 竪穴建物と空間域を共有する建物群が広がっている可能性は高い。したがって、建物群の構成を検討する上で、一旦092 竪穴建物を外して進めることとする。

前提となるのは、先に示した切り合い関係からみた建物の変遷と重複関係に基づく同時存在の可否である。さらに考慮を入れておくこととして、5棟を一律に掘立柱建物と呼んではいるが、東柱のあるA・Bを倉、東柱が認められないC・D・Eを小屋と構造の違いから機能分けした点である。したがって建

物群の基本単位としては竪穴建物・倉・小屋の組合せを想定する。

以上のような前提に基づくと、003 竪穴建物は先後関係のある掘立柱建物Cや建物Bとは組み合わない。したがって倉としては掘立柱建物A、小屋ではDかEが組成対象となる。

ところで、倉と認定した総穴建物は掘立柱建物A・Bの2棟だけなので、3軒の竪穴建物のうちの1軒は少なくともこの調査区内では倉を併設していない。その竪穴建物がいずれであるか判断は難しいが、004 竪穴建物には2基の貯蔵穴が付設されていて、倉の存在が不要であったとの想定に立てば、掘立柱建物Bと組み合うのは002 竪穴建物ということになる。よって残る掘立柱建物の候補は、小屋とした建物Cか建物Dである。

004 竪穴建物と併存する可能性のある掘立柱建物はB・C・Eであるが、掘立柱建物Bとは組み合わないので、小屋とみる掘立柱建物C・Eのいずれかが対象である。このうち掘立柱建物Cは掘立柱建物Bと先後関係があるので、建物Bを付設する002 竪穴建物とは組み合わない。よって、建物Cは004 竪穴建物との組み合わせとなる。

のことにより、002 竪穴建物は掘立柱建物BとD、003 竪穴建物は掘立柱建物AとEとの組み合せになるとともに、切り合い関係に基づけば、表41に示すように3段階の変遷となる。なお3段階の時間幅については、出土遺物による限りほとんど差がない。須恵器1型式か、差があつても2型式程度であったとみる。

表41 建物群の構造と変遷

	竪穴建物	掘立柱建物		出土上器類の時期
		倉	小屋	
第1段階	004 竪穴建物		掘立柱建物 C	布留式新規
第2段階	003 竪穴建物	掘立柱建物 A	掘立柱建物 E	
第3段階	002 竪穴建物	掘立柱建物 B	掘立柱建物 D	～TK73型式

## (2) 竪穴建物の機能

4棟の竪穴建物の特徴としては、共通した点と個別的なものとがある。共通したものとしては、

- ・1辺3~4m台で小型である
- ・炉や窓が認められない
- ・小型の柱穴が壁際を巡る

という点があがる。一方、竪穴建物の個別的な特徴としては、

- ・「ベッド状遺構」と呼ばれるテラス部を付設している(003・004)
- ・作業用の台石を据えている(003)
- ・貯蔵穴を付設している(004)

などの点がある。なお作業用台石の設置については、004 竪穴建物の215土坑が003 竪穴建物の台石設置掘方とほぼ同規模であり、しかも固定用と思われる砂シルトも残っていたことから、台石を据えた痕跡であったとみられる。

表42 西大路遺跡のテラス部付設建物

遺構	規模		建物構造			遺物	備考	時期
	長辺	短辺	テラス	柱穴	火廻			
1370-OD	6.3	6.05	4周	4主柱穴	か		南辺に貯蔵穴	古墳初頭
1384-OD	6	5.9	両脇	4主柱穴	か	瓦石	南辺に貯蔵穴	古墳初頭

以下に、大町遺跡、田鶴羽遺跡の周辺遺跡を中心に、こうした特徴がみられる建物を抽出し、比較を行なう。なお今回の調査成果に関する検討であることから、比較対象は主として古墳時代に限る。

**テラス部（ベッド状遺構）** テラス部付設建物については周辺遺跡にも類例がある。大町遺跡と同じく牛滝川流域の西大路遺跡があり、和泉市域の府中遺跡、和氣遺跡、古池北遺跡、豊中遺跡でも確認されている。

西大路遺跡ではテラス部を付設した古墳時代初頭の竪穴建物が2軒発見されている。その在り方をみると、2軒のテラス部付設建物を含む3軒の竪穴建物が分散し、土坑、土器溜り、溝、小穴などが40mほどの範囲に集まっている。テラス部のない竪穴建物は1辺5.7mの平面方形を呈していて、2軒のテラス部付設建物より規模が小さい。土器溜りは埋没過程の河道内に土器を投棄、あるいは配置した遺構で、壺・甕・高杯・鉢・製塙土器など1500破片、推定320個体を数える。集落構造を具体的に読み取ることはできないが、土器溜りの土器の多さからは集落規模の大きさを推定できる。そのこととテラス部付設建物が相対的に大きいという規模との相関性から、西大路遺跡においては集落内での階層重層化が建物構造に反映されていたと推定できる。

西大路遺跡を除く周辺の遺跡では、テラス部付設建物は集落内に散在する状況を示している。これに対してテラス部付設建物が多くみられる集落もある。堺市下田遺跡が該当する。

下田遺跡におけるテラス部付設建物の状況については、報告書をもとに表43にまとめた。竪穴建物44軒のうちテラス部付設建物は10軒を数え、時期不明の3軒を除いた7軒はいずれも古墳時代前期に比定されている。

10軒のテラス部付設建物のうち、報告書から属性を得ることができなかったSA2084を除く9軒についてみると、まず規模の点で大町遺跡19-1区の003・004竪穴建物と同じく長辺4m未満である建物は3軒を数える。ただ、SA308は長辺4.9m、SA18とSA80は長辺5.1mなので、比較的小型建物が多い。そうした中でSA2100は規模が大きい。

柱穴に関しては、ほとんどが4本柱で上部構造を支えている。この点は003・004竪穴建物と異なる。また明確な掘方のある炉が認められたのは、規模の大きなSA2100の1軒だけであった。ただし、SA2100を含めて4軒では掘方ではないが床面自体が被熱し、赤化が認められる範囲があり、床面で直接火を焚いた痕跡であるとみられている。報告書ではこれを「被熱遺構」と呼んでいる。003・004竪穴建物ではこうした「被熱遺構」も認められなかった。

こうしてみると、規模に関しては大町遺跡の2軒と比較的類似している建物もあるとはいえ、柱から推定される建物構造や火炉については状況が異なっている。

下田遺跡内におけるテラス部付設建物は「布留3」期とされる布留式後半期を除き、布留式前半期の

表43 下田遺跡のテラス部付設建物

時期	遺構	規模		建物構造			備考
		長辺	短辺	テラス	柱穴	火爐	
下田Ⅲ	SA2226	3.4	3.3	4周	2主柱穴	なし	
朝集殿下層	SA18	5.1	4.8~	現段片側	4主柱穴	被熱遺構5ヶ所	東半調査区外
朝集殿下層	SA308	4.9	4.8	推定4周	4主柱穴	現状不明	西半別建物重複、細砂礫敷範囲
朝集殿下層一小若江北	SA2100	7.7	7.1	3方向	4主柱穴	炉1、被熱遺構5ヶ所	
小若江北	SA80	5.1	—	断面確認	推定4主柱穴	現状不明	南2/3調査区外
小若江北	SA29	6.2	5	4周	4主柱穴	なし	細砂礫敷範囲
小若江北	SA2177	6.6	5.7	3方向	推定4主柱穴	現状不明	中央に擅乱
不明	SA2051	3.8	3.1	ほぼ4周	現段4柱穴	被熱遺構1ヶ所	
不明	SA2059	3.8	3.8	ほぼ4周	なし	被熱遺構1ヶ所?	
不明	SA2084	(詳細不明)					

表44 下田遺跡におけるテラス部付設建物の割合

	下田Ⅲ	朝集殿下層	小若江北	布留3
当該期の建物数	4	6	18	2
テラス部付設建物数	1	4	3	0
・2時期にわたる場合については、偏りがあるものは主体的な時期、2時期同等のものは先行時期を取り上げた				

前・中・後葉いずれの時期にも存在が認められる。「朝集殿下層」期で比率が高まるが、平均的にみると1時期20~30%程度、およそ4軒に1軒の割合で存在した様相が想定できる。

しかし一部に規模の大きなものがあるとはいえ、多くは平均的、もしくは平均以下の規模である。規模の点を除けばテラス部付設建物を性格付ける要素は見出し難いが、通有の住居と捉えることには違和感がある。そしてこの下田遺跡の状況は、テラス部付設建物が集落内の中核的な住居であるとみた西大路遺跡と異なる。

被熱遺構に関していえば、あえて掘方を設けないことで建物自体の機能が果たされたとの見方もできる。それはまたテラスの付設にも当てはまる。

貯蔵穴 西大路遺跡の2軒のテラス部付設建物にも貯蔵穴は付設されていたが、さらに大町遺跡004 竪穴建物の様相と類似した事例がある。岸和田市畠遺跡竪穴住居02である。

竪穴住居02は長辺7.8m、短辺7.3mの方形を呈する。4主柱穴を有し、床中央に縦横1.5mほどの範囲で焼土が広がっている。貯蔵穴は焼土を挟んで建物の西壁と東壁付近の2ヶ所に設けられている。東貯蔵穴は上端が長辺0.9m、短辺0.9mの方形を呈し、深さ0.25mを測る。一方、西貯蔵穴は上端長辺1.3m、短辺0.8mの長方形で、深さは0.2mを測る。配置や形状が極めて規格的であり、004 竪穴建物の貯蔵穴と共通している。

台石 台石を設置した竪穴建物あるいは構造物としてまず想起されるのは、鍛冶あるいは玉作りに関する工房である。具体例をあげれば、前者には柏原市大畠遺跡鍛冶炉3、玉作りに関連する建物には東大阪市鬼塚遺跡030 竪穴建物がある。後者は1辺4.8mの隅丸形を呈し、建物の中央やや北寄りに直径65cmほどの閃緑岩の台石が据えられていた。炉などの火爐ではなく、2本柱である。

先にみた下田遺跡でも、SA2232で1辺21~22cmの和泉砂岩製台石が検出されている。建物規模は長辺4m、短辺3.5mほどで、2本柱である。

大町遺跡003 竪穴建物については、出土遺物から建物内で行なわれた生産活動の内容を読み取ることはできない。炉が付設されていないことから鍛冶と関連するとは考えられない。また石材破片が全く出土していないことから玉作りでもない。床面に設置された礎は砥石ではなく、敲打作業の台として使用されたものである。しかも003 竪穴建物に先行する004 竪穴建物においても同様の台石が使用されていた可能性がある。叩くという作業を作う生産活動が継続されていた公算が高い。

竪穴建物の機能 調査成果の報告時に、竪穴建物については「作業場」であったと既に推定した。それを証明するための検討を行ったが、直接的な類例は見当たらなかった。

そうした中で鍵となるのは下田遺跡の小型テラス部付設建物の評価である。住居跡と断定してよいか、被熱遺構や出土遺物、そして集落内での在り方なども含めて、検討を重ねることが必要である。

テラス付設構造に関していえば、小型、通常の炉を有さないなどの特徴を含めた建物機能の観点から整理することが肝要である。それにより大町遺跡の工房の実態解明への見通しがつく。さらに、建物内の生産活動とそれを基盤に形成された古墳群との関係把握につながる。

### (3) 田鶴羽古墳群との関係

19-1区の建物群の位置付けに関して、本節の最初に3点の検討項目をあげた。そのうちの第1点目

の建物群の変遷を基礎に、第2点目の作業場であるとの竪穴建物機能の再認識を前提として、第3点目について検討を進める。

これに当たっては、建物群と古墳群との時期差が課題になることはいうまでもない。改めて、それぞれの形成期間に係る要素を確認すると、

- ・建物群は3段階に分かれ、第3段階がTK73式、あるいは1段階遡る
- ・建物群1～3段階の時間幅は須恵器1型式、もしくは2型式程度とみられる
- ・田鶴羽古墳群はTK23を主体とし、さらに遡る可能性もある

・古墳群出土の須恵器の中には6世紀代に下るものがあり、古墳群形成の下限を示す可能性があるとなる。こうした時間的要素を建物群と古墳群との関係で再整理すると、建物群が先行する、建物群と古墳群とが重複する時期はない、建物群と古墳群との時期差は須恵器1型式から2型式分である、となる。これらのことから、建物群と古墳群とを無条件に直結できないことが示唆される。

しかし至近距離にある建物群と古墳群が全くの無関係であるとしても難しい。両群の時間的間隔が短ければ、古墳群を形成するために準備された作業場との捉え方も可能となる。仮にTK23型式の須恵器が古墳群の最終期を示しているのであれば、そうした考えも成立立たないではない。しかし、上記した現時点の調査成果からはそうした仮定は立て難い。

とすれば可能性が高いのは、古墳群の基盤を形成した集団の生業場であるとの理解である。古墳群を築く工人集団の作業場群とみるのではなく、時系列に沿って考えると、工人集団が社会的な基盤となって古墳群の形成に至ったと捉えるのが適切といえる。

なお今回の調査で発見した竪穴建物4軒がいずれも作業場であるとすれば、集団の生活空間の位置は未検出のままである。しかしこれまでの調査成果からすると、19-1区の西か南に広がる可能性が高い。これに対して既述したように、“天の川”東域に位置する可能性は低い。

なお、久米田古墳群との関係についてもみておきたい。久米田古墳群は9基の古墳から構成されているが、そのうちの5基について主として埴輪、そして土器類から久米田貝吹山古墳—風吹山古墳—無名塚古墳—持ノ木古墳—女郎塚古墳という変遷が示されている。

そのなかで、持ノ木古墳に供献された須恵器はTG231・232型式以前に遡るとの位置付けがなされている。一方、出土している埴輪は、多くが有黒斑だが外面調整B種ヨコハケで、また貼付け口縁部もみられる。突堤間隔が確認できる資料では10cmを測るという（突堤下辺-上辺間9cm）。こうした特徴からは、須恵器に付された時期観よりも若干下る可能性がある。こうしたことを踏まえて19-1区の建物群と久米田古墳群との時期的な関係をみると、持ノ木古墳と女郎塚古墳が平行するとみられる。

19-1区では古墳時代前期に遡る建物は確認していない。しかし岸和田H24区では古墳時代初頭の竪穴住居が見つかり、04-1区でも工房跡とみる竪穴状遺構を検出している。したがって大町遺跡の集落は久米田古墳群形成と平行しているともいえる。

表45 大町遺跡19-1区建物群と周辺古墳群の動態

須恵器型式	～ON231	TK73	TK216	TK208	TK23	TK47～
004 竪穴建物群						
19-1区建物群	003 竪穴建物群					
	002 竪穴建物群					
田鶴羽古墳群					.....田鶴羽古墳群.....	
久米田古墳群	持ノ木古墳	女郎塚古墳				

とはいっても、この集落から久米田古墳群の被葬者系列が輩出されたとは考え難い。むしろ、古墳群を長年にわたり支えた集団・集落であったとみるのが妥当である。さらに推論を重ねるなら、上述したように、その社会的職掌を基盤として、田鶴羽古墳群が成立したといえる。

### 第3節 中世の大町遺跡、田鶴羽遺跡

#### (1) 遺跡の中世遺構

今回の調査地点を加え大町遺跡および田鶴羽遺跡において、大阪府教育委員会により15地点、岸和田市教育委員会は2地点で発掘調査を実施している。そうしたなか、今回調査を行なった19-1区では古墳時代中期の建物群、それに先行する河道、さらに中世の井戸と畦、耕作土を検出したが、このように複合的な時代の遺構が発見された調査地点は数少ない。それは、中世遺構が認められる範囲が遺跡内でも限定的であることに起因している。

また中世の遺物についても、今回の調査では19-1区の154畦から数多くの瓦質・土師質の羽釜や土釜が出土し、推定個体数は90点以上にのぼる。これまでの調査にあっても、限定的な範囲で多量の遺物が出土した遺構は確認されている。例えば06-2区の土器溜り45では、破損した土釜、土師器、瓦器、青磁などの土器類、さらに瓦や石が集積されていた。しかしこうした多量廃棄に対する説明はなされていない。

その原因を端的にいえば、遺跡内における中世の実態解明に関心が起きなかったことによる。さらに、これまでの成果が整理されていなかった点にも原因はある。そこで本章第1節で検討課題として示した

表46 大町遺跡、田鶴羽遺跡の主な中世遺構

時代	調査区	遺構とその特徴
平安後半	10-1区 水田・畦：出土遺物から11世紀代～13世紀前葉の形成。畦は上幅2mで方位に斜交	
	10-3区 水田：出土遺物から12世紀後半～13世紀代の形成	
鎌倉	溝101：幅1.6m、現深0.6～0.7m。土師質羽釜出土。溝104と同時期。用水路と考えられる	
	10-3区 上坑2：幅0.4m、現深0.6～0.7m。溝101・104と同時期。用水路と考えられる	
	溝104：幅1.5m、現深0.3m。出土瓦器種類から13世紀前葉に比定。用水路と考えられる	
	木枠井147：楕円内壁に木板で120×0.8mの方形形を組み底に曲物。底TP20.2m、13世紀中葉に廃絶	
室町前半	土器溜り45：長径2.2m。土釜・羽釜・瓦器・土師器・青磁・紀伊系土器など出土。破損品集積。13世紀後葉	
	高地：13世紀前葉の洪水による水田廃絶後から14世紀代にかけて形成	
室町前半	石組井148：現底1.3mの石積み。底TP20.5m、14世紀中葉に廃絶	
	上坑32：廃棄土坑。長径8.0m以上。漆器碗、土師質羽釜、瓦器、土師器、瓦など出土。14世紀中葉	
	石組井153：在原岩河原石積み。底TP20.8m、14世紀中葉に廃絶	
室町前半	石組井15：瓦器・土師器・瓦・青磁などが出土。底TP19.7m、14世紀中葉に廃絶	
	石列槽：直線的に並べた河原石碎2ヶ所。右列8から14世紀中葉の瓦質羽釜出土。建物の区画、基礎の可能性	
	上坑2：東西2.5m以下・南北1.4m。河原石・土器片出土。屋敷場の可能性。14世紀中葉	
室町後半	溝16：埋戻し跡で瓦器・瓦・瓦質羽釜・土師器組合を列状に置く。14世紀中葉廃絶（遺物は12世紀中葉から）	
	石組井146：河原石積み。現底TP21.5m、溝147付設。15世紀前葉廃絶	
	畦154：瓦質羽釜・土師質羽釜・上蓋合計90個体以上含まれる。14世紀後葉に廃成	
研修上：出土遺物より14世紀後葉の形態と判断（12世紀中葉。もしくは2時期の可能性）		
室町後半	10-1区 水田：回復	
<時代の大略年代> 平安後半：11世紀～12世紀中葉		鎌倉：12世紀後葉～14世紀前葉
室町前半：14世紀中葉～15世紀中葉		室町後半：15世紀後葉～16世紀中葉

表47 大町遺跡検出の井戸

調査地点	遺構番号	構造	現深(m)	底標高(TP)	廃絶時期	出土遺物	備考
06-2区	47	木組	0.5	20.2	13世紀中葉	土釜、瓦器、瓦	井戸底に方形枠を組み曲物設置
06-2区	48	石組	1.7	20.5	14世紀中葉	瓦質羽釜、瓦器、土師器、青磁	井戸底に木組枠、石組高1.3m
06-3区	53	石組	1.2	20.8	14世紀中葉	土師器皿、瓦器皿	井戸底に木桶、石組高0.7m
07-1区	15	石組	2	19.7	14世紀中葉	土師器、瓦器、青磁、瓦	井戸底に木臼、石組高1.6m
19-1区	146	石組	1.6	21.5	15世紀前葉	羽釜、瓦質土器、土師器、須恵器	井戸幹不明、石組高1.3m

表48 大町遺跡、田鶴羽遺跡の中世土地利用の変遷

時代	大略年代	“天の川”東域			“天の川”西域		
		10-1区	06-2区	06-3区	07-1区	10-3区	19-1区
平安後半	11世紀	↓水田(～13前葉)				↓水田(～13前葉)	
	12世紀中葉						
	12世紀後葉						(耕作土)
	13世紀前葉					溝/101 溝/102 溝/104	
鎌倉	13世紀中葉	↓畠地	↑木組井戸/47				
	13世紀後葉		土器番り/45				
	14世紀前葉						
	14世紀中葉		↑石組井戸/48 廐棄土坑/32	↑石組井戸/53	↑石組井戸/15 石列群 土坑(墓)/2 溝/16		
室町前半	14世紀後葉						↓畦/154 耕作土
	15世紀前葉						↑石組井戸/146
	15世紀中葉						
室町後半	15世紀後葉	水田回復					
	16世紀中葉						
凡例	↓:形成期、↑:廐棄期						

時代の大略年代 [平安後半] 11世紀～12世紀中葉

[鎌倉] 12世紀後葉～14世紀前葉

[室町前半] 14世紀中葉～15世紀中葉

[室町後半] 15世紀後葉～16世紀中葉

ように、中世遺構に関してこれまでの調査成果を改めて整理する。

まず、中世の遺構を抽出すると、検出された調査区は6地点を数える。そのうち4地点が“天の川”東域にあり、10-1区を除くと“天の川”東岸の南寄り付近に集中している。

10-1区では平安時代後半から鎌倉時代前半にかけての水田、13世紀中葉から14世紀代の畠地、その後の水田という変遷にみられるように、耕作に関連した遺構のみが広がっていた。“天の川”西域に位置する10-3区や19-1区でも、後者では石組井戸が存在しているが、中世の実態を物語るのは耕作関連の遺構であり、10-3区の用水路もまたそうした遺構の一部である。

こうしてみると、19-1区の石組井戸も含め、井戸が日常生活の飲料用のために設けられたものであったか確認しておく必要が生じる。

これまでに検出された井戸は4地点5基を数える。06-2区井戸47が唯一の木組井戸で、残りはすべて石組井戸である。これらの井戸に関して留意される点をあげる。

井戸47の底には木材で方形枠が組まれている。その内に納められた曲物は檜の薄板を桜皮で固定したもので、「特別に作った可能性も考えられる」との報告者の所見である。井戸48では、埋め土から「釣瓶に使用したと考えられる」檜製板2枚が出土したとされている。井戸53では、埋め戻しの最終段階で土師器皿9枚と瓦器皿5枚が並べ置かれていた。井戸15でも埋め戻しの最終段階で長さ70cm、幅23cm、厚さ15cmほどの礫が据えられていた。井戸53や井戸15にみられる廐棄時の儀礼からすると、耕作用の「野井戸」であった可能性は低い。また井戸48で検出された釣瓶もまた飲料用水を汲み上げたことを示唆する。同様に、井戸47における井戸枠からも農耕用の井戸であった可能性は低くなる。

これらに対して19-1区の井戸146は、底部に井戸枠の存在を示しているとはいえ、具体的な構造は不明である。さらに調査区内の状況においても、耕作域以外の空間が広がっていたとは考えられない。よって井戸146については農耕用井戸であったとみる。

とすれば、上記したように“天の川”東岸南寄り、そして大町遺跡南東端付近から調査区外方向にか



第63図 古墳時代遺構位置



第64図 中世遺構位置

けて居住に係る施設が存在していたと考えられる。そしてその施設部分を除いた遺跡内の大半の範囲では、平安時代後期以降に水田化が進められたと考える。

## (2) 遺跡内の動向

大町遺跡、田鶴羽遺跡における中世に関する調査成果を再整理して、時系列に沿った動向として表48にまとめた。そこからは、次の2点を指摘することができる。

- 1) 平安時代後期に広い範囲で水田が営まれた
- 2) 14世紀中葉に井戸の廃絶と多量の破損品の廃棄があった
- また局所的な状況の可能性もあるが、19-1区の状況を踏まえると、
- 3) 14世紀後葉に水田整備が進められた
- 4) 15世紀前葉に前時期に開発された耕作地に伴う井戸が廃棄された

という2点もある。調査成果の半数以上はこの遺跡内で行なわれた耕作に関する動向である。だがしかし1)、3)については遺跡周辺地域の動向とも関わっていて、背後には広域開発、あるいは中城再開発という政治的・社会的要因が存在している。

2)については、明らかに地域情勢と関わる。また3)と関連する珪塗土内の多量の羽釜・土釜は、2)の状況の一部とも考えられる。

また4)に関しては、井戸の廃棄なのか、それとも耕作地を含めた廃絶なのか判断の決め手を欠くが、耕作の休止があったことを否定する根拠も見当たらない。

今木廃寺跡では園池状遺構からコンテナ300箱近くの瓦、羽釜をはじめとする土器類が出土し、14世紀末に破壊された近在の墓地から投棄されたものと推定されている。しかし19-1区の154珪でも同様の状況が認められたことから、今木廃寺跡における多量の羽釜の使用と廃棄に対する従来の見解を見直さねばならない。

この今木廃寺跡の調査結果も含めて、14世紀中葉から14世紀末、あるいは15世紀前葉までの間に若干の時間幅はあるが、この地域の情勢と照らし合わせてみる必要はある。例えば、建武3・延元元(1336)年には八木城の籠城戦、觀応3・正平7(1352)年には熊野街道沿いの松村と加守で合戦があった。こうした出来事が土地や建物に影響を及ぼし考古学的な痕跡を残したか、という点に関して考古学的な判断は難しい。しかし、周辺遺跡の動向とともに、地域情勢も併せて整理することにより、調査成果を地域の中に還元できる。

## (3) 周辺遺跡の動向

大町遺跡、田鶴羽遺跡における12世紀から15世紀にかけての時期、すなわち中世の時期に関するこれまでの調査成果を時系列に沿って整理した。その結果、11世紀から12世紀前半に当たる平安時代後半期の水田、14世紀中葉の日常生活用井戸の廃棄や廃棄物処理用遺構の形成という状況を、遺跡の広い範囲に及ぶ動向として捉えることができた。ことに後者については、13世紀中葉の井戸廃棄や後葉の土器溜りの存在という06-2区の局地的な状況とも合わせて、遺跡内に生じた居住空間の形成と廃絶を間接的ではあるが示している。

大町遺跡、田鶴羽遺跡では、そうした空間が断続的もしくは地点を移しつつ13世紀中葉から14世紀中葉にかけて形成されたとみられる一方で、水田を中心とした耕作地が広い範囲で営まれ、14世紀後葉以降にはさらに拡充が進んだとみられる。

そうした大町遺跡、田鶴羽遺跡の調査成果を地域の中に還元するために、その成果と周辺遺跡の当該時代の動向を重ね合わせてみていく。周辺遺跡として対象とするのは牛滝川の東・西岸に分布し、牛滝街道あるいは熊野街道からも比較的至近距離にある10遺跡とする。

表 49 周辺遺跡の動向

	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀
大町遺跡 田鶴羽遺跡	広範囲で水田	中葉：井戸・廃棄 後葉：廃棄遺構	前葉：一部で墓地 中葉：井戸・廃棄、廃棄遺構 後葉：畦・耕作上	前葉：井戸・廃棄 後葉：墓地が水田に戻る
箕上路遺跡			中葉：井戸、小穴	整地（集落域拡大？）、水田
下池田遺跡		井戸（宅地近在）、水田	後葉：土坑、小穴 溝、瓦溜り	埋地区画溝
西大路遺跡		中葉：掘立柱建物（主副屋）・区画溝・井戸、土坑、溝 後葉：掘立柱建物・区画溝	前葉：井戸、土坑 中葉：区画溝	
山ノ内道路			水田	耕作地
山直北遺跡		溝、耕作庭		
田治米宮内遺跡		中葉：水田（整地層、畦畔）		
上フジ遺跡				耕作地、溝
二俣池北遺跡		畦畔、溝、小溝、土坑、小穴		
黒石遺跡		掘立柱建物、井戸	土坑、溝 中葉：耕作痕	耕作地
山直中遺跡	後半：掘立柱建物・柵列・井戸・溝、土坑、小穴	前半：掘立柱建物	後半：水田、溝、土坑	前半：水田、溝、土坑

このなかで、最も遅る時期の屋地が認められたのは山直中遺跡である。溝と柵列で囲まれた2棟の掘立柱建物、そして溝を挟んで1棟の掘立柱建物が発見され、12世紀後半に比定されている。13世紀に入ると居住空間の存在が直接、あるいは間接的に示された遺跡が多くなる。山直中遺跡では引き続いで掘立柱建物が設けられた。建物の存在が新たに認められた遺跡としては西大路遺跡、黒石遺跡があり、井戸の存在などから間接的に想定できる遺跡には大町遺跡、田鶴羽遺跡のほか下池田遺跡もある。こうした居住空間の形成と平行して、下池田遺跡をはじめ山直北遺跡、田治米宮内遺跡、二俣池北遺跡では13世紀代に水田化が進められている。

こうした状況は14世紀代にも続いている。こうしたなか、大町遺跡、田鶴羽遺跡では中葉になると居住空間に関連した遺構の廃棄がみられ、下池田遺跡でも同様の状況が起きている。そして15世紀になると、各遺跡で水田を主体とした耕作地化が進められた。

こうしてみると、大町遺跡、田鶴羽遺跡における13世紀から14世紀中葉にかけての居住空間の形成と廃絶は、地域内での特異事例ではないことが判明する。改めて地域動向を概観するなら、13世紀代から14世紀前半にかけて地域有力者の屋地形成が顕在化する、14世紀後半期を中心に以降に居住空間が移動する、15世紀以降水田の拡張・整備が進められる、という点を指摘することができる。

## 参考文献

### 参考文献

#### 〔論文〕

酒井清治 「須恵器生産のはじまり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集 2004年

積山 洋 「大阪湾沿岸の漁撈・製塩集団と広域交流」『古墳時代の海人集団を再検討する -「海の生産用具」から20年- 発表旨』 2007年

續伸一郎 「大阪の瓦質土器」『第26回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着』 2007年

續伸一郎 「堺環濠都市遺跡から出土した“掘る”“卸す”“焼き物”『備前歴史フォーラム“掘る”～播磨からみえる中世の社会～』 2010年

納富當天 「泉州久米寺について」『金澤文庫資料の研究 稀観資料編』 1995年

廣田浩治 「和泉国地域史のなかの岸和田城・岸和田古城」『ヒストリア』第237号 2013年

三好 玄 「和泉北部における古墳時代の手工業生産」『ヒストリア』第229号 2011年

三好 玄 「和泉地域」『古代学研究』199号 2013年

三輪真嗣 「和泉国久米田寺の律僧集団についての予備的研究」『金澤文庫研究』第344号 2020年

森本 徹 「地域首長墓と初期群集墳」『大阪府立近づ飛鳥博物館 開報19』 2016年

〔単行本〕

泉佐野の歴史と今を知る会（編）『地域論集V 南北朝内乱と和泉』 2015年

泉佐野の歴史と今を知る会（編）『史料集5 和泉の中世城郭』 2020年

古代学研究会（編）『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』 2016年

〔報告書〕

大阪府教育委員会『今木庵寺跡発掘調査概要』 1985年

柏原市教育委員会『大県遺跡』（柏原市文化財概報1988-II） 1988年

岸和田市教育委員会『久米田古墳群発掘調査報告2』（岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書12） 2014年

岸和田市教育委員会『大町遺跡』（岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書14） 2015年

堺市教育委員会『下田遺跡発掘調査概要報告』（堺市文化財調査概要報告第105冊） 2005年

財團法人大阪府埋蔵文化財協会『西大路遺跡』（（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第23輯） 1988年

財團法人大阪府埋蔵文化財協会『今木遺跡』（（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第36輯） 1989年

東大阪市教育委員会『鬼塚遺跡第31次発掘調査報告』 2016年

#### 【表4 文献】

【箕土路遺跡】財團法人大阪府埋蔵文化財協会『箕土路遺跡』 1987年

【下池田遺跡】大阪府教育委員会『下池田遺跡』 2008年、財團法人大阪府文化財センター『下池田遺跡』 2009年

【西大路遺跡】財團法人大阪府埋蔵文化財協会『西大路遺跡』 1988年

【山ノ内遺跡】財團法人大阪府埋蔵文化財協会『二俣池北遺跡・上フジ遺跡』 1989年

【山直北遺跡】財團法人大阪府埋蔵文化財協会『山ノ内遺跡II他』 1990年、岸和田市教育委員会『山直北遺跡』 2000年

【田治米宮内遺跡】岸和田市教育委員会『田治米宮内遺跡の調査』 1998年

【上フジ遺跡】財團法人大阪府埋蔵文化財協会『山ノ内遺跡II他』 1990年、『山ノ内遺跡』 1992年

【二俣池北遺跡】財團法人大阪府埋蔵文化財協会『二俣池北遺跡・上フジ遺跡』 1989年

【黒石遺跡】財團法人大阪府埋蔵文化財協会『黒石遺跡』 1990年

【山直中遺跡】財團法人大阪府埋蔵文化財協会『山直中遺跡』 1988年、『山直中遺跡III』 1998年、岸和田市教育委員会『山直中遺跡』 1996年

## 観察表

遺物 番号	出土遺構 番号	出土遺構 ・土層	種別	器種	口径・器高はか	形状はか	調整	図版 番号	実測 番号
1 19	002 穴式建物 覆上	須恵器	高杯	(底径) B10.0 (高) b7.0	底部に削り出し突線1条。端部は〈外面〉タテヘラケズリ。杯部下にユビナデ(内面)ユビナデ(底)ヨコヨコ(縦目横断に残る)	13 1			
2 19	003 穴式建物 覆上	土器	布留甕	(口径) B13.2 (高) b3.4	口縁部はぼ直線的に外傾し、端部〈外面〉劣化のため調整不明(内面)劣化 内面肥厚	13 12			
3 19	003 穴式建物 覆上	(接合部 住)	土器	高杯 B2.6 (高) b7.6	底部を欠いた脚部の破片。脚部上〈外面〉劣化のため調整不明(内面)劣化 端を杯部に挿入する形態	14			
4 19	003 穴式建物 覆上	土器	製塙土 器	(口径) B11.6 (高) b5.2	頭部から屈曲し口縁部短くやや外反。脚部丸味あり。2次焼成により劣化	13 13			
5 19	003 穴式建物 覆上	土器	製塙土 器	(口径) B7.1 (高) b3.3	頭部丸味乏しい。口縁部僅かに外反。2次焼成。積山日顕	13 11			
6 19	003 穴式建物 覆上	土器	製塙土 器	(口径) — (高) b4.5	頭部直線的に外傾。2次焼成により〈外面〉劣化のため調整不明(内面)ユビナデ(内面)劣化	13 10			
7 19	003 穴式建物 覆上	須恵器	(不明)	(口径) — (高) b10.0	底部を欠いた脚部の破片。底部に向に親らしく開く。やや焼成不良	13 15			
8 19	004 穴式建物 186 上坑	土器	布留甕	(口径) B14.4 (高) b13.2	口縁部僅かに内済し端部内面肥厚。脚部は僅く矢口	14 9			
9 19	004 穴式建物 186 上坑	土器	甕	(口径) B13.8 (高) b10.3	口縁部は更に直線的に外傾し端部やや尖り気味。脚部跡形に近い	14 5			
10 19	004 穴式建物 186 上坑	土器	直口壺	(口径) B12.2 (高) b10.3	口縁部僅かに内済し端部内面肥厚が削ける。脚部の温りを欠く。頭部開き気味	14 2			
11 19	004 穴式建物 貼床内	土器	高杯	(口径) B18.0 (高) b5.2	脚部は下位に一棟をなしてやや内済気味に開く	3			
12 19	004 穴式建物 覆上	土器	高杯	A3.0 (高) b7.2	底部を欠いた脚部の破片。脚部上〈外面〉タテミガキ(不鮮明)(内面)ヘラナデ(内面)ヘラナデ(内面)ヨコヘラケズリ	4			
13 19	004 穴式建物 東土坑壁際	土器	製塙土 器	(底径) A1.4 (高) b4.7	底部の破片。尖り底で厚底あり。2次焼成により赤化・泡泡。積山E類	14 6			
14 19	004 穴式建物 貼床下落込み	須恵器	(不明)	(口径) — (高) b4.3	下辺をナデて一棟立てる。器台脚〈外面〉ヨコラケズリ・ヨコヘラナデ(内面)ヘラナデ(自然軸掛る)	14 7			
15 19	004 穴式建物 覆上	須恵器	(不明)	(口径) — (高) b3.3	帶状に墨出する脚部端の破片。器台脚部(内面)ヘラケズリ・ユビナデ(内面)ユビナデ(自然軸掛る)	14 8			
16 33	001 落込み(一括)	土器	短頭甕	(口径) B10.6 (高) b4.7	綾やかに屈曲する頭部から内済気味に口縁部は立上がる。端部平坦	15 34			
17 33	001 落込み(一括)	土器	短頭甕	(口径) B11.2 (高) b5.9	「く」字型に屈曲する頭部から口縁部は直線的に外傾して立上がる	15 35			
18 33	001 落込み(一括)	土器	甕	(口径) B19.0 (高) b4.1	僅かに外反気味に外傾する口縁部の破片。端部丸味あり	15 56			
19 33	001 落込み(一括)	土器	有段口(頭部) 緑甕	B13.0 (高) b15.0	直立気味の頭部から外傾して立ち上がる。口縁部は一段をなして外反する。2次焼成	15 40			
20 33	001 落込み(一括)	土器	大型鉢	(口径) B42.2 (高) b3.3	頭部から一段を有して口縁部は直線的に外傾する。端部平坦	15 33			
21 33	001 河道	土器	布留甕	(口径) — (高) b3.5	口縁部の一部破片。口縁部端面肥厚。2次焼成により赤化・硬直	16 51			
22 33	001 河道	土器	布留甕	(口径) B15.6 (高) b2.8	口縁部は僅く内済して立ち上がり端部にヨコユビナデ(内面)内面がやや長めに肥厚する	16 45			
23 33	001 河道	土器	布留甕	(口径) B13.0 (高) b3.8	口縁部は内済して立ち上がり端部内面がヨコユビナデ(内面)内面ヨコヘラケズリ	16 62			

## 観察表

遺物番号	出土遺構番号	出土遺構・土層	種別	器種	口径・高さほか	形状ほか	調整	回収番号	実測番号
24 33	001 落込み(一括)	土器	布留彌	(口径) B5.4 (高) b5.5	頭部は「く」字状に屈曲し口縁部 は僅かに内溝して立上がる。端部 内面肥厚。器壁薄。	〈外面〉口縁部ユビナデ〈内面〉劣化のため 調整不明		16	39
25 33	001 落込み(一括)	土器	布留彌	(口径) B16.4 (高) b6.4	頭部は「く」字状に屈曲し、口縁 部は緩く内溝気味に立上がる。端 部内面肥厚	〈外面〉口縁部・脚部ヨコヘラナデ〈内面〉 端部ヨココハケ(8~10本/1cm)・脚 部ヨコヘラケズリ	16	38	
26 33	001 河道	土器	布留彌	(口径) B15.6 (高) b6.8	口縁部はやや内溝気味に立上がり、 端部内面側に肥厚する	ケ・ミガキ・ヨコナデ〈内面〉口縁部ヨ コヘラナデ・脚部ヨコヘラケズリ	16	44	
27 33	001 落込み(一括)	土器	布留彌	(口径) B16.0 (高) b12.7	内溝して口縁部は立ち上がり端部内 面肥厚する。頭部は球形。2次焼	〈外面〉口縁部ヨコヘラナデ・脚部タテハ 成	16	32	
28 33	001 河道	土器	布留彌	(口径) B16.0 (高) b5.2	「く」字状に屈曲する頭部から直線 的に口縁部が立ち上がり、端部は内 面がややために肥厚する	ケヘラナデ・脚部ヨコヘラケズリ	16	48	
29 33	001 落込み(一括)	土器	布留彌	(口径) B14.0 (高) b4.4	頭部は「く」字状に屈曲し、口縁 部は直線的に外傾する。端部内面 肥厚	〈外面〉口縁部ユビナデ・脚部ヨコヘラナ デ〈内面〉脚部ヨコヘラケズリ	16	36	
30 33	001 落込み(一括)	土器	布留彌	(口径) B16.2 (高) b5.4	頭部は直線的に立上がる。内部の肥 厚弱い	ラケズリ	16	37	
31 33	001 溝A	土器	布留彌	(脚部径) B6.0 (高) b3.1	脚部上部の破片。頭部の球形度高 いとみられる	ヘラケズリ・ヘラナデ		55	
32 33	001 落込み(一括)	土器	布留彌	(脚部径) B12.0 (高) b6.4	「く」字状に屈曲する頭部から直線 的に口縁部が立ち上がる	〈外面〉劣化のため調整不明〈内面〉脚部 ヨコナデ		47	
33 33	001 河道	土器	布留彌	(脚部径) B20.0 (高) b14.8	脚部の球形度高いとみられる。頭 部は強く外傾して立上がる。	〈外面〉ヨコハケ〈内面〉ヨコヘラケズリ		58	
34 34	001 溝A	土器	甕	(口径) B13.0 (高) b6.3	「く」字状に屈曲した頭部から口縁 部は強く外傾して立上がる。2次 焼成	〈外面〉劣化のため調整不明〈内面〉劣化 のため調整不明		57	
35 34	001 落込み(一括)	土器	台付甕	(接合部径) A4.9 (高) b1.5	台付甕の頭部と脚部の接続部の 破片。脚部を開き気味に、脚部部 は内溝気味に延びる。2次焼成	〈外面〉ハケ(8本/1cm)〈内面〉脚部・ 脚部ユビナデ	15	61	
36 34	001 溝A	土器	台付甕	(口径) 一 (高) b1.8	脚部の破片。緩やかに内溝して 立上がる	〈外面〉タテハケ(6本/1cm)〈内面〉 ヘラナデ	15	41	
37 34	001 落込み(一括)	土器	台付甕	(口径) 一 (高) b2.8	脚下部の破片。底部にかけて器壁 は厚くなる	〈外面〉タテハケ(7本/1cm)・ヨコヘ ラナデ〈内面〉ヘラナデ	15	24	
38 34	001 河道	土器	高杯	(口径) B16.4 (高) b5.4	下部で屈曲し外反気味に開く部。下 部を含む脚部は僅に欠く。下	コミガキ	18	53	
39 34	001 落込み(一括)	土器	高杯	(接合部径) A2.4 (高) b5.2	位に弱い一種をなして立上がるが、 脚部全体に丸味ある	〈外面〉ヨコミガキ〈内面〉劣化のため調 整不明		31	
40 34	001 溝B	土器	高杯	(口径) 一 (高) b3.9	高杯の杯部中央の破片。杯底は下 位で一縫をなしたのち直線的に外	ヨコミガキ〈内面〉ヨコミガキ	18	60	
41 34	001 河道	土器	高杯	(接合部径) A3.2 (高) b6.7	縫をして立上がる	ヨコミガキ〈内面〉ヨコ・タテヘ ラナデ	18	17	
42 34	001 河道	土器	高杯	(接合部径) A2.8 (高) b8.2	脚部を欠いた脚部の破片。脚部上 端に杯部を上乗せる形態。2次 焼成により赤化	〈外面〉ヨコナデ〈内面〉劣化のため調 整不明(破片残る)	18		
43 34	001 河道	土器	高杯	(接合部径) 一 (高) b7.6	脚部を欠いた脚部の破片。内溝し て立上がる。上端を杯部に挿入す る形態	〈外面〉タテミガキ〈内面〉ヘラナデ(較 目残る)	18	20	
44 34	001 河道	土器	高杯	(口径) A2.8 (高) b7.3	脚部を欠いた柱状脚部の破片。脚 部上端を杯部に挿入する形態。2 次焼成により赤化	〈外面〉タテミガキ〈内面〉ユビナデ	18	19	
45 34	001 河道	土器	高杯	(接合部径) A2.4 (高) b6.2	脚部を欠いた脚部の破片。脚部上 端を杯部に挿入する形態。2次焼 成により赤化	〈外面〉劣化のため調整不明〈内面〉ユビ ナデ	18	21	

遺物	現 番号	出土遺構 番号	出土構 造・土層	種別	器種	口径・高さほか	形状ほか	調整	図版 番号	実測 番号
46	34	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(上径) 器(高)	B15.1 b5.4	胸部から丸く内溝して口縁部は立 上がり、端部は尖り気味。2次焼 成不明	〈外面〉ヨコタキ(内面)劣化のため調 整	27	
47	34	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(上径) 器(高)	B13.1 b18.3	張りの弱い胸部から緩やかに外反 して口縁部は立ち上がる。2次焼成 により赤化・劣化。楨山E類	〈外面〉口縁部ユビオサエ・胸脚タキ・ヘ ラナデ	17	28
48	34	001	河道	土器	製塙土(上径) 器(高)	B12.3 b6.7	胸部から口縁部にかけて直線的に 直立する。端部尖り気味。楨山E類	〈外面〉劣化のため調整不明(内面)胸部 ヘラナデ(埋没痕)	17	42
49	34	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(頭部径) 器(高)	B12.0 b10.5	強いナデにより颈部は幅広く屈曲。 口縁部は内溝しつつ立ち上がる。2 次焼成により赤化・劣化。楨山E類	〈外面〉頭部ヨコユビナデ(内面)頭部ヨ コユビナデ	17	63
50	34	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(上径) 器(高)	B11.8 b6.8	外反して立ち上がる口縁部は先端で 直立。端部尖り気味。2次焼成に より赤化・劣化。楨山E類	〈外面〉劣化のため調整不明(粘土接合痕 あり)(内面)劣化のため調整不明	17	64
51	34	001	河道	土器	製塙土(上径) 器(高)	B12.0 b5.0	胸部から口縁部にかけて直線的に 直立する。端部は内溝が削げていて 尖り気味。2次焼成により赤化・ 劣化。楨山E類	〈外面〉劣化のため調整不明(粘土接合痕 あり)(内面)ヨコタキ・胸脚ヨコヘラナデ ・楨山E類	43	
52	34	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(上径) 器(高)	B12.5 b6.3	口縁部はやや内に外反し、端部は やや尖り気味。2次焼成により赤化・ 劣化・器表窪。楨山E類	〈外面〉劣化のため調整不明(内面)ユビ オサエ・ヨコユビナデ(粘土接合痕あり)	17	30
53	35	001	河道	土器	製塙土(上径) 器(高)	B16.6 b6.5	頭部は緩やかに屈曲し、口縁部は 直線的に外張する。上縁部端は尖 り気味。胸部は肩の盛りが乏しい。 楨山E類	〈外面〉劣化のため調整不明(内面)ヨコ タキ・ユビオサエ	49	
54	35	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(頭部径) 器(高)	B13.3 b6.8	緩やかに「く」字状に屈曲する頭 部から直立気味に口縁部は立ち上 がる。2次焼成・楨山E類	〈外面〉劣化のため調整不明(内面)劣化 のため調整不明	17	26
55	35	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(上径) 器(高)	B13.7 b4.2	口縁部はやや内溝気味に立ち上がり 端部外縁が削げて尖り気味。2次 焼成により赤化。楨山E類	〈外面〉ユビオサエ・ヘラナデ(内面)ヘ ラナデ	25	
56	35	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(頭部径) 器(高)	B11.6 b13.2	緩やかに屈曲する頭部の破片。胸 部は肩の盛りが乏しい。2次焼成・ 楨山E類	〈外面〉劣化のため調整不明(内面)劣化 のため調整不明	17	23
57	35	001	河道	土器	製塙土(頭部最大径) 器(高)	B16.2 b13.0	底突。胸部膨らみくび。2次焼成 により赤化。楨山E類	〈外面〉タキのちユビオサエ・ユビナデ・ ヘラナデ(内面)ヘラナデ	18	50
58	35	001	河道	土器	製塙土(上径) 器(高)	B15.8 b1.9	底部はややカリ味のある丸底一 味成により赤化・則脚。精正E類	〈外面〉タキのちユビオサエ・ユビナデ	52	
59	35	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(底径) 器(高)	A1.2 b5.5	底突。胸部にかけて直線的に外傾 する。2次焼成により赤化・劣化。 楨山E類	〈外面〉タキ・タケヘラケズリ(内面)ユ ビオサエ・ユビナデ	17	65
60	35	001	河道	土器	製塙土(底径) 器(高)	B3.0 b4.7	底部は僅かな平坦面もある丸底と みられる。2次焼成により器面劣化 楨山E類	〈外面〉劣化のため調整不明(内面)ヘラ ナデ	54	
61	35	001	河道	土器	製塙土(底径) 器(高)	A3.6 b2.3	底部は円錐形にやや突出し開き氣 味に胸部が立上がる。腰底部の可	〈外面〉胸部タキ(内面)ユビナデ 能性	16	
62	35	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(底径) 器(高)	A4.0 b7.0	底突に近い底面幾分平坦。胸部 にかけて直線的に外傾する。2次 焼成	〈外面〉タキ・ヘラナデ(内面)ヨコヘ ラナデ	18	46
63	35	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(底径) 器(高)	A4.5 b8.0	底部は僅かに突起する。胸部下半 は立ち上がりの開きが乏しい。2次 焼成	〈外面〉胸部ヘラナデ・ユビオサエ(内面) ユビナデ	29	
64	35	001	講A	土器	製塙土(頭部径) 器(高)	B12.0 b6.2	底部は底突。2次焼成により赤化・ 劣化	〈外面〉タキ(内面)ヘラナデ	18	59
65	35	001	落込み(一 括)	土器	製塙土(底径) 器(高)	A3.2 b6.6	底部は円錐形に突出し胸部は丸底 をもって立上がる。2次焼成によ り赤化	〈外面〉タキ(内面)劣化のため調整不 明	18	66

## 観察表

遺物	出土遺構番号	層	種別	器種	口径・器高ほか	形状ほか	調整	回収実績番号
66	37	井戸枠内	瓦質土器	皿	(口径) B8.0 (高) a1.1	平坦な底部から開き気味に口縁部 へと立上がる。口縁部丸味あり。	〈外面〉 脚部上半以上ユビナデ、下半以下 ユビオサエ・ユビナデ(内面) ユビナデ	194
67	37	井戸枠内	瓦質土器	羽釜	(口径) B23.2 (高) b4.2	1B形。口縁部は端にへラナデが 加わり僅かに腫む	〈外面〉 口縁部ユビナデ、脚部へラケズリ ケズリ(擦過痕)	195
68	37	井戸枠内	瓦質土器	羽釜	(口径) B28.2 (高) b5.1	3B形。口縁部の段差不鮮明	〈外面〉 口縁部ユビナデ、脚部へラケズリ 〈内面〉 口縁部以下へラナデ(擦過痕)	193
69	37	井戸枠内	瓦質土器	羽釜	(口径) B24.0 (高) b5.5	3B形。口縁部にかけて僅かに内 湾気味	〈外面〉 口縁部ユビナデ、脚部へラケズリ 〈内面〉 口縁部以へラナデ	196
70	37	井戸枠内	瓦質土器	羽釜	(口径) B26.4 (高) b4.8	1A形。口縁部は端部にかけて厚 味増す。脇部や長め	〈外面〉 口縁部ユビナデ(内面) 口縁部ユ ビナデ	192
71	37	井戸枠内	瓦質土器	捏体	(口径) 38.04 (高) b7.0	口縁部にかけて直線的に立ち上り る。口縁部端は下に肥厚・突出する	〈外面〉 口縁部ユビナデ(内面) 脚部へラナ デ(擦過痕)	197
72	39	154 畦3層	須恵器	椀	(口径) B17.0 (高) b7.3	底部から内溝して立ち上がり突唇を 持つ。内溝で直立する	〈外面〉 脚部突起以下へラケズリ・以上ユ ビナデ(内面) 脚部ユビナデ	167
73	39	154 畦3層	土師器	皿	(口径) B8.0 (高) a1.5	口縁部にかけて直線的に外傾。脚 部や厚い。口縁部縮れく收まる。	〈外面〉 脚部から口縁部ユビナデ、底部ユ ビオサエ・ユビナデ(内面) 底部静止ユ ビナデ(右側転ユビナデ)	77
74	39	154 畦3層	瓦器	椀	(口径) B13.2 (高) b2.0	口縁部にかけて直線的に外傾。口 縁部はかるく外反	〈外面〉 脚部ユビオサエ・ユビナデ(内面) 脚部ユビナデ	86
75	39	154 畦3層	瓦器	椀	(口径) B14.4 (高) b3.4	口縁部にかけて丸く内溝し上端は 僅かに外反しつぶく收まる。高 台極めて扁平	〈外面〉 口縁部ユビナデ、脚部ユビオサエ (内面) ミガキ・ユビナデ	84
76	39	154 畦3層	瓦器	椀	(高台径) B2.6 (高) a0.3	高台は断面膨潤な三角形。底部か ら脚部にかけて開き気味に立ち上 がる	〈外面〉 脚部下半ユビオサエ(内面) 底部 ミガキ	85
77	39	154 畦3層	瓦質土器	羽釜	(口径) B21.0 (高) b5.0	1A形。脚下面以下斜付着	〈外面〉 口縁部・脚部ユビナデ(内面) 口 縁部へラナデ(擦過痕)	19 101
78	39	154 畦3層	瓦質土器	羽釜	(口径) B20.0 (高) b5.3	7A形。口縁部が極めて短い。脚 部は膨らみに欠ける	〈外面〉 口縁部・脚部ユビナデ、脚部ヨコ ヘラケズリ(内面) 脚部ヨコヘラナデ	19 102
79	39	154 畦3層	瓦質土器	羽釜	(口径) B18.7 (高) b4.8	5A形。脚下面以下斜付着	〈外面〉 口縁部・脚部ユビナデ(内面) 口 縁部ユビナデ、脚部ヨコヘラナデ(擦過痕)	19 100
80	39	154 畦3層	瓦質土器	羽釜	(口径) B21.0 (高) b6.2	1B形。脚部の丸味らしい	〈外面〉 口縁部・脚部ユビナデ(内面) 口 縁部ユビオサエ・ヨコヘラナデ(擦過痕)	20 99
81	39	154 畦3層	瓦質土器	羽釜	(口径) B23.2 (高) b6.7	5B形。脚短い。2次焼成により 赤化	〈外面〉 口縁部・脚部ユビナデ(内面) 口 縁部ヘラナデ・ユビナデ	111
82	39	154 畦3層	土師質土器	羽釜	(口径) B23.6 (高) b6.7	1A形。口縁部は上半のみ。脚 下面以下斜付着	〈外面〉 口縁部・脚部ユビナデ(内面) 口 縁部ヨコヘラナデ(擦過痕)	20 130
83	39	154 畦3層	土師質土器	土釜	(口径) B23.2 (高) b7.0	1A形。脚はやや長め。脚下面以 下煤付着	〈外面〉 口縁部・脚部ユビナデ(内面) 脚部 ヨコヘラナデ・ユビナデ	20 113
84	39	154 畦3層	瓦質土器	甕	(口径) B26.7 (高) b5.9	頭部は緩やかに「コ」字状に削れ。 口縁部は短く外反して水平に張り 出する	〈外面〉 脚部以上ユビナデ、脚部平行タタ キ(内面) 脚部ヘラナデ・ユビナデ	21 166
85	39	154 畦3層	陶器	椀	(高台径) B4.3 (高) b1.4	割れ出し高台。接地面平坦。厚味 あり	〈外面〉 高台接地面ヘラナデ(内面) 底面 黒跡	182
86	40	154 畦4層	土師器	皿	(口径) B6.4 (高) a1.5	口縁部にかけて外反して立ち上りが る。底部は丸く收まる。底部や丸味 あり	〈外面〉 脚部上半以上ユビナデ、下半以下 ユビオサエ(内面) 脚部ユビナデ、底部 ユビオサエ・ユビナデ	78
87	40	154 畦4層	土師器	皿	(口径) B7.4 (高) b1.6	口縁部にかけて内溝して立ち上りが る。端部は丸く收まる	〈外面〉 脚部上半以上ユビナデ、下半以下 ユビナデ	82
88	40	154 畦4層	土師器	皿	(口径) B7.7 (高) a1.7	底部から丸く内溝して立ち上りが る。口縁部にかけて外反する	〈外面〉 脚部から口縁部ユビナデ、底部ユ ビオサエ・ユビナデ(内面) 底部ユビナ デ	21 97
89	40	154 畦4層	土師器	皿	(口径) A7.4 (高) a1.4	口縁部にかけて直線的に外反し端 部は肥厚して丸く收まる。僅かに 上底	〈外面〉 脚部から口縁部ユビナデ、底部ユ ビオサエ・ユビナデ(内面) 底部不定方 向ハケのち静止ユビナデ・回転ユビナ デ	21 81

遺物番号	出土遺構番号	出土遺構・土層	種別	器種	口径・高さ	形状	調整	図版番号	実測番号
90 40	154 番 4 層	上師器	皿	(1)径 B7.8 (高) a1.3	口縁部にかけて短く直線的に外傾。 上底気味	〈外面〉 脚部上半以上ユビナデ。下半以下 ユビオサエ・ユビナデ 〈内面〉 脚部ユビ ナデ。底部ユビオサエ・ユビナデ	21 79		
91 40	154 番 4 層	上師器	皿	(1)径 B8.6 (高) a1.2	口縁部にかけてやや外反し端部は 外面側が削げる	〈外面〉 脚部上半以上ユビナデ。下半以下 ユビオサエ・ユビナデ 〈内面〉 脚部ユビ ナデ。底部ユビオサエ・ユビナデ	80		
92 40	154 番 4 層	瓦器	皿	(1)径 B8.4 (高) a1.7	口縁部にかけて内溝して立上がり。 端部近くで外反する。底部上底氣味	〈外面〉 脚部上半以上ユビナデ。下半以下 ユビオサエ・ユビナデ 〈内面〉 劣化のた め調整不明	92		
93 40	154 番 4 層	瓦質土器	羽釜	(1)径 B20.0 (高) b9.5	3 A 形。小型。脚部丸味あり。鶴 下面以下若干付着	〈外面〉 口縁部・脚部ユビナデ。胸部ヨコ ヘルケズリ 〈内面〉 脚部ヨコヘラナデ (渡 通痕)・ユビナデ	19 104		
94 40	154 番 4 層	瓦質土器	羽釜	(1)径 B24.6 (高) a9.8	1 A 形。脚部丸味あり	〈外面〉 口縁部・脚部ユビナデ。胸部ヨコ ヘルケズリ 〈内面〉 脚部ヨコヘラナデ (渡 通痕)・ユビナデ (残る)	20 133		
95 40	154 番 4 層	上師質土器	上釜	(1)径 B21.1 (高) b4.1	3 A 形。鶴や短い。鶴下面以下 煤若干付着	〈外面〉 口縁部・脚部ユビオサエ・ ヘルケズリ 〈内面〉 口縁部ユビオサエ・ ヘルナデ・ユビナデ	20 116		
96 40	154 番 4 層	上師質土器	上釜	(1)径 A30.4 (高) b5.5	3 B 形。鶴やや短い。鶴下面以下 煤付着	〈外面〉 口縁部・脚部ユビナデ・胸部ヨコ ヘルケズリ 〈内面〉 脚部ヨコヘラナデ	20 117		
97 40	154 番 4 層	上師質土器	上釜	(1)径 B35.2 (高) b8.0	2 A 形。大型。脚部丸味あり	〈外面〉 口縁部・脚部ユビナデ・部分的 ズリ 〈内面〉 脚部ヨコヘラナデ・部分的 にユビナデ	19 134		
98 40	154 番 4 層	瓦質土器	甕	(1)径 B29.8 (高) b5.8	頭部は横やかに「コ」字形に屈曲し。 口縁部は短く外反して水平に張り 出す	〈外面〉 頭部以上ユビナデ・胸部平行タタ キ 〈内面〉 口縁部ユビナデ・脚部ヘラナ デ	21 168		
99 40	154 番 4 層	上師質土器	上釜	(1)径 B29.0 (高) b6.3	「く」字形に屈曲した頭部から口縁 部は短く外反。脚部上半脂付け突 きを温す。記印無	〈外面〉 口縁部ユビナデ 〈内面〉 ヘラナデ (渡通痕)	162		
100 41	154 番 4 層	須恵質土器	捏鉢	(1)径 B32.0 (高) b8.5	や丸味ある上脚部端は立上がり 且・ユビナデ	〈外面〉 脚部から口縫部は立上がり 且・ユビナデ	160		
101 41	154 番 4 層	須恵質土器	捏鉢	(1)径 B30.0 (高) a13.1	脚部から口縫部にかけてほぼ直線 的に外傾。口縫部端は下とも肥 厚	〈外面〉 脚部上半以上ユビナデ。下半以下 ヘルケズリ 〈内面〉 ユビナデ	181		
102 41	154 番 4・5 層	須恵質土器	甕	(1)径 B24.4 (高) b7.4	屈曲する頭部から口縫部は強く外 反する。口縫部端半坦	〈外面〉 脚部以下平行タタキ 〈内面〉 脚部 当肩痕・ユビナデ	180		
103 42	154 番 4・5 層	土師器	皿	(1)径 B7.2 (高) a1.5	口縫部にかけて短く直線的に外傾。 口縫部端は丸く収まる。厚味あり	〈外面〉 脚部から口縫部ユビナデ・底部ユ ビオサエ・ユビナデ 〈内面〉 全体的にユ ビナデ	76		
104 42	154 番 4・5 層	土師器	皿	(1)径 B7.3 (高) a1.8	口縫部にかけて内溝して立上がる。 口縫部やや肥厚し丸く収まる	〈外面〉 脚部上半以上ユビナデ。下半以下 ユビオサエ・ユビナデ 〈内面〉 ユビナデ	71		
105 42	154 番 4・5 層	土師器	皿	(1)径 A7.6 (高) a1.4	口縫部にかけて直線的に外傾。口 縫部端丸く収まる。底部内面削	〈外面〉 脚部から口縫部ユビナデ・底部ユ ビオサエ・ユビナデ 〈内面〉 底部静止ユ ビナデのち回転ユビナデ	21 72		
106 42	154 番 4・5 層	土師器	皿	(1)径 B7.8 (高) a1.4	口縫部にかけて直線的に外傾。口 縫部端幾分丸く収まる。底部内面 上底	〈外面〉 脚部から口縫部ユビナデ・底部ユ ビオサエ・ユビナデ 〈内面〉 底部静止ユ ビナデのち回転ユビナデ	21 74		
107 42	154 番 4・5 層	土師器	皿	(1)径 B9.2 (高) a1.7	口縫部にかけて直線的に外傾。口 縫部端は肥厚し丸く収まる。底部 内面削。やや上底	〈外面〉 脚部上半以上ユビナデ。下半以下 ユビオサエ・ユビナデ 〈内面〉 ユビナデ のち回転ユビナデ	21 73		
108 42	154 番 4・5 層	瓦器	皿	(1)径 A10.3 (高) a2.8	丸く内溝して立上がる。口縫部端 尖り気味。2次焼成	〈外面〉 口縫部ユビナデ・脚部ユビオサエ・ ユビナデ (内面) 底部ミガキ (劣化のた め不鮮明)	96		
109 42	154 番 4・5 層	瓦器	椀	(1)径 B13.6 (高) b2.9	口縫部にかけて外反。口縫部端丸 く収まる	〈外面〉 口縫部ユビナデ・脚部ユビオサエ・ ユビナデ (内面) 底部ミガキ (目)	87		
110 42	154 番 4・5 層	瓦器	椀	(1)径 B16.6 (高) b4.2	口縫部にかけて内溝気味に立上 がる。口縫部端丸く収まる	〈外面〉 口縫部ユビナデ・脚部ユビオサエ・ ユビナデ (内面) 底部ミガキ (劣化のた め不鮮明)	88		
111 42	154 番 4・5 層	瓦器	椀	(1)径 B14.0 (高) a3.2	内溝気味に立上がる。高台断面低 い三角形	〈外面〉 口縫部ユビナデ・脚部ユビオサエ・ ユビナデ (内面) 底部ミガキ (螺旋)	89		

観察表

遺物	出土遺構 番号・層号	出土遺構 番号・層号	種別	器種	口径・器高ほか	形状ほか	調整	回収実績 番号・層号
112 42	154 畦 4・5 層	154 畦 4・5 層	瓦器	楕	(口径) B14.4 (高) a3.1	内側して立上がる。高台面扁平 三角形(紐狀)	〈外面〉口縁部ユビナデ、脚部ユビサエ・ ユビナデ(内面)底部ミガキ(擦痕)	90
113 42	154 畦 4・5 層	154 畦 4・5 層	土師質 土器	羽釜	(口径) B25.6 (高) b10.6	1 A 形。脚部丸味あり	〈外面〉口縁部・脚部ユビナデ、脚部ヨコ ヘラケズリ(内面)底部ミガキ(擦痕)	19 131 過痕
114 42	154 畦 4・5 層	154 畦 4・5 層	瓦質土 器	羽釜	(口径) B22.0 (高) b10.0	4 A 形。脚部丸味あり。全体に煤 付着(跨下面以下銀著)	〈外面〉口縁部・脚部ユビナデ、脚部ヨコ ヘラケズリ(内面)底部ミガキ(擦痕)	20 132
115 42	154 畦 4・5 層	154 畦 4・5 層	土師質 土器	土釜	(口径) B25.6 (高) b5.8	頭部「く」字状に屈曲。口縁部は 外反し端部は短く直立。紀伊系	〈外面〉劣化のため調整不明(内面)脚部 ヨコヘラナデ	161
116 42	154 畦 4・5 層	154 畦 4・5 層	瓦質土 器	甕	(口径) B29.2 (高) b13.8	頭部は「コ」字状に屈曲し、口縁 部は短く外反する。口縁部正面は ユビナデにより僅かにむず	〈外面〉脚部平行タキ(内面)脚部ヘラ ナデ(擦過痕)・ユビナデ	19 157
117 43	154 畦 6 層	154 畦 6 層	瓦器	楕	(口径) B12.4 (高) a3.0	縁やかに内側して立上がる。高台 扁平(硝化)、2次焼成	ユビナデ(内面)底部ミガキ(行方線)	93
118 43	154 畦 6 層	154 畦 6 層	瓦質土 器	羽釜	(口径) B21.0 (高) b7.0	1 A 形。跨や短い。跨下面以下 保護著に付着	〈外面〉口縁部ヘラナデ、脚部ユビナデ・ 脚部ヨコヘラケズリ(内面)脚部ヘラナ デ(擦過痕)	20 103
119 43	154 畦 6 层	154 畦 6 層	土師質 土器	土釜	(口径) B27.0 (高) b7.0	2 B 形。全体に厚味あり。跨長め。 口縁部端大きく折り返す	〈外面〉脚部ヨコヘラナデ(内面)脚部ヘ ラナデ・ユビナデ	20 109
120 43	154 畦 4・6 層	154 畦 4・6 層	瓦器	皿	(口径) B10.2 (高) b2.4	口縁部にかけて内側して立上がる。 口縁部端や乎平坦	ユビオサエ・ユビナデ(内面)劣化のた め調整不明	91
121 43	154 畦 4・6 層	154 畦 4・6 層	瓦質土 器	羽釜	(口径) B21.7 (高) b7.5	4 A 形。脚部丸味に乏しい。現状復 元化物の付着みられない	〈外面〉口縁部・脚部ユビナデ、脚部ヨコ ヘラケズリ(内面)劣化のため調整不明	106
122 43	154 畦 4・6 層	154 畦 4・6 層	瓦質土 器	羽釜	(口径) B32.2 (高) b6.3	7 B 形。大型。口縁部内傾い。 端部びつ	〈外面〉口縁部・脚部ユビナデ、脚部ヨコ ヘラケズリ(内面)脚部ヨコヘラナデ	191
123 43	154 畦 4・6 層	154 畦 4・6 層	瓦質土 器	羽釜	(口径) B32.6 (高) b11.0	1 B 形。大型。脚部丸味あり	〈外面〉口縁部・脚部ユビナデ、脚部ヨコ ヘラケズリ(内面)脚部ヨコヘラナデ(擦 過痕)	19 107
124 43	154 畦 4・6 層	154 畦 4・6 層	土師質 土器	羽釜	(口径) B22.0 (高) b8.0	1 A 形。跨や短い。跨下面以下 保護著に付着	〈外面〉口縁部・脚部ユビナデ、 脚部ヨコヘラケズリ(内面)脚部ヘラナ デ・ユビナデ	20 112
125 43	154 畦 4・6 層	154 畦 4・6 層	土師質 土器	羽釜	(口径) B25.4 (高) b8.2	6 A 形。口縁部に比して跨や厚 め	〈外面〉口縁部・脚部ユビナデ、脚部ヨコ ヘラケズリ(内面)脚部ヨコヘ ラナデ(擦過痕)・ユビナデ	20 114
126 44	154 畦 4・6 層	154 畦 4・6 層	土師質 土器	土釜	(口径) B18.6 (高) b4.1	3 B 形。跨や短く直下に工具の 当たり痕あり。脚部丸味を欠くと みられる	〈外面〉口縁部・脚部ユビナデ、脚部ヨコ ヘラケズリ(内面)脚部ヨコヘラナメ・ヨコヘ ラナデ(擦過痕)・ユビナデ	20 110
127 44	154 畦 4・6 層	154 畦 4・6 層	土師質 土器	土釜	(口径) B19.4 (高) b7.1	3 A 形。小型で跨短い。跨下面以 下保着干付着	〈外面〉口縁部・脚部ユビナデ、脚部ヨコ ヘラケズリ(内面)脚部ヨコヘラナデ(擦 過痕不規則)	20 135
128 44	154 畦 4・6 層	154 畦 4・6 層	土師質 土器	土釜	(口径) B23.6 (高) b7.8	2 A 形。脚部丸味強い。	〈外面〉口縁部・脚部ユビナデ、脚部ヨコ ヘラケズリ(内面)脚部ヨコヘラナデ	115
129 44	154 畦 4・6 層	154 畦 4・6 層	瓦質土 器	擂鉢	(口径) B34.4 (高) b6.4	直線的に立上がり。端部は下に上 肥厚する	〈外面〉脚部ヨコヘラケズリ(内面)脚部 ヨコヘラナデ(擦過)	21 158
130 44	154 畦 8 層	154 畦 8 層	土師器	皿	(口径) B7.2 (高) A1.5	口縁部にかけて外反して立上がる。 口縁部端や肥厚し尖り気味。底 内部に粘土の塊裏	〈外面〉脚部上半以上ユビナデ、下半以下 ユビオサエ・ユビナデ(内面)ユビナデ	21 75
131 44	154 畦 8 層	154 畦 8 層	瓦質土 器	羽釜	(口径) B23.6 (高) b5.6	口縁部 1 段目で直線的に内傾。 長い	〈外面〉口縁部・脚部ユビナデ、脚部ヨコ ヘラケズリ(内面)脚部ヨコヘラナデ(擦 過痕)	19 105
132 44	154 畦 8 層	154 畦 8 層	瓦質土 器	擂鉢	(口径) B32.0 (高) b6.9	口縁部にかけて直線的に立上がる。 端部はや丸味あり正面平坦	〈外面〉脚部以下平行タキ。端部にカキ メ(内面)脚部当具痕(同心円文)・ユビ ナデ	21 159
133 44	154 畦 8 層	須恵器	甕	(口径) B38.0 (高) B13.0	口縁部は大きく外反し端部は外方 に方形に肥厚する	〈外面〉脚部上半以上ユビナデ、下半以下 端部は外面側が削げて。底面やや 丸味あり	ユビナデのち回転ユビナデ	156
134 45	154 畦北脇近 世整地土	154 畦北脇近 世整地土	土師器	皿	(口径) A7.5 (高) a1.3	口縁部にかけて外反して立上がり 端部は外側が削げて。底面やや 丸味あり	ユビオサエ・ユビナデ(内面)底部静止	21 83

遺物	図 番号	出土遺構 ・土層	種別	器種	口径・器高ほか	形状ほか	調整	図版 番号	実測 番号	
135 45	154 莜南中世耕作上	瓦器	椀	(口径) B13.0 (高) a2.7	直線的に立ち上がり口縁部は外反する。2次焼成	〈外面〉口縁部ユビナデ、胴部ユビオサエ・ユビナデ(内面)底部ミガキ(不透明)		95		
136 45	154 莜南中世耕作上	瓦器	椀	(口径) B14.4 (高) a3.1	縁から内側して立ち上がる。高台福平(鉢状)。口縁部内外縫付着	〈外面〉胴部上半以上ユビナデ。下半以下ユビオサエ・ユビナデ(内面)底部ミガキ(縫隙)		94		
137 45	154 莜南中世耕作上	土師質土器	土釜	(口径) B21.9 (高) b7.2	3 A形。口縁部端丸く収まる	〈外面〉口縁部ユビナデ、胴部ヨコヘラケズリ(内面)口縁部ユビナデ、胴部ヘラナデ・ユビナデ	20	108		
138 45	154 莜南中世耕作上	土師質土器	土釜	(口径) B24.0 (高) b9.9	球形の胴部から頭部は緩やかに屈曲し外輪する(縫隙部に続く)。胴部上半に貼付穴形。紀伊系	〈外面〉劣化のために調整不明(内面)ヘラナデ・ユビナデ		163		
139 45	154 莜南中世耕作上	土師質土器	土釜	(口径) B34.6 (高) b18.2	球形の胴部から頭部は緩やかに屈曲し口縁部は外側して立ち上がる。胴部上半に貼付穴形。紀伊系	〈外面〉口縁部ユビナデ、頭部ユビオサエ(内面)胴部ヘラナデ・ユビナデ・ユビオサエ		165		
140 45	154 莜南中世耕作上	土製品	土鍋	(長) A3.5 (幅) a3.5	球形。孔開をつなぐ縫合溝1条。乳孔径0.7~0.6cm	孔開をつなぐ縫合溝1条。〈外面〉ユビオサエ・ユビナデ		183		
141 50	下段面近世耕作上	土器	甕	(口径) B25.4 (高) b5.0	「く」字形に屈曲する頭部から口縁部は短く外輪する。口縁部断面方	〈外面〉胴部ヘラナデ(内面)胴部ヘラナデ		170		
142 50	下段面近世耕作上	土器	甕	(口径) B32.0 (高) b4.3	「く」字形に屈曲する頭部から口縁部は短く外輪する。端部は上下に突出する	〈外面〉口縁部ユビナデ、胴部ヘラナデ(内面)口縁部ユビナデ、胴部ヘラナデ		173		
143 50	下段面近世耕作上	土器	甕	(底径) B9.0 (高) b4.1	底部破片。平底。胴部下半は外反(外面)タテヘラナデ(内面)ヨコヘラナデとして立上がる			171		
144 50	下段面近世耕作上	須恵器	杯蓋	(口径) B10.0 (高) b2.2	口縁部の立上がりは短く、天井部は低い	〈外面〉天井部回転ヘタケズリ(内面)天井部回転ユビナデ		176		
145 50	下段面近世耕作上	須恵器	杯蓋	(口径) 一 (高) b3.1	胸部・天井部間に1枚をなす。胴部はやや開き気味	〈外面〉天井部回転ヘタケズリ(内面)天井部・胸部回転ユビナデ		169		
146 50	下段面近世耕作上	須恵器	蓋	(口径) B14.0 (高) b1.3	屈曲した口縁部から低い天井部に続く。口縁部厚くやや丸味ある	〈外面〉天井部回転ヘタケズリ(内面)天井部回転ユビナデ	22	177		
147 50	下段面近世耕作上	須恵器	(不明)	(高台径) B10.2 (高) b1.1	高台部破片。高台部は低く底面が濡れ粘土付で内凹する	〈外面〉底部回転ヘラナデ(内面)底部ユビナデ	22	178		
148 50	下段面近世耕作上	須恵器	硯	(脚径) B14.0 (高) b2.2	脚部端、透かし大きなと形状の複元から方形透孔18ヶ所程度と推定	〈外面〉脚部ユビナデ(内面)脚部ユビナデ	22	184		
149 50	下段面近世耕作上	須恵器	杯身	(受部径) B13.0 (高) b1.7	受部は短く厚味あり	〈外面〉胴部回転ナデ(内面)口縁部・胴部回転ナデ	22	172		
150 50	下段面近世耕作上	須恵器	高台付	(高台径) A12.8 (高) b2.9	高台は断面方形を呈し端部は外方に埋かに突出	〈外面〉底部ユビナデ(内面)底部ユビナデ	22	189		
151 50	下段面中世耕作上	須恵器	壺	(張部径) B9.8 (高) b4.3	張りの強い脚部中央から上半は頸部を強めて立上がる。頸部は直立	〈外面〉胴部上半カキメ、下半ヘラナデ(内面)胴部ユビナデ	22	190		
152 50	下段面近世耕作上	須恵器	器台	(脚部径) 一 (高) b6.0	「ハ」字形に開く脚部断片・円孔	〈外面〉突線、櫛文・波状文(内面)ユビナデ		179		
153 50	下段面近世耕作上	黒色土器	椀	(高台径) B7.0 (高) b1.3	A類。高台断面厚みのある三角形。底部や底味あり	〈外面〉底部ユビナデ(内面)劣化のため調整不明		22	187	
154 50	下段面近世耕作上	瓦器	皿	(口径) B9.1 (高) b1.7	口縁部にかけて直線的に外傾する。端部は丸く収まる	〈外面〉胴部ユビオサエ・ユビナデ(内面)胴部ミガキ(密)		140		
155 50	下段面近世耕作上	瓦器	椀	(高台径) B5.4 (高) b1.2	高台断面やや低い三角形。底部から脚部にかけてやや開き気味	〈外面〉胴部ユビナデ(内面)ナデ(ハケ)・ミガキ(平行)	22	188		
156 50	下段面近世耕作上	瓦器	椀	(高台径) B5.4 (高) 2.7	高台断面は高さのある三角形	〈外面〉胴部ユビオサエ(内面)底部ミガキ(平行)		141		
157 50	下段面近世耕作上	瓦器	椀	(高台径) A5.2 (高) b2.1	高台断面三脚形。底部から脚部にかけてやや開き気味	〈外面〉胴部ユビオサエ・ユビナデ(内面)底部ミガキ(斜行)	22	186		
158 50	下段面近世耕作上	瓦器	椀	(口径) A14.4 (高) a5.2	口縁部にかけて直線的に外傾し、端部は丸味あり	〈外面〉口縁部ユビナデ、胴部ユビオサエ・ユビナデ(内面)底部ミガキ(平行)	22	67		
159 50	下段面近世耕作上	瓦器	椀	(口径) A15.2 (高) a5.2	口縁部にかけて内湾し、端部は肥厚し丸く収まる	〈外面〉口縁部ユビナデ、胴部ユビオサエ・ミガキ(内面)底部ミガキ(密)	22	68		

## 観察表

遺物番号	出土遺構番号	層	種別	器種	口径・器高ほか	形状ほか	調整	回収番号	実測番号
160 51	下段面近世耕 作上	土層	瓦器	楕	(口径) B15.4 (高) a4.5	口縁部にかけて内溝し、端部は丸く收まる	〈外面〉口縁部ユビナデ・ミガキ、胴部ユビオサエ・ユビナデ(内面)胴部ミガキ(やや粗)	136	
161 51	下段面近世耕 作上	土層	瓦器	楕	(口径) B16.2 (高) b4.2	口縁部にかけてやや開き気味に立上がり、端部は丸く收まる	〈外面〉口縁部から胴部にかけユビオサエ・ミガキ(和) (内面) 脇部ミガキ(やや粗)	137	
162 51	下段面近世耕 作上	土層	瓦器	楕	(口径) B15.2 (高) a5.2	口縁部にかけてやや内溝し、端部は内面側が削がれたため僅かに外方に屈曲する	〈外面〉口縁部ユビナデ、胴部ミガキ(内面)底部ミガキ(平行)、胴部ミガキ(やや密)	22	69
163 51	下段面近世耕 作上	土層	瓦器	楕	(口径) B14.8 (高) a5.1	口縁部にかけて丸く内溝し、端部は内面側が削がれる	〈外面〉口縁部ユビナデ、胴部ユビオサエ・ハラナデ(内面)底部ミガキ(平行)、胴部ミガキ(やや密)	22	70
164 51	下段面近世耕 作上	土層	瓦器	楕	(口径) B15.0 (高) b4.7	口縁部にかけて外反する。胴部下半やや丸味あり	〈外面〉胴部ユビオサエ・ユビナデ、上半にミガキ(内面)胴部ミガキ(密)	138	
165 51	下段面近世耕 作上	土層	瓦器	楕	(口径) B15.0 (高) b4.7	口縁部にかけて外反する。胴部はやや開き気味	〈外面〉口縁部ユビナデ、胴部ユビオサエ(内面) 脇部ミガキ(密)	139	
166 51	下段面中世耕 作上	瓦質上 器	羽釜	I A形	(口径) B30.0 (高) b9.3	1 A形。胴部はほぼ直立する	〈外面〉口縁部ユビナデ、胴部ヨコヘラケズリ(内面) 脇部ヘナナデ	19	98
167 51	下段面近世耕 作上	灰釉陶 器	楕	(高台径) A4.7 (高) b1.1	高台断面低い三角形。2次焼成により施釉変色	〈外面〉底部斜軸系切(内面)施釉	22	185	
168 51	下段面中世耕 作上	土製品	土鉢	(長) A4.3 (幅) a1.0	管状。孔径 0.2	〈外面〉ユビオサエ・ユビナデ		174	
169 51	下段面近世耕 作上	土製品	土鉢	(口) A4.5 (幅) a1.4	管状。孔径 0.4	〈外面〉ユビオサエ・ユビナデ		175	
【凡例】									
口径ほか A:計測値 B:復元値 器高ほか a:全高 b:瓶高									

# 図 版





竪穴建物出土土器類

原色図版二  
羽釜、土釜



瓦質・土師質羽釜、土釜



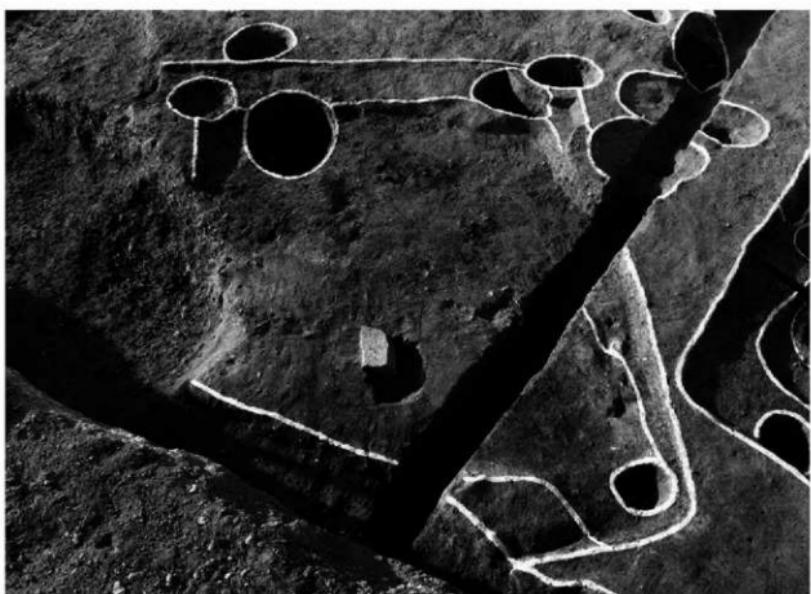
19-1区西端 15 m間全景（北東から）



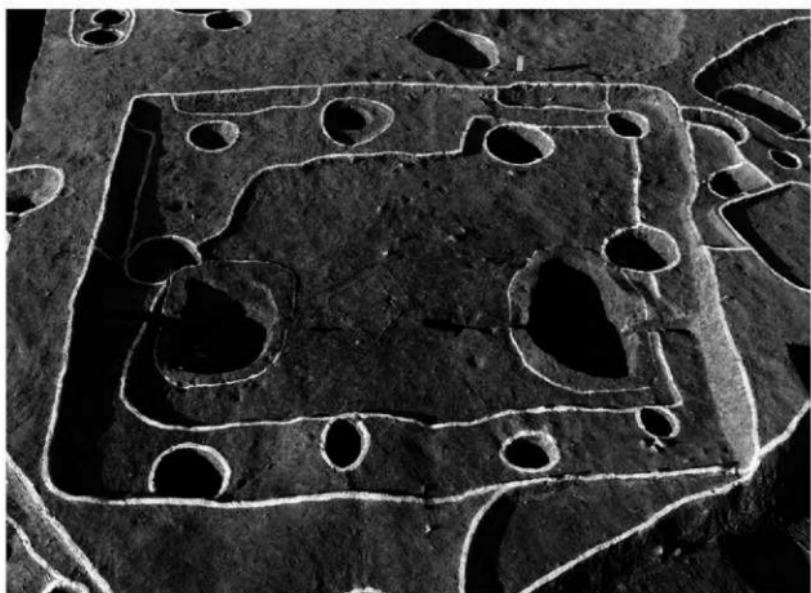
19-1区西端 5～20 m間全景（北から）



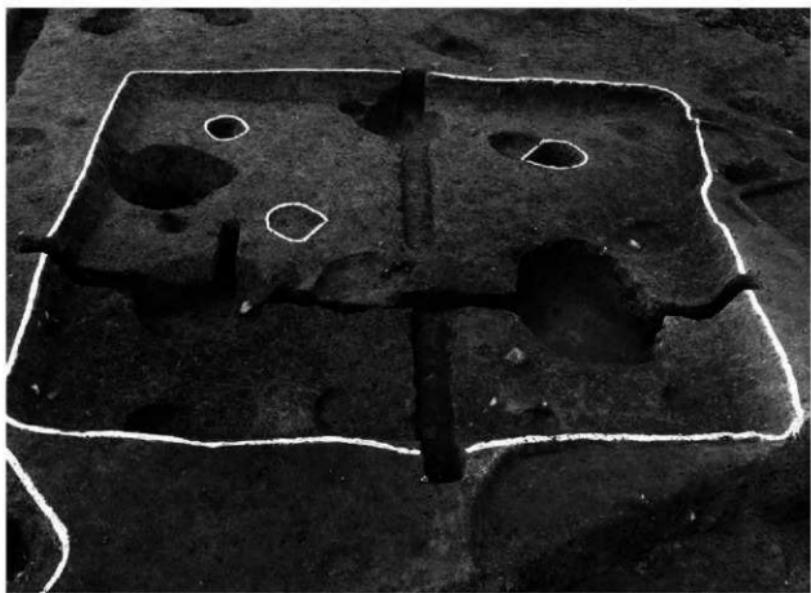
上:002 竪穴建物全景(北東から)  
下左:002 竪穴建物土器類出土状況(北東から)  
下右:002 竪穴建物須恵器出土状況(北西から)



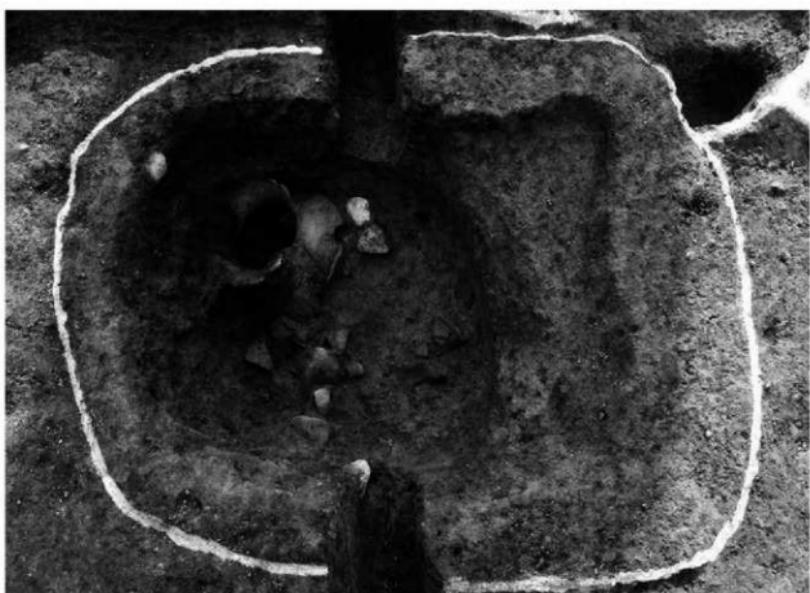
上：003 堅穴建物全景（北東から）  
下左：003 堅穴建物掘方面（北東から）  
下右：003 堅穴建物内作業台（北東から）



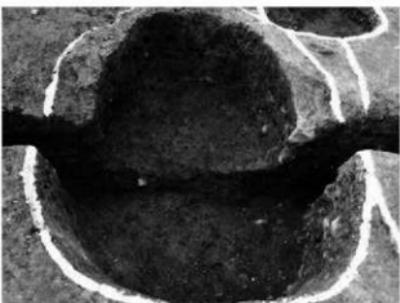
004 堅穴建物全景（北東から）



004 堅穴建物撮方面（北東から）



004 窓穴建物 186 土坑土器出土状況（北西から）

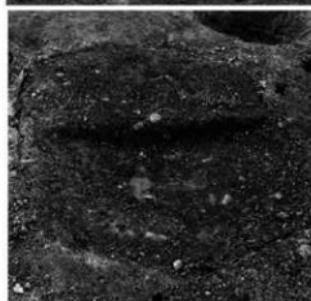
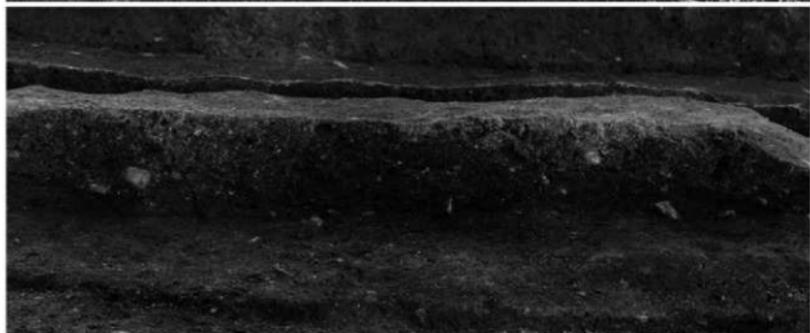
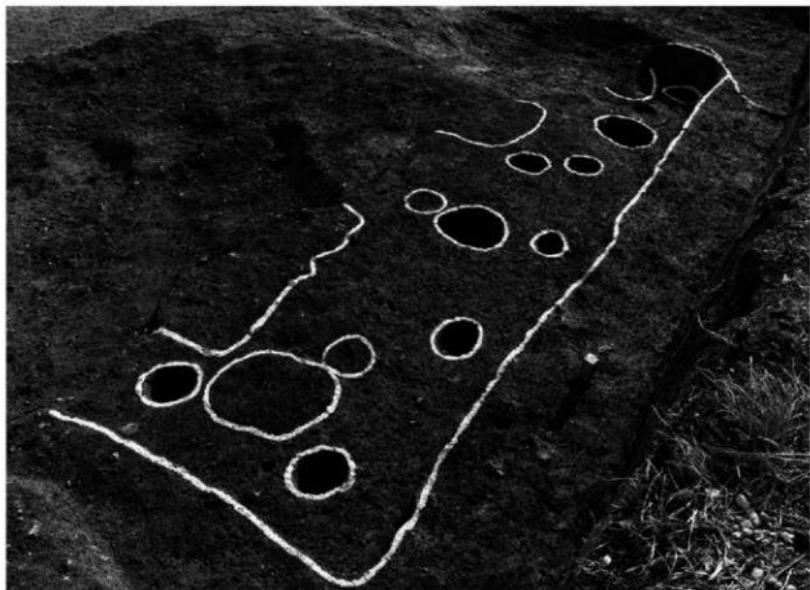


中左：004 窓穴建物 186 土坑断面（北東から）

中右：004 窓穴建物 183 土坑断面（北東から）

下：004 窓穴建物 215 土坑断面（北東から）





上：092 竪穴建物全景（西から）

中：092 竪穴建物土層（北東から）

下：092 竪穴建物 214 土坑土層（北東から）



001 落込み全景（北西から）



001 落込み全景（南東から）



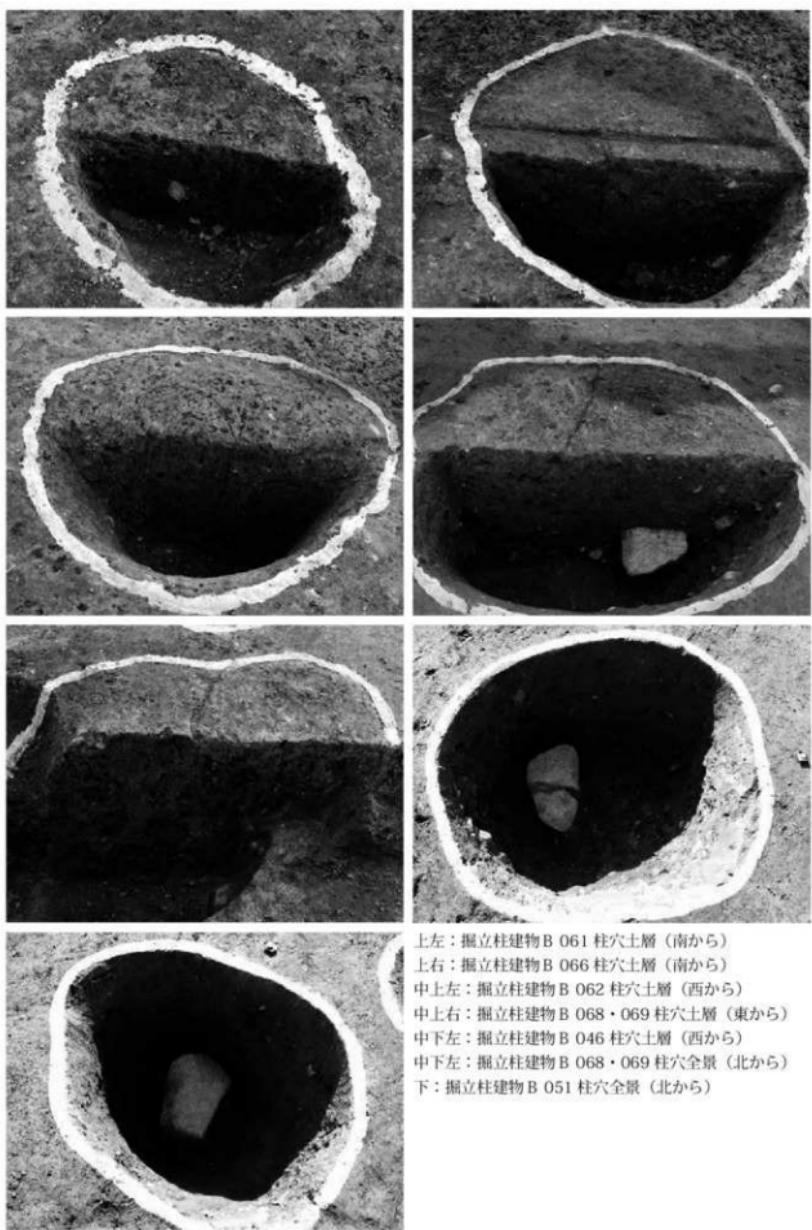
001 落込み土層〔西壁〕（東から）



掘立柱建物柱穴群全景（北東から）



掘立柱建物柱穴群全景（南東から）



上左：掘立柱建物 B 061 柱穴土層（南から）  
上右：掘立柱建物 B 066 柱穴土層（南から）  
中上左：掘立柱建物 B 062 柱穴土層（西から）  
中上右：掘立柱建物 B 068・069 柱穴土層（東から）  
中下左：掘立柱建物 B 046 柱穴土層（西から）  
中下右：掘立柱建物 B 068・069 柱穴全景（北から）  
下：掘立柱建物 B 051 柱穴全景（北から）

図版一〇 一九一区 中・下段面、一五四畦



中・下段面（北西から）



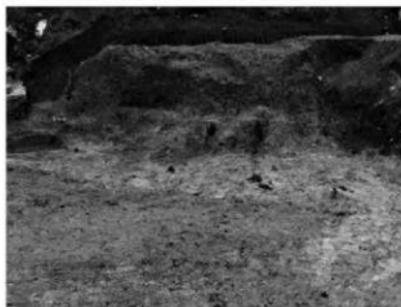
154 畦土層（北東から）



上：146 井戸半裁状況（北東から）  
下：146 井戸断面（北東から）

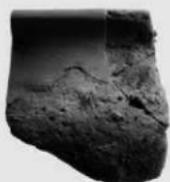


図版二  
一九一二区 全景、畦、谷状地形



上：19-2区全景（西から）  
中左：畦、耕作土土層（北から）  
中右：谷状地形土層（西から）  
下：谷状地形内杭列（東から）

図版一三 〇〇一・〇〇三竪穴建物出土遺物

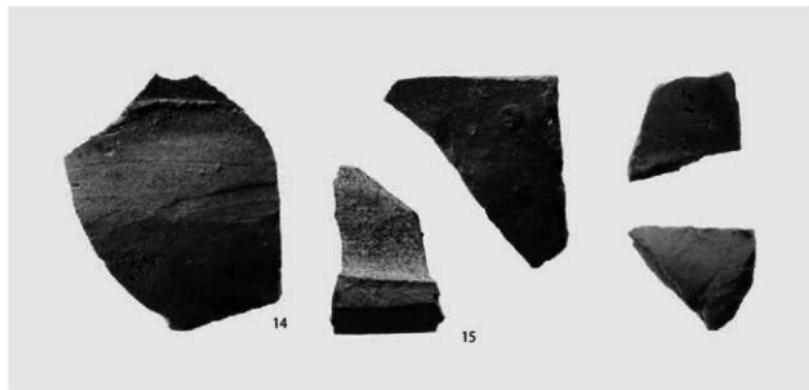
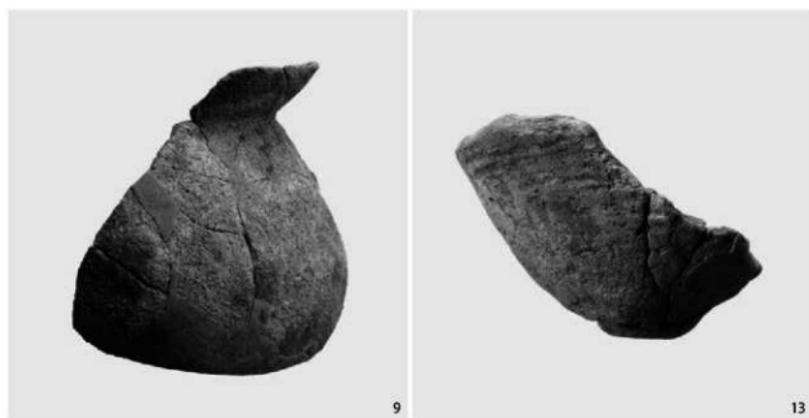
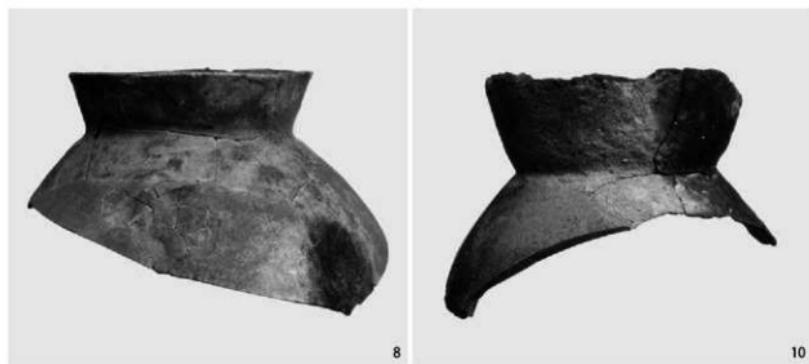


003 竪穴建物作業台の台石

002・003 竪穴建物出土遺物

圖版一四

○○四堅穴建物出土遺物



004 堅穴建物出土遺物

図版一五 ○○一落込み出土遺物（二）



16



17



20



19



18



35



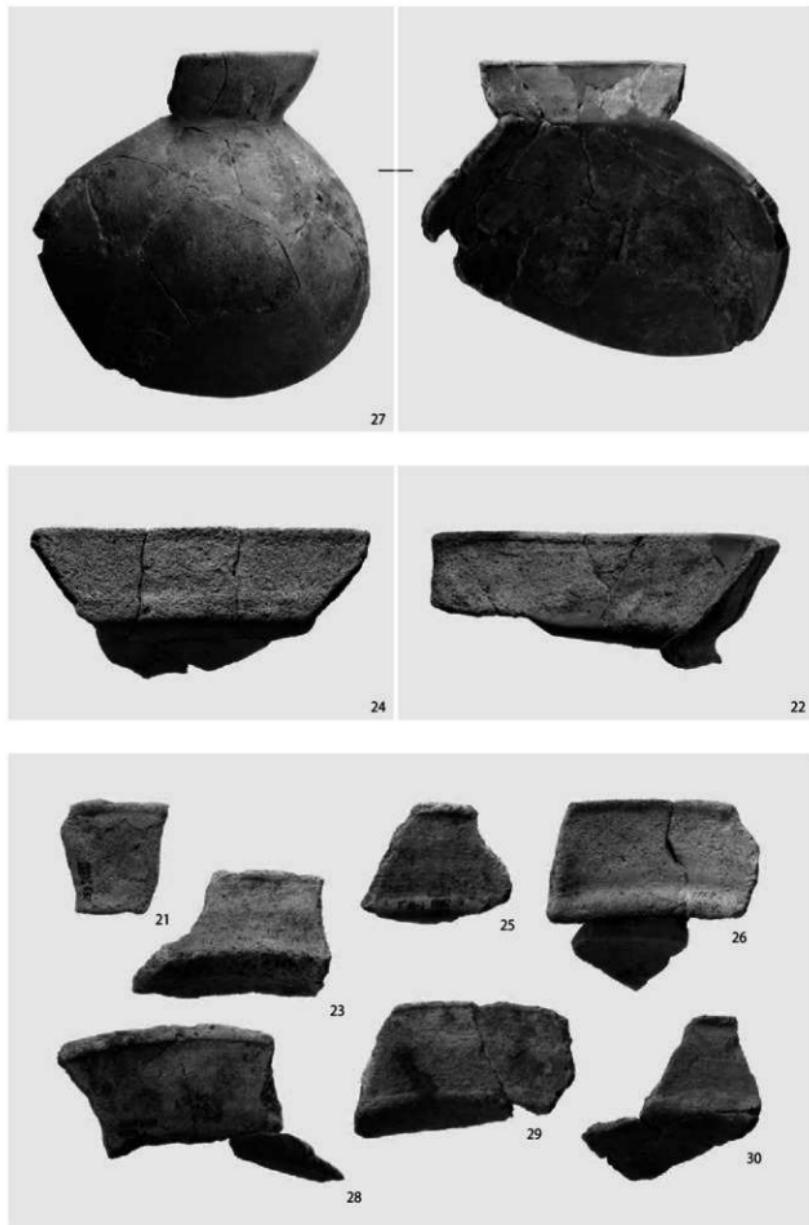
37



36

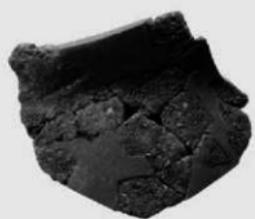
001 落込み出土遺物（壺、鉢、台付甕）

図版一六 ○○一落込み出土遺物(一)



001 落込み出土遺物（布留式甌）

図版一七 ○○一落込み出土遺物 (三)



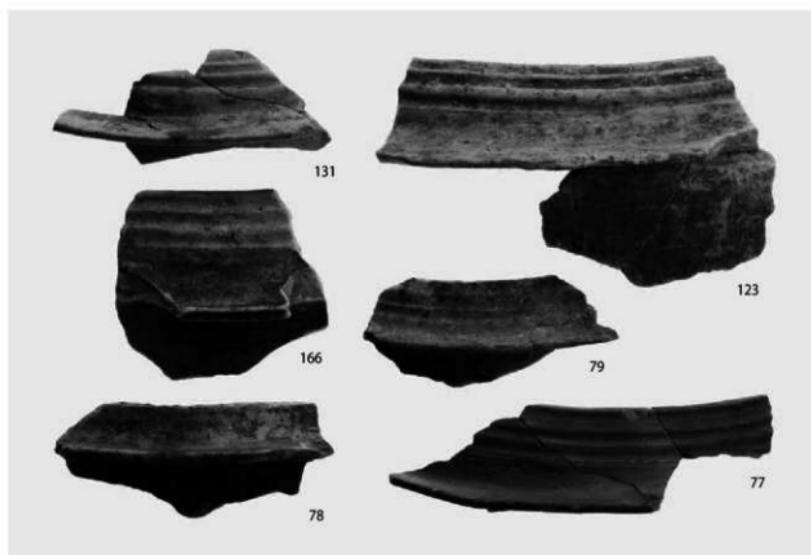
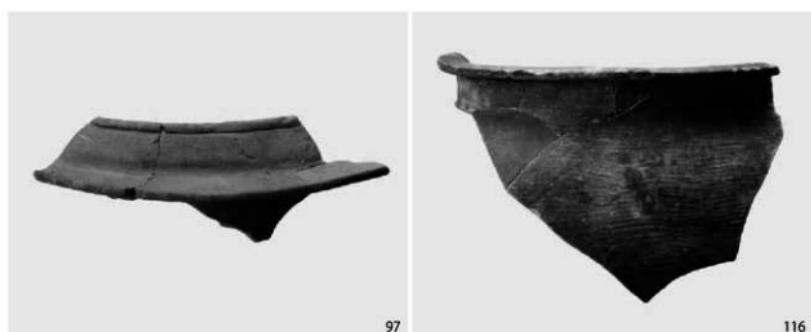
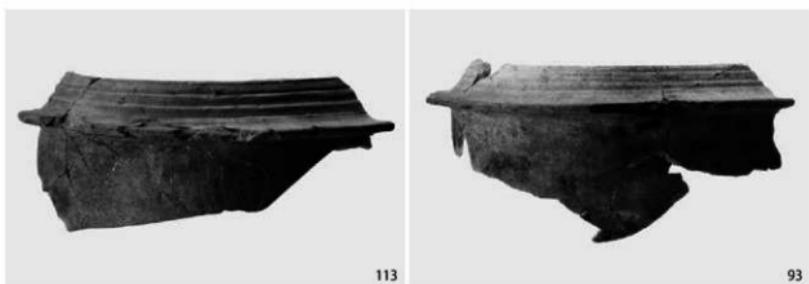
001 落込み出土遺物 (製塙土器)

図版一八 ○○一落込み出土遺物(四)

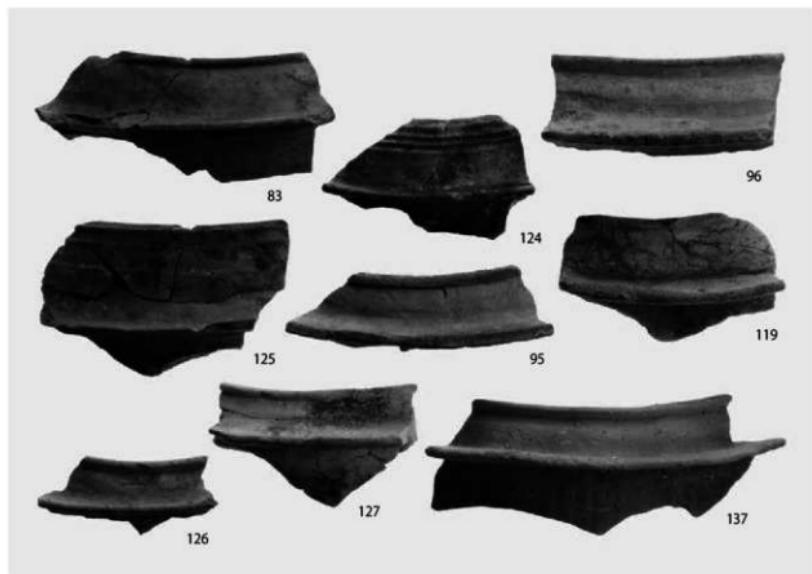


001 落込み出土遺物(製塩土器、高杯)

圖版一九 一五四畦出土遺物（二）

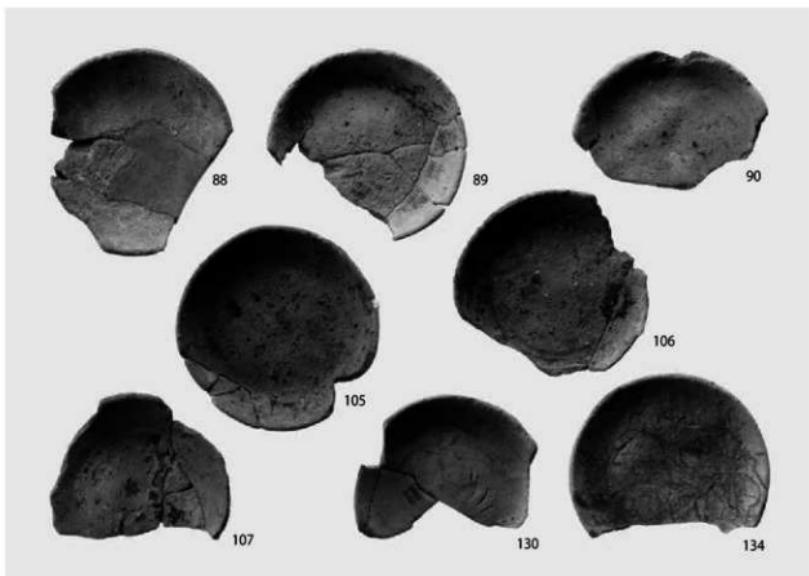


154 畦出土遺物（羽釜、土釜、甕）



154 畦出土遺物（羽釜、土釜）

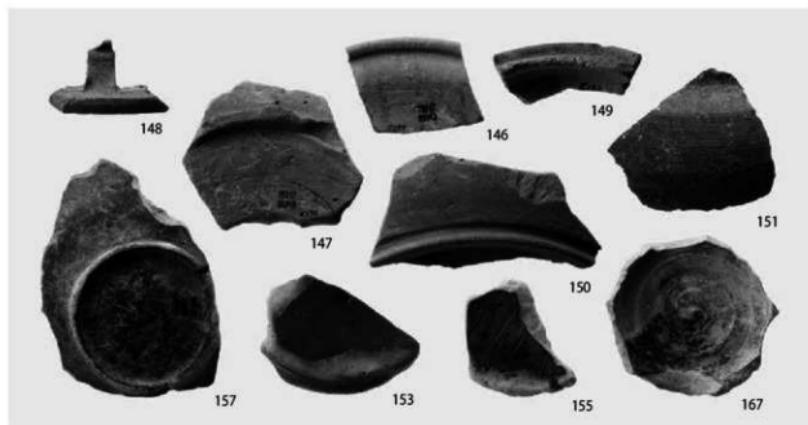
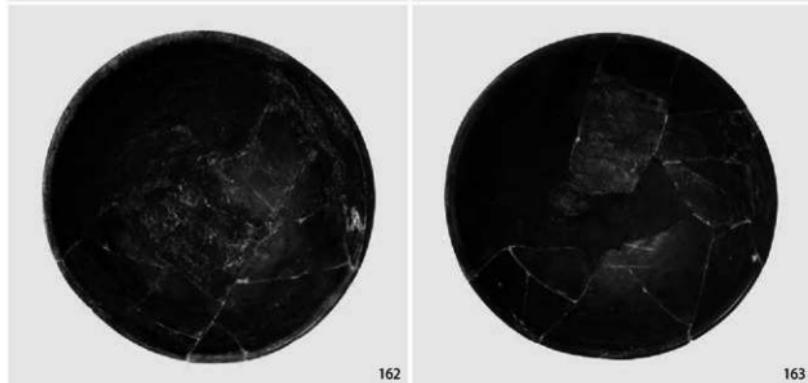
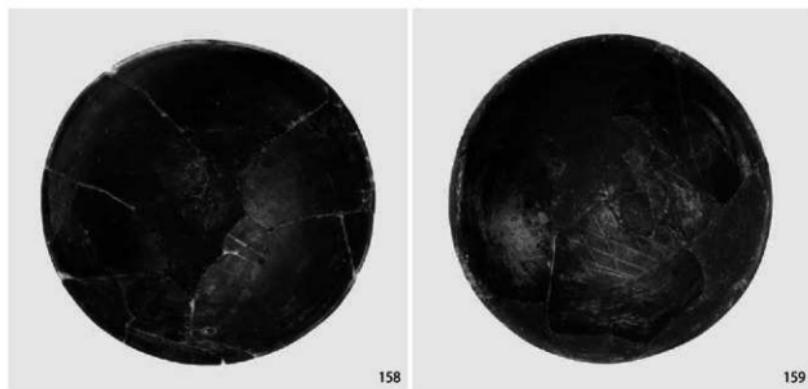
圖版二  
一五四畦出土遺物（三）



154 畦出土遺物（甕、擂鉢、捏鉢、土釜、土師器皿）

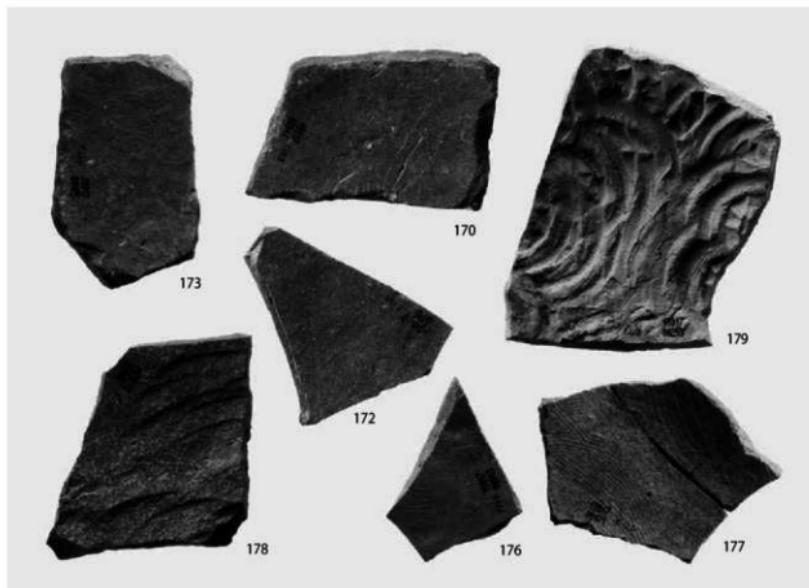
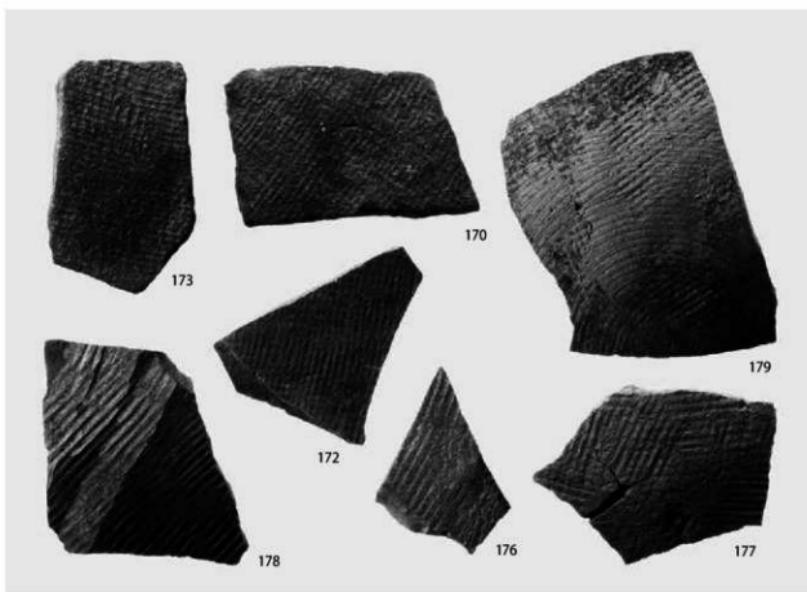
圖版二一

耕作土出土遺物



耕作土出土遺物（瓦器椀、須惠器、黑色土器、灰釉陶器）

圖版一三 須惠器



須惠器

圖二  
瓦(一)



181



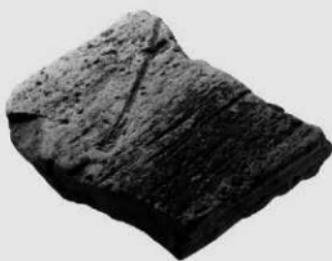
182



183



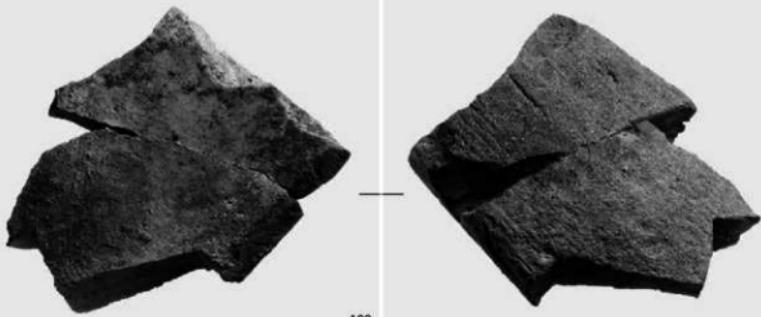
185



187



瓦(1)



189



188

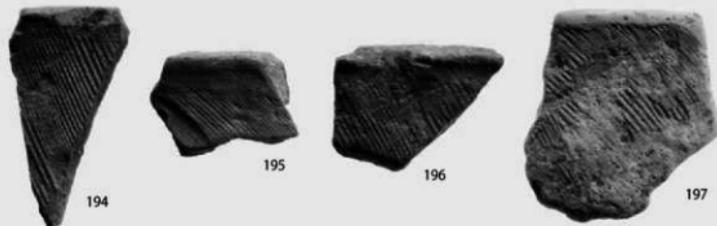


191

193

190

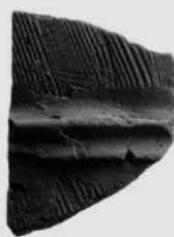
圖版二六 填輪（一）



200



207



202



203



211



205

212



213

215



214



## 報告書抄録

大阪府埋蔵文化財調査報告2020-4

## 大町遺跡IV

—府営岸和田大町住宅道路整備工事に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目  
TEL 06-6941-0351(代表)

発行日 令和3年3月31日

印刷 株式会社 近畿印刷センター

〒582-0001 柏原市本郷5丁目6番25号